女學世界

マダム振り



第十巻第二號

大學目藥

「小兒の眼病には
小兒用大學目藥を用ひられよ



商標 登錄

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず

◎定價金十錢（郵稅二錢） 中瓶三十錢（郵稅四錢） 大瓶五十錢（郵稅八錢） ▲各地藥店に在

日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）

參天堂藥房

効能の概略

▲はやり目
▲トラホーム
▲星の目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に効くべき奇効あり
◎又この藥は目力を強くするの効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし



女學世界定期增刊 マダム振り 第十卷第二號 目次

沙翁傑作唯一の好譯本

ハムレット

洋裝天金頗美本　紙數約三百頁　全一冊
正價金壹圓三拾五錢　郵税金八錢

沙翁の最大傑作**ハムレツト**は我劇場に演ぜられしこと前後六七回の多きに及びたれども眞に原作の面影を傳へたる飜譯は未だあらず、坪内逍遙博士早稻田大學にて沙翁を講ずること茲に二十年、今回**沙翁傑作集**を公刊する先驅として本譯を公にせらる、其特色（一）原文は如何なる難句も剩す所なく悉く逐語的に譯し（二）而も流麗明晰雅潔簡勁よく原文の意味と調子と風韻とを傳へ（三）直に舞臺にも應用し得べく（四）滑稽戲謔の句の如き地口語呂の如きをも巧に適當なる邦語に移し（五）雅致に富める**アーヸング版**の挿畫數十個（精巧なる木版）及び美麗なる三色版（名優**アーヸング**の扮せる**ハムレツト**像）（六）作の由來に關する譯者の見解を添ふ（七）用紙舶來上質、裝釘高雅瀟麗

坪内逍遙譯

東京牛込區早稻田　**早稻田大學出版部**
發兌
東京神田區裏神保町　**合資會社冨山房**

かざしの花



田中製版所三色版

本品は**宮内省御買上**の光榮を辱ふす

此券添付注文の方
特に一割引
一月女學

東京　須原啓三郎謹製

毛髮料日ノ出クリーム

色白グナルオレンジ水

○美顔料日ノ出クリーム、白色劑オレンジ水、日ノ出煉、椿、香油ヲ使用アレ必ズ美人トナルベシ、美ハ愉快ヲ覺エ、精神ヲ爽快トス美ハ實ニ自他共ニ一生ノ幸福ナリ

美人トナル秘密

色の白きは七難かくすと申し御婦人は勿論男子にても皮膚の奇麗な程快きものはなし此皮膚を奇麗にすると云ふことは平素の食物と衛生に依るとは云へ彼の歐米人が顔の美はしく皺の少なきは日の出クリームを缺くべからざる化粧品として使用しつゝある所以にして日ノ出クリームが又東洋の御方にも適當なることは衛生試驗所の證明其他各位の實驗上明かであります色を白くしキメを細かに美麗ならしむることは勿論日ノ出クリームは電氣乳劑なれば皮膚を摩擦する時は脂肪が一面に普及し柔軟ならしむる故老年に至るも皺の寄ることなく如何に其花の如き姿を永く保ち得るでしようか又皮膚のあれ性の方は必ず朝夕御使用あれひゞしもやけ等にかゝることなく又全治する特効を有す彼の恐るべき白粉の鉛毒を防ぐは無論日本流の薄化粧白粉や白粉下を用ゆるの要なく。又つき惡き眞の無鉛毒の白粉を使用前日ノ出クリームを用ゆれば極めて美くしくつき眞正の美人となることは獨逸國醫學博士エエボーン氏の證明する所さて如何に日ノ出クリームを使用すべきか「初め微温湯を浸したるタホルの切れにて面部を數分間温蒸し自然と顔の毛孔に吸取られたる塵と垢を發出さしめ其後日ノ出クリームの極少量を指先きに付け充分(マッサージ)擦り込たる後はハンカチーフ或は紙にてふき取らるべし」尚化粧を望まるゝ方は前記の如く化粧後無鉛の粉白粉を用ゐらるゝ時は衛生上有効なるのみならず櫻花の滿開せし如く實に美麗を極むべし白色劑オレンジ化粧水本品が色を白くする等は既に學理上明にして説明を要せず乞ふ如何に効果顯著なるを御試用あらんことを

定價表

美顔料日ノ出クリーム　特二圓、一圓、五十錢、廿五錢
白色劑オレンジ化粧水　大一圓、中三十錢、小十五錢
日ノ出煉香油クリーム　八十五錢　二十五錢
日ノ出椿香油　特大一圓五十錢、七十錢廿五錢
此際發賣紀念として直接御注文一千名を限り美顔ボウダー粉白粉一個を添呈す

送料八錢二個以上無料

發明製造人　須原啓三郎
東京日本橋區馬喰町三丁目十五番地

發賣元
化粧品問屋　酒井豐吉商店
(電浪四一一三番)

特約店
大阪南久太郎町高野永盛堂
東京白牡丹各店其他信用ある化粧品販賣店にあり

美顔トナル日ノ出クリーム

女(いの一)

日ノ出純椿香油

婦人雜誌 家庭

毎月一回一日發行 一冊拾錢郵税一錢 半年六拾錢

……《第二卷第一號目次》……

女子大學講義

講義錄の特色

雜誌の如く零碎的でなく書物の如く說明を缺かず講義錄の特色を發揮して質問の自由を有す講師は孰れも當代第一流の學者にして教育に熱心なる博士等講義親切材料堅實文章平易說明嶄新一讀了解し得べし母たる者と妻たり又妻たらんとする者は勿論各學校教師の參考書として最も好適のもの也圖畫は大に理解を助くるもの費用を惜まず多く挿入する所以此點にても普通の書籍を凌ぐ通篇悉く家庭經營の實際を酌み一家の主婦に有益なる課目耳講義二冊雜誌家庭一冊配布一ヶ月會費五十錢此際入會金免除の特典あり

會則 無代進呈 ……

東京小石川久堅町百八 **精美堂** 振替口座二八三八

女(いの二)

女へいの三

各國醫學會の賞讃を博す

◎レックス石鹸は今や社會の一般を通じて愛用せらる

REX SOAP FLOATS

英國製實用浮 レックス石鹸

佛國製 ケーバ 石鹸 香水



◎ケーバ石鹸香水とは世界の美人國たる佛國より輸入す

春の花

すみれ、水仙、猫柳



福本日南先生著

菊判舶來上等紙八百五十頁コロタイプ寫眞十葉彩色石版大地圖二葉添付總布上製函入美本五號假名付

義士正傳

元祿快擧録

全一冊

定價貳圓貳拾錢

郵稅拾貳錢直接註文に限り郵稅不要

千古の快擧たる赤穗義士復讐の顚末を最も精細に最も面白く記述したもので殊に義士の快擧を助けた烈婦の行動に就ては筆を極めて細叙されてある瑤泉院妙海尼お輕等の賢行原の母小野寺の妻の自刄の如き婦德の養成に資し家庭の話材となるもの頗る多い

啓成社編輯部編纂

每月一回發行全部十二冊每卷讀切

家庭十二ヶ月

菊判二百頁頗美本

定價卅錢郵稅六錢

◀一月の卷▶

家庭の和樂を增進し少年少女の好伴侶たる希望を以て生れたるものの完成の上は尨然たる家庭辭書を形成するを得べし本書は家庭に於ける月々に因める題目を言文一致を以て說き之に豐富なる圖書を添へたり

發兌元　東京本郷區本郷一丁目　振替口座一二〇五五番　株式會社啓成社

女（ろの二）

●博文館圖書陳列所……館内にあり

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

●本法は 女髮結師安部歌子女史

ちゞれもくせも もはへうけあい

二大奇方剤

多年の實驗を經たる證明秘法剤にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇剤なり往復端書紹介詳報す

●東京市麴町區三番町六十七 濟世園

第七回

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勲四等 ドクトル 渡邊鼎

通信教授會員募集

産婆學講義錄

規則要郵券二錢

東京市四谷區內藤町一

産婆科六ヶ月卒業 看護科四ヶ月卒業

東京産婆看護婦講習會

謹賀新年

(登錄商標) 玉おしろい



發賣本舖 東京市京橋銀座三丁目 松澤商店

國民寶典

實用家庭百科全書

見本申込次第進呈 製本既成

東京 精美堂

女(ろの三)


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン
太平洋博覧會に於て
名譽大賞牌受領
最上醤油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
醸造元
濱口合名會社
電話銚子二十一番

洒掃



家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著

家庭百科全書

全部五十册——毎月一回發行

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畵十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には槪れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぎるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

- 第一編 新家庭訓 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理 宮中[illegible]料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南 女子高等師範學校敎授 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法 東京治庖會講師 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
- 第七編 育兒の務 醫學士 田村貞籬君 朝夷孤舟君 共著
- 第八編 簡易治療法 新潟縣高田高等女學校敎諭 藤井靜子女史著

- 第十二編 編物指南 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著
- 第十三編 婦人の生理と衛生 靑山學院敎授 牧野淸子女史著
- 第十編 教育お伽噺 少年世界記者 木村小舟君著
- 第十四編 女德の養成 前田長太君著
- 第十五編 家屋と庭園 内山正如君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養 農業世界記者 鹿野化骨君著
- 第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
- 第十八編 子女の教養 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著

販賣用電話 本局二六二〇

發兌元 東京日本橋

（その二）

婦女必讀の大全書

第九編 **禮式と作法**
女子高等師範學校教授 佐方鎮子女史著

第十編 **惣菜料理**
赤堀吉松君
赤堀峰吉君
赤堀菊子女史 共著

第十九編 **家庭の趣味**
文學士 大森兜山君著

第廿編 **家庭遊戯法**
高橋忠次郎君
松浦政泰君 共著

第廿一編 **書道手引**
歌道書道專攻 大和會々長 井田秀生君著

第廿二編 **歌の手引**
◎歌よむ始◎稽古の仕方◎結題◎題の心得◎季の題◎雜の題◎題の熟字◎句の切方◎字餘◎結句の字割◎言葉◎調◎てにをは◎助動詞◎疑問の言方◎感歎詞◎活用と受詞◎係結◎名詞の格◎倒句と隔句◎略語◎上下に掛かる句◎序句◎枕詞◎冒头◎冠と物の名◎折句と沓冠◎緣語◎重詞◎囘文◎引歌◎主なる詞◎敬語◎材料の古今◎歌の諸體●附錄‖添削日記
大和田建樹君著

第廿三編 **刺繡術指南**
●總則‖▽姿勢▽下畫の心得▽絲の縒り方▽實習用具▽針の使用法外七項●木花草花の部‖▽薔薇▽櫻花▽躑躅外十六種●果實の部‖▽柘榴▽蜜柑▽枇杷外六種●禽鳥の部‖▽鷲▽鶏▽雉子外十四種●昆蟲の部‖▽胡蝶▽蟬▽蜂外五種●獸類の部‖▽馬▽犬▽猿猴外八種●魚の部●龍の部▽雲龍▽水龍外四種●風景、刺繡の心得【實習部】●手柄の部(二項)●婦人洋服の刺繡の心得●腕掛の部●團扇の部●ハンカチーフの部(二項)●袋物の部(三項)●洋傘の部(二項)●寫眞挾の部(二種)●半襟の部(十項)●衣類模樣の部(三種)●衣服紋繡の部(五種)●袱紗の部(二種)●額面の部(四種)●卓子掛之部
刺繡術專門 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南**
●第一編 總論●第二編 材料●第三編 從業の順序と用意●第四編 實習上の說明●第五編 實習製作●第六編 實習上の說明●第七編 簪の作り方說明●第八編 實習法の說明●第九編 應用科諸種實習法●第十編 巾著模樣各種作方●第十一編 摘み細工雜感◎附錄‖モール細工諸種製作方外十二項◎
山田興松君著

(近刊)……▽第廿五編●**新式化粧法**
藤波芙蓉君著

(はの三)

振替貯金口座 東京二四〇番 **博文館** 本町三丁目

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

湯蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製（大壜二十錢 小壜十二錢）

水製（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）

玉製

粉製

肉色各種

錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生せざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す又東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨得の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗に御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

綠、藍、紅彩蝶番ひ罐詰 八錢

別製罐詰 五拾錢

大袋 二錢 小袋 一錢

登錄商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE
WASHLNG IOWDFR

壽美禮あらひ粉



製造本舖 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣薬店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ（電話浪花二七六五番）

女（はの四）

曇らぬ御代



跡見花蹊筆

初髷



太田三郎筆

一等國

一月二十日發行

洋裝四六判二倍大
紙數二百六十頁
寫眞版如例豐富
正價金三十錢
郵税（本號に限）四錢

太陽第十六卷第二號増刊

◉一等國の列に在る諸國は世界の運命を司配す。

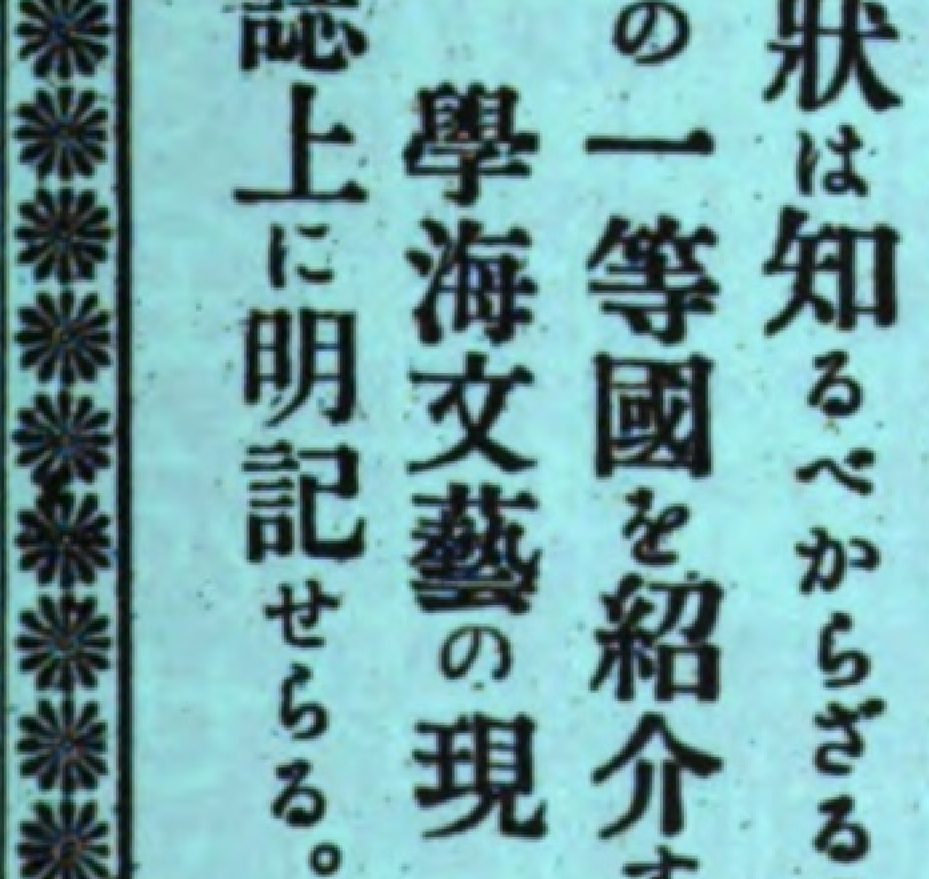
◉世界的と言へば即ち一等諸國の形勢に冠する形容詞なり。

◉吾が國は東洋に於ける唯一の一等國にして。歐米の一等國と文明の大競爭を試みんとす。

◉統計書を通じて彼れを知らむとするは恰も玄關に立ちて他人の家内を覗はんとするに異らず。其の實質實狀は知るべからざる也

◉本誌は統計書以外に立ちて世界の一等國を紹介す

◉政治外交の舞臺、社會の狀態、學海文藝の現況其の他百般の形勢は、悉く本誌上に明記せらる。



女（にの二）

（女にの三）

名流小照



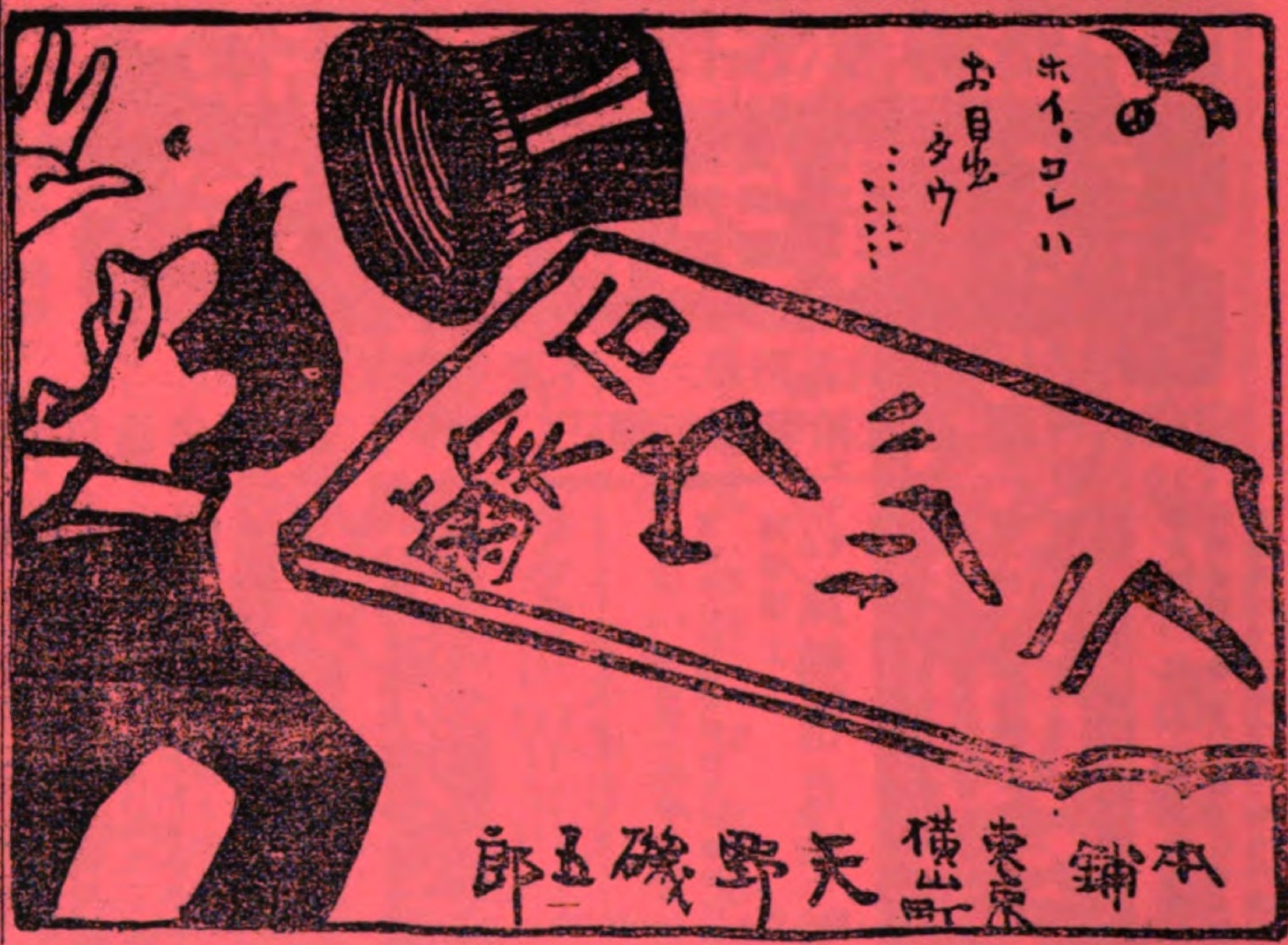
京都佛光寺裏方蓬子（東宮妃殿下御令妹）

（今尾掬翠氏撮影）

名流小照


千家男爵令孃信子


小笠原伯爵夫人貞子



最上醤油

キハク印

釀造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハタ又キハタ

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

女(一の一)

！文運堂の嶄新なる日記手帳！

文運堂編輯部編纂

家計重寶 臺所勘定帳

此勘定帳は婦人に最もつけ易くして家計の費途一目瞭然たらしむる様式に考案せる最良の日記なり殊に家庭の一切に就て懇切なる説明を附しあれば効果は頗る多大なるべく本書に依りて幸福なる家庭を作り得らるべきは疑ひを容れざるなり。

▲洋装頗美本
▲四六判紙數
▲凡三百廿頁
▲定價廿五錢
郵稅金六錢

博文館編輯局 少年、少女世界部 木村小舟君編 名和永年君書

日本歷史手帳

此手帳は、古今に通じて有名な武將、忠臣及び義士などの歷史、殊に其最も著名な事蹟を誰にも讀み易く、且面白く編述して、これに、一々、鮮麗な繪畫を掲げてありますから、手帳を使ふ間に、知らず〳〵覺えて終ふ事が出來、また卷頭には、唱歌の樂譜も掲げてありますから、英雄を謳ふ事も出來まする、頗る趣味のある有益な手帳であります。

▲洋装菊判
▲紙數八十頁
▲定價壹冊六錢
郵稅金四錢

日記手帳出版元帳簿文房具製造

東京神田錦町(振替東京一九七〇〇番) 文運堂

東京日本橋區本町(振替東京二四〇番) 博文館

大阪市東區瓦町(振替大阪八三六五番) 文運堂支店

東京日本橋區駿河町(振替東京三〇〇番) 三越呉服店

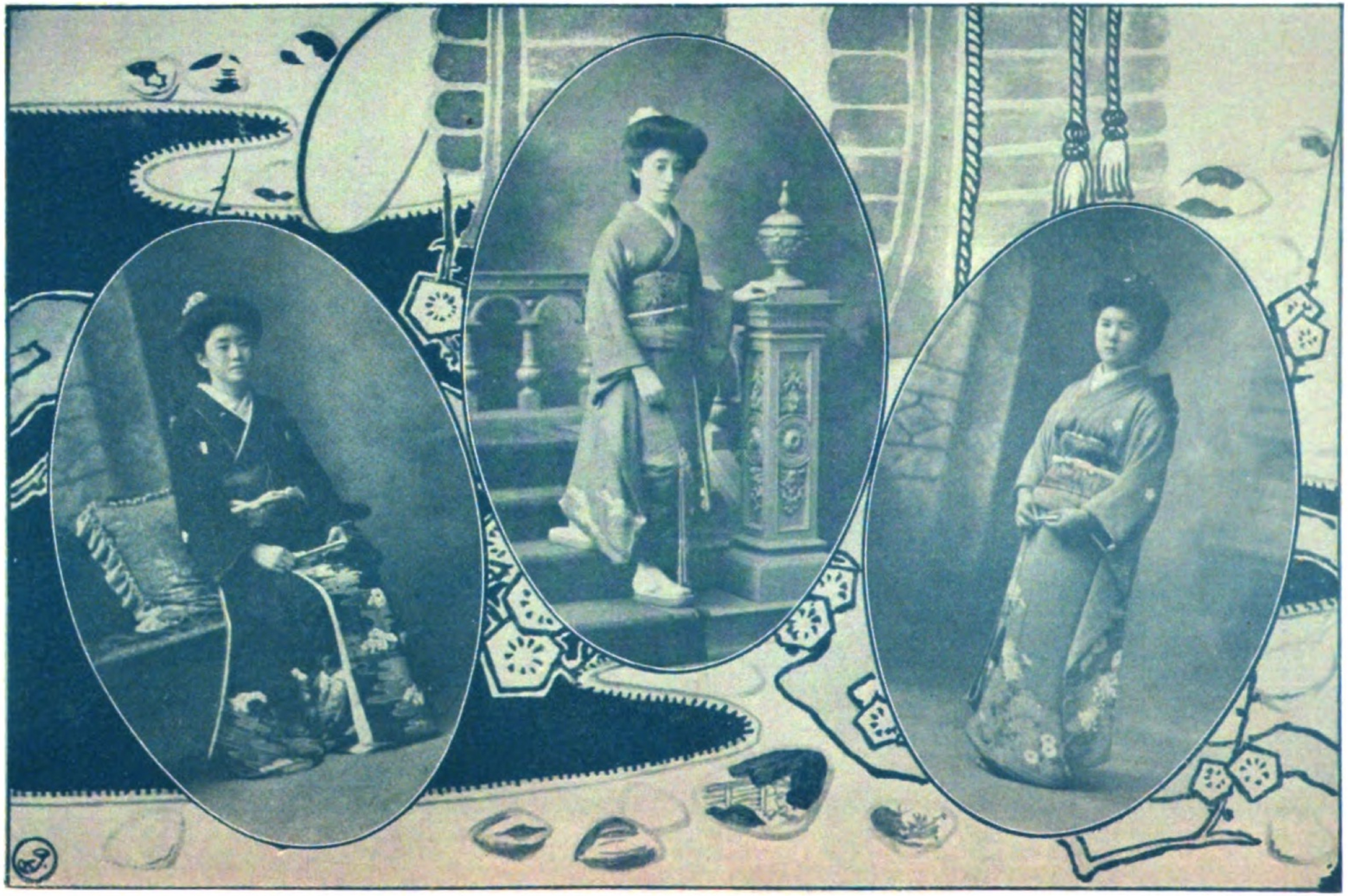
女(ほの三)

名流小照

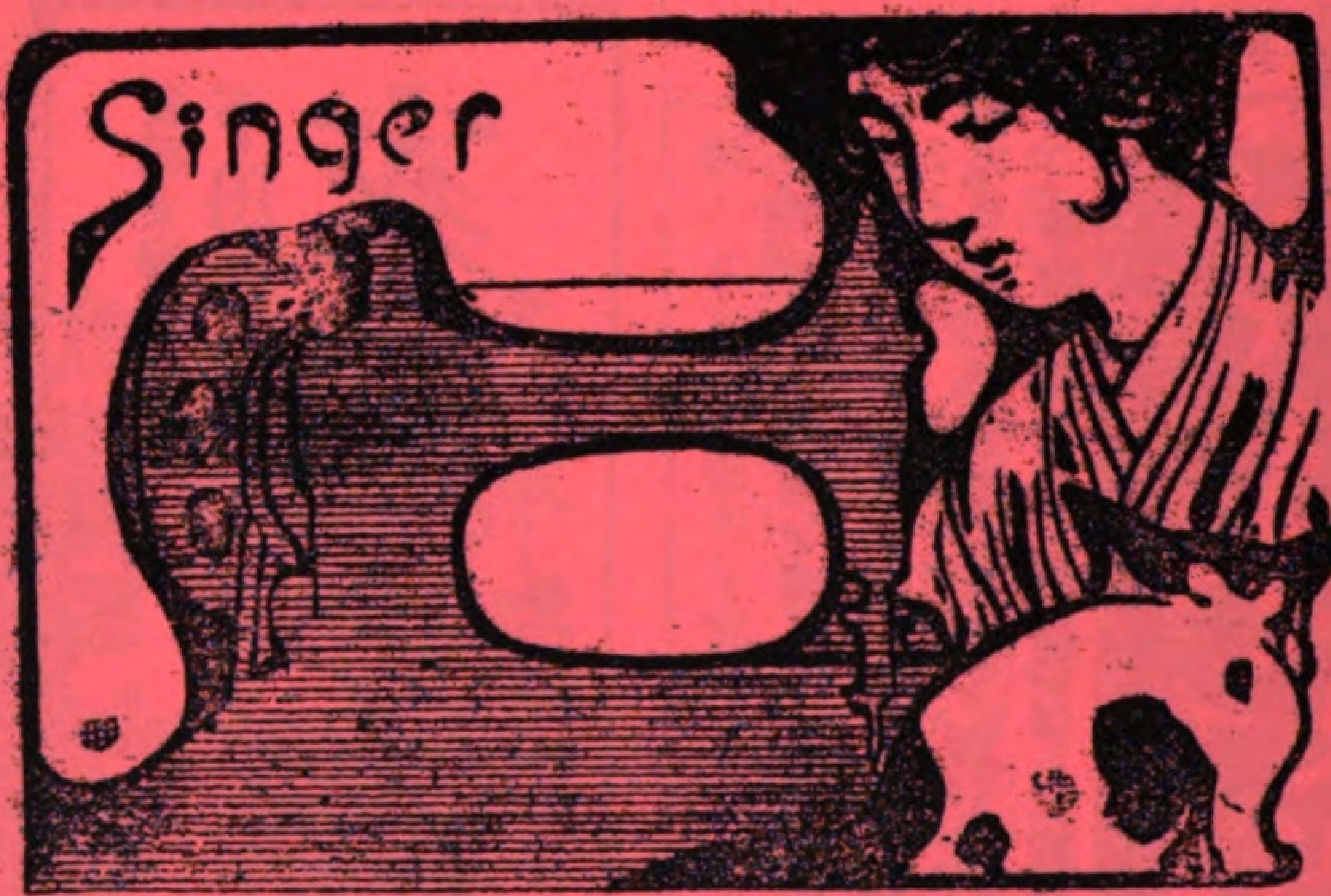


右圖　大河内子爵夫人國子（德川慶喜公第八令姫）
中圖　眞田伯爵令妹信子（藤堂伯と約婚の方）
左圖　榊原子爵令孃鑑子

令嬢かゞみ



右圖　松永安彦氏（貴族院議員）令孃たゝ子
中圖　岡田貞德氏（實業家）令孃千代子
左圖　坂井寛次郎氏令孃芳子



女(への一)

今井柏浦君選

榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、溫情自然に溢る、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の溫柔なる處が多いから、俳句なり歌なり、女性的と男性的とは、歴然した區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

全壹册
菊半截美本
貳百五十頁
正價卅五錢
郵稅四錢

東京本町 博文館

●日本と最も深き關係交渉を有する米大陸●

田村松魚著

北米世俗觀

●活社會は諸君の眼前に展開し來らん●

洋裝三六判美本二百五十頁
正價卅五錢　郵稅四錢

東京　博文館發行

女(への三)

文藝倶樂部 第十六巻第二號 增刊（既成發行）

全一冊洋裝菊判
紙數三百二十頁
口繪寫眞版豐富
正價金二十五錢
郵税金二錢五厘

講談 落語 義士外傳

内容の壯快にしてまた悲慘なる、決して銘々傳に劣らざる「義士外傳」はいよいよ來る十五日を以て發行す、忠臣藏の劇を既に見飽きし人なりとも、目先の變りたるこの書を見ば、坐ろに春宵の長きを忘れて明鴉の啼く音に驚きつゝ、辛うじて卷を措くなるべし、確定せし讀物は左の如し。

内容

△實説お輕（神田松鯉）△二段目（柳家小さん）△腹切魚（錦城齋典山）△宇都宮重兵衛（桃川燕林）△四段目（三遊亭圓橘）△小山田庄左衛門（一龍齋貞山）△寺井玄溪（眞龍齋貞水）△五段目（橘家圓藏）△森寺牛左衛門（西尾麟慶）△高田軍兵衛（桃川如燕）△七段目（柳亭燕枝）△村松三太夫（放牛舍桃林）△堀部妙海尼（猫遊軒伯知）△九段目（三遊亭圓右）△關根彌次郎（寶井琴窓）△片山萬藏（清草舍英昌）

◎私の前座時代……（口演者一同）……其他雜錄興味津々

振替口座東京二四〇番 **博文館** 東京日本橋本町三丁目

新奥様の装ひ



禮装



式部長伯爵戸田氏共氏並に夫人極子

女(その一)

少女世界 雪の巻

▼既成發行▲

洋裝菊判
紙數百二十八頁
口繪寫眞版豐富

正價十錢
郵税一錢

◀少女世界第五卷第二號增刊◀

●雪中の少女（表紙）……………………村瀬義德筆
●愛らしき鳩（口繪）……………………西洋名畫を美麗なる
三色版にて現はしたるもの——……外に●寫眞版八ぺーヂ

▽新式少女對話……………………巖谷小波作

▽少女訓話……………………久保田金僊畫

或る女學校長が、特に本誌のために述べられた事實談です。

▽少女小説（三篇）……………………

何れも可憐な少女をモデルとしたもので、やさしいなさけ心が現はれてゐます。

▲少女スケッチ　▲少女會の心得　▲雪の名所

▲小野のみゆき　▲女學校入學試驗問題　▲淸少納言の雪の山

▲俊子の愛犬　▲米國少女の髮の形　▲女學校だより

▲少女世界……近畿地方巡回講話

◉和歌『春の雪』……………………三宅花圃選

◉新派和歌……………………與謝野晶子選

◉俳句『新年雪』……………………武田櫻桃選

◉短文『雪について』……………………編輯局選

右の外に、まだ面白い記事が澤山あります。

東京　博文館　本町

少年世界 第十六卷第貳號 增刊

既成發行

紙數二百五十六頁
口繪 三色版…一枚
石版畫…一枚
寫眞版…二十頁



第十六卷からの少年世界は、全く舊來の面目を一新したばかりか、一方主筆小波氏は大きなみやげ袋を提げて、目出度くお歸りになりました、第十六卷に達したのと、小波主筆の歸朝と此の二つの祝賀として、茲に尨大なる二百五十餘頁の『みやげ袋』を發行します、表紙口繪の美麗なるは云ふまでもなく、記事は悉く愉快極まるおみやげ話、名刺交換會の發表も漏れなく掲載してあります、新春の讀物之に勝るものが何所に又と有ませう。

▲表紙國光…懸賞應募▲口繪おみやげの分配…尾竹國觀▲米國繪はがき……三色版▲其他美麗珍奇なる寫眞版二十頁

正價二十錢 郵税（本號に限）二錢

名家寄稿

石川理學博士　岸上理學博士
近藤工學博士　三好理學博士
松村理學博士　坪谷水哉君
名和靖君　其他數氏

● 渡米百談…巖谷小波筆 久保田金僊畫

● 名刺交換會……約數千名

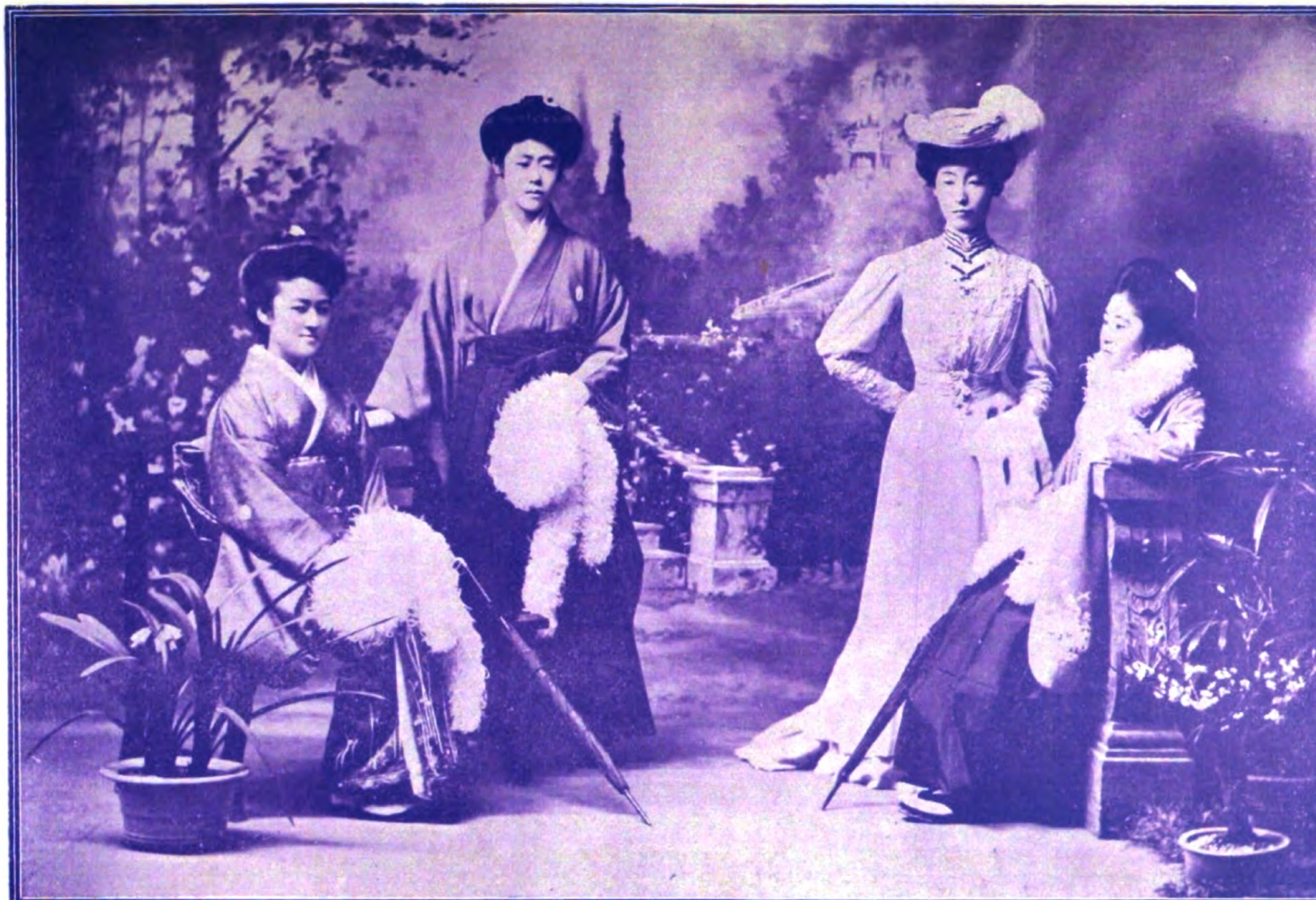
よみもの

△新案畜人機△活動寫眞△圖書館案内
△名所みやげ△地中會議△魔術の先生
△空中漫遊談△動物園△海底の秘密
△博物館參觀△びつくり箱△其他材料如山

女（との三）

女(との四)

名家の夫人



右より一　鍋島侯爵令孃俊子
二　同　世嗣夫人禎子（黒田長成侯令妹）
三　松平恒雄氏夫人信子（鍋島侯爵令孃）
四　水野子爵夫人米子（岩倉公爵令孃）

令孃かゞみ



右　前田伯爵令孃絹子　中　同住子　左　故能勢榮氏令孃梅子
（孰れも梅香女塾にありて學習院女學部に通學中）



松方侯爵令孫竹子（侯爵世嗣巖氏令孃）
同令孫圳子（[illegible]爵令息正作氏令孃）

明治文壇 名家小

（裝訂……洋裝菊判總

再版

露伴叢書

前編（五百七十二頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

後編（九百九十頁）正價金貳圓 小包料拾六錢

明治の世、新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閱すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵きて出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の溫雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸す。本館此處に思ふところあり、**名家小說文庫**を發刊し、每卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし、價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

無比好擧　說文庫

((クロース特製紙箱入))

新刊 澁柿叢書

紙數壹千餘頁
正價金貳圓（小包料十六錢）

本編目次

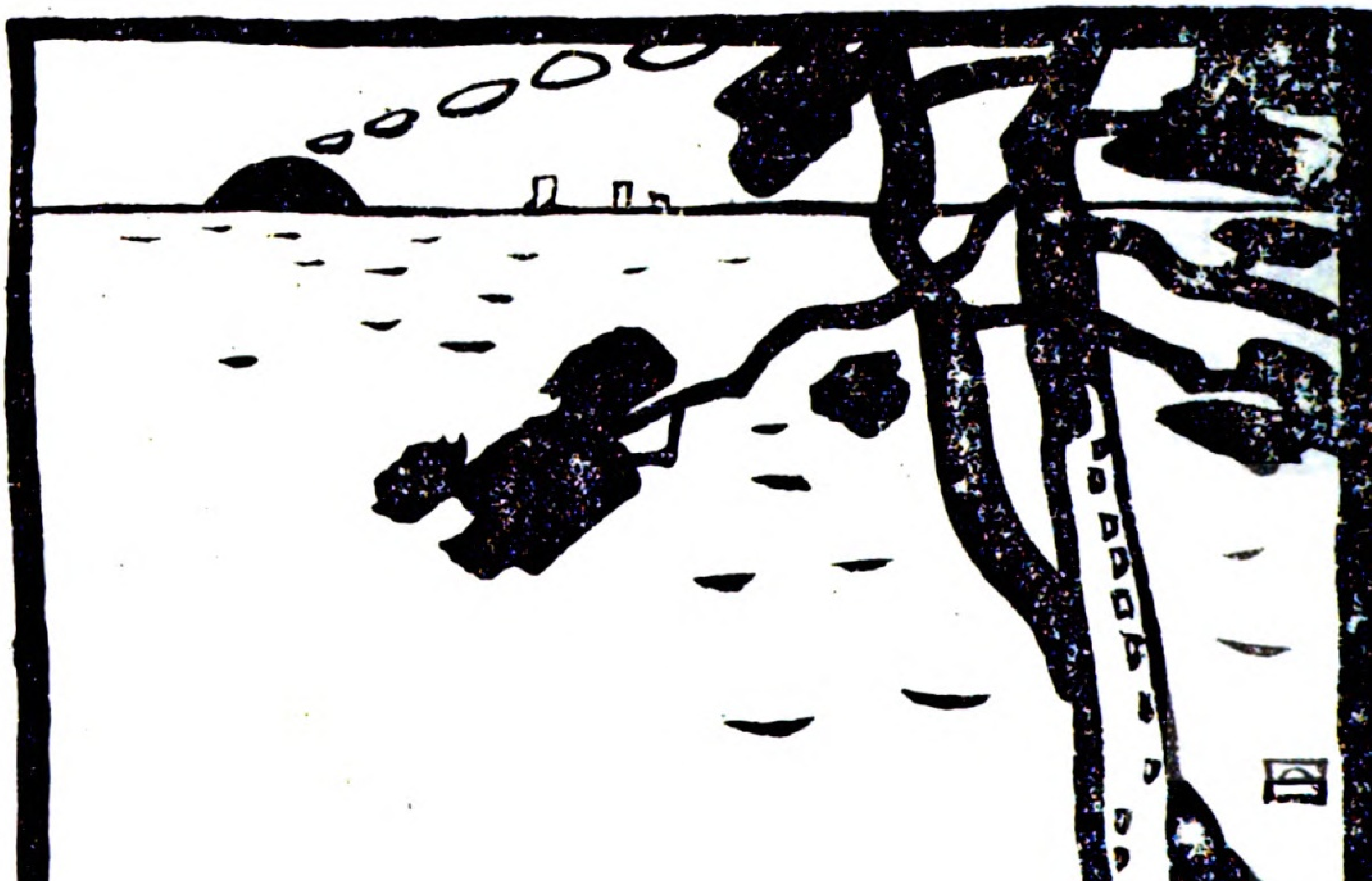
▼釜煮▼妻の心▼猿冠者▼鐵火▼聚樂殿▼島勘左衛門▼是非もなき▼不老術▼新粧法▼夢と夢▼眞の武士▼親の面▼五月女坂▼三千石▼男の面▼油井正雪▼大石内藏の助▼碧玉盌▼大風乾之介▼他流試合▼脫走兵▼振武軍▼密告▼此の戀

新刊 柳浪叢書 前編

紙數壹千餘頁
正價金貳圓（小包料十六錢）

前編目次

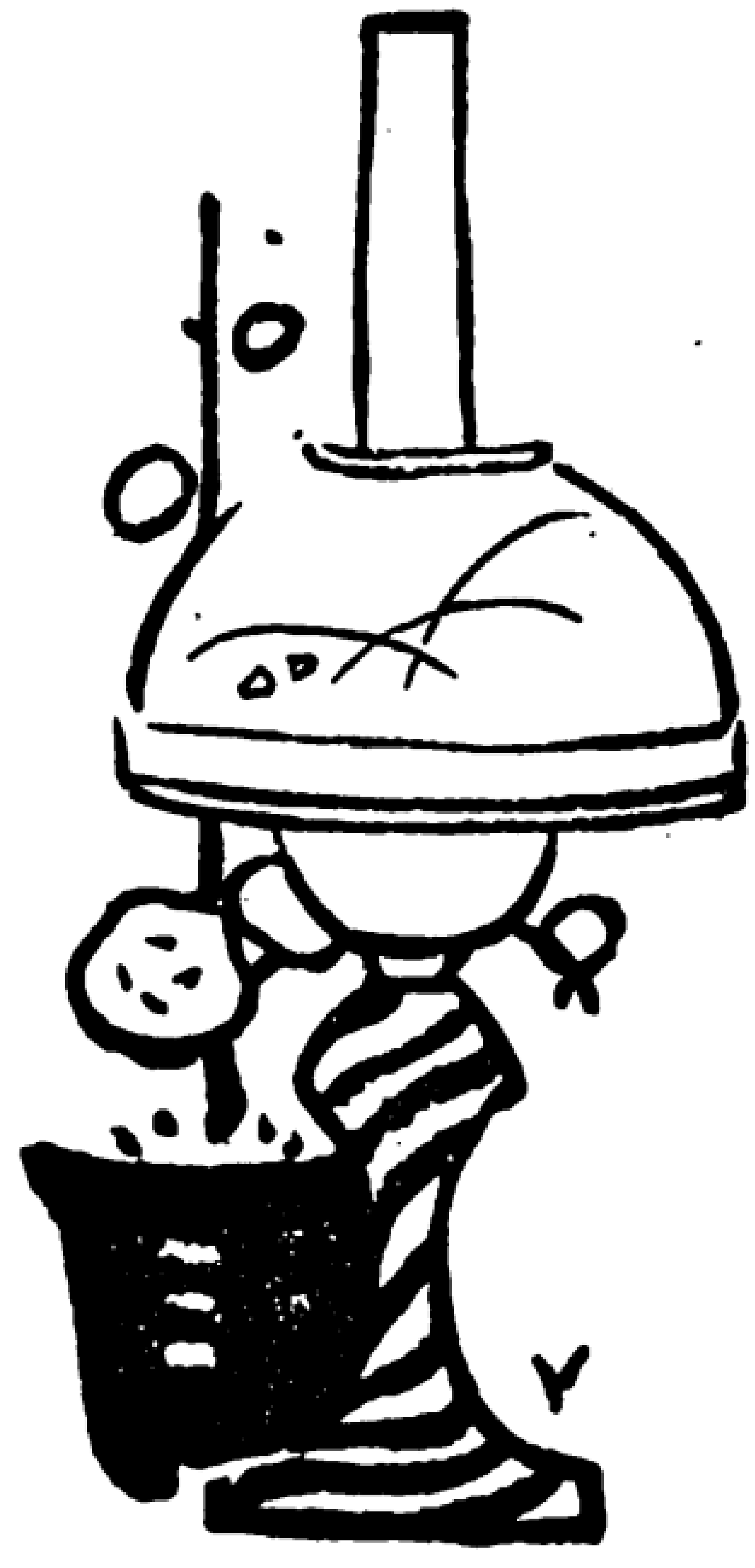
▼おもかげ橋▼昇降場▼骨ぬすみ▼妾▼今戸心中▼隅田の夜路▼罪の悶▼變目傳▼都の夢▼狂言娘▼畜生腹▼重づま▼貯金玉▼花ぐるひ▼幼時



女學世界定期增刊 マダム振り

昨日の光榮(花嫁)は今日の品位(主婦)となり、過日の歡樂は日下の權威となる、歲月匆々、人事傾刻に移り三日隔世の感をなす。

彼女は今須らくこの品位を持し、この權威を保ちて以て人事の患難に臨まんと欲す、患難の多きところは即ち又光榮の遍くところなり、聊か新婦人の前途を祝す。



クラスメート花競べ

翠野

卒業の別れの會の時、翠野の筮竹に上つた級友の未來記、非常な好評だつた。今其の友の境遇と、對照して見るのも、時に取ての一興だらう。

音樂家

市村よし子孃

月の桂も手折るべし。といふ古い形容詞でも奉呈し度ほど、向上心が有る上に、技術も、却々馬鹿には出來ない、末は天晴れ、女流音樂家として、何々演藝會の何々音樂會のと、あのスラリとした、御身體を、派手な衣裳に包んで、そしてあの透通る樣な美い聲に、多くの青春男の血を躍らせ、若い女の妬みと羨みの、的となるであらう。

果して？卒業後何所で御目に懸つても、音樂の話でもち切りだつたが、何樣した譯か、一年ばかり、御便りも無い、ほのかに聞けば、まあ田舍へ行つて！

音樂家には、相違無からうが、小學校の專科教師！

「よし子孃も、並大抵ぢやあ有りませんよ、何しろ旦那樣が中學校の、英語の教師で、月に、三十五圓の俸給それへ御自分の分の十二圓とで、家賃から、すべての遣り繰り」……あの大事に〳〵して居つた美くしい白魚の樣な指（音樂家は手が財產だと平生言はれた）もだん〳〵太く成つて、此頃では、まあ可愛相にお小兒の、お襁褓の洗濯まで……

それもこれも、みんな、よし子樣が、づるかつたから、田舍へ行く前だつて、「十分の五月」とか言ふお腹を始末に困つて今の旦那樣と夫婦になつたとやら……

とは惡口家のつね子孃の下馬評……

實業家令夫人

松井糸子孃

良人樣は實業家で財產が澤山あつて、三越でも白木屋でも、馬車で隔日に通つて寸分流行に後れない服裝で交際社會の大立物になつて、ダイヤの光と黃金のひらめきで、この身體（十五貫八百目と評判の）の頭から爪先まで飾つて一生を送り度、との御希望……但少し位の、頭の禿なら、不關焉だと……

もし此麼女に、文士夫人なんて、言はうものなら、それこそ大變……腕力だつて辯舌だつて到底かなはぬ故まづ〳〵さはらぬ神にたゝり無しで

實業家の奥方と、申上げ奉つておいたら、どうやら、無事通過であつた、

五十二歲のお婿樣に二十一歲のお嫁樣、もう大學卒業した、自分より五つも年上の方に、母樣と呼ばれて一向平氣……

先達て、お夫婦お揃ひで、馬車を、三越に走らせた所が氣のきかぬ店員が、父子と間違へたとやらでお夫婦共きついお立腹

「夫婦にて候」といふ立札でもして置かねば私初間違ふかも知れないものを厚かましいにも程があるわ……

女學世界にあつた「蝿のダンス」といふのは糸子さんの旦那樣のことよホヽヽヽヽと

あの新聞記者夫人だけあつて、耳の早い彩子さんの通信で、はじめて成程とあやしく、微笑が止まらなかつた翠野も、「世話して下さいよ」とくれ〴〵も賴まれては居たが御注文が御注文故、これといふ目的もなくて居たが、まあこれで一つ荷を下ろした

文士夫人

若月彩子孃

歌が好きで、朗讀が上手て、新體詩の新派和歌のと作文の先生のオハナで、お作はたび〳〵拜見させて頂いた、女としての理想は晶子女史で理想の良人は鐵幹樣のやうな人だとやら

雜誌、新聞の募集は、何時も地と下らぬ賞をお取りなさるし文藝會の度に必らず、自作を朗讀して、それ

が又乾度大さうな喝采を博すのでは自分でも天晴れ文學者氣取り、口癖の樣に「文學志想の無い人は全つきり話にならないわ」とそれは〳〵えらい氣焔そこへ持つて來て私が級友滿座の中で文士の夫人と豫言したので、非常に御得意で、（いつも、上向きの鼻が殊更天井と見たとは友だちの惡口―）作文の點で、常々苦い顏をして居る、私の手を固く握つて

「貴女が一番話せるわ他の友みんなだめよ」

新聞記者文士と言へば矢張り文士の仲間だが、それも三面のアラ探しと來ては、些か面喰はざるを得ない、……それでも彩さんは頗る御機嫌で、級會の時

「若月さん文士つて貧乏な者よ」と松井さんが言はれたのを

「その位の事、私だつて、とつくの昔しから承知よ、百の人爵よりも唯一の天爵の方が崇いことを知らない人は話に成らないわ、いやしくも文士の妻を以て自ら任じて居る以上貧乏位に恐れやしない、」的の生活に甘んじて居られる

旦那樣が持つてかへられる一月の勞銀よりも、彩さんの幾枚かの原稿の方が、遙に多い時があるとやら、それか、あらぬか、あの心持太り氣味の彩さんの御滿圓はあの痩せた小形の旦那樣だとか、噂とり〳〵

女流教育家

星田たか子孃

思ひきつて遠慮無しに、突き出した廂髪に、素通しの金ぶち眼鏡、派手な被布に紫の袴、幾多の女學生達の、わかい血をわかせて、理想と仰がれ、寄る年波も浮世の辛苦も、空吹く風、生駒い男等は傍へも寄せ付けず、にらめ飛ばし、他人から、オールドミスの何のと言はれても一切頓着なし、やがて末は、かしこきあたりの、御覺えも目出度く、上流の家庭へも出入して女ながら、從五位といふ位を頂かれる事疑ひなし

意外！意外!!!意外!!!　これを意外と言はずして、何をか又意外と云ふべき――

實業家の細君！　あれ程好きだつた廂髪を、粹な根のひくい丸髷に結つて、袖の長い紫矢絣のめいせんを、

大名くづし黒繻子の半襟かけた、袖たけのつまつたものにして、知らぬ人が見れば、それ者の果てかと見える變りやう、旦那様のお好みが思ひやられる、稀に訪ねたクラスメートが
「變つたのね、學生時代に夢中になつた、ワグネやゲーテは如何て」
言へば夢見るやうに淡く笑つて
「ホヽ、郷に入つ



ては郷に従へですわ」
一寸身體に嬌態をやりながら、黒繻子の半襟をかろく後につく華侈な指がキラリと光る
「まあ御覧遊ばせよ」
と出されるのは婦人畫報や演藝畫報
これがかつて、文藝會の時に、グレーの墓畔の詩を朗吟して、人々をして言ひしらぬ想に牽き入れた、あ

のハイカラな、高子さんの後身とは、どうして思へよう、

「星田さんは、趣味まで、俗化して、銅臭を帯びて來たのよ」とは、例の彩子さんの、惡口？妬み？

大地主の御内儀　伊藤みやぎ孃

大勢の下男下女の取締りから、御舅姑の御機嫌、澤山ある親類縁類の交際まで、一つとして、申分無く、やりとげる腕あり、經濟が上手で料理がたくみで、子女の教育も立派、所謂良妻賢母の模範、老いて後の樂隱居、風月を友として餘生を歡樂む。

但し派手な交際社會へ出ての働き振りよりも、碎けた世話女房として、内を治める方が上手なり。

筮竹を叩いて（其實勝手な方寸から割り出して）出た卦の面は、正に如斯なれど、そこは活きた人間を對手（人の心と空ゆく雲は……」とやら

下宿屋の二階に新家庭？案外だわ……ほんとに、まつたく、と妾ばかりで無く、たか子樣が、目を丸くしての物語、

卒業後御郷里へも歸らず、兄様の下宿に、轉んで居るうちに、遂兄様の友人の、誰彼と、惡い噂が立ち初めて、果ては、空名を博愛主義……

今の良人は、早稻田の哲學科とやら、

毎朝旦那様の御出校を見送つてひとり淋しく△△呉服店の賃仕事、

「いくら經濟思想が豊富でも、月々旦那様の御郷里から送られる學資と、自分の賃仕事の收入だけの出納おや、いやになつちまふわ、下宿屋の女將や、同宿者への交際に、交際術が何でせう、……でも伊藤さん、裁縫がお上手でよかつたこと」とは口善惡ない或友の立ち話……

ドクトルの奥様　杉野ゆき子孃

容貌が好くて、お實家が富豐で、學問も先づ〱上の部、何と非點の打ち所も無い、が强いて言へば、些と、虚榮心が強いけれど、それも二萬といふ、持參金

附だから、旦那樣も、さう〳〵頭をいためずとも、よし、平素も友達から「貴女の理想は？」と問はれるとニッコリ美くしく、笑つて默つて居る、

こんな女は、御醫者樣の奥樣が、一番はまつて居る大當り「一體お前は、いつこんな術を習つたんだい明日から占ひ者になれよ、御縁に連る此髯もまあ當分は無事だ心配なしだよ、」と翠野も良人に笑はれました

旦那樣は醫科大學出、それにゆき子樣の持參金のお蔭で獨逸で三年間の研究を積んで、彼地でたてたカイゼル髯はドクトルといふ肩書と共に故郷にかざる錦だつた

候補者も澤山あつて競爭もなか〳〵激烈だつたときいたが、雪子樣の何者をもチャーㇺする樣な眼ざしと二萬の持參金とが見ん事、勝を制して幾人かの婦人を失望させて、ドクトル松村夫人と濟して居られるが、盛んな者は、人に妬まれるのか、

「ゆき子さんの良人樣は持參金でドクトルの位を買つて來たのよ」とか「病室も病院もみんな持參金で建てたのですつて」とか―さて〳〵世はうるさいもの―

不如歸の武雄が理想

關野みどり孃

ホトヽギスの浪子に、非常に同情して居られる、それからか、川島武夫の樣な良人をと、あの無口な女から、誰が何時聞いたのか級中の評判、

「みどり孃は海軍の軍人よ」

とみんな一齊に言ひ出したので、私の卦がつひ、出なかつたが、よかつたわ、あの時私が卦を發表したらそれこそ、大變よ、恨まれるかも知れないわ、けれど當るも八卦、當らぬも八卦、翠野の筮竹の動き方が、不思議に、みどり孃の、運命を豫知したつた、

お父樣は陸軍大佐、お宅に出入する、青年い軍人の多い中で、此人こそと、みどりさんの深く思ひ込んだ士官があつた、

「陸軍中尉でそれは〳〵色こそ黑いが眉目秀麗な」と

は見て來たふみ子さんの話、

「あの月見草の樣な弱々しいそして美くしいみどり樣と凛々しい鹽崎中尉とが並んだ新婚の寫眞が早く見度わ、松に蔦が生え添ふたとでも言い度樣でせうよ、それにいゝわ、丁度みどり樣の理想通りで」とふみ子樣はつけ加へた

互に、思ひ思はれて、末は必ずと、固い約束こそせざれ、相方の胸には既う決めてあつたのを、無慘や、そこが花には嵐！一夜お宅で園遊會の折、人目忍んで庭の木立の蔭の立話が、昔氣質の、お父樣のお目に留つて鹽崎中尉は出入禁止！磯にしほやく海士が烟、こがれ〳〵た、枕についたみどりさん肺？といふ診斷が下つて、大磯の別莊に行かれたのは、今年の四月……今秋は淋しく、雁の行方に憧がれて、日に〳〵やせて行く身を、遠く東の空を眺めて、立ちつくす夜半もありとか。

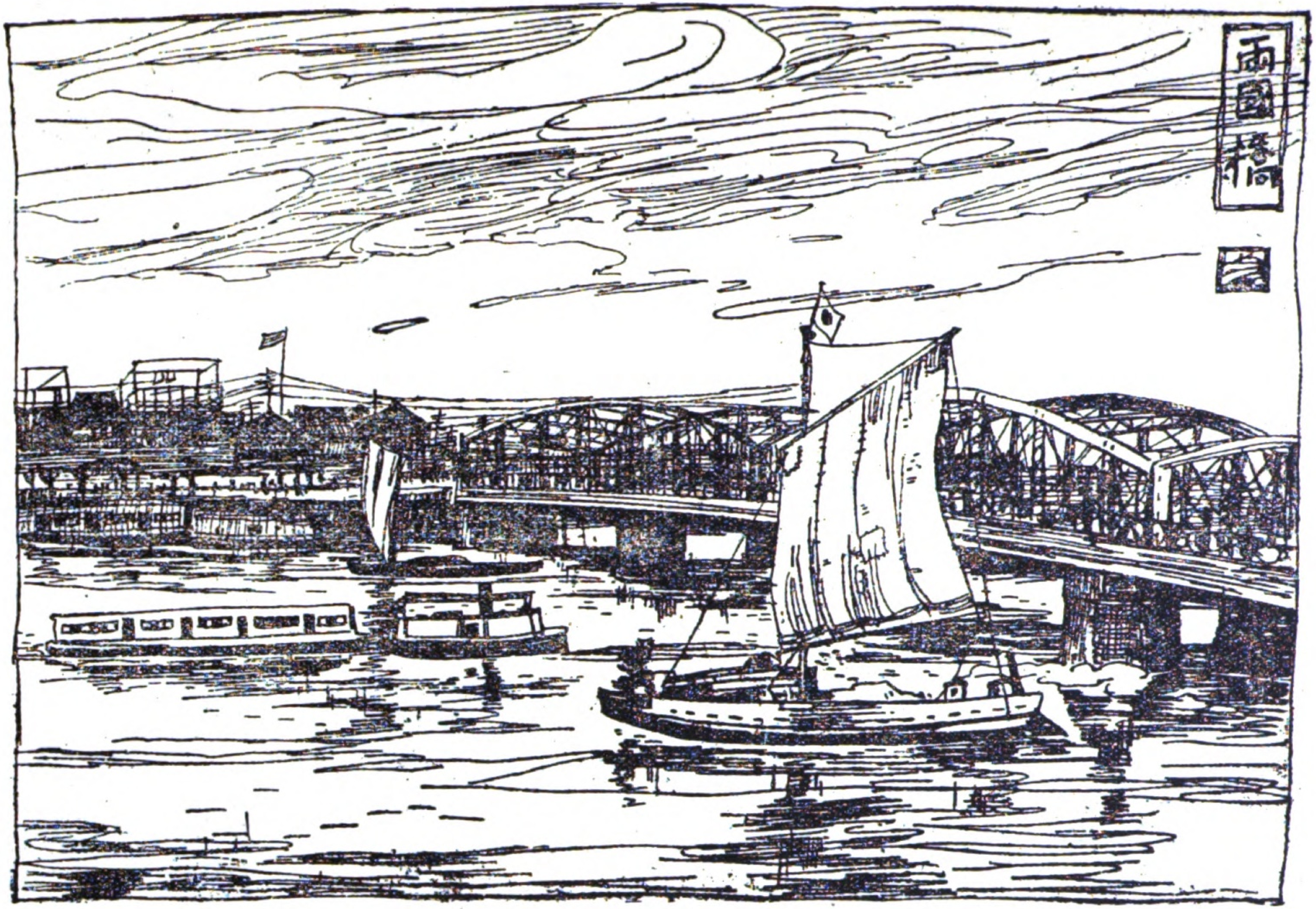
此外にも、未だ十餘名、御紹介もれの方があれど、多く出す程翠野のボロが表れる故まづ〳〵

女長者の儉約

米國華盛頓のクリール夫人といふは有名な女長者で一ケ年一千萬圓の收入があるそうだ、然し夫人は有名な節儉家で三十圓以上の價格ある衣服を着たことがないといふ、夫人は屢々人に語つて云ふに「世間では皆私を富豪の樣に云ひますが、如何にも私は六十萬頭の圓く肥つた、立派な家畜を所有し、十四萬町の豐饒な土地を持ち、私の食卓の四邊に毎日友人や知己を集めて盛んに饗應して、其人達の喜ぶ顔を見るのが何よりの愉快でありますが、然し百萬弗長者の婦人としての私の衣裳簞笥のうちは、誠にお粗末なもので、一襲三十圓の衣服(三襲)一個十四圓の帽子(二個)一足四十圓程の靴、長靴(十四足)一足十二圓の本絹靴下(三百五十六足)が其の大部分であります、其外安物の襯衣、外套、手巾と少し許りの雜用品でお話になるやうな代物では御座いません」と世の富豪の奢侈を誇として居るのに夫人は儉約を誇として吹聽して居るのである、表面は豪奢生活と見えても內部は又存外なものである。

ヤドム撮リ　9

東京市街畫報——兩國橋





新郎新婦
離別の一齣

彌生子

離愁！　離愁とは餘り陳腐な言ひ方である、けれども近く味はつた私には如何に痛切な言であるよ。新婚後僅かに數旬、汽船ミネソタは吾が最愛の夫を奪ひ去つたのである。

今晩秋の澄みきつた碧空に幾萬の金矢をなげた日光は新らしき障子に枯木の影を瞭に寫して照つてゐる、朝晴れの心地よさに母様と久しぶりに庭に出た、今播いた許りの綠苔の上にはや紅葉が五つ六つ散つて風情を添へてゐる、日頃夫の愛育された淡黃の薔薇が霜にもめげず一輪、半開の脣から芳香を放つてゐる、懷かしき薰り！　母様は初咲きの白椿の一枝を祖父君の御靈前に、私はこの可憐の薔薇を書架の上に、君が半身の御影と並んで私の書齋を彩つて居る。

あゝこんな好天氣に君ましまさば近郊に御伴ひ頂かうものを。お出發の前夜であつた。

『やあさんいよ〳〵明日となつたね！　う？　あゝもう何も忘れたものはない、唯彌さんあなたを置いて行くのが心殘りな許り、せめて一年も經つてゐるなら！　こんなに早く淋しい思ひをさせて無情と怨んで下さるな、將來の爲めと思つて許して與れ給へ、御兩親の事はくれ〴〵賴むよ、お互に體が大切だ、決して自分一人のものではない何卒大事に』

と御情け深いお言葉は今もあり〳〵耳に殘つて居るお準備やらお暇乞、送別會と日夜引續いたお疲勞と明朝御早いのとで、早くお床にお入れ申上げて私は明日の衣類其他手落のない樣に揃へて床に就いた。夫の

君はすや〳〵寢入つて居られる、私は目が冴えて如何して眠られやう、恁して一室に睡るのも今夜限り長く御留守になるのかと思へば限りなく心細くなつて止め敢へぬ涙が襟に冷うなつたのを覺える、それでも曉方にとろ〳〵としたと見えて夫に『もう五時だよ』と呼起されて目が覺めた。

『何卒お大事に』『あゝお前も、もう何も言ふまい其一語で盡きて居る。』ほんとに然うだ、また種々申上げたら遂聽しくなつて停車場にも汽船にもお友達や其他多勢御見送りの方が居られるだらうに意氣地なく泣面でも見られたら恥かしい。

洗髪を例より聊かつめた束髪にして鼈甲の櫛を三枚小さい白薔薇の簪を挿し生家の紋を縫つた吉野御召を二枚、帯は綴織、女の手に締らぬのを夫のお力拜借して結び、さてお伯父樣から祝つて下された鯛の御頭つきに赤の御飯で朝餉の卓に向つた、御盃は御兩親より夫、私と一順されて生來好まぬ酒を夫の御無事と御成功とを祈りつゝ頂いた、胸はもう一ぱい、やつと輕く二膳お湯で流し込んだ、祖先の御靈前、氏神等御參詣の、お供して吾等二人お先に横濱にとて新橋に向ふ、俥連ねて行く道すがら冷たき小雨はほろ〳〵とこぼれて來た。先頃私の俥を先に立てゝ親類を廻つた時は道行く人に見返へられても顔が熱り同級會より歸りがけのクラスメートの一連に逢つた時などは穴にも入りたく羞しかつたのをそれも昨日の夢、喜ぶべき此の御出世のお首途を是が限りと思はれる迄悲しく喜悲萬感胸を衝いて夢の心地にもいつか新橋に運ばれて了つた

相も變らぬ停車場の雜踏、人の林車の森、轍の響自働車の軋り、急に胸をそゝられる樣に弱き心は一轉引き締められて車の梶棒下されると共に早や階段の上から『ヤアー』『ヤアー』と三人五人聲を掛けられる夫の御友人を始めに右も左も親戚知己、御挨拶に忙殺されて何時の間にか自分も此の活動裡に卷込まれて了つた。

この中にも切符はこゝに在るショールを忘れるなと細かきお心づけ何時もながら優しき夫の亦殊更に嬉しく難有く涙さへ浮ぶのである。萬歲！　御機嫌よう！

お大事にの聲に送られて汽笛一聲我等を載せたる汽車は動き出し一時間餘にして横濱に着いた。あゝ是が私共の新婚旅行である、人は蜜の如き新婚旅行といふ、我等は辛の如き新婚旅行をしたのである、冬の休暇を利用して西京に遊ばんとの二人の希望、要求は空しく破られて斯く我等は辛の如き新婚旅行をしたのである

　始めて見たる横濱市街、珍らしき光景も目に止まらず兩側の西洋館並木の柳がずつと立つゞいて居たといふ位の漠然とした印象を殘したのみで、荷物の事から水上警察の事等萬事生家の兄君にお願して長き棧橋を渡り水上樓閣ミネソタに乘船した、先づ夫の船室に手荷物を置く、寢具から含嗽器其他總べて備つて居る、飾り立てた會堂、喫煙室、應接室、磨きに磨いた食堂には美花珍草が匂を競つて居る、設備完全流石に立派は立派である。上甲板に出でゝ見晴らす海の面雨は止んで波は靜かに、靑く濁つた水は防波堤の彼方に僅かに小さき白波を動かして居る「あれはオリエンタル其れは何ホテール、燈臺の右手の山は何と伯父樣は委しく說明して下さる私は唯ハイ〳〵と伺つて居たが今となつてはよく覺えても居らぬ、其内に一汽車おくれにて御兩親生家の父上母上御友人のK樣M樣の御一連どや〳〵と來られて廣い船の中もどよめいて來た、態々御遠方迄御見送り下された御禮など申上げて居ると後からポンと肩を叩く者がある、振返ると同級のYさん

「オヤ久濶！　奈何して當港へ？　誰樣か御出發？」

「イヽエ然うぢやないのですけれどね一寸横濱の親類に用もありましたし先日上野さんから今日御立ちの事を伺ひましたから久し振りで御目にかゝり度いと思つて參りましたの。」

「それは難有う存じます私は皆樣に大變御無沙汰をして了つて、これからは暇になりますから成るべく同級會へ出ようと思つて居りますが何しろ急に渡航事となつたので忙がし……」

　と人が言ひ切らぬ内に先日會の歸りに海軍省前で御目に掛つた時御良人とお二人でお通りになつたつてそ

してお島田がよくお似合になつたつて松野樣方が御話でしたよ御噂さで大變だつたの、然うお澄ましにならず會へもお出遊ばせよなどいろ〳〵仰つしやるので私は好い加減に話題を轉じようと思つて

「雨も奈何やら晴れさうね」と云へば、でも貴女の處では雨が降るでせうお床の中で大雨になるでせうよと人の心もお察しなく場所も場合もお構ひなしの御雄辯を振るはれる、「私は用事が御座いますから失禮」と又皆樣に御挨拶に行く。ほんとに少しでもお友達の情を持つて御出になつたら多少同情して下されさうなもの又少しでも氣の毒と云ふ御感念があつたならあんな輕薄な人を冷罵す樣な御言葉は忘れても出まいものを、よく見て覺えもしなかつたけれど紫紺の御召に赤つぽい御帶胸高に締めて居られた樣だつた、それは〳〵目に立つお服裝、この場所へ見られに來られた樣なもの或はさうであつたかも知れやしないなど丶神經の興奮した身には淺ましい猜心迄起つて來る。

今でこそ恁んな事も想起するが其時は殆ど夢中、只まあ隨分な！　位に思つたのみであつた其内に出帆の時が迫つたので夫は一々御挨拶して居られる、私も御機嫌ようは口の中此方よりこそ申上ぐべきを却つて夫の君がお大事にと仰せられて堅く握手せられた、と同時に視線が合ふ、あゝ其時の心持！　忘れる事が出來ない恐らく生涯私の記憶から去る事は無いであらう、悲しき中にも終始人目をかねて「泣かずに別れよう」とのお約束を思つては「僅つた半月しかかゝらぬ對岸へ航かれるのだ！　僅か三四年で歸つて來られるのだ！　とつとめて平氣に無理にも虛心にと堪へ堪へて居た勇氣も張りも此の一瞬は一時に破れて心臟も肺臟も一所に丸めて熱湯の中へ投げ込まれ攪き廻はされた如に熱い血の涙は沸き上つて既に瀧つ瀬と溢れんとした其刹那！　危くも心の底から意氣地なし！！　一喝されぢーいつと嚙みしめた胸の痛さ。さていよ〳〵船に惜しき別れを告げてお養父樣のお手を取りつゝ又棧橋に出た、他の人々も續いて皆下船て了ふと船から棧橋に渡した階梯は揚げられ同時に汽笛は凄まじいビユー

ツピユッと胸の底を抉ぐる樣な音響を立てゝ船は動き出したのである噫々其の音！　今思ひ出しても慄とする、濤を蹴破る機關の響　其恐ろしい一響毎に船は次第々々に棧橋を離れ高き動悸の一搏毎に二人の間は引き裂かれて行く、噫々恁くて汽船ミネソタは吾が最愛の夫を拉し去つたのである。

打ち振る帽子淡るゝ影、波は靜かなるにも似ず刻々に船を呑んで苦しき喘ぎの黑煙團々。飽かぬ別れ！　慕はしき影！　何時迄も立ち盡して居たいと思つたが早や御送りの皆樣がそろ〳〵歸路に就かれるので又厚く御禮を述べて歸らうとすると此度の事には始めから種々配慮せられた下川樣が是非寄つて歸れとの御懇言私は折角ながら早く歸つて思ふ樣泣き度いと思つたけれど折角故と父樣の仰せにお邪魔する事にして下川樣を先き父君母君私と車を列ねて山下町の御住居に向つた。途上徒歩でぶら〳〵停車場の方に行かるる生家の父母兄姉の君T樣達の御連中を追ひ越して四輛の俥は走つて行く。あゝ實家に居た時分は一番後になつた事などは絶えて無く供なしの時には父樣でさへ先へやれと被仰れ又其頃は左程勿體ないとも思はず行つたものだつたが今はお前は嫁であると何處かで叱られる樣で車夫に私を一番後にして下さいよゝ賴んで小さくなつて從つて行く、始めて我身は世間に出ては極めて小さな殆ど存在を認められぬ位小さなものといふ事を知覺つて我ながらいぢらしき身とつく〴〵感じた。此後姿を見送らるゝ父樣母樣の御感は果して如何だらう？溜め涙が呑む側から側から溢れて來て曇る目を曲り角で顧り返へると兄樣がお帽子を振つて居られる、一寸首を下げて見返るともうお姿も見えぬ、いよ〳〵これから一人ぼつちになつた樣な氣がして下川氏の住宅迄不覺の涙に手巾を濡らして了つた。夫人令孃の御心づくしの御馳走御茶菓など頂きお手厚きお接待を受けて午後五時頃歸宅したのであつた。それから今日で僅かに五日。大變日數がたつた樣に思はれるが數へて見ると僅つた五日、日足の遲いのが怨めしい。三年五年は直に經つものとは年を厭ふものゝ言葉、待つ身には恐

らく千年の長さを覺える事であらう。

風邪を引いたか頭痛がする。父母の近くに殘つた身でさへ少しの病にも心淋しう思ふものを寄る邊なき萬里の異郷に冷きベッドに呻吟して氷の如な藥瓶を手にし給ふ時は如何に如何にお心細き御事かとそゞろに涙が湧いて來る、あゝ



泣き度い、涙は今の私の隔ない慰め者である。

『若奥様は御居間で入らつしやいますか奥様のお召し』とつるの一聲、ハッとして我に返る。

障子開けて縁に出ると短かき秋の夕日は爛け過ぎた紅葉に照つて南天樹の實が蒔いた樣に落ちて居る。

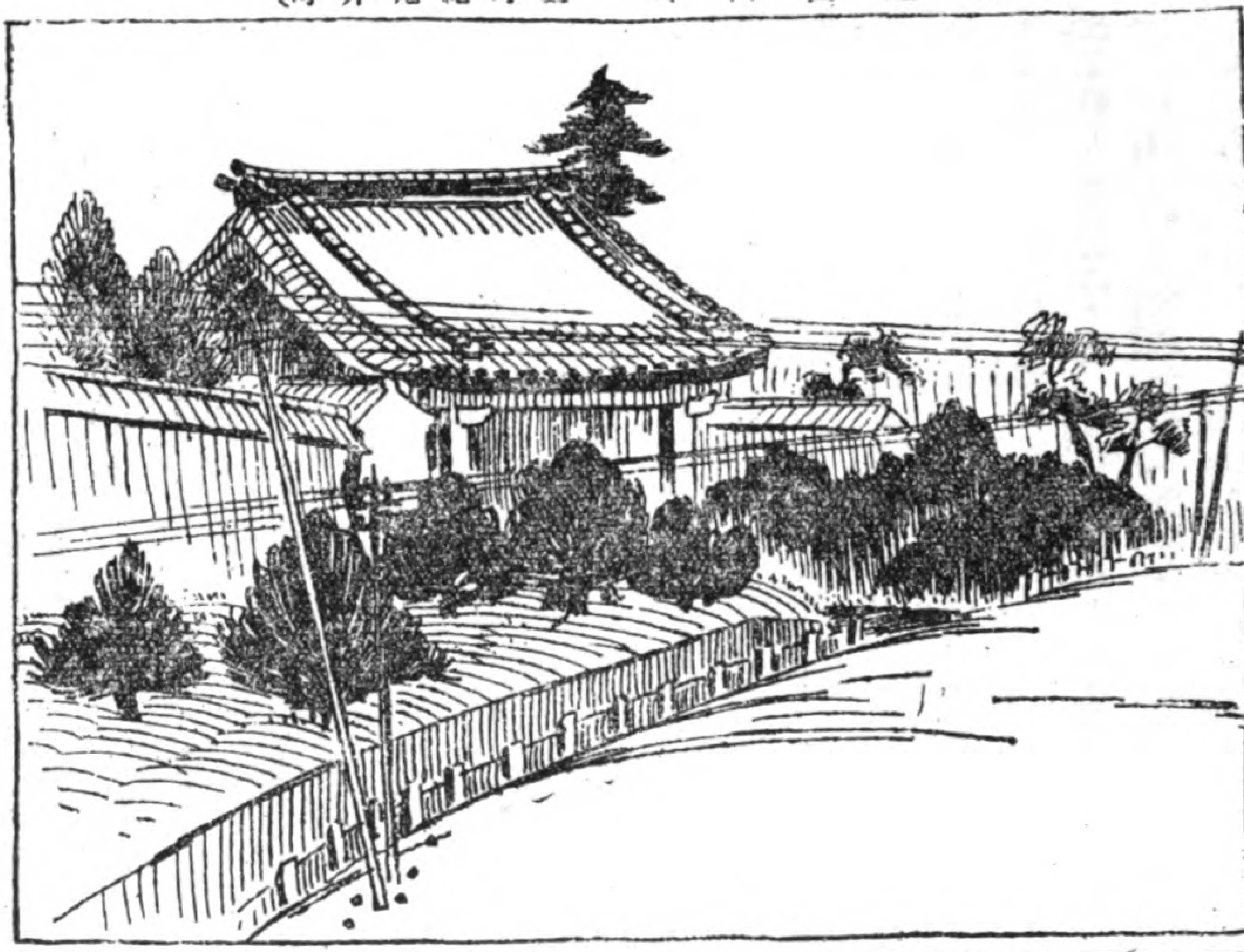
麹町の伯父樣と華子樣（義従

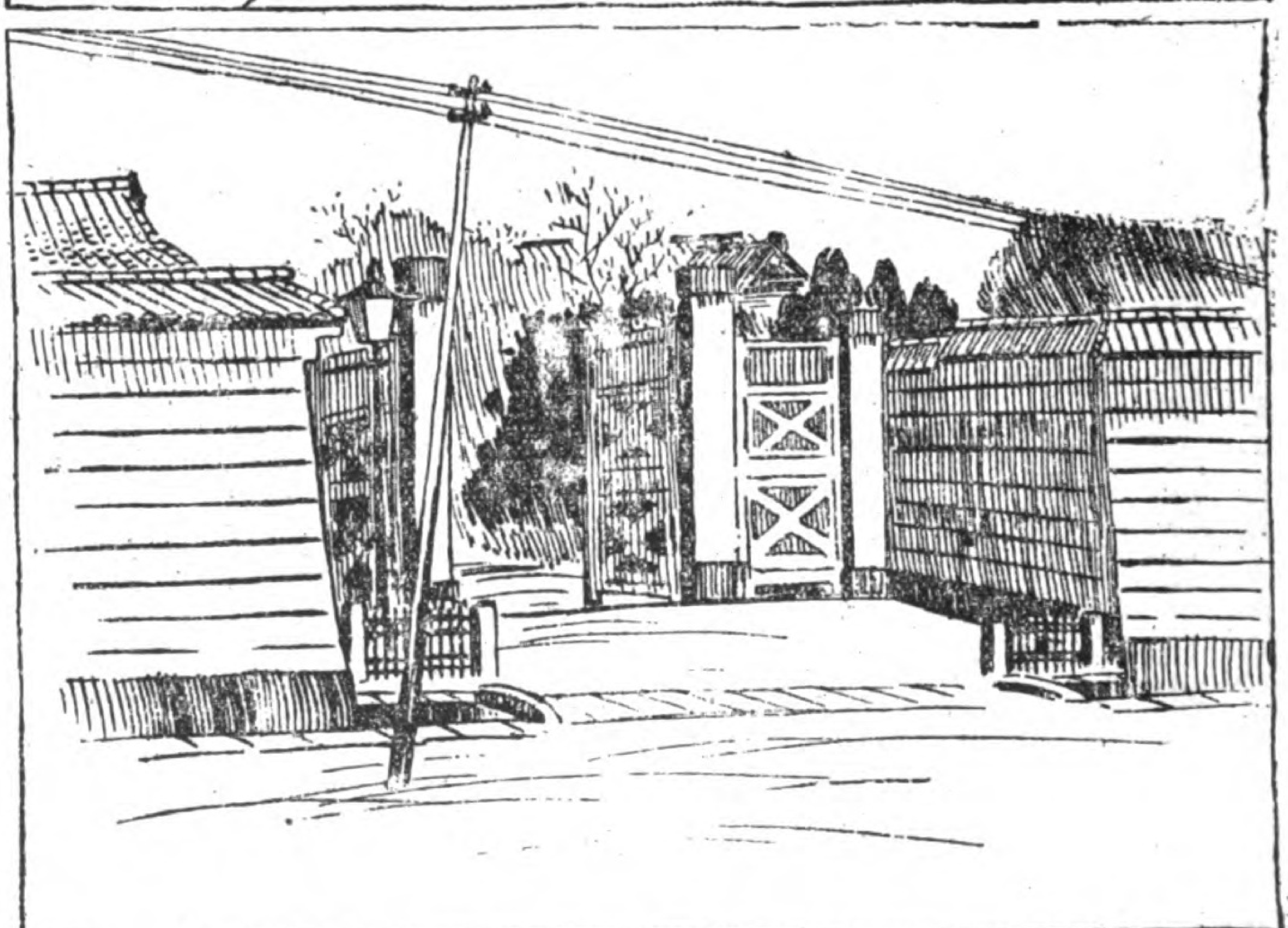
妹)とが御訪になつて御一緒に御夕食を頂く、御養父様御好みのおさしみ伯父様の鹽蒸鯛の白ソースかけ其他二三品別に珍らしいものもないが華子樣に手傳つて頂いて久しぶり賑かに濟んだ、食後のお羊羹果物、今迄はこれは奈何だと御手づから取つて下されたが、ああ其君は今は海山の彼方白雲に遠く立ち隔だゝれて了つたのだ、事毎に思ひ出される。其中にも華子樣は愉快さうに康樂園のダリアが美しかつたの先日銀座通りへ行つた時田舍者が天賞堂の店前で夢中になつて見て居た拍子に頭を硝子にイヤと云ふ程打つけて其顏の可笑しかつた事のと種々さも面白さうに語り興じて居られる、年は私と僅か二つしか違はぬのに巾廣のリボンをマーガレットにかけて大きな絣の御召に小豆色のお羽織・何の氣兼ね苦勞も知らぬ娘時代の暢氣な如何にも若々しい目元口付き、逐つり込まれて私も既往の學生時分の氣に返り滑稽談など持ち出して何も彼も忘れて居るとお勝手の方で母樣のお聲、「まだかい? 何をし 居るのかね! 田舍のお方は悠 暢なものですね」又しても臺所の片づけが遲い御小言か、全く遲いには遲い、別に遊んで居るのでも怠けるのでもないのだけれど。

御一緒に庭に出ると眞紅な夕陽は樫の木の彼方に名殘の光を止めてお寺の鐘が夕暮を告げ始めた、其殘光が刻々に沈んで落葉寂しき庭の冷い空氣を動かして鼓膜を打つ其鐘の音! 深く〳〵暮れ行く秋の哀れを覺えて「物の哀れは秋こそまされ」とか「夕の鐘に涙を落す」とか古來謳ひ馴れた語、常は昔の人の歌文は一種の規則の樣に秋は寂しいと言はねばならぬと考へて居たのかとさへ思つたものが今は我身に沁々哀れに悲しう覺えられて、人情は古も今も變らぬもの、いくら言ひ古るしても此後千萬年の後も同じ思ひは幾多の人に繰り返へされ同じ言葉が幾千の口から叫ばれる事であらう。言葉は古い、而も其思は永久に新たである。十六七日頃の月は枯葉も殘らぬ柳の糸に淡くかゝつて居る。

あはれ船窓の月果して如何!!

伏見宮御邸（麹町紀尾井町）





華頂宮御邸（三田綱町）



新奥様訪問記

マダムぶられの記

野菊女

飾棚の上に今とびたちさうな鷹の剝製も、布袋の置物も、あの油繪も、この寫眞帖も、もう眼が痛くなる程、拜見したし、置時計の子供が愉快げに、ブランコする樣も二三十回は算へて見た。

こんな事と知つたなら、お訪ねするのではなかつたもの……といつて、今更お目にもかゝらないで、お暇するのも、ちと大人しくないし……

一たい、まあ、けふは何といふ間の悪い日なんだらふ。澁谷の病院に貞子さんをお見舞申してのかへり道電車までは七八町、急ぐともなく通りかゝつた御門前何心なく仰ぎ見た門標はクラスメートの幸子さんのお住居!! お懐しさが一ぱいになつて、前後の思慮もなく、お玄關に立つて、案内を乞ふたが…、噫、よせばよかつたのねえ。女中の取次ぐ名前をきいて、あら野菊さん?、よくまあ訪ねて下すつたね、さあ〳〵こちら…へと御自身、お出迎へて下さらうなどゝは、全く私のうぬぼれ身分柄…。そんなにまでして下されかし、とは願はしないけれど、お女中に導かれて、應接間の椅子に、大きなお臀を小さく腰掛てからもう、一時間近く…。それは、叮嚀な女中の手に、美しい、九谷のお茶器も運ばれて、香ばしい、結構なお茶もいたゞいたし、思ひきつて大きく切つた、カステーラも、とりわけて下さつた、さつき女中が投げ入れた、暖爐の石炭は眞赤に燃えて、逆上る程温かいけれど、けれども私は、何となくちり毛のあたりから、そく〳〵と身に

沁み渡る冷氣を感じて、着物の袖を胸に疊んだ。
たとへ昔は一つ教室に机を並べて、いつまでもよ！と契り合つた友垣の中とは言つても、今では幸子さんは、內務省の高等官、洋行歸りの法學士夫人、田舍教師の女房風情の儂が學校時代のクラスメートで候なんどゝ、お訪ねしたのが一期の不覺であつた…
と、さやく／＼と衣擦れの音がして扉があく、ぷんとえならぬ美香が默想の腦を刺戟して….
『ま、大へんお待たせいたしまして…、失禮致しました』



金鈴のやうなお聲は、昔ながらの幸子さんだけれどどことなく凜として冷たいやうな氣がした。
押されるやうに儂は叩頭した…が、瞬間…、僻み根性の反抗心は、むら／＼と沸いて、ぢつと幸子さんを凝視すると、にこ／＼とお美しく
『よくお出下さいましてね、ほんとに久濶でムいまし

たこと、あゝ卒業後、一度もお目にかゝりませんでしたかねえ！、でも貴姉は少しもお變り遊ばしませんのね、私などは、もうこんなに老けてしまひましたのよおほゝゝゝ」

さも〳〵懷し想に、溢るゝばかりの御愛嬌…、これあるかな、旦那樣のお評判のよろしいことゝ、感心して見上るお髪の、まあいゝ恰好、ふつくらとだしたお前髪に、これがローマとかエヂプトとか、葉卷の名と間違ひさうな名の卷方なんでせう、寶石入りの金ピンがきら〳〵と眼を射て、なんのお老けなさる所か、歡樂に伴ふ花やかな御ものごし、同年の儂より四つ五つはお若いやうである、卓上の呼鈴を押して、女中をお呼びになつて。

「ね、此方は珈琲の方が、お好きなんだから…、早くしてね、あ、それから、あの！貴姉！、今も矢張林檎はお好きでゐらつしやるの…、オヤ、さうですか、ぢや、あの林檎も持つておいで…」

何たる御親切なんだらう、一時間近くも、獨りぼつねんと、出御を待ち奉つた舊友の、このみすぼらしい田舍者姿はお眼には入らないかのやう、お如才がない

「貴姉、只今でも田舍のお住居…、まお羨やましいこと、閑靜な田園に、自然の風物を友と遊ばすなんて、詩的ですわねえ！、私などは、もういつも、こんな、塵の都に、千篇一律、忙しい思ひばかり繰返して居りますの、熟々嫌になつてしまひますのよ」

鳥渡、眉を顰めてお見せになる表情も却々巧者になつた、談話は貞子さんの病氣にうつると、美しい眼を大きく遊ばして。

「あ、さう〳〵、私も早くお見舞申さなくてはと、毎日思はない日はありませんけれど、もう何やかと、あなた…、内のこと、外の事で、身體が二ッあつても足りないやうな、思ひばかりして居るものですから…、けふもあなた…、二時頃から、止むを得ん事で、藤波子爵夫人を、御訪問いたす都合で厶いましてね、それや、これやで貴姉をも、こんなにお待たせしてしまひましたのよ、失禮な…おほゝゝゝ」

オホヽ、言譯いつてらつしやるよと、腹の蟲がつぶやく

「で、あなた貞子さんをお見舞下さいましたの？、まあ、御遠方をよくねえ…あの、何ですか、貞子さんの御病症は、肺…のやうな…」

「えゝもう肺も肺、ツベルケルとかいつて、菌がもう六號とか八號とかまで、進んでるのでムいますつてね」

「まあ！そんなに、酷く」

痛ましいといつた風に太息して、獨言のやうに。

「お可哀想にねえ…、私…どうしませう、此二三日中は出られないし」

と考へてらしやるから、

「御承知の通り、須磨子さんがいらつしやいますから大層都合も宜しうムいますし、あの廣岡さんが又、御親切に殆ど附きりでお世話して下さいますの、それにもう毎日誰樣かしら、見舞つて下さいますから貞子さんも大元氣に、喜んでいらつしやいますよ。」

一度も見舞つて上げないのは、あなたばかりと、言ひたいのを、ぐつと呑みこむ

「よく皆樣がそんなにねえ…、私、ほんとにすみませんのね…、貞子さんも何とか、わろく思つていらつしやるでせうねえ」

「いゝえ何と思ひませう…、只もう昨日もお噂が出ましてね、我々同級生の誇りだと、申合ひましたんですの、廣岡さんなどは例の熱心な老孃主義ですけれど、幸子樣位に、目覺ましい活動ができるのなら、すぐにも持說を抛つて、出雲の神樣に贄を捧げるなんて、あなたおほゝゝゝ」

「おほゝゝ　相變らずお盛んだと見えますねえ…、それはさうと、兎に角、ちよつとお見舞にあげて置きませう」

ちやうど其時珈琲を運んできた女中に

「きよや！、山本は居るの…、さう、ではね、先程の果物の籠ね、あの籠を山本に持たして、澁谷の赤十字病院…あゝ、山本は知つて居ますよ、病院の、內科…

あの野菊様何號室で厶います…あ、さう、内科第十二號室小林貞子様、いゝの分つて！　其方の所へね、お見舞申上げてくるやうにね、私の名刺を添へてね」と極めて明快にお命つけになる。書生が持つてゆく立派な果物籠……、理窟やの貞子さん、難有くおうけするかしらん。

「さ、野菊さん、珈琲が冷えますから、どうぞ…、林檎は、いかゞ剝きませうか…」

先ほどの、女中が又入つてきて、

「只今、山本を遣しました、それに、あの奥様――、御隠居様が、又少々お胸がお痛みださうで――、お薬をと仰しやいますが――」

「おや、又いけないの――、ぢや、あの救急函に入れてある健胃散――あれをお上げ申して御覧夫でもいけなかつたら、電話で青木先生をお招き申しな…、あ、もう三吉を、旦那様のお迎ひに、あげなければなりませんよ」

命側の女時計をパチンとあけて御覧なさる、オヤもう二時、まア私とした事が、あまりに艶麗かな幸子様の夫人振に見惚れて、うか〳〵お邪魔申上げた、これだから田舎者は、氣がきかないと、いはれるのだ、周章てゝお暇乞すると、いかにも殘り惜しげに

「では又お花の時分にでも、緩々とお出かけ遊ばせ…何もお友達の中、決して御遠慮なく！、キッとお待ちして居りますから…」

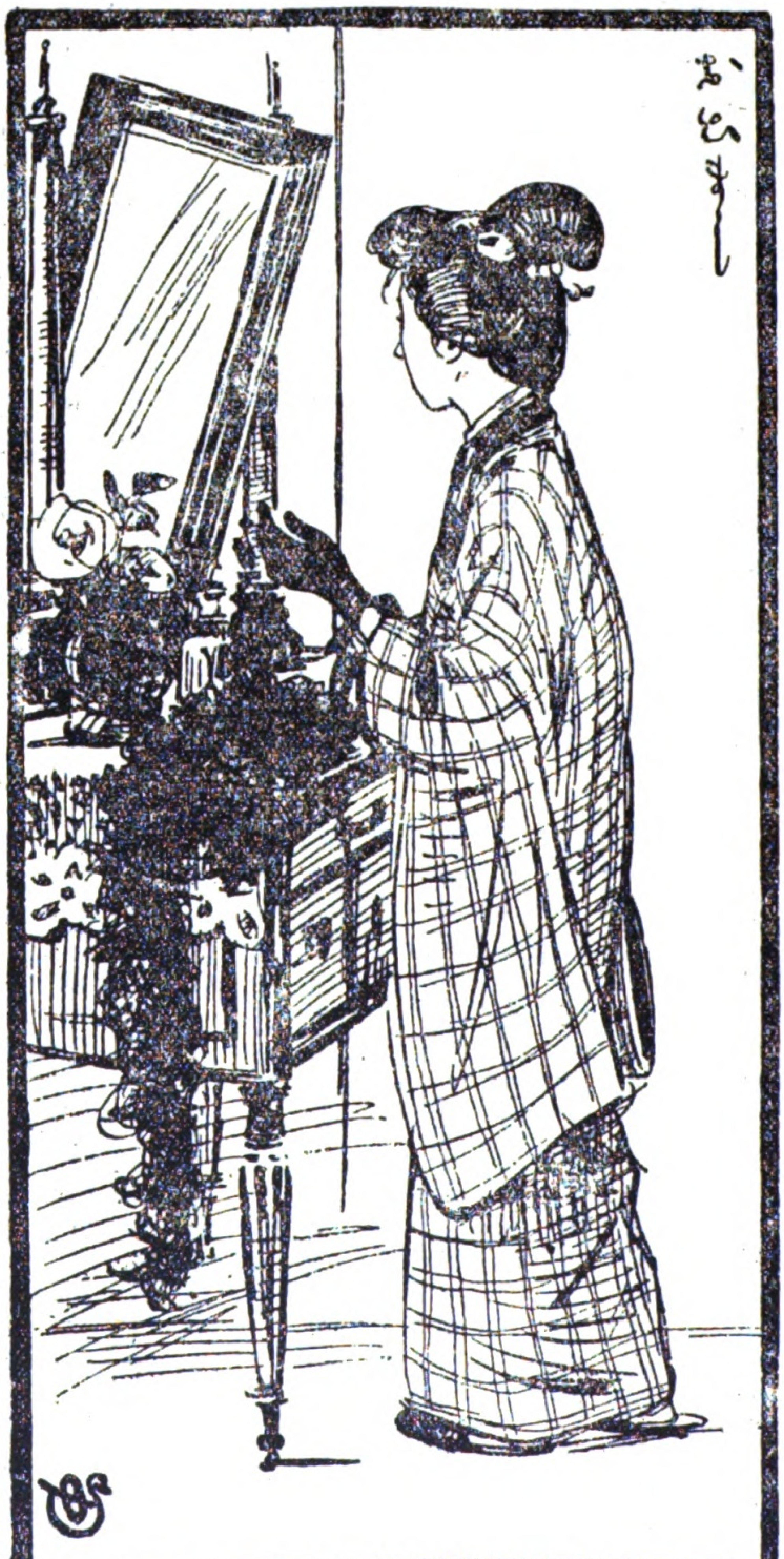
と、力をこめて、言つて下さる。

「あのね奥様私の住居は片田舍ですよ、何にもお目にかけるやうなものも厶いませんが、それでも、春は菜の花、れんげ草の咲きつゞく野の末に、霞む筑波の高さ寸餘、其山より高く舞ふ胡蝶の袖も、のんびりして居りまする、秋は城址に亂れさく千草の花、百花園あたりのとは、又趣も異ひませうし、背戸の畠で、掘りたての甘藷、埋火のむし燒は、お口には合ひますまいが、昔、寄宿舍の雪の窓で、おみだくじ、ひいた匂ひもいたしませうに、ふとお心のむく折も厶いましたなら、自働車にでも召して、米のなる木でも見にお出

かけ下さいませ、旦那様のおつとめ柄、行政視察とやらのおつもりで…』とつひ、口をすべらした置土産を

『おほゝゝゝゝ』と輕くうけて

『まあ　恐れ入りましたね、手織木綿の布子の裾を端折つて、これから歸つてお漬菜でも洗ひませう、大層なマダムでムいますこと…』



『いづれ貴姉のマダム振を一度は、拜見に出かけますから…』とお笑ひなさる、

『おほゝゝゝ、結構ですわ、女優の何とやらさへ、あなた、マダムといふぢや、ありませんか』

とは、又振つた御挨拶、重ね〴〵恐れ入つて、ちびた駒下駄の音をたてじと、五間ばかり、御門際で振返つて見ると、もう姿は玄關から消えてゐる。

ちよつと買物して電車にのり、停車場へいつて見ると、今切符をきり始めた所、やつと間に合つてほつと一息…、もう〳〵目まぐるしい、都は僕の性に合はない、矢張わたしには、下肥臭くとも田舍が氣樂でよい歸去來、我脊子われを待てり矣だ。さう〳〵、途中で買つてきた林檎、早く歸つて食べませう。

心地よい車の動搖に、半は夢のやう―、昨日家を出てからのこと刻まれた影、殘つた印象、病院での快談疲れた貞子さんの顏――優しい須磨子さん――自暴自棄のやうな廣岡さん――誇りに充ちた幸子さん、光榮ある女性の權威と、敗殘者の暗い心もが、網のやうに――糸の縺れのやうに…、あゝ何だか頭が重い〳〵。

「大宮――大宮――」と呼ぶ、驛夫の聲に驚いて降りた。赤切符を渡して、待合室の横を通りかゝると、其窓から黒色の鳥打帽が、ぬつと出て「ヤア」といふ。

吃驚して見ると、まあ精さん!?、新調したしらい焦茶のサックコート、帶革に身を固めて、ハンチングウオッチなんかつけて、斜に新う銃を脊負つた姿は、一かどの狩獵家らしい。

「こちらの方へいらしつたの?、私ねけふ一寸、およりしたけれど、伯母樣もよし子さんも、皆お不在だつたの!」

「ヤ、さうでしたか、生憎でしたね、僕等はね、昨夜はお留守宅へ厄介になつたですよ」

精さんの背後から同じ樣な服を着て、髮を長くわけたハイカラ貴公子が、顏を出し

「ヤ、始めてお目にかゝります、昨夜は、はからず御厄介になりました」と挨拶する、ぬからぬ顏つきで精さんが。

「僕の親友、林君です」と紹介して、

「ヤア昨夜は實に愉快でしたよ?、何にしろ、マダム(今日はいやにマダムの流行る日だこと)御不在の所へもつて、この荒武者が揃つて、ぬつと御宿の無心を申入れたんだ

から、ハス君大に面くらつて、直介君と共に天手古舞を演じてしまつたです」と二人で大笑ひする
「オヤ〳〵とんだ梁山泊ね…、何か御馳走ができて？
「それや君、我輩等御持參の鳥料理、鴨鍋といふ寸方で、食ふ程に飲む程に、劍舞だの、琵琶歌だの…、とうとう一時迄」
「ぢや、もう天井の煤拂ひだけは濟んだのね、おほゝで、けさ御飯はどうしました、炊きました」
「…、それがです、まア姉さん大失策よ、九時頃だつたね君、のこ〳〵起きだして、ハス君を立役者に、飯炊場の一幕もすみ、いざこれからと、僕が味噌汁の鍋をもちだすトタン、安鍋だと見えて、持つてた耳がポツンと折れて、鍋がパチヤリと落ちてしまつた」
「オヤ〳〵大へん……まあ」ハイカラさん堪へかねてふつと失笑だす
「一たい姉さんがケチだからいかん、あんな鍋を」
「マアこの人達は呆れた人だね、そんな踈さうそして…おほゝ、ではお汁はだめね」
「ため所ぢやない、千六本の大根汁が四疊半一ぱいさア、、…、所で又、飯がだねえ、まるで針のやうにパラ〳〵ときてるのさ」
「いやね、水が足りなかつたのね、でどうして」
「詮方がないから、皆で鷄卵をわつて漸く食道へ流しこんで置いた、いやどうも閉口さ…、實際ねえ、けさの飯よりは、例の、姉さんのライスカレーの方がましかも知れないからねえ」
「好加減になさいよう…口の惡い…、舌根震動だなんて、いふものだから、多美子さんの兄樣にまで、笑はれてしまつたわ」
「それは酷だ、何も僕が吹聽したんぢやあるまいし、姉さん自分の好きでヒトの事まで書きなぐつて…」
ガラン、ガラン〳〵、それもう上りは着いてよ、オヤ〳〵〳〵二人は駈けだしたよ、おほゝあのスタイルつたら、あれでも大學生…おほゝゝゝゝ腰に下げたサツクが、ふら〳〵してるわ、鴨どころか、雀一羽だつて、はいつちやゐないんだよ、きつと…。精さんて

ば、僕より、二ッの年下だといふので、ヒトの事いつでも、姉さん〳〵だつて、あたし…まだ、これでもやつと、二十位にしつきや、見えないだらうと、自信してるのに、あんな真黒なアイヌよろしくの人が「姉さんなんて…、大に人格に關するわ…、オヤ馬車の喇叭が鳴る、こちらも大急ぎだ。

俥では、護謨輪でなくとも、馬車の三倍、賃錢をとられるから、經濟學者の僕は、却々俥などには乘りやしない。

馬車は、もう羊羹色の、洋服をきた御者殿が、古い膏毛布を、腰に卷いて、今鞭をあげやうとする所—、僕が乘込んで、ちやうど滿員八名、御者がギユー〳〵と妙に、口をならすと、心得て馬車が、ガタガタガタンと走りだす。

上下動、左右動、却々猛烈な勢だけれど、幸に此地方は平坦だから、天井に體を投げつけられる、程ではないけれども、放心してると、お隣りの才槌頭に、おでこの額位、叩かれかねないのだから痛快だ。向側の膝と、こちらの膝とはすれ〳〵に氣味の惡い温味が傳はることもあるんだから、自然主義の文士などにも好い材料を供給する事もあるさうな、然しけふ、乘合せた連中は、何れを見ても山家育ち、といつた格ばかり…、私の隣にゐるのは、黒羅紗の筒袖外套をきた男紺やの職人でゞもあると見えて、真黒な指に、朝日かなんかを、つまんで、おいしさうに吹かしてる、向側のは髪のみだれた四十ばかりのお神さん、營養不良と見えて色のわるいこと、其隣に二人連の若い衆、これでも萬作踊の殿樣位はつとめると、いつた風に、頭をてか〳〵させて、綿ネルのシャツの襟尖をピンと三角に前の方につきだして、大得意だ、其他は、江戸見物の歸りと見える、老爺さんお婆さんの群で、觀音様の鳩がどうしたとか、勸工場つて所は、たゞ見せて呉れるとか、噺し合つてる。先、かう見渡した所で、染直しではあるが黒縮緬の羽織きて、蛤形のショールを卷いた、大丸髷の僕が、まあ、此馬車の女王といふものだ、古い中折帽の上から、スコッチ縞の襟卷を頰被

りにした御者が、シーッといふかけ聲、に大路を拂はせて、痩せたりと雖、馬は栗毛、塵を蹴だてゝ、一望千里の武藏野原を疾驅する、嗚呼、何だか無暗に愉快でたまらない、折々、テヽト、テトテトーと、ラッパを吹くのも振つてるし、例の殿様連の頭から、ぷうんと安香水の、ほのめくのも惡くはない、此所、野菊、大に夫人振つて、大氣取にすましこんでるうちに、もう町にはいる。

正門から、蹄の音戞々と「お歸りー」と、呼ばせたい所を、殘念だけれど、大道で馬車を乘りすて、横町を曲つた格子先、チリチリチリン！「只今」といふと「お歸りなさい」と直介さんがとびだした（直さんは主人の甥で此間からうちへきて中學三年へ通つてる）「叔母さん、杉本君にお逢ひでしたか」「エ、停車場で逢ひましたよ大變んな騷ぎしたつてね…」「オヤ叔父さんは…」「叔父さん今入浴に行きました」「さう…、おやもう五時過ぎてるぢや大急ぎだ、直ちやん何か買つてあるの…、え生鰯ま、何とかしなくつちやね、直ちやんも、お湯にいつてらつしやいな」手早く、一張羅を脱いでこれから大車輪！、鳥渡よくでる、食卓日誌の體裁にかくと、

一、鰯つみいれ、澄し汁、葱、
二、鰯天ぷら　附合おさつ、にんじん、
三、すりいも　三杯酢花かつを、もみのり

お香の物は、淺漬の大根に、茄子の辛子漬、お飯櫃を見ると、ナールホド、まるで生のやうなご飯が澤山殘つてる、お鍋のあたりに、ビール瓶の死骸、無慮五本、傍に味噌汁でぐちやぐちやしてる雜巾が、つくねて置いてある、御飯が、ふきはじめた時、二人共眞赤になつて、お湯から歸つてらしつた「不意のお客様でしたつてね、さぞお困りで厶いましたらう」といふと、「やあどうも、留守居をしつけないからねえ何所に何があるんだか、薩張分らなくて、大分、家中を荒したよ」と仰しやる、誰が着たのだか、きせたのだか、私の銘仙の羽織だの、白絣の浴衣なんか、引出したまゝにある、どんな事をしたのかと可笑しくて、しかたが

ない。チャブ臺をだして、皆で溫かい夜食をいたゞく
どうしても、うちの御飯が一ばん美味しい。
食後、樂しみにしてた林檎を剝きながら、昨夜から
けさの滑稽談に、お腹の皮をよる、こんな男ばかり、一ケ月も留守居さしたら、まあ、どんな事を仕出來すだらう 昔から「男鰥に蛆がわく」といふ、俗諺さへある、だから女といふ者、殊に細君を、大切になさらなけりやなりませんよと、際どい所で、鳥渡、女權擴張を試みて置く。



さう〱、鰯の殘りが、まだ五尾ある、裂いて酢びたしにして置けば、あしたお肴の足になる、針のご飯も煮かへして麹一まい入れて、甘酒にして置きませう
また、あすの朝のお米も、といで置かなくちやならないのね…、忙しいこと…。



八百屋の店

話の種

印度の奇習

◎印度人の服裝は多くは半裸體跣足で、男は腰に大幅の布を卷いて前端を股間から後へぐつと端折り臀の上で夾んでおく、女は又縫目のない大幅の一枚布を肩からすつぽりと纏ひつける、之は確にまだ裁縫と云ふものを知らない時代の遺風であらう

◎印度人は總て高い善い鼻を持つてゐる、之は赤ん坊の時分に母親が毎日丹念に摘まみ上げて拵へるのであるさうだ、少し高貴な人になると鼻翼に孔を明けて種々の飾環を着ける、此外耳にも手にも足の尖までも亦其相應な裝飾を着ける

◎印度人は髮の毛を妙な形に剃立てゝ色々と頭の恰好を替へる風習になつてゐる、又印度人の足は日本人のやうに腓腸部が膨れてゐないから裸體で見ると恰で二本の棒杭を立てたやうである

◎子供の抱き方が一寸變つてゐる、女ならば其の横に著るしく發達した腰骨の上へ片手で子供を抱へ込んで歩く、男ならば子供を肩の先へ跨らせて自分の頭に摑まらせる、胸に抱へたり背に負ぶうやうなことはしない



◎印度人の常食は矢張り飯であるがそれを蓮の葉に盛つて手で丸めて食ふ、決して皿を用ひない、而して一度々々其蓮の葉を捨てゝ終ふ、又女は非常に乳を見せることを恥として、はだかの時でも乳だけは隱してゐる

◎印度人には妙な風習があつて、便用の時には瓶に水を携へて一に左の手で洗ふのであるゆゑに、食事には必ず右手を用ひ左手では食物に觸れぬやうにしてゐる

◎象は印度人の爲には馬の代用となるのであるが象の背中に大きな箱を縛り付けて其處へ客を乘せ自分は一人象の頭の上に乘つてゐる手には鋭い鎗の先のやうな刃物を持つて折々象の頭をつゝく、すると流石の象もちくりとすると見えてのろ〳〵足が少し早くなる

◎雨の降る時は芭蕉の葉を傘に翳して外へ出る、人が死ぬと其儘野で燒いて骨は近所の海か川へ捨てる、棺桶のやうなものは用ひないのである。

米國婦人の服裝費

富裕な米國婦人が毎年衣服費として支出する金額は莫大なるものである、近頃ある記者が取調べたところによると、どうしても廿萬圓を下らないと云ふ、即ち毛皮類が一萬圓、自宅服が六千圓、宴會服が一萬圓、車上服が四千圓、夜會服一萬六千圓、略服が千六百圓、外套が五千圓、散歩服が三千圓、外出服が六千圓、帽

子が二千四百圓、乗馬服が千五百圓、装飾品が五千圓、靴其他で二千六百圓、手袋等が四千百圓合計七萬七千二百圓を要すると、そして毎年斯の如き巨金を衣服身の廻りに投ずる婦人は紐育府だけで少くとも六千人を下らないさうだ、米國全體を通計すると一萬人以上はあらうと云ふ、なほ一層奢侈なものになると一着の價六萬乃至八萬の黒貂皮で冬上衣を着するものすらあるといふ、且つ之と同じ皮のマッフなどを加へると一揃の婦人の防寒具の價約十萬圓に上るだらうといふ。

支那の新夫人

支那人は一體に早熟であるから我邦の十七八は支那の十四五と略ぼ匹敵する位で、繪にでも書くなら其頃が一番美しい、娘のことを俗に寶物と云ふ程に、日本では片附き先きのことばかり望んで居るから、自然身の飾りも一番立派である、誰に媚びてドーと云ふことはないが、自然ソー云ふ風になつて居るに支那では此年頃が最も人の嫌疑を避けなければならぬ時で、若しも十五か十六かの少女が身を入れてお化粧でもしやうものなら、父母は忽ち心配をする其位であるから、外にも出さない隨つて人に見られることはない、朝夕顔を合はすものは身内の人ばかりであるから、一方から云へば決して身形を飾るべき必要はない、支那の少女は其最も天然の麗質を外に現はすべき時



代には、垢こそつかれ、着物も木綿で髪は垂髪、顔は薄化粧にして簪などの飾りはない、偶々外出する時は格別であるが、平生は極めて質素な風をして居る、それに反して一旦人の嫁となれば、力の及ぶ限り身の周りを飾立てる、尤も新婦は殊に身の周りに氣を附けるものではあらうが、支那の如きは又格別で、啻に新婦の時代のみならず、顔に年波の皺の寄するもお化粧は矢張り止まない、蓋し己れを愛するものゝ爲めに形つくるので今は何等の嫌疑もなく誰に遠慮もないから全身の媚を其夫に捧げる所からしてかうなるのであらう、

眞珠貝の話

◎夏の晴れた朝、志摩の海濱小島の間に櫓を操つて船を乗り出すと、鏡の様な水面に桶が三つ四つ五つと到る所に浮んで、何處ともなく海女の笛が遠く近く耳底に沁み渡る様に響いて來る、これが此土地の海女が眞珠取の作業に從事して居るのである、

◎志摩伊勢は昔より海女で有名な土地である、海女になるには十二三歳の頃より水に入り掛け、初めは一尋二尋の淺い所から次第に深所に向つて修業するので、修業が積むと十七八尋より廿尋位の深さへも自由に潜水し得る様になるのである、

◎海女の全盛期は十七八歳から三十歳位迄で、此時分に元氣が旺んだから如何なる怒濤をも物ともせず數十尋の海底へ入つて

勇ましく働く其内非凡の技倆を有つた者は外海の鮑取に出掛けるが、其時は碇を抱いて海底に沈み、作業が終つて海上へ出る時は合圖の綱を引いて船へ引上げられるのである、

◎潜水は此地方の結婚條件でこれをなし得るものでなければ嫁に貰ふ者がない、潜水さへ上手なれば姿色は少し惡くとも貰ひ手が多いと云ふ有樣であるから婦人は競ふて潜水を勵み嫁入の資格を拵へるのである、

◎海女の働く時間は普通一日三回で季節に依つて相違はあるが夏は一回約一時間乃至二時間位冬は一回約十五分位である、海岸近い陸上には海女小屋と云ふものが設けられ冬は潜水後其小屋に入つて火に身體を溫める樣になつて居る、

◎眞珠取に從事する海女は白の一枚襦袢に腰卷一つと云ふ身輕の扮裝で腰に一條の綱を着け、これを數十人に繫ぎ合せて其綱の先きには桶を結び付け、採取した眞珠貝を一時其桶に納め充滿するに及んで船中に移すのである、

◎海女が水に潜る際には出來る丈け深く息を吸ひ込んで水中に下り、再び水面上に現はるゝと今迄耐えて居た呼吸を充分に吐き出す。其時海女は口笛を吹くもので、其口笛は一種の哀調を帶び、海內遠く迄も聞えて人に凄慘の感を起さしむる、

◎眞珠には古來種々の傳說がある、支那では是を用ふると長命になると同時に阿片の毒を消すと云ふので今でも實際に用ふるものがある、又支那では目藥として效驗があると云つて眞珠を粉末にして鷄の生膽と混和して使用するので、小兒の爛れ目などに用ひらるゝと云ふ印度では色澤の惡い眞珠を鷄に食はせ、兩三日を經て鷄を殺し、胃袋の內の眞珠を取り出すと其れが優美なものとなると云つて居る、これは恐らく胃中にある時に胃から分泌する酸の爲めに眞珠の外層が溶解され、內部の眞好なる眞珠層が表はれ出るのであらう、



贅澤な貴婦人の服裝

歐洲の貴婦人が交際場裡に跳れ廻る服裝料は約四十萬圓之を內譯すると日本で他行着といふ會に着て出る上着が一着四五千圓から三萬圓尤も會場に其美を競はんとするのだから安い方などは用ひない、此他仕立賃及附屬品は又莫大なもので、アンダーリネン千二三百圓、コルセット七八十圓、靴下尤も絹のが一足で二十六七圓、ダイヤモンドを以て裝飾したダイエーラ即ち冠冕が四萬圓、尤もこれは安い方である、眞珠の頸飾りが四萬圓其他腕環、指環、寶石のブローチ、櫛ピン、グラズップ是等亦却々侮り難い金額である夫れから貴婦人としては是非共馬車か自働車の必要がある、自働車なれば往復の車上ではモーターリングコートといふ上着を着る、之れが千圓、オペラやダンスに用ゐるシエーダーラップといふ外套の如きもの

が千圓、夜會の飾りなどに肩へ掛ける外套が三萬圓、尤もセーブルを用ひず絹のレース丈けで拵らへたものならば七十圓位のもある、扇一本百二三十圓、長裾の花飾りせるものが四五十圓、夜會に用ふる靴即ちイーブニングスリッパー一足五十圓、手袋一雙五圓、尤も夜會靴は上等の繻子で拵らへたるものだから幾度も穿くことが出來ぬ、手袋なども一度丈けである、然し以上は會に用ふる丈け常着は又此外で、散歩の時に一寸穿く靴一足五十圓、寢床用のスリッパー一足百圓、常用の靴が十圓、洋傘一本七十圓、帽子が七十圓、寛袴七八十圓、目の當り必要なもの許りでも此位、髪を結ふ時肩にかけるジャケット一枚が二十四五圓などいふから贅澤と云はざるを得ない。

女子の職業と結婚

巴里、倫敦、維納、伯林などの大都會の婦人を得意とする大商店では、花の如き美人に其店で賣つてゐる洋服とか帽子などを着けさせ品物を引立たせて客を引いてゐるが、餘るほど金を持つて漫遊に來る米國邊の婦人連は、これには大抵財布を空にされてる、從つて女の職業としては隨分好い收入になる、何樣美人の事であるから、巴里などでは名物の一になつてゐる、其他重な女子の職業は官衙、會社の書記、速記者、寫字者などで、以前帽子を造るとか縫物などをして前から細かい仕事に手先を使つたことのある者は皆總う云ふ方面の職業に就くやうである、此女子職業の變化が歐米大都會の家庭生活に大影響を與へてゐるのは云ふまでもなく、延いて女子の結婚に對する思想までも一變して、自活の道のあるビヂネス、ガールは總體に結婚に就いては一種の望を抱いてゐる其顯著な一例を擧ぐれば巴里の女は一體に政府のお役人と結婚することを希望してゐる、是は佛國の習慣として官吏の細君は社會の一種の地位を得られるからである、尤も黄金萬能の米國では金が萬事を支配するから、女の考もそれとは反對のやうるである。



林檎の料理

林檎パイパイは、レモン、桃、苺などいろ〳〵あれば、林檎のパイは最も甘味にして風味よきものなり、まづ平鍋の底にバタ少しひき溶かして濃く煉りたるうどん粉を敷き其上に皮を剝きたる林檎の薄身を列べ少々の砂糖と、レモン水等をふり更に煉りたるうどん粉にて充分其上を覆ひ、文火にて一時間ばかり蒸燒にするなり。

林檎のジンジャー林檎の大なるもの五ツ位皮をむき心を去り、更にこれを細かく切り刻みたるものを深き鍋の中に投じ、中斤ばかりの砂糖少しのレモン汁及び生姜を加へ、凡七八合ほどの水を加へてよく蓋をなし、文火にて二三時間ほど煮るなり。

名流夫人の日常生活

學問と裁縫を樂まるゝ

棚橋絢子刀自の平常

▲一週間の日課▼

一週間に三日自分の學校（東京高等女學校）へ出ますほかに、女子商業學校や美術學校へも講話に參ることになつて居ります、それからいろ〳〵な會にも出席しなければなりません、個人からも招かれて參りますよく、宮樣に上つて妃殿下に小學とか菜根譚とかいふやうなものゝ御講義を申上げても居ります。たゞ毎月第三の火曜日には家へ五六人御話をきゝに見える人がありますので、其日丈けは都合して在宅することにしてありますが、其他はまあ殆ど外で暮して居るやうなものです、假令出かけない日があつても歌を詠んで與れとか、又玉章を書いて與れとかいつて賴まする事がなか〳〵多いので、遊んで居る暇はありません。

▲裁縫が何より樂しみ▼

また自分も遊んで居る事は嫌ひで、もし暇があれば裁縫をいたします、尤も私は冬のものは夏の內にすつかり拵らへて了ふのです、けれど間に人が着せて與れる事がありますので、何かと縫ふものが御座います、歌を詠んだり文章を書いたりする事は、幾ら好きだと申しても骨が折れますが、裁縫丈けは少しも骨が折れません、爲初めるとやがて袖が出來たり綿が入つたりしてズン〳〵形にあらはれて參りますから、誠にたのしみです。とにかく裁縫は餘程好きだと見えまして、いくら續けていたしましても根氣の疲れるやうな事がございません、私の若い時分は、兩親と七人の兄弟との衣物を自分一手に引き受けて、縫ふたものですから、今日でも、若い人達と一緒にしても負けるやうな事はございません、近頃は家にお針をするやうな婦人が一人居りますので、遊ばせて置くよりはと思つて、縫ひ

ものを與へて居りますが、それでも矢張り手を出して見たくなつて、手傳つてやります、さうすると其人は年寄に負けまいと思ふて、一生懸命にするものですから、直きに肩が凝つたとか、歯が痛いとかいひ出すのです。

▲好んで讀む書物▼

裁縫のない時には庭掃除や讀書などをします、讀書は好きで讀むのは漢籍ですけれど、雜誌類や新刊ものなどは、方々から贈つて下さるから、之れも御親切に對して讀んで居ります、夜分は親戚の者などが訪ねて參ることもあれば、伜と話をして過す事もあります、御承知の通り先達は伜の學校が燒けたものですから、此頃は毎晩其善後策についての相談を受け、何うしたらよからう、斯うしたらよからうと口添へをいたして居ります。

▲お仲間で一番仕合者▼

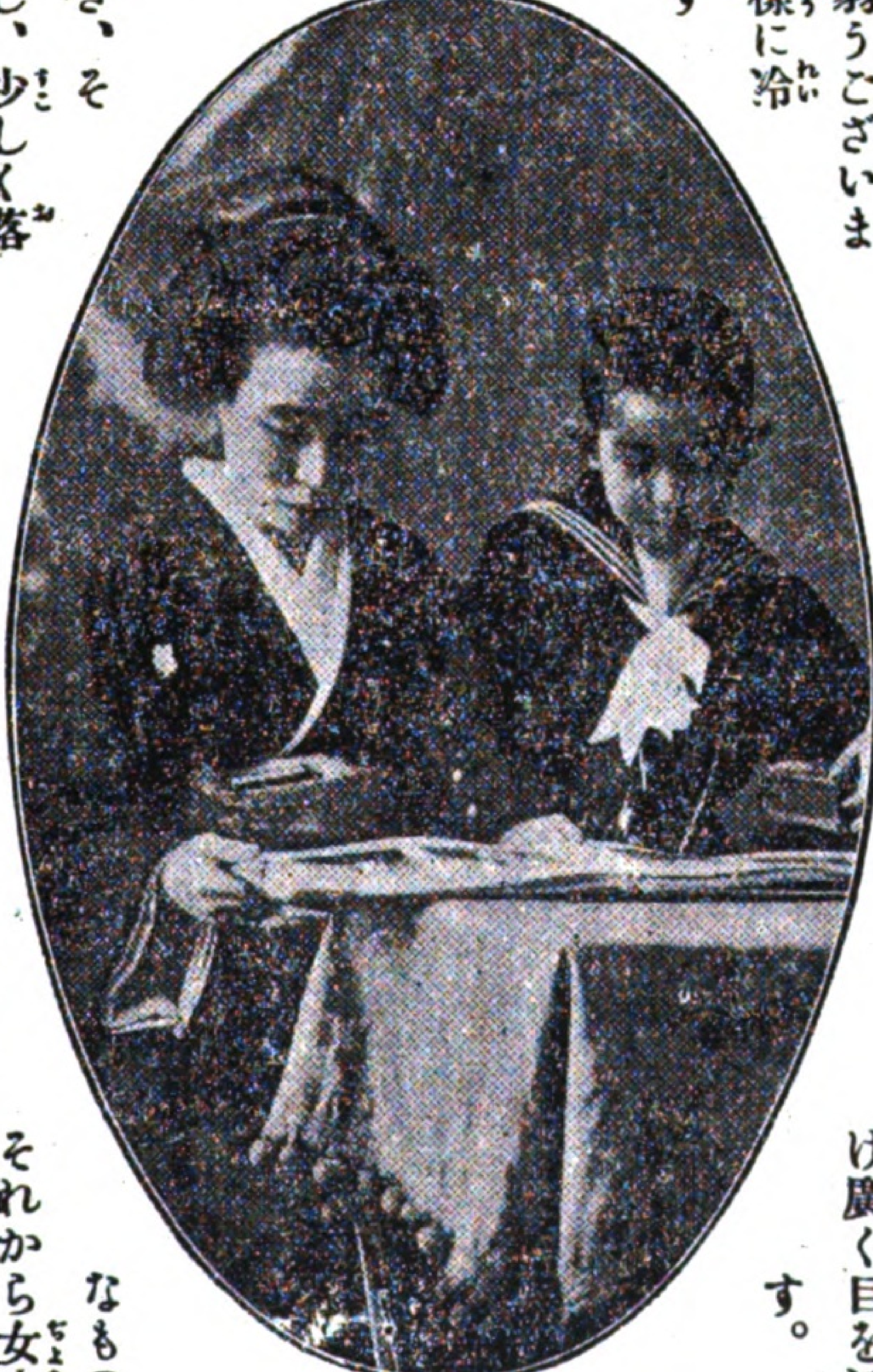
私は始終面白く暮らさうといふ事を心懸けて居りますが、實は心懸けないでも面白く暮らされる身分なのでございます、伜でも娘でも嫁でも皆お母さん〳〵といつて大事にかけて與れますので、外へ出ては矢張りお辭儀もして居らなければなりませんが、家に歸つては大威張り、まして孫達がお祖母さま〳〵といつて懷かれますと、頬ずりをして、なめても〳〵足りない程に可愛いのです、お仕合だとは仰しやつても實のお子様でないお間柄には、それ相當の御氣づかひもあり御面倒もあつたりして、お氣の毒なものだと伺ひますが、それを思ふと、お仲間でも私は一番の仕合者かと思ふのでございます。

令息の身體に注意さるゝ
金子子爵夫人の平常

▲數年來の冷水摩擦▼

此頃は兎角規則立つた生活に緣が遠くなりました

それでも今年十三の息が學習院へ參るものですから、朝は毎日六時半に息と一緒に起き、冷水で身體を拭ふてやりまして、それから朝食の濟む迄側に附いて注意して居ります。息は此頃は大分壯健になりましたけれども、以前、腸胃が弱うございましたから、それで斯樣に冷水摩擦などを致しますので、もう久しく續けて居ります。子供に御飯を濟ませて學校へ送り出しますと、やがて主人も起きますから、私共も朝食を頂き、それから髪などを梳かし、少しく落ちつきますと其の日の新聞を一通り讀みます。新聞は時事、朝日、讀賣、報知、其他國民、萬朝、日々など色々でございます。戰爭當時金子が亞米利加へ參つて居ります間は、地方の新聞に金子の事の出てゐる部分の切拔迄取り寄せて讀みましたが、此頃はそれ程にも致しません。けれども新聞は讀んで居りませんと、どうも世間の事が分らなくなつて困りますから、成るだけ廣く目を通したいと思つて居ります。



金子子爵夫人と令息武麿氏

▲つひ大事にしすぎる▼

彼是致して居りますと、出入の魚屋が參りますから、一日中の入用なものを見計ふて取り置き、それから女中に息の辨當を拵へさせて十一時半頃迄に學習院迄持たせて遣はします。これは溫い御飯を頂かせたいからでございます。學校の先生は餘り注意が過ぎて宜しくないと仰しやるそうです

が、何分身體がまだ十分強いとは申されませんから、今二三年は成る丈大事にして置かうと思ひます。金子なども其樣に氣を揉まずに團（子爵の令妹の婿君團琢磨氏）の家のやうに放任して置けと申しますが、團さんでは多勢のお子さんですから氣丈夫でございませうが、私方では男の子供は只一人ですから、誠に心細いので、惡いとは存じ乍らつひ注意を爲過ぎるのでございます。

▲毎日の料理の苦心▼

それから晝食の支度ですが、料理には隨分苦心を致します。金子は、拙者は座敷を淸潔にして食物を旨く拵へて與れゝば何にも不足はないと始終申しますので、『あなたは本當に意地がきたないのでございますね』つて善く笑ひますが、食卓の上へ種々な品を少しづゝ列べなければどうも氣に入らないのでございます、料理はお椀盛や酢の物などだけ日本のを好み、鉢物は西洋風か支那風を好みます。特に酢の物をよく頂きまして、毎日二度づゝは缺かさず調へますから、一つ物ばかりも致されませんし、材料には何時も困ります。それでいよ／＼私で料理に困る時には、井上善兵衞を召びまして、『また酢の物で面白い趣向のものがないか』と言つて能く工夫させるのでございます。そして晝頃からはお客が始終ありますから、大抵お晝と晩のお客膳の用意を致して置きます。

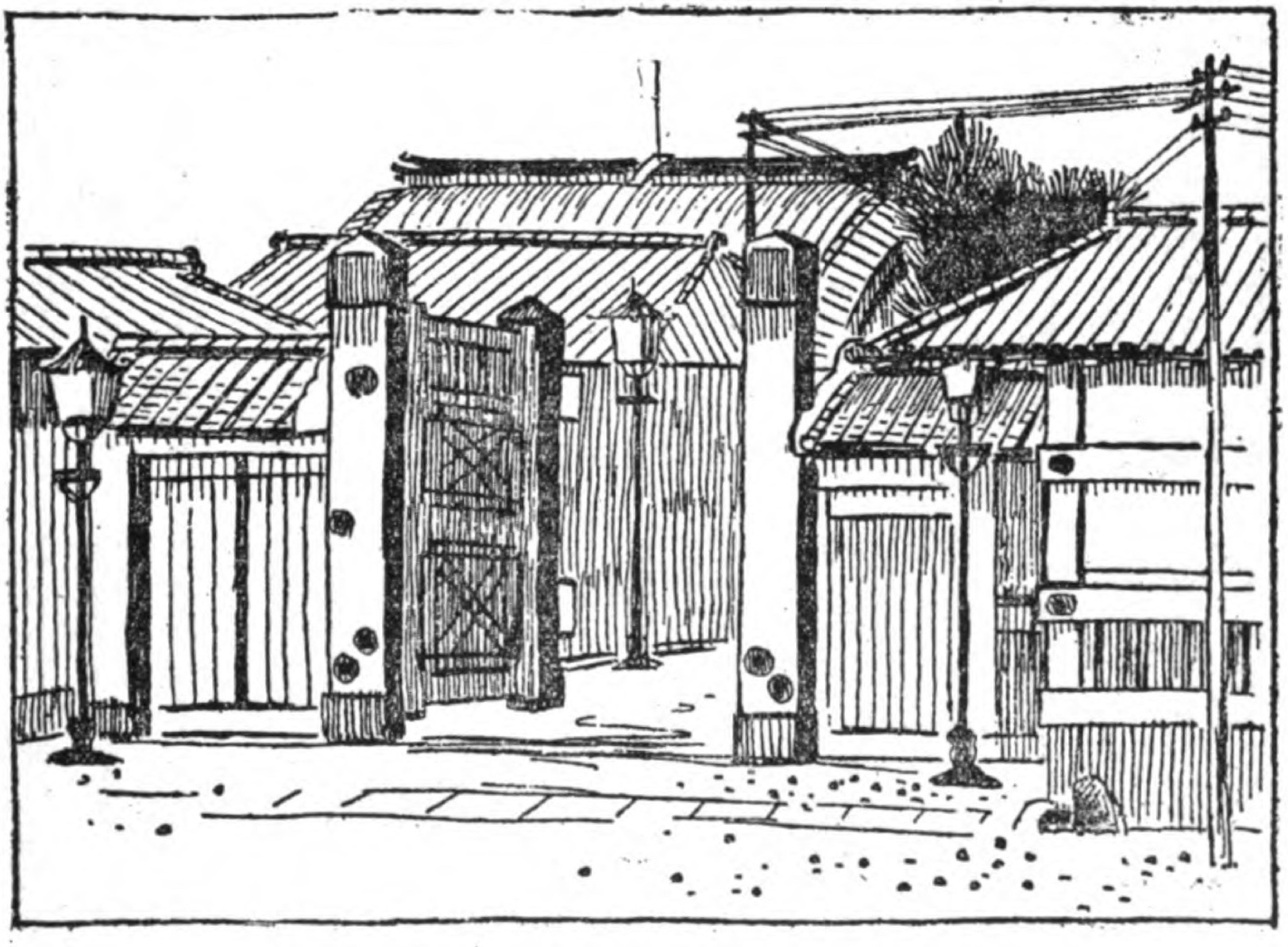
▲女中の配置▼

此樣な事でいろ／＼人手が要りますから、女中は、御飯炊と仲働きと小間使、それに子供の世話を致す者が一人と、ちよつと料理の出來る者が一人、都合五六人は居りますが、客の立て込みました時は、これだけではどうしても手廻り兼ねるのでございます。其中料理は二人に敎へ込んで置き、一人が差支があつても間に合ふやうに用意して置きますが、そのお料理番も少し差支が出來ましたので、此頃は材料の配合や風味を見るのを總て私が致して居ります。又夜分も遲く來客

勝ですから、平常は女中を當番非番に分けて夜交代に早く休ませる事に定めてございますが、それも忙はしくなりますと左樣もいかない事がございます。

▲入湯と醫師の注意▼

午後三時頃になりますと息が學習院から歸りますから、直ぐ服を着代へさせてちよつとしたものを中食に食べさせ、それから四時か五時の間に風呂へ入れて遣はすのですが、これを女中任せにして置きますと、十分水氣



宮內大臣岩倉公爵私邸　（麴町三年町）

を拭き取らずに着物を着せるなどして、折々風を引かせる樣な事がありますから、これも一切私が致します。此樣にお湯から上る時に十分身體を拭ひ、そして身體の冷めない間に御飯を頂く樣にすれば決して風邪に罹るやうな事はないと主治醫から申されて居りますから、お湯から上ると直ぐ食卓に就かせます。これは大抵六時頃でございます。それが濟んで一時間位自由に遊ばせて置きますと、家庭敎師が參りますから、暫時復習を願ひ

ますので、此樣にして子供の休みますのが彼是九時頃になりますが、それから後も多くは御客がありますので、終日殆んど暇がございません。

▲生花と室內裝飾▼

それゆゑ娯樂の方には餘り注意をしてゐる暇もございせんが、それでも生花や室內裝飾などが一番好きでございますから、お晝後などの暇々にはいろ〱趣向を凝らす事もありますし、又折々幅を掛け更へて見たり、珍らしい花瓶を手に入れては獨りで樂んでゐるやうな事もございます。花瓶は古代ものゝ模樣の無い雅致のある物が好きでございます。金子も書畫骨董が大好きで、特に刀劍が非常に好きですから、私は毎時「掛物や道具は座敷の裝飾になるから幾程でも御召し遊ばせ、刀劍は保存に手數が掛つて困ります」と申すのですが、それでも刀屋が國次でも持つて參ると堪へられないと見えまして、「マア暫くの間置いて行くが可い」と申して預り、緣側の端へ出て拔き放しては善いな善いなと申しながら眺めて居りますが、遂に求めて仕舞ひますので、私は「あなたが善いなど仰しやれば大抵定まつて居ます」と申して毎時笑ふのでございます。

▲音樂の嗜好▼

音樂では西洋樂なども大變宜しう御座いますが、鄕國で聽き慣れて居ります爲めか、筑前琵琶が大好きでございますから御來客の折は、是迄橘法師などを呼んで能く奏させました。此の方が薩摩琵琶より賑かなやうでございます、長唄や義太夫なども好きですから、雨の降る晩など、今夜は寂しいから義太夫でも聽きたいと仰しやる御客があつたりする折に、昔し葭町で藝者をして居つた者が只今義太夫語りとなつて居りますから、毎時呼んで語らせます。山崎と申して五十歳ばかりの婆ですが、却々上手で、方々善いお邸へ出入致し、丸髷作りの上品な女でございます。尤もこれは偶偶の事で、此頃は蓄音機が却々重寶に出來て居ります

から、それを一臺備へて置きまして、大抵はそれを出しては樂しみます。

十五人の女中を追ひ廻さるゝ大倉喜八郎氏夫人の平常

▲朝日を浴び乍ら紅茶一服▼

私は規則正しいことが好きで、寢るにも起るにも、一旦身についた習慣を、成るべく破らない樣にして居ますので、毎朝床を出ますのは、八時でございます。主人は六時ごろに眼が覺めましても、私は八時になるのを待つて、起きると直ぐに風呂に入ります。尤も朝湯はさう好みはしませんけれども、主人が毎朝入浴致すものですから自然私も習慣となつたのでございます、身體の爲めにはどうやら此の方が宜しい樣でございます。

湯から出ますと、早速先祖へ香を差上げ、それから新しい空氣と麗かな朝日に浴しながら紅茶や番茶を頂きます。其の上でパンを少々と牛乳を用ゐますが、之れが私の朝餐で、誠に簡單でございます。さうかうして居りますと、もう主人のところへ處々方々から電話がかゝつて參つたりして色々忙しうございますが、主人は間もなく出勤致します。

▲買入品の取締▼

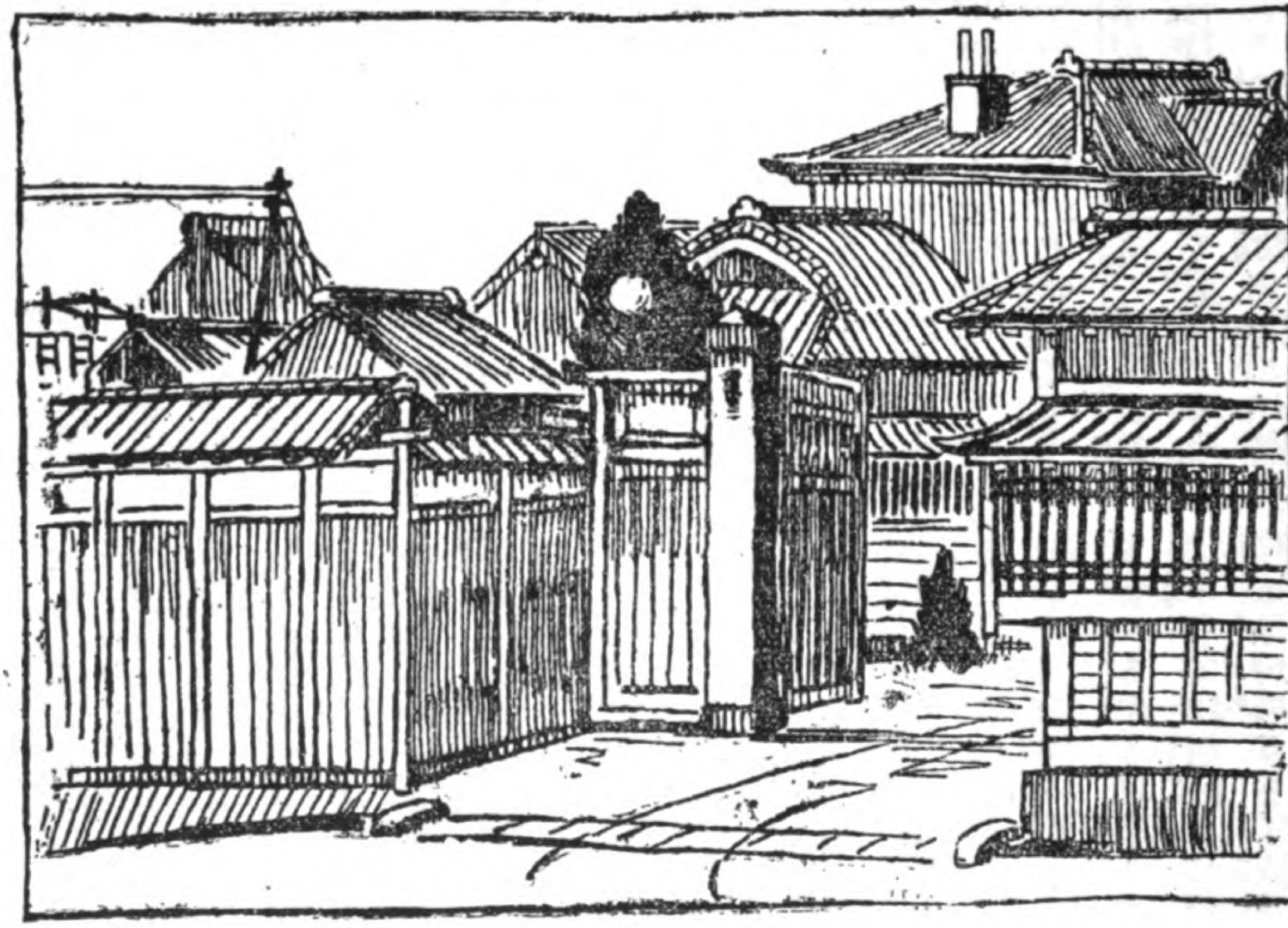
主人が出勤しまして後は、三日に一度は必ず髮を洗ひます。それから庭園を散歩がてらに女中と共に草取やお掃除をすることもあります、

或は室内の片付け具合を女中達に敎へる樣な事もあります。その内に出入の商人が來ますから、御客樣のない限りは、その買ひ入れる品物を、一々私が眼を通して價格を聞きました上で買入れてもよいものは納めさせる事に取計らひます。之を人任せにすると主人が非常にやかましうございますから、必ず私が致します。さうかうして居りますと、そろ〳〵晝近くなりますから、女中達をそれ〳〵分擔の仕事にとりかゝらせ

ます。

▲女中は皆お嫁にやる▼

料理人には京都の婦人を頼んであります。男は一切使ひません。其外女中などを合せますと、只今使つてゐる女は十五人居りますが、此の人達をどうか誤ちのない様に育てゝ相當の身なりをさせて何れへかお嫁にやりたいと、何時もそればかりを樂しみにして居ります。で女中達も讀み書きや針仕事などを一通り覺えて、いざお嫁にゆくといふ事になつても少しも不自由のないやうになつて居りますから。



總理大臣桂侯爵私邸　(三田小山町)

外の御方は「大倉の女中は御姉さんの樣だ」などゝ申されるのですが、主人は學校をつくつて國の爲めに遣すといふて居りますから、私はこれ位の事はしなければなるまいと思ひまして、可哀さうな子がありますと、家へつれて來て、小さなときから教育をするやうにして居ります。

▲建築造庭の趣味▼

此の頃は少しく健康を損じまして、午後はよく

醫者の許へまゐりますか、さうでない時は大抵建築場へ行つて、いろ/\大工の指圖をいたします。建築や庭造は非常に好きでございますから、時には自分で設計して造らせることもあります。箱根にある私の別莊は、自分で好いた樣に設計して造らせたのでございますし、小田原にある娘の別莊も大部分は私の設計ですが、自分乍らも好く出來たと思つて居ります。

▲氣分を紛らす仕事▼

夜分は大抵七時から八時の間に御飯を濟ませ、それより十一時迄、女中には銘々自分の仕事をさせ、私は何もしないで考へ込むとどうもいけない方ですから、いつも糸を紡ぎます。糸を紡ぐとは私の殆ど二六時中の仕事で、汽車の中でも車の中でも、それをやつて居ます、とそれにまぎれて何うやら氣分がよいのです。餘儀なく芝居などへまゐる事がありますと、紡ぐ材料を持つて行つて幕のあく度毎に糸を採つて居りますので、いつも娘共に笑はれます。若し糸を紡ぐことが厭やな時は、着物の色合を、いろ/\と工夫して繪の具で試み、今度はかういふ色合の着物をつくつて見樣などゝいふ事を思つて樂しみにして居ります。

こんな風ですから、新聞なども感情を刺戟する樣なところは成るべく避け、書物なども太平記とか、源平盛衰記とかいふ樣な古い物を讀むのみで、新らしい小說などは殆んど手にした事がありません。

綺麗好きで實用主義の 若槻大藏次官夫人の平常

▲忙はしくて坐る間もない▼

主人の出かける時間が一定いたしませず、早い時もあれば、晩い時もございますので、家の中もそれにつれて早く片付いて了ふこともあれば、一日ゴタ/\して暮れるやうな事もございます。一體私共では子供と申しては娘一人に倅一人丈けでございますし、ほかには母が居ります許りで、家族も少い方ですから、從

つて用事も少い譯ですけれど、矢張りこれで何やかやと一日の中手をあけて遊んで居る時はないので御座います。それにこの新築いたした家へ引越しましてから、始終職人などが入つて居りますので、何處を見て呉れ、それ此處は何うしたらよいかとか申されますので、なか／＼坐つて居る間も御座いません。

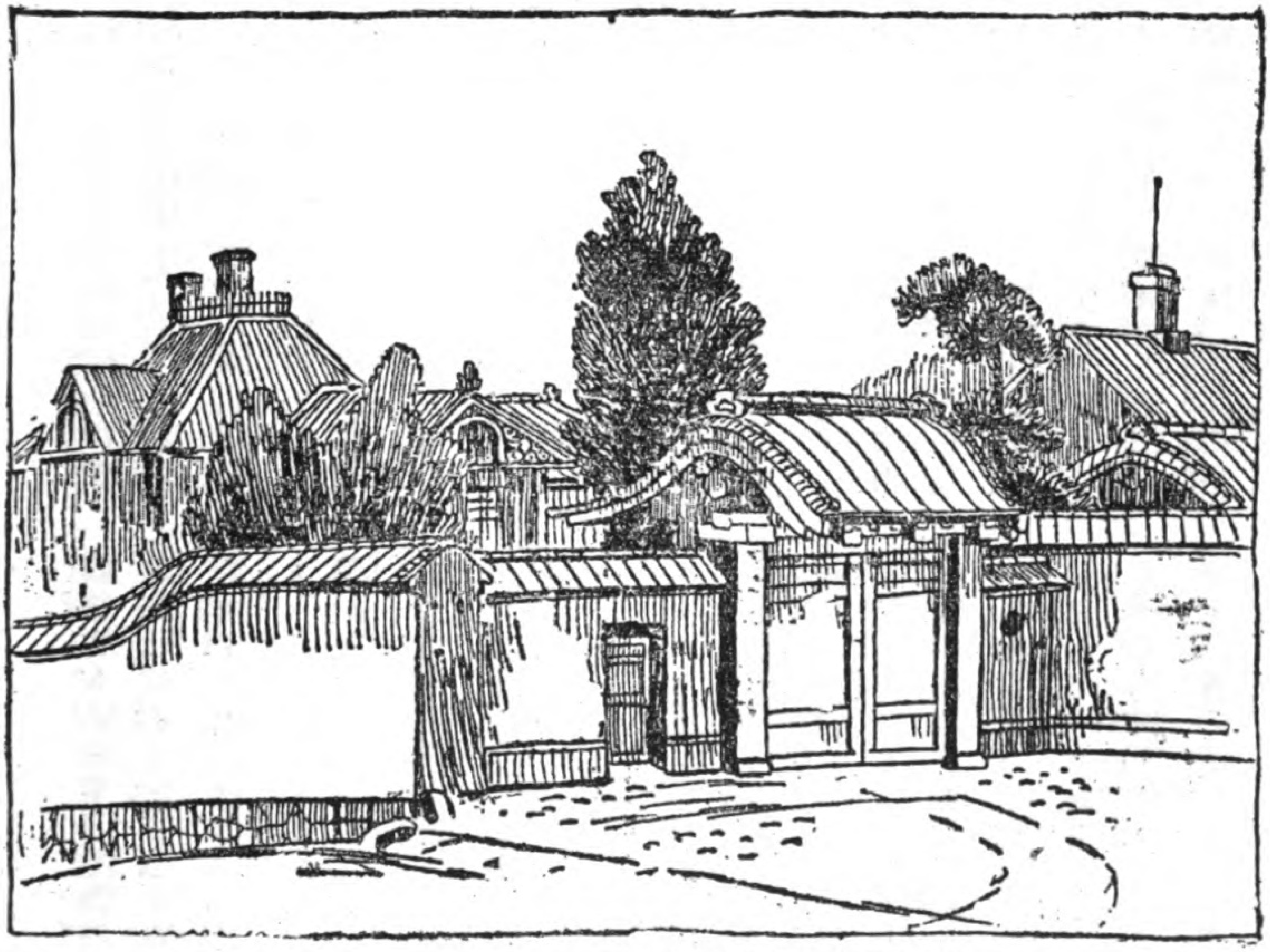
▲お掃除が何より樂み▼

臺所の手傳は嫌ひでございますけれど、其ほかの事は何でも自分でいたす方で、取りわけ掃除には念を入れます、餘りやかましく申しましては女中達が辛らからうと存じますが、何うしてもよい加減にして置くことの出來ない性質で御座いまして、隨分嚴しく申すので御座います、朝は皆早く起きまして、學校に參る子供等に至るまで、それ／＼受持を定めて清潔に丁寧に掃除をいたして朝御飯を頂くのですが、私の受持は特別に多う御座いますので、なか／＼御飯前に濟して了ふ譯に參りません。御飯後にもいたせば、主人の出勤後にもいたすので御座います、まあ私などは掃除道樂とでも申す方なんで御座いませう、お掃除をするのが何より樂しみで、一日のうち一番よい心持になるのも矢張り其れの出來上つた時で御座います、お掃除と同じに好きなものは湯に入る事で、毎日何んな事が御座いましてもお湯に丈けは入らずに居られません。此のお湯でもお掃除でも第一母が好みますので私共も自然其變化を受けて居るので御座いませう。

▲音樂よりも芝居▼

出懸けます事は好まない方で暇があれば裁縫などをいたします、お天氣でもよければ、母が招魂社あたりでも散歩して見やうなどゝ申しますので、偶に一緒に出かけることも御座いますが、出かけて見れば成程よい氣もちで御座いますが、矢張り生來の不情と見え進んでまでも出懸けて見やうとは思ひません。會などへも始終失禮許りして居る方で御座いますか、それでも慈善の催しなどがありまして、據處ない先から切

符でも廻つて參りますと、つひお斷りする譯にも參りませんから頂きます。しかし私はよほど俗人と見えまして、音樂は嫌ひで、芝居の方がまだ面白く見られますから、音樂の時には娘を遣し、芝居の時には私が參ると、かう定めて居りますが、それもほんの偶のことで御座います。其他遊藝なども餘り好でないといふ至つて無趣味な人間で御座います娘などにも其方には餘り精を出させないで居ります。



男爵岩崎小彌太氏邸　駿河臺紅梅町

▲學校を終へてからの修養▼

尤も娘一通りの事は學校でも習はせて頂きましたし琴などは餘程小さい時分から續けて居るので御座いますが、なほピアノが習ひ度いとか何とか申ますけれど私はそれよりもまづ實用的の事はよく仕込んで置かなければならないと存じますので、お料理や裁縫の稽古をせつせといたさせて居ります、娘は學習院の女學部を卒業したので御座

いますが、學校に參つて居りました間は何でも學校の方でして下さるので暢氣で御座いましたが此頃は何うも私が氣をつけてやらなければなりません、けれど私共あたりで、一人丈けなのに宅へ先生をわざ／＼御呼び申すほどの贅澤も出來ませず、それに出敎授をして下さる先生にはなか／＼よい方を見つけにくう御座いますから、裁縫は私が家で見てやることにいたしまして、和洋料理、活花のお稽古などは此方から先生の御宅へ伺はせて居ります。

萬事に心掛深き
松崎博士夫人の平常

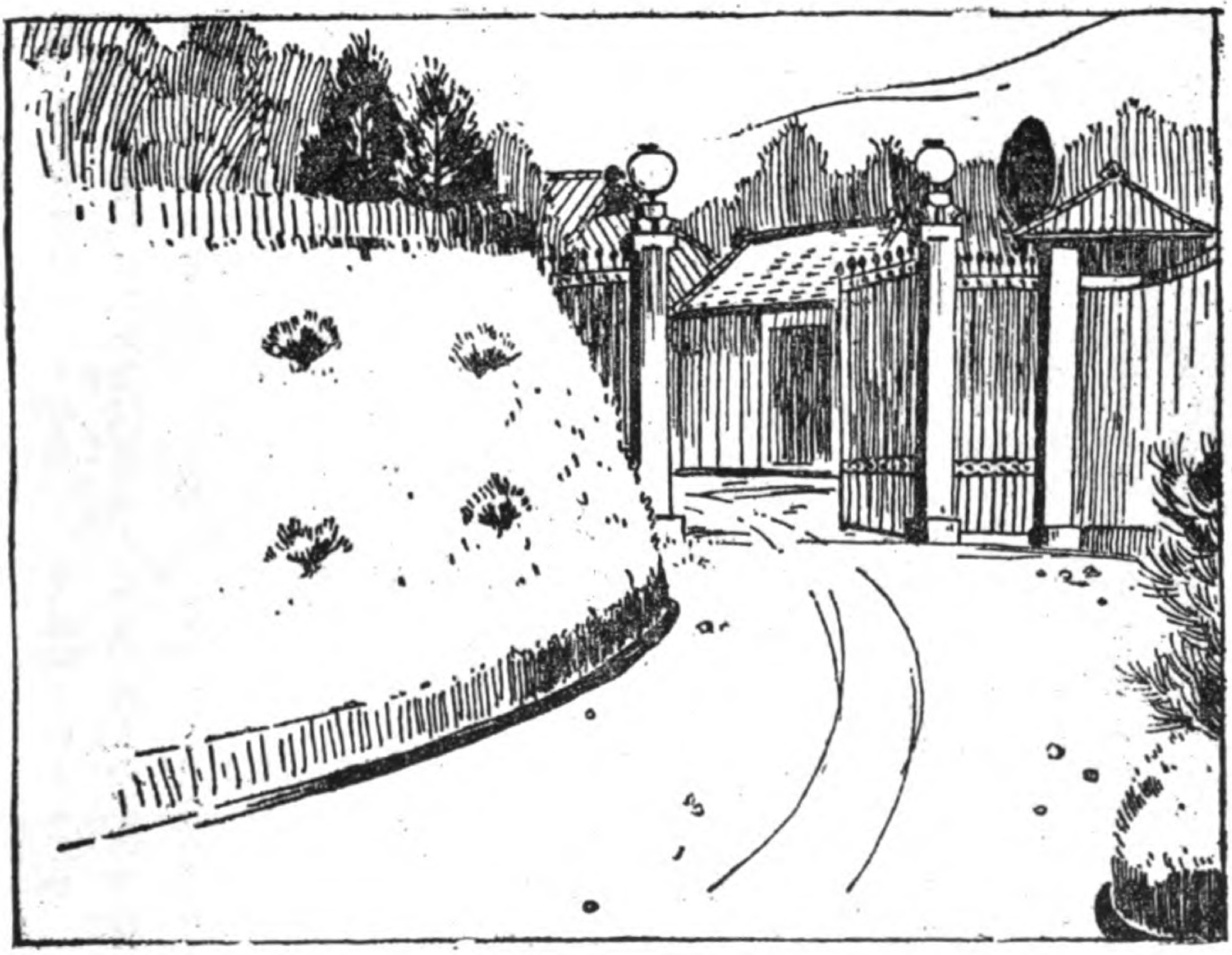
▲朝は四時半に起きる▼

何時ぞや新聞に私の道樂は朝風呂と瀧口入道を讀むことでそれから年にも似合はず薄衣をして、さも／＼お洒落でもして、ゆつくり日を送つて居るかのやうに書いてございましたが、飛んでもない事でございます宅は何ういふものか、昔から忙しい家でしたのに、私はまだ四人の子の母親ですもの、何うしてそんな事で日を送つて居られませう、それに私は人一倍氣分の烈しい方で、朝などもなか／＼寢んでは居られません。夜深しをいたしましても四時半頃には起きて了ふので御座います。ことにあの御承知の高等商業學校の騷動が御座いましてひどく心配いたしました以來は、愈々神經過敏になつたやうでございます。

▲忙中の演藝趣味▼

朝は女中共と一緒にお掃除やらいろ／＼いたします、そして主人は朝パンと紅茶とを頂きますから、其仕度を自分でいたし、次に子供等の世話をして學校へ出してやります。それから主人が出て了ひました處で後片付をして髮を結ぶ順序になりますが、其内電話がかゝりましたり、前約のお客様が見えましたりして正午になるのは直きでございます。午後からは出掛けるのですが、それも毎日つゞいては家の事が自然ゴタ

ゴタいたしますから、一日おきに出ることにいたして居ります、そして其間の隙を見て、一日のうち一度は必ず後園の方へ出ることに定めて御座います。後園には野菜を作つて居りますが、私はまたさういふ事をするのが大好きで、爺が居りましてもそれに委せて置くことが出來ず、矢張り自分で種子を下したり草をむしつたりして氣をつけて居るので御座います。これは一つは宅の主人が魚肉類より



男爵三井八郎右衛門氏邸　總本家　麻布今井町

も野菜を好んで頂きますので、自然精を出す氣になるのかも知れませんが、とにかく畑に出て鋤でもとりますと、世の中の事をすつかり忘れて、よい氣もちになりますので、私のやうな神經質のものには、身體のためにも大層よい保養で御座います。

△瀧口入道の戀のわづらひ▼

夜分には食後來客もなければ主人は直ぐ書齋に引込で了ふ方でございますから、私は手紙の返事

でも認めますとか、本でも讀むとかいたします。小說も讀む方で御座いますが、今時のものよりは昔の武士氣質を書いたものゝ方が好きで御座いますけれど、まさか瀧口入道を毎日讀んで居る譯でも御座いません。たゞ日外奥さん方で、今日の靑年は糸編の道などに頭を痛めて居つて何分いけないといふやうな御話が出ました折に私が糸邊の道でも瀧口入道の戀などは立派なものだと申した事が御座いますし、主人のお友達で大學の先生方が御見えになつた時もまた御話の序にそれを申した事などがあるもんですから、つひあんな事を書かれたのでせう。

▲幾つになつてもお稽古▼

女と申すものは、家庭を持つたり母親になつたりいたしますと、つひ用事の多いにまぎれて自分の事などは打捨になり易いもので御座いますが、私は常に幾つになつてもお稽古をしやうといふ心懸けを失はないやうにとつとめて居ります、只今は一週間に一度英語を見て貰つて居ります位の事で御座いますが、勉强しやうといふ心懸さへあれば、忙しい家事の間にも出來ない事はないもので御座います、それから皆樣が御聴きになつては、舊弊だと御笑ひになるかも知れませんが私はこれでなか／＼神信心をいたすので御座います。親戚の田尻なども私の氣象に似合はないと申して、不思議がつて居るので御座いますが、別にこれと申す理由もなく、いつの間にか琴平樣と水天宮樣とを信仰するやうになり、毎月一日に參詣らなければ、十五日には必と參詣いたします、そして御願ひ申す事は主に主人の事で、身體の無事息災から職務をよく果すやうになどすべて主人の身の幸福を希ふので御座います。主人がよろしければ、家内の者は從つて仕合な譯で御座いますから、自分の事などは少しも御願いたしません、立派な宗敎を信ずる方はまた格別結構で御座いますが、女はとにかく何か信仰するものゝある方がよいやうに思はれます、私のやうなものでも信心のためにどれ丈け氣を安められるかわかりませんのです。

▲娘には夜も薄い蒲團▼

子供の教育に就いては男の子はさうでもありませんけれど、女の子の躾方は他樣と多少變つた心懸けをいたして居るかも知れません、餘程小さい時分から髮を上げたり、着更をしたりするのに人手を借らせないは勿論の事、夜の蒲團などもわざと薄いものを用ゐさせるといふ風に、女の子に對しては、女中などが見かねて可哀さうだと申す程粗末な取り扱ひをしてゐるので御座います、それと申すは女の子は將來他家に嫁いで何んな不幸に遭ふかも知れませんのに、實家で贅澤に育つて居りますと、さういふ場合に一層苦まなければなりません、以前實家で粗末に取り扱はれて居りますと、夫が少しでもよくしてくれた時に其有りがたみが一しほに思はれやうと思ふからで御座います。

多忙の中に趣味を見出さるゝ
井上角五郎氏夫人の平生

▲許しを受けた朝寢▼

主人は有名な朝起きでございまして、大抵四時半頃から、眼を覺まして、新聞を觀たり、手紙を書いたり、その日の要事を朝飯前に了へる樣にとして居りますが妾は迚もさう早く起きるわけに參りません。主人は用さへなければ、大抵午後の七八時頃には、床に就きますから、それでもよろしいでせうが、妾はいろ〳〵仕事もありますし、それに夜ふかしの方で、早く床に就きましても眠れませんから、休みますのは、どうしても十一時前後になりますので、朝丈けは公然許しを受けまして、六時半迄休すんで居ります、それでなければ、身體が續きませんから、濟まないとは知りつゝも休ませて貰ひます。

▲朝床を出でゝ後▼

朝起きてからの仕事はと申しますと、先づ主人の出勤もあり、それに子供が七人もありますから、たとへ自ら手を下して世話をしないまでも、勢ひ食事の具合から、學校へ通ふ上に手數もありますので、八時過ぎまでは一時は中々の騷動であります。

それが一しきりかたづきましてから妾は御飯を頂き後ち、時事、報知、日々の三新聞に一通り眼を通して少しまごまごして居ますと、もう晝近くになりますから、そろ〳〵女中に晝食の支度をさせます。晝は主人は大抵宅へ歸つて食事する事になつて居ますから、歸るまでにちやんと支度の出來る樣に心がけて居るのでございます。



井上夫人

▲趣味のいろ〳〵▼

仕合せな事には、主人も妾も食事に就ては彼之とやかましい事は申しません。どちらかと申せば、主人は料理の趣味を解するなどゝいふよりは、何でも構はんから、どつさり食べた方がよいといふ方なので、誠に手數がかゝりません。その代りおいしくなくとも、數が澤山なければ、機嫌が惡う御座いますから、なるべくいろ〳〵のものを進める樣にして居ります。そして食物の質は淡白なものよりも、濃厚のものを好む傾きがありますが、妾はそれとは大反對で、肉よりは魚、魚よりは野菜を好みます。毎度醫者からも今少し脂肪のあるものを用ゐなければ

いけないと言はれますが、どうも好みません。たとへ魚を食べましても、別に大根おろしででも食べまして、成るべく口の中をさつぱりさせて置きます。

着物などに就ても主人は丸つ切り趣味がなく、何でも構はないといふ風ですから、妾も今の流行ものには餘り眼を着けた事がありませぬ。其の代り妾は元祿時代の古いものでもあれば、欲しくつて堪りませぬ。其他骨董品――就中卷繪ものが大好きですから、月一二回は骨董屋が參りまして時間をつぶす事があります。けれども主人は之れも嫌ひですから、もし骨董屋が來て品定めでもして居るところへ、不意に主人が歸つた折には、骨董屋をこツそり、外に出す樣な滑稽を演ずる事があります。

▲遊戯のかず〳〵▼

遊戯は大抵好きで、弓などは庭に的場を設けて置きまして、運動を助けるため一週一度位づゝやつて居ります。能樂も大層好きですから、時折參る事があります。芝居も新舊共嫌ひでありませんから、これもちよいちよい見に參りますが、この頃はどうも思ふ樣に參りません。謠曲も大層趣味は持つて居ますが、何分閑がありませんので。自分でやるといふ程ではありません。それに此の頃は普請を致して居りますが、主人は一寸の閑もない爲めに少しも關係せずに、事務所の者に監督させて置くのみですから、自然妾が萬事を切廻しなければなりませんので、この頃はこの方にも大層趣味を持ちまして、日本室の裝飾は一切妾の手で致しました。全部出來上る迄は、まだ〳〵世話のやける事かと思ひます。

▲晝食後の常用▼

話が一寸橫道へ入りましたが、さて晝食後晩餐迄の間はと申しますと、これ又一定の仕事はありませんが大抵は子供の着物の世話、洗濯ものゝ注意、或は來客の應接などで、多く時間がつぶれます。その來客にも樣々ありまして、中には主人が不在ならば妾にといふ

人もありますから、知つてる御方なれば御會ひ申しますが、たとへ御會ひいたしても主人に就ての用談なれば妾は一切承らん事にして居ります。

かれこれしてる内に、子供が學校から歸つて參りますから、そろ〳〵入浴させますので、大抵四時迄にそれが濟みます。それより暫くして晩餐を致しますが、子供や主人の食事が仕舞つてから、妾が致す樣にして居ります。

▲晩餐後の仕事▼

その後妾は毎日の日課として先つ日記をつけ、一日の會計を見、それから翌朝の食事に就て女中にそれぞれいひつけ、やつとこれで一日の仕事が濟んだとなつてから、少し許りの裁縫とか、又は雜誌などをのぞきます。けれどそれもほんの少しで、到底落ち付てゆつくりといふ譯に參りません。

かういふ有樣ですから、心には臺所も自分がやつて見たいと思ふけれども、そこまではどうしても廻りかねまして、殆ど臺所には關係致しません。從つて人樣からいろ〳〵の會に出席する事を勸められましても、まだ一度も出た事は御座いませんし、唯だ〳〵井底の蛙の樣に家の中にばかり引つ込んで居ります。尤も妾は外出はあまり好まぬ方で、運動にすら滅多に出た事がありません。

まあ、毎日殆ど同じ事を繰り反して居るので御座います。唯その中にも、一週一度茶を立てる事と、子供と共にわい〳〵さわぎながら食事をする事位が妾に取つては折々の變化で御座います。妾は前申す通り骨董が好きな位ですから、茶にも趣味がございますので、時々茶室をひらきます。いゝえ下手の横好きで、誠にお恥しいので御座います。子供と食卓を共にすると申しますのは、いつも離れ〳〵に食事をして、其上子供は子供の室、妾は妾の居間に、個々別々になつて居ては、自然親子の愛情も薄らぐわけ故、時々食事を一緒に頂き、其より一時間位騒ぎ乍らたわいなく遊ぶのでございます。其にしても矢張り平凡な生活でございます。



當世マダム氣質

菱花

○

『それではどうぞお早く。』

と、最後の會釋をすれば、一寸輕く帽子の鍔に、手をお掛けになつた旦那樣は、すた〳〵と、出て行かれた。急に持つた物を取られた樣で、何だか物足りなくなる。開けた障子に靠れたまゝ、はら〳〵と散る楓の眞赤な葉をみつめて居る。

　奥から九時が聞えた。

　お離れに通ふ長い廊下の、冷くて小走りに歩るいてさらり、と襖引きあけて、

『お母さまおいかゞ』と伺へば、今日はまあどうしたこと、お召物もどうやらお召しになつて、繻子の小帶を前に結びながら、

『今日は暖かい樣ぢやね』と、お機嫌がいゝ。

　東向の障子を、からり、と開け離せば六疊の室一杯朝日が射し込んで暖い。前栽の白菊はもう、すがれたが、手水鉢の南天の實が赤くなつた。

　お花が御手水を差し上げて居る間に、御掃除をすつかり濟ませて、御夜具を横手の塀の上に干す。座蒲團をお直し申して、御茶器を拭き〳〵

『今日は野那あたりまで御伴致しませうか』と申し上ぐれば、皺の寄つたお目を益々細く遊ばして、

「それだと結構だがね、お前の都合はどうかい」とお優しい、こんなに仰つて頂くと、もう〳〵私の方なんかどうでも、と申し上げたくなつて、お晝からお伴することになる。

　それぢや斯うして居られない、大車輪だと仕事着に着替へて日課にかゝる。

第一に旦那様の御書齋のお掃除、どんな事があつても此處許りは人手を借らない事にしてゐる、先づ御床間の石膏の像の塵を拂つて古銅の置き物を直して疊をパンで掃く書棚の上の書籍を一々部門に藏つて書類の整理をする。カート挾みの不用の分を抜き去り、書簡の取捨をす



る、用紙、ペンインキ、などを揃へて、一輪挿には溫室に咲いたパアジンを三莖入れて置く、花にお机と障子の棧を拭くことを云ひつけて湯殿に入る。

竹の大笊に雪を盛つた樣な白の洗濯物の急ぐのばかり撰り出して糊をする。

晴れたる秋の空に片々と飜るホワイトシヤ

ッの鮮やかなこと。

銘仙物を引掛けて牛乳に買ひ物に行く。今日の献立表を見つゝ。

鯛一斤

ほーれん草少し

くはゐ一升

リンゴ三個

向ふからすばらしい風采の人が來ると思つたら、まあ富子さんだ。

「あら」と云ふ間もなく、

「靜子さん、あなたどうなすつて、そんな眞似して」と、大きな聲なさる。通る人がみんな振返つては富子さんと私を見くらべて行く。

「お献立の買物だわ」と云へば美しいお眉を一寸お顰めになつて、そして、お口のあたりすこしおゆがめなすつて、

「そんなことがおできで結構だわ、私なんか―」と傍の女をお覽になつて、

「お變え千代」と爺にお委れ遊ばす。

ほんとに富子さんは僅十萬と云ふ大した富豪にお嫁ぎになつたが、大家は又大家だけあつて奥から店まで嚴しい家憲とかゝあつてそれ〳〵の人が實權を握つて居るのでお可愛さうに御養子の旦那樣なんか全くそんな人逵の云ふ通りになつて居なければならないとかで先日も同窓會で富子さんが、

「私なんか、全く人に飼はれた小鳥の樣だわ、可愛がる樣でそして北實脳に入れて自由を奪ふのですもの」とお云ひになつた事があつた。それを思ふと私なんかこんな幸福なことはありはしない、お叱さまもあんなだし、旦那樣だつて……それにしても愛情は遣ひ過ぎない樣にしなければならないのだとか。

歸れば最う十一時半、旦那樣へ電話をかける。

「チチチリン……」

「二〇三番、香取へ取ついで下さい宅から」

「旦那樣ですか、オホホヽ私でございます、あのね今からお母樣と野那へ參ります。あらあんなこと仰つ

て、ねそんなこと云はないであなたも御退屈からおまはりなすつてはいかゞですか。あらさうですか、それぢやいけませんね、そのかはり精々早く歸ります。今日は反對に待つてゐて下さい。おとなしく、いゝものを取つて置きました。花からお貰ひなさいませ。」

○

午前は、フレンチの稽古に行く。

午後は作平爺と溫室の手入をする。

ロベリヤがやつと芽を出した。フロックスが枯れさうで心配だ。

旦那様のお好きの糸水仙の蕾が咲きかけた。御書齋の書棚の上に鉢を運んで置く。

昨夜は二時迄の御執務、餘程お忙しいと見える、お身體に障らなければよいが。今朝は御顏色もお勝れにならなかつたやうだ。

眞實に長い間のお勤めのうちには、隨分お辛い事もあるだらう。又お厭にお成り遊ばす事もきつとおありに違ひない。それにあんな、お性格だものだから、お信じになる事は無理にも貫ぬかうとなさるものだから時には上官のお氣に召さない事があるかも知れない先日も矢野の奥さんがお見えになつて何だか妙なことを仰つた樣だ、でも矢野さんの樣にお髭の塵許り拂つて居る人も厭だが今の此濁つた官界に身を置いては又其邊の呼吸も必要かも知れない。

「髮結さんが參りました。」とお花が云つてきた。

「久しぶりに髷にしよう」と桃色の手絡に朱の中挿透彫りの金簪、きらり、と鏡を合すれば、衿のあたりが削げた樣。お湯に入つて、白い物で一寸顏を刷いて置く。薄藤の衿の襦袢に着替へる。

ガラ／＼と云ふ車の音。

「お歸りだよ」とお花にも云ひながら玄關に飛んで出る。立ちながら、

「お歸り遊ばせ」と御挨拶してお帽子と、ステッキを受取るはずみに、

「お寒かつたでせう」と冷たいお手にさはつて見る。

笑ひたいやうな顔をなすつて、じろ〳〵と私の顔を見てゐらつしやる。

「何ですつて、」と束髪のピンをぐいと挿すつもりでふと手をやつて、

「あらつ」と云つて手のやり場に困つて、赤い顔をするのを御覧になつて、

「アハヽヽ」と高うお笑ひ遊ばす。

「だつてお母様が始終「髭にせい」と仰るのですもの。」と

一人云ひ譯して御居間について行く

電燈輝く茶の間兼食堂の中央に純白の覆して、透通つた玻璃器に深紅のブドー酒、銀色の薬味壺、お花も手を洗つて座に着いた。

「オヤ〳〵今夜は昨日の冷遇の埋め合せかね」

と、きんとんを頬張りになる。其赤い顔が可笑しいとお花が笑ひこける。

鐵瓶の湯がシャン〳〵と音をたてる。外には木枯が一しきり鳴つた。

「静お前も一つやつてごらん」と

コップをお出しになる。

「此上私が頂いたらそれこそ猩々の化物ですわ」と云へば

「その猩々の化物が見たい」と

「まあ憎らしい。それぢや、斯うしますよ」

とキントンのお丼を引たくれば、

「ご免〳〵」とあはてた眞似をなさる。

「まあいゝ面の皮ですこと。お髭なんかお有りの癖にこんな丼なんか抱へて、随分ですよ。私はこんな旦那様を持つたかと思へば悲しうなります」と半眼すれば

「これでも私は赤門一の甘黨さんでござんした」と末は妙な義太夫節になる。

お花は耐りかねて、勝手の方へ逃げて行つた。

「さゝもう一つ」とコップを差し出せば、きらりと光るエンゲージリング。

○


春のうた

「お歸り遊ばせ」と
手を突いてそつとお顏を伺へば、お眉の邊すこし震へてご機嫌がお惡るさうだ。今日は何かお氣に召さない事があつたのか。
すら〳〵とお前に歩いて、お居間の襖を開けてお待ちすると、すつとお通りになつて「はた」とお閉ちになつた。暫く外からご様子を伺つてゐたが、其儘椅子におよりになつた様だから、打捨てゝ置いて十分許りたつてからお召物のすこし暖めたのを袖衿をすつかり揃へてお花に持せてお着替へをおさせ申す。
「どうして居らして」ときけば
「何とも仰やらずにお澄しになつて又お掛け遊ばしました。」と許り。
ミルクに薄い紅茶を入れて持つて行く。
「今晩は、何か珍らしい物でも拵へませうか」と、はつきりした聲で尋ぬれば、只
「いらない」と許り仰る。それでは、日本酒にでもと簡單に申し上ぐれば頷かれる。
早速其仕度にかゝる。
尙何とも云はずに召上る。
バナナの皮を剝いて皿に入れ差し出せばつまみながら、
「あゝ醉つた」とはじめて私の顏を御覽になつた。それでも、まだお額のあたりは曇つてゐる。
「どうですつて」とは只目に云はせてにつこりとうなづく。又だん〳〵目をお落しになつて矢張り無言でゐらつしやる。
何かとあまり申し上げてもよくあるまいと私も火鉢にもたれたまゝ、少し首をうなだれて無名指のリングを嵌めたり脫いたりしてゐる。
門前を流して行く新内の撥の音が冴えて聞ゆる。
「月のいゝ晩ですよ」と一寸申し上ぐれば、
「うむ一寸步るいて來よう」と案外早うお立ちになつたので、あはてゝお羽織をお掛け申して、ハンケチを差出して、格子の外に立つてお見送りする。塀の内のはんの木の梢に懸つてゐる十三夜の月の影が、旦那様

の肩の上に光る。
今日は一體どう遊ばしたのだらうか、此頃は餘りこんな事はなかつたのに、屹つとお役所で厭な事がおありなのだらう。それとも例の事件の悶着なのかしらん。併しそれは先日解決した筈、それとも又別にご心配な事がお出來なのかしらん。
旦那樣は何一つだつてお話し下さらないものだからお察しの仕樣もなくどの位骨が折れるか知れない。
それにしても此度いらした山上樣はあまりよくない御方らしい。でも内務省でのきけ者だと云ふから、便誼上お伺候申して置く方がいゝと思ふ。
斯んな事を旦那樣のお耳に入れたら又きつとお怒りになるかも知れないけれども、生きて行く上に又是も捨てゝはならぬ事だもの。其厭な役廻りを私が引受けてゐさへすれば、澄む事だ、が、全く彼山上の奥さんのお相手はいくら胸はない私だつて少なからず閉口する。どなたの奥さんはお召物が何ができた、誰の着附きがどうのかうのと、仰る位はまあ罪がなくていゝけれども、時にはとんだ文學通をお振廻しになつて、どこそどうお聞きになつた物か、
「水野葉舟はセンチメタルですつてね、宅の坊はチャンピオンメタルを取りましたよ」なんて冷汗の出る樣な事を仰るのですもの、それでも明日あたりお伺ひしてお役所のお下話でも伺つて來よう。
もうお歸りの時分だらうとお書齋を明うして、お蒲團を直して置いて私は自分の居間で旦那樣のお好きな「越後獅子」を彈く。
……むかし小山のひちく竹、枝節そろへてきりそこまかに十七和、室の小口に夢見て候。……
お歸りの樣だけれども續けてゐる。
机の上の紅薔薇の花が散る。
止してそつとお書齋を伺へば熱心に讀書してゐらつしやる。少しお落着の樣だと昨夜仕殘しの靴下をあむ。
十一時が鳴つた。
お茶入れて南洋堂の栗饅頭添へてお書齋に入る。
「お茶が入りました。」お好きのこれを！と置けば一寸

お覗きになつて、につこり遊ばして、ハタとお讀み差しをお閉ぢなさる。

「何處をお歩るき遊ばして」と伺ふと、

「新内の後を附いてあるいたのさ」と平氣な顔して仰しやる。

「おや、、、まあ隨分ですことね、よくお手引きとお間違へられになりませんでしたこと」

「間違へたものがあるかも知れんよ。あんな眞似も面白からう。おれが手引きになるからお前越後獅子でも彈いてあるかんか」

「えゝ私が盲目になつたらでございますね」と一寸こはい目をすれば、

「なか／＼其目では盲目になれさうにもないよ」と仰しやるから、

「あなたの様な方に手を引いて頂いたつて危いものです。どぶの中にでも引張り込まれでもしようものなら大變ですからね。」

「其時こそおれの勝手だ」

「夫れぢや、今日は私の云ふことを聞いて頂いて、もうおやすみなすつて下さい」

○

「さあ參りませう」と毛糸のショール引纏つてまさきに沓ぬぎに下り立つと、櫛の様な下弦の月が軒端に光つてゐる。

「あゝ寒い」と出ていらしたお口から、白い息が見える。

兩手を袖に突込んで前屈みに「さつさ」と後からついて行く。

路傍の石が霜に輝いてキラ／＼する。また、大抵の家は、シンとしてゐる。横町の、豆腐屋だらう、そこ許りはカッと赤い灯がさしてゐる。向うから、カラ／＼と下駄の音が冴えてきこゆる。風はないけれども、鼻のさきがキリ／＼／＼する。

旦那様も、ふう／＼云つてゐらつしやる。

岸の袂の柳の木が紺青の天に黒うぼーつと立つて、どこからが空とも柳の梢とも、見わけがつかぬ。

歸りには、私が前になつてあるく。東の空がたん／＼明るくなつて、市場の前にきたときは、すつかり明けて、早、新鮮な野菜や果物の色が、はつきり見える。

今日は木曜日でお召替の日だから、五分許りお食事を早く差し上げる。又石鹸の香がすると仰つてはいけないから、とみんなまとめて「ローズ」を二三滴落して置く。

お出ましになつてから、規定の仕事をすまして、机の前に坐る。今日は是非旦那樣の經濟學講義の原稿の校正を濟まさねばならぬ。それから、新著書の整理もすこし始めればなるまい。

あまりいゝお天氣だので明日はどうかと思つて、二時頃から張り物する。

キラ〳〵する秋の日の下に、白い手拭を被つて緋もみの布を懸け渡してミシンをはづしてゐると、離れのお母樣お笑ひになつて、

「いゝ嫁さん振りぢやのう」と仰る。

「まああんなこと」と急に顔がほてつてくる。四時過お役所から電話が

「今夜は須藤と一緒だよ」とかゝる。

あゝあの須藤さん、何だか變つた方、でもよく宅の方は「須藤々々」と仰る。

「まだ下宿の二階に轉がつてゐる奴さ、可愛がつてやれ」とこの間も仰つた。

あの方は慥に私が東京にゐた時、伯母さんのうちによくきてゐた人だ。何だか神經の鋭さうな方だと思つてゐた。

其頃何だか目のこはい方ねと伯母さんに云つたら、「あれでも　なかなか實のある方ですよ、靜さんあんな人嫌ひ？」と仰つたとき、まだ男を、どんなのを好くとも好かぬとも思つてゐなかつた自分は、只何となしに、「えゝあんな人大嫌ひ」とつい云つてしまつたことがあるように、覺えてゐる。

それから越えて二三年、どんな男の方がいゝの、何する人がすきだのと、幾度も若い胸に繰り返してきたのだが、腕もあり、眼識もあつて時流に乘つてチヤ〳〵榮達なさる方は、何かしら、ハートの要求に飽き足らないようだし、それかと云つて、雲脂だらけの頭に、髭もしやもしやの顔して、人生がどうの、哲學が何だとか許り云つてる人も餘り難有くないと云つてる中に、つい今の身になつたのだが又斯うなつて見ると昔つまらなかつたことも存外興味も出てきて、從つて努力もし改善も計ると云ふようになる。

それでは今夜は須藤さんに精一杯お馳走して上げやう、と仕度にかゝる。

「まあ、須藤樣今お一つ如何でございますか。」

「はあ澤山です充分頂きました。」

「あらもうお引込み遊ばす。ご遠慮許りなさるんですもの、宅なんか遠慮がなさ過ぎて困る方でございますのに」

「ほんとにもう澤山です」

「まだあんなこと仰つて、此頃は大分おいけ遊ばすさうぢやございませんか」

とつい申し上ぐれば、例の光るお目を一寸私にお向けなすつて、急に伏目になさる。

「それぢや暖かい物でも澤山召し上つて下さい、」と優しう申し上げ

て置く。
旦那樣が大きな聲をなすつて、
「あの近藤はその後どうしたらう隨分の健啖家だつたがね」と
須藤さんは沈んだお聲で。
「矢張り北國の此頃の寒天に、例の薄汚れの袷一枚で震えてゐるに違ひないさ」と仰る。
お額のあたりに悲痛のお色があり／＼と讀まれる。
今夜も霜かしら大層冷ゆる樣だ。
到來物の餅を使つてお雜煮をこしらへた。
お二人とも、
「うまい／＼」と召し上がる。
「どうぞ澤山ご遠慮遊ばさずに」と申し上ぐれば、須藤さんも
「今度は決してご遠慮は申しませぬよ」とご滿足のご樣子、
「須藤樣は、三筋の音の方がおすきでしたれいまに、花がおきかせ申しますよ」と
お花を振り返れば、
「あら奥樣」と眞赤な顏をする。
十九だと色艷のいゝ子だ。
嘗つて勝手の方にゐると、須藤さんが是非にと云つて、積時雨をお彈かせなすつたようだ。
お立ちだと云ふのでお送りして、お靴をお穿きになるお肩のあたりが餘に寂しさうに見えてたまらなくなつて、
「そこらまで、お見送り申し上げていらつしやい」とおすゝめする。
お二人で高くお笑ひなさりながら門をお出になつた。

○

髮を洗つて、垂らしたまゝ、水色リボンで一寸前髮を結んで、緣側の安樂椅子によつて編物してゐる。高く昇つた旭日が、羽織を脫いだ下の赤い帶のあたりを照らしてゐる、濕つた髮からは長閑な糸ゆうが燃ゆる。
ふと頭に浮んだ歌を誦つてゐると、植木鉢を見てゐらしたが、急に、
「あのフロックスの芽はどうしたのだ」と
大きな聲で仰るから、だまつてもゐられず、
「それこそお天氣のせいですわね」
「何お天氣？」
「ヤヽと外に一夜出して置いたらあんなになつてしまつたのですもの」
「一夜出して置けば澤山だ」と怒つた顏をなさるから、
「あの一寸植物の世話をすれば何とかだつて仰りましたわね」
「何とも云はんよ」
「あら酷い、あんなお約束がしてありますのに、それぢやもうようございます。そのかはりみんなからして仕舞ひますから」と
ついと立つてすた／＼緣側をあるいて茶の間に入つて仕舞うとする

と、毛糸がすつと引いてきてゐる。どこでおとしたのかと、又立つて糸を辿つて行くと、憎らしい旦那様がお手に持つてゐらつしやる。
「早く返して下さい」と手を出すと、
「植物をどうする」と仰るから仕方なしに
「いゝ精一杯大切にします」と云つてしまつた。
午後から、常盤ホテルで龍野様の結婚の披露會がある。もうそろそろ仕度にかゝらねばなるまい。主人役を勤めるのだから、少し早めに出掛けよう。
洗つた髪を大管の束髪にしてダイヤのピンを一つ挿す。藤鼠地に同じ色の糸の入つた縮緬に菊づくしの裾模様の二枚襲ねに、古代織の巾狭なのを私特有の結び方（皆様がさう仰る）に締めてつい先日伯父さんから頂いたプラチナの鎖を掛ける。
ブライドに贈る白薔薇の花輪を持つて、ホテルから迎へにきた馬車に乘る。
車の中で今日外國婦人に挨拶する言葉を考へながら、小さい聲で云つて見る。
「挨拶りは難いものだ」とお笑ひになるけれども、私はそれ處でない。
大玄關に着いた。白布を敷いてある沿道を絹足袋のまゝすら／＼とあるいて控所に入る。一寸お世話係の方と打合せて全く準備ができた。
愈々時間がきて、私丈お迎へしてご會釋する、百二十人許りの方から握手をなさる方もあれば、叮嚀に腰をお屈めになる方も又擧手の禮をなさる方もある。もうこれですつかり疲れてしまつた。
會は富子さんの「悦びのこゑ」の合唱に始まつて花婿花嫁の紹介がすんで、祝盃を擧げた。さあ愈々私の番だと一寸胸が躍つたが壇上に登つた時は夢の様でもう何ともない。
思ひきつた華やかな態度と、派手な表情とで、すら／＼と難なくすました。けれど壇を下りようとするとき、はら／＼となる。急霰のやうな拍手の音がひどく遠方で聞ゆるような心地がした。又後で外國婦人が何だかんだと、頻りに話し掛けられたときは壇上にあつたときより少なからず狼狽した。
餘興となつては一番始めに高砂の仕舞をする囃子も謠も選物選り拔きで來るからう筈なく私もかたの如く舞ひ納めた。
誰だか、
「靜子夫人は、シャンペンがおできださうださあ一つ獻じませう」と云ひだしたので右からも左からもコップを突き出されて、あぶなくせめ落される處を、武田さんの主唱で
「招主幸村お夫婦の幸福を祈る」と祝盃を擧げて下すつたので、やつと助かつた。
會が全く終つて後の始末を終へて馬車に乘つた時は、夕月が西の山の端に隱れやうとする時であつた。
まだ歡樂の餘香は失せぬながらも、心は早別の人となつて暗い海岸通りを夫と向き合つてだまつて走つて行く。
「つかれたらうね」と仰つたから、
「えゝ」と無意識にそこにある手を握つた。



當世 新奥様の面影

水仙女史

え、マダム振りを書くんですつて？……まア、先きには嫁に行くんで今度はマダム振り、いまに銀婚式の記や金婚式の所感などを書けと被仰りはしなくつて？……其時分には皆さん御同様に白髪のお婆さんになつて了ふのね、ほゝゝゝ、おう厭なこと！

マダム振りと云へば此前嫁に行く人の時お話した千代子さんね、アノ早婚論者にして且其實行者と云つた彼の方のマダム振りを一寸お話して見ませう、そして水仙のは話さないのかつて被仰るの？、あらさうぢやありませんわ、千代子さんのは其前提、まアお景物なのよ。

千代子さんと云へば何しろピヤノは出來る、學科は優等、加之校中第一番の美人、若し時事新報の美人募集に應じたら第一等の末廣さんより勝る位、え、そんな事を云ふと野津侯爵に怒られる？……憚さま今では私にも五尺六寸の良人がついて居りますわ、ほゝゝ

閑話休題、才色兼備の千代子さん、どうして世間で捨てゝ置くでせう、未だ十六の肩あげとらぬ中から嫁に婿にと申込む、其中で凱歌を揚げて千代子さんを宿の妻としたのは赤門の秀才竹内法學士ぢやありませんか、其時千代子さんは丁度十六の秋、良人は二十五の美男子、まア一對のお雛樣見たいでしたわ、而して系累と云へば七十二三の祖母さんが一人居らつしやるばかり、私始め級友の羨しがつたのも實際無理はないわ。

丁度新婚旅行から歸つた翌日、私一人で遊びに行くと千代子さんは靴下をあんで居るところ、

「あら千代子さん御勉強だわねえ、」

と冷笑すと、

「可愛良人のですもの、」と澄ましたもの、随分ですわねえ、

「祖母様は？、」と訊くと、

「錦町の伯母さんと本郷座へ行つたのよ、」との事

「良人は？、」と訊けば

「今日は同郷人の懇親會へ……」との御返事。

「あら、では貴女お一人……お察し申しますわ、」

「何？、」

「お淋しくつて、」

「眞實よ、」と笑つて居る、

「あら無代でお惚けは眞ッ平よ、」

「ほゝゝほゝゝゝ、」

其時千代子さんは勝手の方へ行く、何か御馳走でも出すのか知ら？、お菓子？、カステーラ？…………下司張つて居るつて？、ほゝゝゝ、それでも未だお薩と思はないだけが上品だわ、

まア、そんな事を考へて居ると本箱の上に見馴れた千代子さんの日記帳がある、どんな事を記してあるのか知ら？、と、そつと手に取つて見ると、

九月二十六日、新婚旅行の第二日

何だか昨夜はよく眠れなかつたので昨日より早く起きた、良人は九時になつても未だ眠つて居るので私は一人で奈良屋（箱根宮ノ下旅館）の裏庭づたひ、二三丁のところを散歩して來ると良人は漸く床の上へ起直つて居た、

「貴郎、モー十時ですわ、」と、後ろから衣服をかけて上げると、

「ヤー大寐坊した、」と帶をしめる、

「早く顔を洗つていらつしやいな、」と、申上げると、

「へい〳〵、」とにこ〳〵しながら出て行つたが直ぐ引返して、

「ヤ、大失敗！忘れ物をした、」と頓狂な聲で叫ぶ、

「忘れ物です？、」

「あゝ、」

「是ではなくつてヨ、」と良人の好きな「藤村詩集」を
カバンから出すと、
「ヤア千代さん入れて呉れたの、」と、ホッと安心した
様子、
「貴郎お忘れになる様でしたから私そつと入れて置い
たんですわ、」
「イヤ持つべき者は女房だねえ……千代さん、」
「あら—、」
「はゝゝはゝゝゝ、」
千代子さんも隨分だわね　、處へ千代子さんが這入つ
て來て、
「あら靜江さん、他人の秘密を斷りなく見るなんてお
人が惡いわ、」と、睨む眞似する、
「ほゝゝ、私後日の參考に一寸拜見したのよ、」
やがて十分ばかり經つと色の白い可愛らしい女中さ
んが手をついて
「奧様、只今の物をお通し申しませうか、」
と訊くと、

「あ、直ぐ持つて來てお呉れ」
と千代子さんは命令てやる、何だか私奧樣と云はれ
て澄まして在らつしやる千代子さんの顔を見ると可笑
しくつて仕様が無かつたわ、
そこへ女中さんが行儀よく運んで來たのは千代子さ
んも妾も大好物の栗饅頭、え？幾個食べたつて？、天
機洩すべからずですわ、ほゝゝゝ、
柱時計が三時をうつと玄關へ俥の音がして、
「お歸り——、」と車夫の頓狂聲、
「良人？、」と訊くと
「え、」と千代子さんはにつこりして迎ひに出る
「靜江さんが來て居る？、さうか、」
と快活な聲で話しながら這入つて來たのは竹内法學
士、色の白いところ　御酒機嫌でほんのり櫻色になつ
て居るのでいとゞ好男子に見える、あら餘りほめてを
かしいんですつて？厭な、誰が友人の良人に戀なんぞ
するものですか、
「ヤー宜くお出で下すつた、是非チヨイ／＼遊びに來

てやつて下さい、千代子令夫人が毎日淋しがつて仕様がありませんからね、」
と笑つて居る、嘘ばつかり、毎日お二人で樂んで在らつしやるくせに……、
「え難有う、ですがお邪魔になりはしなくつて」と云つてやると
「イヤ、是は一本まゐりましたね、實は令夫人甘たれて仕用がないのです、」と頤をなでる、
「あら嘘よ、」と千代子さんは睨む、
「はゝゝ、然し今日の懇親會は素敵に愉快だつた」
と近頃御丹精の「八」の字髭を捻ねる、「八」の字髭おやないかつて？お生憎さま、まだ「八」の字程先きがはねて居ないのよ、ほゝゝゝ、
「何か面白い餘興でもあつて？」と千代子さんが訊くと
「あゝ、奈須先生の薩摩琵琶と伊井一座の演劇、それよりも面白かつたのは最後の福引さ、」
「貴郎何と云ふのをお引きなすつて？」
と私が口を入れると、
「え、僕のですか、僕のは（君がお不在で……）と云ふんです、」
「まア、而して何を出して？」
「鰹節が一本にマッチが十個、」
「什麼云ふ譯なの？」
「オカゝ、マチドウ……、」
「あら！」とばかり、千代子さんは眞紅になる
「ほゝゝ、實際だわ、」
と私追擊してやつてよ、と、陰でこそ出放題を云つて居るが二人並んではさすが恥かしいと見えて千代子さんは勝手の方へ逃げて行つて了つたの、餘りいつまでも出て來ないので妾お暇しようとすると、
「靜江さん何もありませんけど、」
と千代子さんは御馳走を出す、見ると鷄肉團子のすまし汁、チキンカツレツ、林檎のフライ、百合の甘煮、
「千代子さんのお手際？」と訊くと
「えゝ、」と笑つて居る、

「どうしてねえ靜江さん、千代子夫人の料理自慢は非常ですよ、どうかすると汁が多過ぎて甘煮だか吸物だか譯の解らない物を食はせられるんですもの。」

「また……。」

「何？。」

「知りませんわ。」

「ほゝゝゝ夫婦喧嘩はお止し遊ばせ。」

と笑ひながら御遠慮なく馳走になつて見ると本當に吃驚する位おいしく出來て居ましたわ、あら涎を吸つて在らつしやる方は誰？、ほゝゝゝ、

只祖母さんと云ふ人が前世紀の而も九州の山ン中で育た人間なのでせう、是には千代子さんも困つて在らつしやるらしいのよ、其後亦お訪問すると生憎千代子さんは良人と日比谷公園へ行つたとの事に直ぐお暇しようとすると其祖母さんが無理に引とめて、

「靜江さんの前だが餘り美い女の嫁は貰ふもんぢやごわせん喃。」

と云ふのでせう、私口惜しくつて……だつて私のお多福を見込んで自分の味方にしやうとする樣に思はれたんですもの……。

「あら何故で御座いますの？。」と反問してやると

「淸（竹內法學士の名）がもう夢中になつての、やれ御園白粉ぢやクラブ洗粉ぢやと毎日買ふて來てばつかい居るぢやて……。」

と憎々さうに云ふの、あんまりな事と

「あら今の人は男の方でもみんな使つて居ますわ。」

と態と大きな聲で云ひ返してやつたの、すると、

「それぱつかいか、エブニング何たら云ふ私等昔者には譯の解らん洋服なぞ買ふて來て、千代さんは瘠せ形ぢやて、洋服は好う似合ふなんぞ淸奴ニコ〳〵して居るぢやてのう。」と苦々しさうに云ふの、

「洋服をお求めになつて？、まつたく千代子さんにはお似合なさるでせうわねえ。」

此方では亦尙反對に出ると、

「折角私の良人が蓄へた竹內家の財產もこいぢや末が案じられるぢやて……そして自分の妻のことを千代さ

ん千代さんと呼んで居るぢやて、本氣の沙汰ぢやごわせんのう……」

「ほゝ御自分こそ本氣の沙汰ぢやごわせんわね え、然し間もなく良人が外交官試補になつて佛國へ行くようになつたので千代子さんも同行して今では巴里の交際場裡の花と謳はれて居らつしやるのよ、眞實に千代子さんはお幸福だわねえ、其所へ行くと私達より一年早く卒業た松子さんね、えゝ陸軍大尉へ嫁いた彼の方よ、本當にお氣の毒ですわねえ、尤も始



めは矢ッ張りお幸福だつたのよ、お嫁きになつた時分は丁度大久保に在らしつたので秀子さんと、つゝじ見に行つた歸途お寄申して、

「松子さん、貴女お幸福ねえ、」と云ふと、

「えゝ難有う……それでも良人が愛して呉れますので……」

「あら！御馳走樣、」

「ほゝ實際ですわ、」

と笑つて、

「どうせ良人なんぞ、やつとこ大尉なんですもの、物質的の滿足は思ふように得られませ

んわ、然し上見ればキリ無しでねえ、此近所に居るお百姓のマダム……はヽ　お百姓のマダムも振つて居ますが……朝は暗い内から野へ出て田を耕し、夕は星を戴いて家路に歸る、其お神さんなぞ何樂しみがあるか、他目には本當にをかしい位ですが、夫れでも一家團欒面白さうに暮らして居ますからねえ、樂しみは夕顔棚の下にもあるとは實際ですわ、あの幕末の志士梅田源次郎の妻が

　樵り置きし軒のつま木も焚きはてヽ
　　拾ふ木の葉のつもる間ぞなき

と詠んだとき源次郎が

　事足らぬすまいなれども餘りあり
　　我をなぐさむ君あればこそ

と和したやうに、例へ物質的の滿足は得られないでも、夫婦相愛の心さへあれば、これに越した事は無いと思ひますわ、」

てねえ、常の沈默家に似合はず大氣焔なのでせう、秀子さんも私も吃驚してしまつたのよ、

それが如何したのですか半年もたヽない内に良人の大尉は他の女を愛し始めて松子さんの事は見向きもしないんですつて、

　良人は陸軍へ出て居る位なので、極く元氣な面白い方なのでせう、ところへ松子さんがあの通り陰氣な方なので、どうも趣味が一致しなかつたらしいのよ、始めは「君ならで誰にか見せむ梅の花、色をも香をも知る人ぞ知る」で隨分人に羨まれる位仲がよかつたのですが、品がよい許りの梅よりも艶麗な櫻の方が宜いと思召したのか、いつか他所の花へ手をお出しなすつたのですつて、まつたくお氣の毒ですわねえ、其後それとなく私、松子さんに慰問のお手紙をやつたら其お返事がかうなのよ、

……むかし紀有常の娘は在原の業平が河内の國の女に通ふを妬みもせで

　風吹けばおきつ白波たつ田山
　　夜半にや君がひとり行くらむ

と詠みしとやら、何事も運命とあきらめ居り候……

私、あんまりはがゆくつて其手紙を寸々に破いてしまつたの、だつて二十世紀のマダムが不見識も程があるぢやありませんか

藤子さん？、前川家へ嫁らしつた藤子さんでせう、彼の方なんぞ始めは本當にお可哀さうでしたわ、そりやア物質的の幸福は得られたでせう、何しろ百何十萬と云ふ金満家へ嫁らしつたんですもの……ですが精神的の満足はねえ……、

　良人は高商出身の少壯實業家ですから申分はありませんけれども家庭はそりやア隨分だつたのよ、藤子さんには舅に當る良人の實父は十年前、良人が未だ十一二の時に亡くなつて了つたので一人の阿母さん、而も義理ある――え丶、實の阿母さんは早く亡くなつて後妻にきた方――が一人では大勢の奉公人も使ひこなせず、商賣の方も困ると云ふので、既に分家した良人の伯父様夫婦が返つて來て後見する様になる、さア左様なると色々面倒になつて結局阿母さんの方は裏の離室の方へ別居して了ふ、が別居とは云へ一ツお邸中に居るのですもの、丁度三人の姑を持つたやうなものよ

いつかお目にかゝつた時、

「藤子さんも隨分大變ですわねえ、」と云ふと、

「え、難有う、」

　と云つて笑つて居らつしやるのでせう、眞實に私大なる同情を有つてよ、何故？……、私想像、何事も運命とあきらめてお口に出さないだけ心の中は云ふに云はれぬ悲哀の情に満たされて居るのであるです、え、神田先生酷似ですつて？まアお口の惡い、是でも會話の優等生ですわ、ほゝゝゝ、

　兎に角そんな風で自然奉公人まで二派に分れて居る、其中へお嫁きになつた藤子さんは什麼にお困りでしたらう、でも藤子さんは感心なのよ、阿母さんの方は阿母さんの方で程よく仕へ、叔父さん御夫婦の方は亦それで良く仕へ、而して一家の取締りをして在らつしやる所は私なんぞ迚も眞似も出來は仕なくつてよ、廊下つゞきに成て居るとは申せ半丁も離れて居る所を毎朝毎晩御機嫌伺に行く、而して晝間自分がこしらいて置

た菓子などを持つて行つて
「お母様おいしくもありませんけれど……」
と出す、
「おゝ折角ですがねえ、亦叔母さまが氣にすると困るから……」と云ふ、
「いゝえ、叔母さまが阿母さんにお目に掛けなと申しますから……」
と云ふのでせう、阿母さまの方ではあんな敵の樣にして居る叔母さんが什麼してそんな事を云つたのかと思ふが滿更惡い心持もしないので
「さう、では少し御馳走になりませう」
と喜んで食がる、亦叔母さんや叔父さんの方へ來ては
「阿母さんが、かうお仕しと申しましたから……」
と、お煮花なぞを入れて出すと云ふのでせう、それは亦いつか藤子さんの頓智とは知れたものゝ折角藤子が心配して與れるものをと兩方でもいつか心が和いで今は阿母さまも本宅の方へ御返りになつて在らつしるの、ですから今ではもう叔父樣御夫婦、阿母樣も藤子さんでなければ成らない樣に大事にする、見世の番頭から女中まで若御新造――藤子さんでなければならない樣に云ふ事をきくのですつて、まア私是こそマダム振りの模範だと思ひますわ……、
あら今度は愈々私のマダム振りですつて？、厭！笑ふんですもの……え、眞面目に聞くつて…… ほゝゝ大變な事になつたのね、
此前「嫁に行く人」の時荻香さんは商人腹に生れて子供の時から腹一杯に慾をためて算盤はじいて頭を下げるの外、文學趣味など爪の垢ほども解さない、前垂かけの良人を持てお神さんと云はれる位なら生甲斐もないと思ふ、と被仰いましたが一概にさうばかりも云へませんわ、現に私の良人なんぞも全く商人腹に生れたのですが新刊の書籍は好んで讀む、就中文學的の本は常に愛讀して居る位ですもの……あら良人の辯護ばかりするのだらうつて？、嘘よ、それやあんまりですわ、
實を云へば私も荻香さんのように思はない事もなか

つたのですが元より私と良人とは従兄妹同志の、其性行もよく知て居たので甘んじて「おかみさん」に成たのよ、而して嫁いて見ると良人の本箱には藤村詩集や露伴叢書、源氏物語や眉山全集など文學的の書籍が澤山あるぢやありませんか、私どんなに嬉しかつたでせう、加之良人は大變俳句に趣味を有つて居ますのよ、



私も實父が俳句をやつて居たので猿の人眞似どうやらお話相手位は出來ますので夜になるといつでも良人と二人で作句しては樂しんで居りますの、一寸今覺えて居るのが

下手上手馴るれば同じ杵の音　　東　山(良人)

ふり向くは未だ初戀にならぬうち　　静　江

君見よや油斷なされば除夜の榮　東山

散る露や昇る力を見せてのち　東山

谿を貫く巖の松や初日出　靜江

ほゝ大變な宗匠でせう、然し句になつて居る居ないは兎に角、かうして二人で樂しむ愉快は亦格別ですわ、

それから亦良人は謠曲が大好きで靜かな雨の夜なぞにはよく獨吟をやつて居りますの、而して私にも

「靜江、お前も少しやつて見ないか、」

と云ふのでせう、是には私も困つて了いましたのよ何故つて私聲が惡いのですもの、でも折角良人が勸めて與れるものを厭と云ふのも氣の毒なので、

「では何かやさしい物を……」と頼むと

「では「夜討曾我」でもやつて見るさ、」

と良人は早、先生氣取、

「其名も高き富士の根の………、」

と謠ひ出す、私は何だか無性に可笑しくつて唯下を向いて居ると

「さア、あとをつけて謠はなくつちや駄目だよ………其名も高き富士の根の………、」

「ほゝゝほゝゝゝ、」

「はゝゝ笑つちや駄目、其名も………、」

「ほゝゝゝ」

とう〳〵始めの晩は笑つて止めてしまつたのよ、それでもまア毎晩やつて居る内にはいつか一字落し二字落し、廻しやクリ入りなどもどうやら出來るように成つたのよ、え、隨分氣樂なマダムですつて？………、あら！是でも中々の働者なんですわ、料理裁縫は申すに及ばず、時には見世へ出て二一天作二三が六の割算掛算、毎度難有うの商賣までするのですもの、えゝ實際よ、嘘と思召すなら私の日記帳をお目に掛けませうか………、

十一月二十日、晴、氣溫五十一度、

良人は商用で今朝下りの一番列車で足利へ行く、

私は水仙を活けて居ると巴里に居る例の千代子さんからお手紙と近頃御撮影のお寫眞が來た、立派な洋

服を召してにつこり笑つて居らつしやる千代子さんのお容姿、いつ見ても惚れ〳〵する樣だ、言文一致の長いお手紙、本當に面白い事ばつかり、(此手紙は手文庫の中へ入れておく)私も早速御返事を書いて出した、封の中へ白菊を一輪入れてあげたが千代子さんのお手にはいるまで香が殘つて居るか知ら?、それからお母さんのお羽織を縫つて居ると三吉(番頭の名)が來て

「あの本町の戸塚さんと宮本さんが來て學友會の臨時寄附をお願ひ申したいと云つて參りましたが什麽致しませう」と訊く、

「旦那がお不在だからと申上げてお與れな。」

　と云ふと、

「へい、夫れは私も申上げたのですが兎に角お神さんにお訊き申して與れる樣にと申しますので……」

と云つて居る、仕方がないから見世へ出て、

「只今三吉が申上げました通り生憎良人が不在で御在いますから……」とお斷りすると

「否、如何程でも思召で宜しいのですから……」

と二人とも笑つて居る、

「折角で御座いますが良人の居りません所で申上げましても餘り澤山出して他家樣の方に笑はれても成りません　亦餘り少し出して良人が歸つて叱られても困りますから。」

と云ふと、それではと云つて歸つて行つた、あとで良人に此事を話したら中々うまい事を云つたねと褒められた、

今日の惣菜は鰯のつみいれ、奥の分は里芋の甘煮、むし松茸、

午後大川さんが來たので品代金四百貳拾圓也渡す、但し四百圓は川崎銀行小切手、

三時頃漸く羽織仕立上る、大變仕立榮えのする柄だ

午後五時の列車で良人が歸つて來た、

晩餐には小鯵のフライ、薩摩汁、小蕪の酢漬を出す

夜は例の通り良人と妾と三吉と三人で謡曲の復習、今夜は熊野をやつて見た、シテが私、ツレが良人、

三吉は宗盛、私の「甘泉殿」が思の外よく出來た、それより家計簿と日記をしるし午後十一時就眠、

十一月二十一日、曇、氣溫五十二度、

私は女中のきよやと梅やを相手に漬菜を洗つて居るとお隣の御隱居が

「大分お働きぢやありませんか、」と這入つて來た

「えゝ、あんまり働いて雨でも降ると困りますわねえ、」と笑ふと

「實際！然し松島屋の若いお神さんは中々の豪ら者だつて町内で評判して居ますよ、」

と笑つて居る、いつもながら面白い御老人、

今日の惣菜は、ほうれん草のしたし物、但し忙しかつたので奥も同樣、

午後見世は大分忙しいよう、

晩餐にはミートオムレツ、林檎のフライ、

お母さんは此頃少しお眼が惡くつて大好な小說も讀むことが出來ないから晩餐後露伴叢書の内の「二日物語」を讀んであげた、そして「思ひ入つて操る珠數の音の聲すみておぼえずたまる我涙かな」から「君にて御座せしよ、こはいかに、と涙に顫ふおろ／＼聲」のあたりまで來るとお母さんは

「まアお可哀さうだわねえ、」と涙を拭いて、

「ですが本當に面白いねえ、」と被仰る、

實のところ老へたりとは云へ未だ二十歲の血の氣の多い私、「伯爵夫人」や何かの方が面白いと思ふが元よりお母さんに讀んであげて居るもの、其お母さんが面白いと被仰れば矢ッ張り面白かつた、

それより良人の襯衣のボタンを直し、家計簿日記帳を記して後就眠、

ね、實際でせう、旦那にいちやついて其昇進をさまたげたり、少し許りの美人を鼻にかけて貴夫人のあられも無い寫眞道樂にうき身をやつす何某夫人などゝは異ひますわ、そんな御面相は持ち合せないのだからつて……あら失敬な、大に失敬ですわ…………、

然し妾なぞ良人と趣味を同じくして幸福ですが若し運惡く趣味を異にして居るやうならばマダムとなつた以

上、良人の趣味に同化……少くも同化せんとつとむるのが肝要だと思ひますわ、ほゝゝ靜江とした事が大變な議論家になつてしまつたのねえ…………。

姑との仲ですか？姑と云つても私には血緣の叔母、而も一人も實子をもたないで良人を養子して私を迎ひたのですもの、良人より私の方が甘へて居る位なのよ而して姑は私の顏さへ見ると、

『俳句や謠曲も宜いが、それよりも早く愛孫でもこしらいてお呉れ、』

と被仰る、さう飴細工のように出來はしませんわねえ、でも間もなく私が唯ならぬ身になつたのでお母さんは大喜び、

『早く產れるといゝねえ』

とニコ〳〵して居る、良人はをかしがつて

『手品師ぢやあるまいし、さう急にはねえ、』

と笑つて居る、

『男の子が生れたら何とつけようね、』

とお母さんは大變な事を云ひ出すので

『まだお母さん產れもしない内から……』と私が笑ふよ

『でも早く考へて置かないと困りますよ……若し男だつたら祖父さんの名をつけたら什麼でせう、』

『祖父さんの名？だつて赤ン坊に淸右衞門も振るつて居るぢやありませんか、はゝゝゝ、』

と良人は笑ふのでお母さんも私も吹き出してしまつたのよ、やがて月滿ちて生れたのは男の子、この秀坊がさうなんですわ、ほゝゝ、こんな坊やまである——明けて二十一のお婆さんの癖に、出放題ばかり申上げて面目ありませんわねえ、然し誰やらの句の『とてもなら笑つて暮らせ五十年』面白をかしく暮すのが一生の利益ぢやアありませんか、『良人の趣味に同化して愉快に暮らす』是がマダムとしての私の主義なんですわ…………………。

（完）



境遇の變化と私の覺悟

小だまき

夫は海岸、婆やは張物、此暇にと針箱あけて——喧ましかつた妹の花枝の縁談もとう〳〵先月纒まつて明日は其輿入の吉日である、嫁く先は實業界に名の高い望月家、其嫡男の正夫さんは造船技師で洋行歸りのチヤキ〳〵である、腕はよし氣質は寛濶其上にも財産が……、こんな良縁はまたとはあるまい、と云ふ母様からの相談を受けた時私の胸はつらかつた。

實家の父の今の位置なり資産なり、又嫁く妹の容色學藝性質なりから考究しても此縁談を不釣合として拒む丈の勇氣はなかつた、否確に相應はしい縁である、双手をあげて賛成すべき良縁である、夫だのに何故私は躊躇した、何故直に返事を書き得なかつたらう云ふまでもなく私の胸のどこかの隅に穏ならぬ或感情が潜んで居たからではあるまいか。

姉様の嫁いだ先は名高い舊家で財産家だが若い時から後家を通したと云ふ確固とした難かしいお姑様がある、鬼千匹の小姑がタルリ取卷いて滑べつたの轉んだのと、本當にどうしたら好いんだか、と其當座はよく泣きに來たものである、無理もないお乳母日傘で荒い風にも當らなかつた十八の蕾の花には世にありふれた家庭の風波もどれ丈烈しく辛らかつたらう。

「もう〳〵お金なんか何になるもんですか、當人さへ確なら差向ひの氣樂な處が一番仕合せなんですよ」

と泣いた揚句はいつも此語で結末をつけるのが例である、夫でもどうやら納まつてゆく、其お次は、と目指された私には姉様よりも更に多くの貰手が來た、兄一人に妹三人多くもあらぬ子供の中でも環々と取別秘藏にして居た父が早い〳〵の一點張で諾はなかつた過去一年の求婚者中には華族もあつた、軍人もあつた、學

者實業家の數を盡して選取見取の盛況を呈しつゝも、扨此男はと見込をつける程のもないな、とばかり父樣の首はいつも斜に
「あなたのやうにさう難かしく被仰つては到底緣付ける譯には參りません」
と母樣が躍氣におなりなさる今度こそは、と持ち出されたのが一人は華族の外交官一人は三井の倫敦支店詰、いづれも若手の腕利で確固とした資產がある、親があらうが兄弟が居やうが始終外國で暮す身に何の心配もありますまい、と云ふ仲人口、母樣の膝は覺えず進む母樣は派手な事がお好である、最後の一人は伯林の伯母樣からのお手紙にある若林樣、親もなく兄弟もない獨り者、工科大學を出るが早いか親の遺產の全部を持つて渡歐した、其貯のあらん限りは研究もした、其盡きる時は故國に歸つて職を求める、と云ふて居る、沈着な默靡の深い頗る寡歡の人と認めるともかくも逢つて御覽になつては？居物を賴んで置いたからとある、其居物は數月以前に寄られたまゝ其人の影は再び見えぬ、初對面の抑々から面白い、話せると父樣はぞつこん打込んで被居る。
「どこへでも貴君のお望の處へ私から御紹介致しませう」と懇に被仰つたのを輕く遮ぎつて
「否少し前から話もありますので多分大學の方へ這入る事になるでせうから」と被仰つた。
判明とした物の云ひ樣落付いた體の擧止、親の遺產の全部學資に傾注して腕一本からやり出さうと云ふ獨立獨步の其精神が賴もしい
「あの男はどう思ふ？」二階の一間に親子三人婿選の相談最中、片や外交官片や實業家勝敗如何と首傾けた母樣の耳に不意の一言、爛漫たる櫻と桃の林の中に樫の木一本亭々として雲をつくとも其根は深く幹はよし堅くとも、櫻の花の色もなく桃の實の味もない、若林さんは貴夫財產が御座いませんからねえ、夫に學校の先生では此先蓄財の餘裕もなし萬一の事があつた時環が難儀致しますから」
母樣の說も一理ある、私もそこは考へとるが、環はど

こへ極める積り？」和やかな眼を向けられて眞赤になつて俯向いた、今年二十一、幸にして體は健全目鼻立こそ十人並だが私に何の取柄がある？學問、と云つても只女學校を出た斗り遊藝といつても本の一通教へる程の能もない、只父の位置父の資産柳澤の娘なればこそ噂にものぼる所望もされる、萬一私が裏店小店の其日暮らしに手鍋下げて働らいて居たら？、まあ誰が見返つて與れるだらう、三吋五吋のリボンの値段を知らない娘も雖一切の値は心得て居る、夫等の娘は代數幾何に苦しますとも何錢何厘のお釣錢取違に違算を生せぬ人妻として一家の竈を預る上にどちらを人は選むであらうか、重ねて云ふ私は實に柳澤の娘である柳澤の娘なればこそ噂にのぼる所望もされる、私の身から親を放してしまつたら？家を放してしまつたら？身に添ふものは卒業證書只一枚、たか〳〵が小學校の女先生、而も夫は女の天職ではないさうである、女の天職は妻たるにある母たるにある、其本分を全うする丈の女になりたい、地位も財産も總べてを除いて五尺の體只一ツ、いかなる場所いかなる人の前に投げ出されうとも―押しも押されもしないやうなあゝ、眞の價値ある女になりたい、今日までの柳澤環が一躍子爵の令夫人となり濟し、あの鼻眼鏡の良人と肩を並べて馬車へ乘つて船へのつて洋服つけて英語をしやべつて、ミセスミセスと持てはやされたとて何になる？御前樣奥方樣と家從や侍女から奉られてつまる處はお米の値段も知らずに死んでしまふだらう、お金のあるのが私は嫌ひ、取分親からする〳〵と讓り受けた財產は身につき難いと云ふ、さもあらう、自分の勞力の何物をも見出し得ない寶の中に自分の精神の何物をも止め難い道理である、遣ひ餘つた身代もつて樂な所で修業は出來ぬ、外交官もいや銀行屋さんもいや、若林さんさへ貰つて下されば……今や一生の身の極り時、徒らに恥かしがつて居る場合でない思ひ切つて打出した。

「お前に其決心があるならば」と父樣は大贊成、多少の意見は母樣にもあつたらうが是許は當人次第親だとて強いませぬ、ともかくも、と人橋かけて問合せると

「あんな大家の娘は貰はぬ、到底辛棒は難しい」一度に斷然ことはられた、親ある爲の私の値は親ある爲に落された、あはれ不束な身ながらも嫁した以上は分相應もう實家の事思ひませぬ、世の女の憧るゝ富貴榮達聊も願はうとは存じませぬ、只身一ッ心一ッを浮世の海に浪にも風にももまれもまれて錬へ上げたい望許り、と再三再四仲人が足を運んで纒めてくれた、もとより當方は一介の書生、昔の儘の家屋敷こそ我物ながら月給取の家内として分不相應の仕度は無用、と嚴しい達しに式服の黒の模樣も目立たぬやうに色直しも留袖のまゝ、五年後の明日の祝にそれ取出して同じ縮珍の丸帶しめて晴れの座席につかるとは、ああ誰も思ひ掛けては居ないだらう、年は取つても親掛の時代には、たかゞ紋付の一襲帶一筋が



月給の大部分に相當するとは思ひもつかぬ、指環も時計も持ち馴らしては氣にも止めぬが扨買ふとなれば半年一年の生活費は棒にふる、こんな事に驚いて何となる、夫にしても私等夫婦に婆やとの三人暮らしでは大學教授の俸給も豈尠しとせんや、私達は奢りこそせね分相應の交際もする行遊もする、夫で月々にいくらかづゝの貯金も出來た、環さんは腕がある、確固者だといふ評判がチラ〳〵と耳に入る、どうして〳〵またこれから、と思ひ乍らも吾知らず微笑まずには居られなかつた。

「お前には財産がある若林に遠慮して持たせてやらぬが眞逆の時には用に立つ、心丈夫に」と父樣は云つて下さる、何としてそんなもの頂いてすむものか、老後の計は吾等自ら立てまする、と口にこそ出さなかつたがあゝ、かうならうとは思はなかつた。

一年前の旅行先から壯健な夫が不意の發熱、チブスの疑をかけられて後一週間果然急性肺結核と聞いた時の私の驚ろき、當時右肺は全部侵蝕され終つたのである、嗚呼萬事休す、未來にかけた私の希望も幸福も、急轉直下總て暗黒の中に葬り去られたのであらうかともかくも職を辭して海邊への出養生、花は散り紅葉は色づき十坪に足らぬ寓居の庭にも秋の氣漲つる。

秋には馬も肥ゆると云ふ夏以來の夫の健康、見違へるやうな顏色肉付胸轟かす咯血も收まつてから今日で三月、此冬を無事に越したら先一安心、と病院でも云つて下さる。

「此分ではお前が留守でも當分困らぬ、花枝さんも婚禮すれば神戸へ行くと云ふ話だし東京へも無沙汰になつてる、丁度好いから行つておいで」と夫が被仰る、

思ひも掛けぬ東京行また嬉しい、一年振りの東京の町懷かしいみんなの顏、夫から夫と目先にちら付くそれにしても旅の仕度、着てゆく着物は！あゝどれもこれも流行おくれ憖に山繭縮緬の色の濃いのが恨めしい、此間御見舞に來て下すつた姉樣のお服裝見ても、鼠の三筋に何とか織の白い帶襟にも帶止にも心を碎く跡は見えて撫肩に絽縮緬の羽織すらりと、奥樣のまゐ

いつまでもお若い事は」と羨やでさへも見とれた位三人の子の母親とは誰が思はう。

それに私は？垢こそ付かざれ幾度も水をくゞつた色揚の單衣に昔を偲ぶお納戸繻子と絽友染の晝夜帯、料理牢にぬれ手ふき〳〵出て來た姿を吾と吾目に見くらべて恥づべきでないと思ひながらも俯目になつた。

あゝ富なる哉金力なる哉、姉様も緣付いてから早や小十年、氣むづかしいお姑様のお小言も出戻りのお種さんのあてつこすりも馴れてはさして氣にもならぬかいつもにこ〳〵と元氣が好い、其癖兄様は相變らずのお付合で夜泊り日泊りも珍らしくないのよ、と平氣で笑つてお話なさる、私などには到底堪へられさうにもない複雜な生活をして誰から慰藉を得るでもなく自分勝手に三越へ流行物を誂らへて出入の者や親類中へ氣のすむ程の附屆して好い加減な時分には汽車に乘つて見舞にもいらつしやる、どこからどこまでお金で固めて無趣味なやうな氣樂なやうな姉様の身に引比らべて私より幸福であり得るだらうか、頼む夫に病らひつかれて手薄い基金を心配しながらさもないらしく笑顔を見せて日夜の看病、辛らいには違ない、其上在職の頃とは違つて收入も減れば暮しもつめる其中での滋養喰牛乳よ玉子よと自然月々の拂も嵩む、中々に襟一掛買ふ餘裕があらうか、苦しいには違ないそれでも私は姉様より、より幸福であり得るだらうか膝に擴げた白羽二重の長襦袢鹽瀬の襟も氣疲でふいて二度のつとめ姉様はさぞ新らしい御紋付も染まつたらう、當の花枝の振袖姿は云はずもあれ一家一門輝くばかり裝ひこらした晴れの座席に私一人の古紋付――品は能くとも流行おくれの――どんなに人目をひくだらう、若林さんも意氣地のない、と耳から耳へ私語かれはしないだらうか夫を見越して母様から、來られるならばお前の分も染めさせやうか、と親切に云つて寄越して下すつたとき何故私は斷つたらう、たかゞ紋付の一襲、憚りながらお序に、と頼んだ處で柳澤の出納帳に際立つた大穴明けはしなかつたらうに。

あゝ思うまい〳〵私はもう柳澤の娘ではない若林の妻

である、歴とした若林の妻である、夫の許を受けない中はたとへ一文半錢たりとも他人の情にすがらうとはせぬ、嫁した以上は分相應、榮耀榮華を願ふまじと決心した身が苟にも人にすがらうとした淺ましさ、果敢ない暮しを續ける中に心までおちぶれて行くのであらうか、嘗ては花枝さんの良縁を聞いた時胸のどこかに蟠かまつた或感情は明らさまに富を呪ふ淺ましさではなかつたらうか、あゝ古紋付の身を恥づるより心を恥ぢよ、私には歴とした夫がある、平和な家庭がある、富にも金力にもかへ難き夫婦の情愛は濃やかである、それ丈でも私は姉樣より、より幸福であり得るのは確ではないか其身の程も辨へず慾に都の空を戀ふればこそ弱い心を亂されもする、都放れた長閑な町に病餘の夫と婆やの三人互に慰め劬はられつゝ浪に明かし浪に暮らせば些の不平もなく些の不滿もない、こゝは自然の樂境である、此樂境をあとに見捨てゝ苦しみ多い東京へ何故私は行かうとする？いつそ明日は止めやうかしら、いや／＼夫が折角の御親切妹の婚禮と云ふに行きたからう、絶えて久しい東京の町も見たからう、との思ひ遣りから御不自由を忍んでまでも、行つてお出でと被仰つて下さるものを、喜んでお請しないでどうしやう、古紋付が何の恥、五年前の其時其夜浮世の門出に誓つた心を袖に包んで三々九度のお盃した、おゝ其決心を胸に納めて幾久しく新夫婦を祝しませう、祝儀の白襟掛けて疊んで着物と帶と丸ぐけと

「オヤすつかりお仕度が出來まして　何とまあお美しい」いつか日は釣瓶落しに、婆やは張り終へた布を片手にさも驚きの眼を見はる、あゝ、上見れば及ばぬ事の多かるを笠着て暮らせおのが心に私は何となく淋しく笑つて針箱を片付けた

（完）





新妻物語

若草

私達が此處へ新世帯を持つて一週間も經たぬ間の事である。

今から思ふと可笑しいが暫くは他人の顔を見るのが何より心苦しかつた。流石下婢一人と我々二人切なので正可雙方無言で暮す譯にもゆかず言葉丈は交はしたが而し不思議に其人と差向になるのが辛かつた。それに今迄夫の使つて居たと云ふ婆さんが意地が惡くつて『御夫婦は差向でお食り遊せ』なぞと、二人の膳が無法に並べてある。と云つてそれを離すも變だし。座には着きはするものゝ、湯等を飲む微な音も其人に聽える様に思はれて心平でない。こんな時には夫の方でも、妙に婆やを引着けて置きたい様な振をして、其を相手に種々笑談を云ふ、そしてクス〳〵と自分が笑ふと軈て其人も大きな聲を擧げて一家の主人の樣に笑ふ……こんな調子であつた。

妙な事だが、私は嫁る前から一ッの好奇心を持つて居たそれは夫が初めて何と云つて自分を呼ぶだらう？との問題であつたが未だ一向呼んだ事がない。用事があれば自身でするか、それとも槇ッ！　と態々自分に聞える様に婆さんの名を呼ぶ、私は其都度可笑しく思つて居た。

其四五日は暇で仕方が無つた。夫の留守の時は御飯を食べると槇の婆さんはお隣へ無駄話に行くので家の内には私獨りとり殘される、こんな時には妙に氣が廻つて自分の一擧一動を此婆さんが、あの亂杭歯をむき出して隣の下女に話して居るのが眼に見える様な氣がせられる。

呆然と緣側へ出て見る。私の家は町外れの新建なの

で、黑い土をならした許の風情のない庭は黒板塀一つ隔てゝお隣の裏と續き、赤い子供の着物をかけた乾物竿の端が此方へ出て居る。何氣なく見ると板塀の下の方の節穴から小さな指が生えた、尙よく見ると其少し上の穴からは黑い眼が光つて居るではないか！

一體此板塀には節穴が三つあつて、其後も注意して居るとよく黑い眼が覗いて居る、時としては一番高い穴の塞がつた事もあつたが流石其眼丈は、自分の氣が付くと最後忍び足で逃げて行つた……。

幾ら何でも是は餘り甚い。是と云ひ前の婆さんと云ひ私は全く監視されて居る樣な物だ。

今の處、留守の間は何となく淋しかつた。と云つて其人が家に居ると妙に氣が張つて、結局居ぬ方が氣樂であつた。而し點燈頃になつて獨だと何か氣が燥つくので、二階に居る時其足音を聞きつけ、バタ／＼と梯段を降りかけ、亦急に心附いて靜に降りた樣な可笑しな事もあつた。

○

其後十日も經つた或朝の事、聞き馴れた樣な聲がするので出て見ると伯母であつた、未だ別れてやつと半月にしかならぬのに恐ろしく長く會はなんだ樣な心持がして其人が夫と挨拶して居る間も心がソワ／＼した。夫は出勤前なので洋服を着た儘飛鼠の樣に坐つて窮屈相に話をして居たが。洋袴の足に痺れが切れる時分に思ひ出した樣に時計を出して見て、時間だからと斷つて出て行く、後は氣兼なく伯母と話が出來る樣になつたが妙に改つて何と口を切つて良いか一寸迷つた。

「どうだね、其後の樣子は……」と暫く其處等を珍しげに見廻して居た伯母の方から口を開いた。私は少し顏の赤くなるのを覺えた。

「……樣子つて、伯母樣」と視線を側へそらせ乍ら云ひ淀むと、伯母は一寸默つて居たが軈て。

「それでも結構だ……」と獨言の樣に云つて、亦急に心附いた樣に「オヤ、菊が咲いて居るね、どれ」と云つて緣側へ立つて行く、私も續いて立つて。

「昨日賣りに來ましたから」と何氣なう答へる、そしてホッと息をついた。
　自分だつて嫁に成つたと云つて、さう羞かむ年でもなかつた、而し遇ふ人遇ふ人、皆意味ありげな言葉遣をして自分の心の奥底を見拔かうとする樣に見えるのが何より辛かつた。
「旦那樣は……（どうも伯母は昔氣質なので旦那樣旦那樣と云ふ）……旦那樣は何時頃お歸りだね」と尋ねるのに放心外の事を考へて居て「サー幾時ですか……」と云つて終ふと
「マー呆れる、主人の歸る時間も知らないで！」と仰仰しい眼付をして笑ふ、かと思ふと。
「茂さん、茂さん、と用ありげに呼ぶ故、何かと思ふと「茂さん。旦那樣を何と云つてお呼びだえ？」人の惡い伯母樣、そんな事は知らない！！
　こんな充らぬ事なぞ云はれたので夫の歸つてからも言葉を交すのが一寸極が惡るかつた、そして其二三日婆さんが「晩は何に致しませう。奥樣」と奥樣と特別に力を入れて來ゝもヤッと平氣に。
「さうネ……」等と云ふのを覺えたのに伯母の前で奥樣と云はれるとヒヤリとする。
　其日の晩は三人一緒に食卓に就いた、一角の手腕を振つて作へた鯛のフライに、これは結構と伯母は箸を着けて、かと思ふと一寸嫁に人の顏を見て。
「どうで御座います、飛んでもない料理を差上や致しませぬか」と云ふと、問はれた其人は吃驚した樣に椀を置いて。
「イヤ、案外結構です」と笑ひ乍ら答へる。
「それならば宜敷う御座いますが、家に居る間は、ネー貴方、時々匙加減を間違ひまして……ソー〱此間も……」などゝ虛言ばつかり、總體年寄は不可ない、調子に乘つて來ると無い事迄並べて人を笑はせやうとする。
「……此間も眼の玉の飛び出す樣なライスカレーを造へましてね……」なぞと！
「ありや妹ぢやありませんか、伯母樣御存知の癖に！」

と云はせもあへず。

『そんなに恨めし相に云はないでも良い』と憎らしい。

二人してハヽヽと笑つて終ふ。

○

かれこれとして居る間に其年も經つて紀念多き新年を迎へた。もう子供ぢやなしさう〳〵恥しくもなく、不意に新しい姓を呼びかけられても直ぐ返辭が出來る樣になつた、と同時に段々今の生活に馴れて、前途に微に光明のひらめくのを感じた。

或日の午後、夫の處へ珍らしく來客があつた、婆さんが二階へ通すのを密と襖の間から覗くとどうも見た樣な人だと思つたが想出せなんだ、――トン〳〵と夫が二階から降りて來て、今の人に紹介してやるから後で來いと云ふので、暫して茶器を持つて行くと部屋の内は烟で一杯、其人はバタ〳〵と居住ひを直す。

一寸夫の顏を見ると、夫は苦相に煙草を下に置いて『之が僕の妻です！』と祝辭めいた調子で云ふ。

挨拶をすると其人は只、ハツハツとのみ頭計りを下げる。そして私の頭を下げ方が少々長かつたので亦吃驚してお叩頭の繼足をせられた。

若い男の人では、女が側に居ると今迄とは見違へる程よく口をきいて快活相に笑談なぞを云ふ人がある、かと思ふと反對に妙に堅くなつて一寸相手から冷かされたりすると眞紅になる人がある。恐らく此人は後者に屬すべき人だと可笑かつた。それに可笑しい事には平生優しい夫が他人の前では一寸暴君の樣な振舞をして、妙に人を『オイ』なぞと呼び、『こんな菓子食へるか』とそれ丈しか無いのを知りつゝ突き戻しにする、と云つてこんな初々しい態度が反て憎くはない。

よく女は假面を被つて居ると云ふが男も常に被つて居る、只少々それが厚い丈で眞の顏を知つてる者から見れば其可笑しさはまた一入である。

密と隣の部屋で立聽をして居るとこんな事を云つて居る。お互に餘程親しい間柄らしい、以前默つて居たお客の聲で。

『君は髭を剃つたな、何時剃つた』

『三月程前……』

『そいぢや奥様をお迎へになる（トカを入れて）一寸

『前にだな』

『……笑談は止せ……』と笑ひ乍ら夫が云ふ

『妻君をもらつたら嬉しいだらう』先刻に引代へ中々思切つた事を云ふ人だ。夫は受太刀になる——

『馬鹿な事を云ふ物ぢやない——』

『嬉しくないと云ふか』

飽迄追及する氣と見える

『もう君には甲を脱いだ』

と夫が云ふと客はハヽヽと快さ相に笑ふ、夫も笑ふし、妾も可笑しくなつ密と下へ降りた。

其人の帰つた後で夫に

『面白い方ですね』と云ふと、夫は苦笑し乍ら、どうも悴が長くて困ると云つた。



○

こんな風に二月や三月は夢の様に経つて行く、昔の事を考へるのでなければ行末の事を案じるでもない、夫の留守には一つ新柄の髪に結つて見やうと半日をそれに費したり、かと思ふとこんな事をして居ては！と一角用ありげに解き物を出して見たりする、日和の良い日は縁側に日がさして針持つ眼が痛い位、もう隣から覗かれても平氣なれば、向ふでも覗かうともせぬ。別に以前の復讐と云ふ譯でもないが一寸悪戯をして見る氣になつて今度は此方から覗いて見る、思つたより狭い汚ない庭で小さい納屋からは我樂苦多が溢れ出てる、そして餘程洗濯好と見え

て乾物竿には乾と、何か乾してあり橫の方にはボロボロの子供の足袋が吊されて風が吹く毎にキリ／＼廻つて居る、つひそこが臺所の裏口になつて居るが、一匹の盗賊猫が何か見附けたか惡い目附をして入つて行く。尤らぬ事だが私はあの猫が何か盗みはしなかつたかと長い間氣になつて仕方がなかつた。

今から考へて見ると可笑しくもあり又戀しくもあるが、あの時分は何でも面白かつた。——

夫は今迄書生生活をして居たので道具などのあり樣なく、緣日でもあると乾と二人で出かけて行つて夫が梅の株をさし上げ片手に箒をさげて群衆の中を大股で歩くと、私はセッセと息を切らせ乍らお客用の枕と紙屑籠等をさげて隨いて行く

「辨慶の七ツ道具見たいだ」

「ほんとに」など話し乍ら歸つて來るのが此上もなく嬉しい。

亦何時かも宿り客があつた時つひ話に實が入つて、夜具の事等を忘れて居た、お恥し乍ら餘分の物は一人前足らぬので、夫のを一枚、お客樣の方は漸くそれで濟んだが、偖濟まぬのは私達、

「どう致しませう」

「困つたな」と顏見合せて居たが、とう／＼外套やら洋服やら、座蒲團やらをあり丈夜具の上にのつけた。京都では、(どんな字を書くか知らぬが、)よくアハヽシヤヽンと云ふ物が來る、脊中に細長い六尺計もあるお厨子を負ぶつてガーン、モンモンと鐘を叩き乍ら、方々から死んだ子の衣類等をもらつて皆御厨子の廻りに結へ着ける、恰度今私共の寢て居る姿があれの樣だといつてお腹を抱へて笑つた

又或時一二ケ月越しで實家へ歸つた事があつた。肩掛なしでも出歩ける時候で、我家の門際の紅梅がしほらしく綻びて居た。戸を開けやうとすると內から鍵がかけてある、是はよく私達の外出をする時にした事なので脇の方から手を入れると難なく戸は開いた、上へ上ると綺麗に取片附けた座敷には人氣もなく硝子障子には午前の日影が赤々と、妹の机の上の硯箱に薄く塵

の浮んで居るのが見える

暫く離れて居た家に獨り歸つて居ると云ふ事が、既に一種妙な心持を起させる。凡ての物が其折の儘であるに關はらず、皆見馴れぬ物の樣な氣がする、例の如く柱に鏡が懸けてある、ア、よくあれで髪を撫で附けたと可笑しく思ひ乍ら前に立つと、丸髷に結つた我顏が笑つて居る、それが一寸他人の顏の樣にも見える

かと思ふと珍らしげに柱時計の振子を見詰める、右から左へ、左から右へ、單調に動いて行くのが面白い
——其時ふと子供の時の心持が我胸に浮んだ、而も稻妻の樣に消えて行つて再び想ひ出さうとしても想出せなんだ。嫁たのは昨日の樣に思つて居る、而し、夫とは昔から一緒に居た樣な氣がして其以前の事を考へやうとすると不思議に頭が亂れて纒つて心に浮べる事が出來ぬ、何故だらう？　實を云へば嫁ぐ前は、母や妹と離れたらどんなに辛いだらうと想像して居た。けれ共、其二三日は兎に角、暫く經つと案じた程でもなく、時としては母と別るゝ我悲の餘りに淡く少いのに自分ながら驚いた事もある。

○

忘れもせぬ其年の六月であつた、毎日々々雨が降り續く此地に有り勝な陰鬱な日が續いた。急に蒸し熱い息の窒る樣な日があると思ふと羽織を重ねゝばならぬ樣な日が來る、私はふと風邪を引いた。何も食べたくない食べると時々吐げたりする。醫者に診てもらうと、何の事もないと云ひつゝも種々の事迄尋ねる。が別にそれに氣も止めずに居た。勿論そんな事とは夢にも知らなかつたのである。

其樣子を婆さんが見て、意味ありげな眼付をして

『實はもう少しお早いだらうと思つて居りましたのに……と云つた。

『當然の事だわ、隱す事がある物か！　こんな事を幾度も考へて見た、けれ共何だか恥かしい、恥しがる理はないんだが恥しい、未だ外に見える迄には行かぬが妙に氣が引けて氣が引けて買物一ッにも出ない。

無論夫には話さなんだ、

今迄處女時代に、お腹の大きい人を見ると無暗に可笑しかつた、

「マア、體裁の惡い！」

「赤、生むんだよ、速射砲みたいに」なぞと甚だ無造作に笑つたものを。一時に羞しい目をするのならば未だしも五ケ月も六ケ月も待ち、苦しむのは耐へられない思がせられる、他人が見た時どんな顏をするだら？なぞと種々の事を想像して見る。

若し確にさうだとすれば！？　うつかりと其後の事が思に浮んで來る。これ迄母となると云ふ事は常々羨みもし他人が可愛い〳〵赤ん坊を抱いてるのを見ると、アア欲しいと一寸思ふた。而しそれに伴ふ事件等は毛頭考に無かつた。而し最早それと定つてみると。そして何だか歡樂の幕が眼の前に切落され、冷たい或物がひし〳〵と我身に觸れる樣な微な悲が心の中に湧くのを覺えた。

でも一方にはまた包む事の出來ぬ悅があつて、暇があれば　ぼんやりと生れぬ先の子の面影を描いて見る、よく若い母親が餘り美しくもない子をかき抱いて、頰に唇をつけたり、可愛ゆくて耐らぬ樣振をするのを見たが自分にもあんな母の愛情が出來て來るかしらと心許ない。男なれば斯う。女なれば斯う。先の先の事迄考へて着せる着物の柄、模樣等を恐ろしく明に想像する。それにしても之を如何して夫に告げやうと氣を揉んだ、云へば悅ぶに決つて居る。が此事計には何かお互に隔があつて告げ難い樣な氣がする、――

而し其人は疾くに知つて居た。

私達の家の横には二反程も空地があつて其處へ近所の子供がよく來て遊んで居た、それが其頃貸家を建てるので毎日朝早くからカン〳〵と槌の音で耳も痛い程であつたが、一月と經ぬ間にズーと棟が列んで終つた。或朝夫が緣側に出て「斯う建て充つては移轉さなきやならぬ」と獨言の樣に云ふので、何故と尋ねると笑ひ乍ら一寸私を眺めて

「何故つて子供が出來たつて遊ばす處も無いぢやないか」と云ふ。私は急に變な氣持になつて其人の膝に縋

つて思はず泣いた——勿論それと知りつゝ今迄默つて居た夫が恨めしくもあり嬉しくもあつた。而し後で考へて何故あの涙がこぼれたか自分でも不思議で分らない。

○

其後醫師に診察してもらつた時はもう胎兒の心臟の鼓動さへ聽えるとの事で、注意して居るとそれが一日一日膨れて行く樣にも思はれ、ある時は微な胎動がある。それがある毎に私は腹の中で小さな物が四肢を張り動かして居る樣を歴々と描いて何となく、物恐ろしい感を起した。

其頃迄は別に『產』と云ふ事に就て深くも考へなんだがそろ〳〵深案じを初めた。時々眞夜中に眼が寤めて眠らうと悶く程眼が冴える。仕方なしに眼を開いてじッとして居ると暗闇の中に種々の物の形が現れてくる。



『私は產で死ぬかも知れない！』ふとこんな事を考へる。と同時に水を浴びた樣に思はず身慄をする。私の知人の中でも產褥で死んだ人が二人ある——馬鹿な。そんな事がある物か。と我と我を嘲り乍ら强て眠に就かうとしても一間隔てゝ寢て居る夫の鼾が耳について眠られぬ。

『何故あんなによく寢られるのだらう！』と腹が立つて腹が立つて枕紙にしがみ付き心ゆく計り泣きたい心持になる、而しそんな考も夜が明けると最後跡もなく

消えゆくので、後で、餘程私はどうかして居ると思ふのが常であつた。而し心細いのは夜も晝も變りなく、兎に角誰か側に居て欲しい。が、こんな事を他人に云はう物ならそれこそ氣儘な女と云はれるに定つてるから一言も口外せずじッと辛抱して居た。

「犬や猫を御覧」槇の婆さんは何時もかう云ふ「犬や猫は一言も聲も立てないで子を產んで、お負に後仕末迄する」。今こそ此お婆さんは皺だらけだが九人も子を生み而も皆々安產であつたのが自慢で、何でも一人の子は臼挽して居て少し變だなと思ふと直生れた、亦一人は草刈をして居て生んだ、無論產婆は居ぬので自分で取り上をした。

「產なんか……（斯う云ふのが此女の癖で）……私を見なされ、生んだ次の日から襁褓の洗濯をした」と如何にも我身の不養生を自慢げに、平生私の恐がるのを譏る樣な口吻をした。

よく懷妊になつて夫の愛情の變つたと云ふ話を聽いてたからでもあらうが、幾ら愼しまうと思つても、つひ、夫の仕向を細かく注意して時々其心を疑つたりする。勿論夫はそんな人ではなかつた。けれ共女の身にして我姿の變るのは決して快よい物でない、それ以來、外へ出ぬ加減でもあらうが顏色が惡くなつた、眼が大きく、思ひなしか其邊りに黑い斑點が出來た樣に思ふ――

「心配しないでも子さへ產めば故の通になるよ」と優しく母が慰めて與れたが、而し一生中の私の時代は最早過ぎ去つたと色々悲しい事を聯想した事もあつた、平生は夫は極く親切な人であるが時々ふと怒る事がある、何時かも婆さんが急用で里へ歸つた晩、知人を見送らねばならぬとて遲くから出かけ樣とする、人が心細くて耐らぬのに今晩丈はと云ふのに、そんな勝手な事が出來る物かと、慳貪に出て行つて終う、無論無理な願である、而し少しは此方の心持も察して欲しかつた。男は子を生まないんだから平氣で居られるのだらうがそれにしても其態度が餘に頼なく物足らぬ、――

種々な事を考へると我體は自由にならぬし、氣がムシャクシャして來る。こんな時に限つて　友達の夫の方々を思ひ較べ、其奥様に對して親切なのを羨しく思ふ、殊に母など、我怒を漏らす人が居る時は、心にもなく

「何故私はこんな處へ嫁たらう?!」と云つて見る、そして「お前は何と云ふ事を云ふ」と吃驚するのを見て幾分か我心ゆくのを覺えた。

私は常々こんな事を考へて居る。今でこそ此處へ嫁る爲に大きくなり、亦其爲に、可也あつた結婚の申込をも斷はつた事になつて居るが元々深い理由もなく定つた其緣談が若し他の人と成立つて居たらどうだらう?　私の半生の運命は全く別の物であつたかも知れない、私は常々、其結果を人事の様にして、そつと見たくも思ふ。——

まあ、こんな工合にある時は堪へられぬ程心細くなる。かと思ふと今迄の事が皆可笑しくなる程心丈夫になる事もある。其事を醫師に話すとそれは神經衰弱でこんな場合にあり勝な事と話して呉れた。

斯る有様で八月の初から母に來てもらう事に賴んだが、自分が生死の境の様に心配し、もう生れるか生れるかと思つて居るに關らず、憎らしい程其人は落着き拂つて知らぬ顏をして居る、けれ共それが亦心丈夫なので、根掘り葉掘り母の經驗を尋ね、それに依つて產のどんな物であるかを强て想像せうと努めた。

而し幸に私の神經衰弱も其内に治り、早く我子の顏を見たいと思つたり、亦思ひ切つて大きくなつたのが餘りに不體裁なので前垂を掛けたら、軒端の暖簾の様にフワリと前へ下るのに大笑をした事もあつた。

○

私は今若き母となつて居る。

今から考へると產の前に何故あんなに心配したかと不思議な位である。ア丶其處に面白い話がある。——

其頃母は病氣の爲來ないで父が代つて來て居たが、其場になると、すつくり周章て丶終つた、「未だ〳〵」と云つて落着いてる產婆の處へ後から要りもせぬ道具を

運んで來たり、又產婆が蒼蠅がる程幾度も〳〵「別條ありませんか」と心配氣に尋ねる、――而し私の方はそれと見て笑ひ出す程樂では無かつた。

疲勞て綿の樣になつて眠つた眠からふと醒めて側を見ると白い蒲團に小さい者が寢かせてある、それを見ると今迄覺えた事のない母の愛が一時に總身に溢れる樣に感じた。

『ジッとして被入しやい』產婆が後の方で云ふ。

「女ですか」と小さい聲で橫に居る父にきくと

「大功名、初てが男だよ」と嬉し想に云ふ、暫くして夫も入つて來て

『よく生んだ、男だ』隨分皆良い挨拶。犬が子を生んだ時と同じ樣な調子だと私は獨り可笑しく思つた。

幸にして產後の肥立もよかつた。初の內は養生なぞと云つて居たが其內に用事の爲に追ひまくられて平生の樣に立働く事となる、それによく子を持つ迄の理想として、お襁褓は必ず白木綿にせう等と考へて居たが、其當時毎日々々雨が續いて、白木綿處か、古い浴衣迄引出して皆それに使ふ。恰度美しくない滿艦飾の樣に、軒にも緣にもお襁褓が飜つて居る、それでも足らぬ時は嫌な香を忍んで鷄籠の下に火を置いてそれで乾した。衞生も何も云つて居られぬ。

今迄は毎日夫の歸る時刻には其處等を綺麗に片附けて置いたが此頃はそれも等閑勝になる。其處へ其人は歸つて來ても別に苦い顏もせず『讓二はどうだね』と、云ひつゝ上衣を脫いだ儘寢かせた子の側に行く、そして生れて間もない子を、『ア、笑つて居る！』なぞと抱き上げたりする。こんな時に限り抱かれた子は泣き出すので、私が笑ふと夫も離て若き父親の樣に笑ふのが常であつた。

斯くして私達は今迄味ひ知らぬ、實のある樂が出來た、何時迄も何時迄もそれが續き行くのを心から願ふのである。

（完）


日曜日

會社員の妻となつて三年目の年のくれ

榮子

月日のたつのは早いもの、花に醉ふた人も月に泣いた人も、ひとしく心せきたつ年のくれを迎ふることに成りました。

一年中秋ほど思ひ出の多い時は無いと云ひますが、妾のやうに都會に生れて都會に住んで居るものは、しみ〴〵と蟲の音を聞いたり、砧の音に夢を破ぶらるゝやうなこともなく、朝から晩まで轟々たるとでも云ふのでせうか、さう〴〵しい人馬の響や、塵煙の中に包まれて居るので、只冷氣を催すばかりに秋は爭はれぬもの位に思ふだけで、無風流とか何とかの譏を受けませうけれど、實際左程秋の淋しい感に打たれたことが有りませんから、先生から歌題などを戴いても昔の人の想を其の儘拜借して、さて秋も昔はかくぞありけるかと怪しむ程です。しかし年のくれに成りますと何時も今更のやうに驚かれるので、忙しい中にも色々の感が胸に浮んで、時には少女時代の愉快で有つたことまで想ひ起すことが有つて、お友達の身の上などもそれからそれとうつし繪のやうに思ひ浮ぶにつけて、羨しいお方もあれば同情に耐えぬお方も少なく有りませんので、ふと自



分の身の上を思ふと夢では無いかと思はるゝことも有ります。

妾の實家は巨萬の身代があると云ふ譯でも有りませんが、食ふに事を缺くやうなこともなく、それに兄弟はたくさん有りますけれど、皆男ばかり女と云つたら妾一人ですから、隨分氣儘に育てられたもので、兄などゝ何かいさかひが起ると、いつも兄が叱られ、弟にでも無理を云はないほどで有つたから、まあ〳〵甘る加減は大抵知れたもので、女學校を卒業してからも、世の中は何んなものであるかと云ふことも知らず、うか〳〵と又二三年をすごしたものです。

緣談もとき〴〵起つて來ましたけれど、只何となく他家へ行くのが厭で、何時も何の彼のと斷つて許り居たのです。

さうかうするうちに二十と云ふ年になつて、お友達も大方は緣付かれたので、兩親は色々と說き勸めますので、とう〳〵今の家は夫婦差向ひで、ことに主人の親兄弟は遠い國に居らるゝのだから、これほど氣樂なところは無いと云ふのと、會社員は收入も多いと云ふので、一昨年の夏話が纏つて、その十月にいよ〳〵結婚することに成つたのです。

結婚の準備についても、いろ〳〵兩親に心配をかけましたのですが、さあいよ〳〵又其の日になると、俄に厭な氣が仕て、いつそ破談にして貰はう、それも出來れば何處かに隱くれやうかなどと思ふ心が起つたのです、けれどまさか其ら氣儘ものだ

からつて、そんなことの出來やう筈も有りませんが、此の日生れて初めて淋しいと云ふことを知りました。

おめでたうなど〻云つて祝ひに來て呉れる人達まで、何だかうらめしいやうに思はれましたが、時刻が來て仲人や家のものと共に家を出てからは何とも云へぬ氣が仕ました。別に今の主人を嫌ひと思つたのでも有りませんのに、不思議と胸がどきづいて、左樣只恐ろしい氣が仕たとでも云ひませうか、今も其の時の心を形容するに適當な言葉を知りませんから。よく人樣が結婚の夜のことなど申されますが、妾は蓮葉もので有つたに似合はず、全く夢中で何が何やら。

それでも翌日からは何となう、心が落附いて二日三日とたつうちには主人の心も解つて、大に居ごゝろが宜いやうに成りました。

それに主人は非常に妾を大事に仕て呉れましたので、まあ今から考へると阿房らしう成りますけれど、たとはゞ他家へお客にでも來て居る氣で、この年を送くつて仕舞つて、新に迎へたお正月は誠に嬉しいお正月でした。

主人が會社へ行つて居る間は何だか淋しい氣が仕て、お歸りに成ると、おそばを離れるのが嫌で、御友人方がお出でに成つて長座などすると腹が立つて仕方が有りませんでした。このやうにお芝居にも花見にも始終一緒にまゐつては笑ひ暮らして、



家の會計などには無頓着で居たのですが、何でも八月の五六日頃で有つたかと思ふのです、髭のむしやくしやと生えた眼つきの惡い男が留守中に、主人を尋ねて來ましたから、恐々留守のよしを申しますと、にや〱笑つて出て行きました氣味惡さに、主人にもあんなお友達が有るのか知らと、お歸りに成ると、かう〱でしたと申しましたら、主人は顔色をかへて、何にも云はなかつたかと聞きますから、はい何にもと云ひますと、よう〱落付いたらしいを見て、不思議に耐えられませんから、あの方は御友人？と聞きますと、ナニ時々會社へ出入して居る商人だよと何氣なう云はれましたが、その夕は御飯もそこ〱にして珍らしくも獨外出しました。

お歸りに成つたのは十二時過ぎでしたらう、相變らず優しう云つて下さるもの〻、何となう浮かぬやうなのに心配して、何處か惡いのぢや有りませんかとお尋ね申したけれども、いやと許り、初めて不愉快の夜をすぐしました、と云ふのは何うも主人の心には秘密があるらしいと氣付いたから、その秘密を妻たる妾に打ち明けないのが不滿で耐らなかつたのです。

翌朝も例のやうに共に向ひ膳に坐つて食事をいたしましたけれど、何だか氣が捐けて仕方が有りませんでしたが、主人も又早々にして會社へ行きました。

主人が出て行かれてからは、妾は哀しう成つて涙がほろ〱

と零れました、なぜだか自分にも解りませんけれど、只々哀しうて仕方がなかつたのです。

その日から主人と妾との間には、氣の精かも知りませんけれど、薄紙のやうな隔が出來たやうに思ひました、實際主人の擧動も變つたに違ひ有りませんでした。

それでも其の年の秋も大したことなく打過ぎましたが、冬の初がたから、會社の方が忙しいからつて夜分に歸られることが度々あつて、遲く歸られた時は、いつもお酒をめし上がつておいでなさいまして、今までに無く荒いお言葉を遣はるゝやうに成りました。

男心と秋の空とか申しますが、ほんとに男ほど當に成らないものは無いと思ふにつけて、實家へ引き取りたい氣が仕ました。

が、妾は今は實家へも歸られない身に成つて居るのに氣付いた時の悲しさ、妾は既に姙娠して居たのです。

こゝに夫婦間のごたごたをならべるのは本意で有りませんから、それは拔きとして一切申しませんが、兎に角お互に面白からぬ日を送つて居るうちに、何時か十二月と成つたのですが、妾の實家にお祝ひ事があつて手傳ひに行つて、燈點し頃に歸りますと、誰か來客がある樣子ですから、そつと裏へ廻つて見ますと、しきりに其の客が荒々しい言葉をつかつて居ますので、執達吏があつては成らぬと、わざと戸口に立つて、聞くとは無しに聞いて驚いたのは、客は確にいつか來た男で、高利貸らしいのです。



よろしいツ、もう君のやうな男の云ふことは當にならないから、明日は差押を斷行しませう、細君が何う仕たと云ふのです、やはり君と同じ穴の狐に違ひない、夫婦して踏み倒さうと仕て居るのだらうが、左うは行きませんよ、僕の方はこれが商賣だからね、御夫婦の愉快費に資本まで卷き上げられて居た日には、人間の干乾が出來るからね、だが君も人間なら能く考へて見るが宜い、今日斯う細君を貰つて居るのは誰のお陰だと思つて居るのだ、皆僕が引受けて結婚費まで貸して遣つたからぢや無いか、それに其の後だつて時々の無心も當座は誰れも有る慣ひだと心よく立て換へて上げたものだよ、元利合計五百圓と云ふ金を倒さうとは恩知らずと云はうか、殆んど云ひやうが無い、まだそれに其のかたを附けようともせず、度々の催促も知らぬ面の半兵衛をきめこんで、聞けば此頃は茶屋酒などに舌鼓を打つて居るさうだが、ちとは此方の身にも成つて見て貰らひたい、いや最う君の云ひ譯は幾度聞いても同じ事だ、名譽が何ですつて、あまり名譽なんて云はれた柄でも有りますまいぢや無いか、明日の晝頃に執達吏を遣すからね、其のつもりで居給へ。

かく云ひ棄てゝ、がら〳〵と戸を蹴たつるやうに、主人が泣かぬばかりに頼んで居るのも聞き入れず、其の人は歸つて仕舞つたので、妾は悲しさに前後も忘れて、家に入ると泣きくづれましたので、主人は驚くり仕たのでせう、なぜ立聞きなどを仕て居たと非常に立腹してまた外出しようと仕ました。

これが今までゝ有つたら、妾は捨て置いたでせう、けれど此頃の主人の擧動の變つて居た原因は決して妾に厭氣がさしたのではなく、今までは夢にも思ひ浮ばなんだ借金のために自棄になつて居られたので有るかと思ふと、いとほしさに妾は死力をこめて、主人を引きとめようと仕ましたが、何う仕ても聞きませんので途方にくれました、その時ふと氣がついたので、妾は自分の腹へ無理に主人の手を引き寄せて、この子は何とも思ひませんか、妾に心配かけまいと今まで隱くし立て仕て下さつたのは却つてうらめしい、それにその金も妾ゆゑに出來たものと聞いては尚更のこと、きつと妾が何うか仕ませうから、この子が可愛いと思ふなら、氣を靜めて下さいと、泣きながら手を合はして頼みますと、さすがに子と云ふ言葉に氣も折れたと見え、妾の手を堅く執つて何にも云はず泣かれました、妾も共に泣きましたが、この時ほど又うれしう思つたことは有りません。

翌日、妾は實家へ行つて金子を調達して來たので、主人に早



速高利貸の宅へ行つて、金を返して來なさいと云ふと、いやわざ〳〵行くには及ばない、きつと又出て來るに違ひないと云つてる所へ、案のぢやう遣つて來たので、夫婦ともに厭味ばかり云つて、たゝき附けんばかりに仕て返して遣つた心地よさ、それよりは妾は再び主人の暖な心に返つたのを樂しみに大々的此の後は儉約をすることに仕ました、無論今までのやうに主人まかせにせず、自分の家の切り盛りをすることに仕ましたが、なか〳〵六ヶ敷ものだと云ふことがだん〳〵解るにつれても、自ら又樂しみも生じて來ました。

四月の末に秀雄が生れてからは、一層家のうちが賑に成つて、なにごとをするにも苦にならず、其の後主人は酒どころか煙草まで止めて仕舞ひまして、朝も晩も秀雄のことばかり、心が愉快になると、會社の事務まで克くはかどるやうになつて、從つて重役の氣受けも非常に善いらしく、年末の賞與には破格の沙汰で、五百圓くれることに重役會議で決議されて居るから、それは其の儘手附けずに去年の金を返さうぢや無いかと云つて居なさる、實家にはそんな金など當には仕て居ないだらうけれど、さうと聞いたら嘸兩親が歡ぶことであらうと、つひ昨日實家へ行つたから話して置いたやうなことでした。

このくれの氣安さに妾はます〳〵勤儉をまもつて四年目五年目と年を加ふることに、主人の心を安んずるやうに仕たいと思つて居ます、よきに連れ惡しきに連れ、思ひ出の多いは年のくれですもの。



妻となつた私の經驗

しぐれ女

新奥樣の幸福なる生活と申されるからには、私だつてまあ奥樣とよばれる身分ですわ。笑つちやいけませんよ、之でも夫は高等官何等とやら、それはもう尤も低い等級ですけれど、結婚したからにはやはり新奥樣ぢやありませんか。それはね、奥樣と申上るのは、流行の服物にうきみをやつし、交際社會の花とよばるゝきはの方ばかりと思召す方には、何ら申上ませぬ。けれども表には立派な冠木門に、金紋付ゴム輪の自用車でも飾つて、書生だの食客だのと四五人もかゝへ女中の二三人も使つてらつしやる立派な紳士の家庭さへも、内輪では火の車だと申す世の中ですもの。假令子供を負つておねぎ五厘、お豆腐一錢と、自分で買ひにいつても期限がきれて人樣に顏赤らめてお斷申上ねばならぬ借金といふものはなく、細く小さいながらにも人樣と對等の權利を以て生活してゆかれる身は、いばつたものですよ。

あゝ幸福なる生活――此詞は聞いた丈でもいゝ氣持がしますのに、自分の境遇も此内に入るのだと思ふ其快感は――えゝうぬぼれ――ほんに私はうぬぼれかもしれませぬ。それはねあなた虚榮にみちた令孃からはあはれにも見えませう。また黄金に眼がくらんで四十も五十も年のちがつた花婿樣をお擇びになる方から見れば、私等は或は馬鹿かもしれませぬ。

けれど〳〵此小さい我家にあるもの、一として私等夫婦の努力でないものはなく、床の軸から臺所の雜品まで、悉く思ひ出の種ならぬはない、此清いたのしい生活はどうして大厦高樓におすまゐになる方々の夢にも

味ひ得られるものではありませぬ、一寸手ちかに見えて居るあの釜のふたでもさうですよ。思ひ出しますと丁度新婚の當時でした夫と共に手を携へて散歩の歸るさ縁日をひやかして、まだ普通の釜を買ふだけの力がないから、土釜ですまして置かうと、瀬戸物やで買つた其土釜を持つて、あのふたを買ひにゆきましたの。すると其店の老人がお安いそまつなもの斗り見せるから、夫の君が今少し上等をと仰しやつた所が其老人はさも不思議さうに私共の顏を眺めて、上等になりますとあなたのお持になつてる釜よりもお直段がはりますよといふのですもの、ほんとに失禮な老人でしたわ。いつ迄も此境遇で居ないから、何もない家具を求めるのは破れず、壊れぬものは勉めて上等の品を買ふようにとの夫の主義なので、成程其時にはお釜の倍もお直段は致したが、此歳月明暮にみがゝれてあのやうにきれいになつて居るのです、時折臺所で食事遊ばす夫の君も、あれはおれが買つた品だねと仰しやる其詞のふしにはいひしれぬ懷舊と滿足の念とがほの見えるのもうれしう感じます、此通り人様には何の價値もない品でも私共にはなつかしい戀しい紀念物ですもの、朝に夕に見るものふるゝもの一としてたのしうないものはありませぬ。

△新婚當時の私の生活

私が當家へ嫁いでまゐりました時には、夫はまだ下宿屋の二階にすまつて居つて、本箱と机と書物の外家具や世帶道具とては何一つありませんでした、さうしてお金は財布の底をはたいて僅かに十五圓と其外には勉學に費した負債が二百圓(尤も之は或會の貸費生としてのもので無利子でした)之が財產でした、之丈と申せばまあ可愛想に何でそれが幸福と仰しやるでせうけれども、私の夫は親や兄には數萬の財產のあるにも關はらず、中學卒業後は獨立と稱して其助けをうけぬ丈の勇氣と忍耐とをもつて居ました、又其借錢を返却しますのには萬やむを得ぬ交際の外、遊里に足をふみ入れざる丈の品性と、是等の苦を共に分つべき妻に對して滿腔の同情にみちて居ました、此夫の人格は何の經驗もない私にどんなに刺戟を

與へましたらうといふもの丶、きのふまで慈愛あふる丶父母の膝下に不自由といふものを知らずに暮らし來つた妙齡の處女が、蜜のやうに甘い新婚のたのしい夢のまださめやらぬ間に一家の主婦てふ立派な美名の下に此尤も貧しい内政を整理すべき重い〱責任を與へられ人生のはれのぶたいに出たのですものほんに此時ばかりは生れて初めて金錢の價を感じました。さうしてまづ何から手をつけてよいやらとほと〱まよひましたが、遠き故郷にゐます夫の母君は我子の家庭をかまふるとき丶其慈愛にみてる御心から、病體をおして來てやらうと迄仰せられたさうですが、例の夫の氣象自分達のことは自分でしますとてお斷りなされたとやら。あ丶それ程迄に私を力あるものと思つて下さるのかしら其厚意に對しても立派な我家の基を作らなければすまないと存じました、其時私は思ひましたね奥樣といふ詞はつまり働くといふことでないかしらと、第一きのふ迄のお孃樣のやうにぼんやりして居ることは出來ませぬ、それは舊家の規則も正しい舅姑も丈夫で同棲し家風といふものがきちんと出來て居る家ならば兎に角、之から自分達で以て何もかも始めて作り出しさうして文明の家庭として遜色のないようにしようと思へば中々寸時も油斷は出來ませぬ、即朝五時には必らず起きて手ばやく身じまいをし、朝食の準備にかかります、此起きるのが又中々で、殊に暖かい國に生れた私共があの東京の冬の寒い朝霜柱をざし〱ふんで氷で倍にもふとくなつたつるべで水ぐみ上げる其つらさすゐ分でした暖かい御飯をたいて夫を起しまゐらせ、出勤を見送りますとすぐたすき十字に室内の掃除庭の草ひき。らんぷの手入、炭取烟草盆と日々になす丈のことをと丶のへ、それから買物に出掛るのです市にゆけば新らしい安い品が得られるからで、材料を買つてからは洗濯やつぎもの、殊に永らく書生生活の下宿ずまゐであつた丈、あちらの行李からもこちらの鞄からもどろ〱に汚れたものやほころびたものなどごろ〱と出てまゐります、其整理や靴下のあみ直し、手ぶくろのつくろひなどは殆ど毎日か丶しませぬ、カ

ラとカフスの外は成べく洗濯屋に出さぬように。さうしてお天氣のいゝ日でも、宅ではつまがけのあしだをはきました、之は水で足袋がぬれぬのと、はきかへれば永くもつからでいつかも私が毛布の洗濯をしようと思つてたらいに入れて足でふんで居る時に里の弟が見えまして、まあ姉さん自分の家になるとさうも變るものですかねつて、ひやかすのですもの、けれど全くですよ里に居る時に此十分の一でも働いたならば御兩親はどんなにおよろこびになつたで



せうと時々思ひました、また火鉢の火だつても使つてしまへば消すとかうづめるとか又よそ様からお菓子など到來しますとそれが暫時置かれるものか置かれないものかをよくしらべて、さうしてそれ〴〵お義理に使ふようにと心掛ます、かういふことは誰にも教はらないのですけれど、つまり其境遇が教へてくれるのですね、私は此ようにして、其十五圓を成べく有用に、かつまた、月末俸給をいたゞくまでの間、不足をつげぬようにと注意しました、それでも夫

は自分の家をもつて不自由ながらも今迄にない快感を覺えた、終日の勞れも宅に歸れば一時に忘れはてるといつてくれました、かういふ風にどうかかうかまあ一家といふものを作りまして、其翌月には吸物わんを求め次の月には膳を求め次の月には洋食具を求めるといふ風にして、漸う一通りのものに不自由のない丈の家具を求めました時に、不幸にも夫が病床の人となりましたので、しみ〴〵と保險の必要を感じまして、全快後早速千圓の養老保險に加入し、永遠の資にあてましたのです、尤も毎月掛ではありますが。それから午後の三時になりますと夕食の準備にかゝります、之がまた尤も樂しい私の務でけふは何の御馳走をしてよろこばせようかしらと、毎日其種類を研究します、一日の間公の務につかれてへと〳〵になつて。歸つてらつしやるのですから、此時は既に湯を使ひお化粧もして今迄ひとりで働いた姿を夢にも見せず、終日ぶら〳〵遊んで居つてさうして淋しくつてたまらなかつたといふような顏をして、快活に夫を迎へます、また日曜日とか休日とかには、私も共に遊び、共に語りて夫の在宅の折には、決して仕事は致しませぬから、夫は自分の不在中にあれ丈働いて居るといふことは恐らく存じますまい。

△むづかしい世渡の術

而し宅では此樣に働きましても、人樣と御交際申上る時にはやはりおとなしい箸よりも重いものは、もちませぬといふような顏をしてすまあして居らねばならぬのですもの、ずゐ分六かしいでせう、さうして又其四季の着物などの樣なものでも中々節約は出來ませぬ、今の世の中を無事に渡つてゆかうと思へば身分以上此等のことを派出にもせねばならぬのです、つまり此呼吸が大切で、まあよくお氣のつく奥樣といはれるのも高慢ないやなやつと噂せられるのも素より物のいひ樣にもよりますけれど、まづ八分迄は是等のことにあるのでせう、一寸近邊の子供へだつても、さうですものね、かべに字をかいてはいけない、門にどろをぬつてはいけないと申すよりも、來客の殘りのお菓子を

二つ三つ與へて御覧なさい決していたづらをするものではありません、また其親にしてもさうでせう、子供に物を與へられておこる親はないでせうし、殊に人を射ようと思へばまづ馬を射よとか、自分の子供を可愛がつてくれる人を悪るく思ふ筈はないのですもの、私はいつか女學世界の増刊に子のない妻の悲しい日記といふのを見ましたが、子供がないからつてあんなに悲しむにもあたらないと思ひますわ、時々はないはうが都合のいゝこともありませうよ、どんなに十分にしても子供はやはり眼前の利につきますからね、上官の宅を訪問して、其子供にもてるお菓子箱を與へて御覧なさい、奥様はお口でいふことが出來ないから、いろいろな眼や顔でさとさうと遊ばすけれど、日頃の敎訓も此瞬間には何の効もありませぬ、私は内心でをかしい時がありますよ、また返さなければならぬ人の物をも終に其まゝになつて、御主人のお手先のにぶることもありませうしね。それあ子供だつてないよりはある方がいゝでせう、併しはんもんをして出來るならば兎も角も、之ばかりは授かり物で人の力でどうすることも出來ないのですから、其煩悶をする間に、自分の修養でもつんで、子のない代りに他の物で夫々慰藉を與へようと注意すればいゝでせう、そらあなた人間は不足を申せばきりがありませんからね、其境遇に滿足するのが一等です、殊に一家の主婦はどんな場合にもいつも快活でなければいけないと思ひますわ、上流社會ならばいざしらず、中流で今時幸福な奥様にならうと思へば人の見ない所で十分働かねばなりません。だから時によつては下女の代にもなりませうし馬丁にもなり、書生にもなり、さうして上表では上品なおとなしい、奥様とならねばなりませぬ、併し眞におとなしい上品にばかりして居つては、さうして此生活難のはげしい世に處して夫に後顧の憂なからしむる丈の立派な主婦となれませうか。

△私と反對の奥様

けれどもまた時々訪問される同僚の奥様にこの樣な方があります、其旦那樣も主人と同じ地位だから、定め

こ御同様の生活だらうと思つてますのに、之はまたどうしたものか、お目にかゝる度毎に流行の品をとりかへ給ふ其おなり、お輿入の時にさへ目につかなかつた寶石のリングが右にも左にもかゞやいて、白魚のやうなお手いと美はしくお内のことは皆女中におまかせで、すましていらつしやる、さうして私に奥様なせ女中をお使ひになりませぬ、私共はもうそんなお三どんなんかまつ平、そんな約束で嫁いで來たのぢやないのですもの、水仕事で手などあ



れますと、同窓會にいつたつて肩身がせまう御座んすよ、女は何といふても身姿が第一ですからね、衣服だつてどし／＼夫にねだるのですよ。春木だつてさうでせう、私が木綿着のぼろぼろした下女のやうな姿をしてるよりも、美しうきれいにしてる方がいゝでせうからねつて、けれど私は我々の境遇で生活費を除けばどうして其樣な餘裕がと申せば「奥様あなたそりあんまり正直すぎますよ、商人だつてそこはぬけめはありませんからね、我々の地位を

信用してどれ丈でも貸してくれますよ、中々お金をもつてから貰はうなど〻思つた日には、いつの事やら分りませぬから、もう一つ物をとつて月に僅かづゝ拂つてやつて、それを返してしまへば、又次のものをとるといふ風に致すのですよ、小間物でも呉服でも、今時はあなた月賦拂といふ重寶なものがありますもの、奥樣もちとさう遊ばしてはと仰しやる。げに定まれる俸給で同じ身分の方が、よくもまあと不思議に思つた私はやぽでした。ほんとに商人てどこ迄考へるのでせう、夫の地位を利用してめつたにたふされる憂がないからと、虚榮にみちた奥樣の前へほしさうなものを並べるのです、私はいや〱出來ない境遇に無理なくめんしてまで、そんな贅澤をせずとも、時節がくれば苦痛なしに求められるであらう、又よしや終生求められなくとも、それが私の運命なのだからその樣なことはしたくないと思ひました。そりやあ誰だつて世間から　美しい奥樣とあがめられ、舊友の羨望のまとゝなるのは淺ましい女の心では心地よいかもしれません。けれど其裏面には恐ろしいやりくりをせねばならず、おしまいには清らかなる夫の心をもいやしい金錢の爲にくもらさねばならぬとも限りませぬもの、假令自分はどんな立派なスタイルを得るにせよ、私は生涯そんな婦人になりたくはありませぬ、盆や暮に出入の商人から持てくる僅かのお印までもどし〱と返してやつて、公務をあづかる夫の心に一點の憂も遠慮もなく、十分自信を行はれるようにして上たい、あそこの夫婦は兩人とも變屈だから、袖の下がきかず、六ケしくつて困るとは夫の役所に出入する人の講評だそうですが、私は此詞をきいて一方ならず滿足に感じました。

△戰役後

夫の部下の奥樣達訪問さるゝ毎にまあ奥樣なぞはほんとうにおしあはせですね、旦那樣はおやさしくつてお氣楽で澤山な年金や俸給をおとりなすつで毎日お化粧して遊んでお出でになつたらばいかゞですねと羨まる、ほんに子供もないのに二人も女中を使つてかうして居る處を見れば人樣からは羨まれるのも無理はな

い、けれど此幸福といふものはさうそこらに落ちてあるものではありませぬ、過去に於て私共の作りあげた僅のものと戰役に際し夫の生命をとして得た多くの俸給と貴き勳章と其にたまはつた年金とは、最初の財産十五圓の幾百倍となつて、今は尤もゆたかに、氣樂に生活の出來る身分になりましたのです、併し私の感ずる幸福は此物質上の富や、名譽の地位ではありませぬ、日に進み月に開けゆく文明の世の人として、夫も私も一日〳〵と進歩し德をみがゝうとはげまされ、燈火したしむ秋の夕のたのしみは晩餐の席に夫が一合の清酒に陶然として靄々たる和氣堂にみちたるの時、あのかまのふた、即過去の苦しい思ひ出を語るの時であります。

さはれ世の中は三日見ぬ間の櫻かなとかやげにうつり變りの早いことときのふまで、位人臣をきはめた立派な方さへも、一朝ハルビンの變にあひたまひては、また如何ともすることは出來ませぬ、殊に官海に浮ぶ身は何時の浮沈が別りませぬから、今日とても決して油斷がなりませぬ、榮ゆる今もやがて衰へる時のあるのを頭に考へて、心をゆるさず其準備せなければなりますまい、とはいふものゝ靑春再び來らぬと等しく、此幸福なる境遇に居てさう沈んで居つては終生とり返しがつきませぬから、心の奥にちやんとしまりをつけて置いてさうしてやはり世の流行につれ、望まれるならば婦人界の立物ともなりませう、又人様の羨望のまとゝなる丈の身なりもいたしませうが、よしや殊更らしくせずとも、觀櫻會や觀菊の御宴のをり、やんごとなきあたりより夫と連名のお召狀など頂戴いたします時には、まあ之が十五圓よりない人に嫁いて來た身なのかしらと自分ながら不思議に思はれてひとりほゝゑまれることがあります。



東京市街雜觀——牛込見附より見たる神樂坂



境遇の悲慘に泣く文士の妻

眞琴女

夫は昨日の朝一人でぶらりとお外出になつた限り、今朝になつても未だお歸宅にならない。又例の……と思ふと、もう口惜しくつて口惜しくつて、涙は知らずしらず枕紙を濕した。

夫はどうして斯う始終外出勝になさるのであらう。私は無敎育の上に持つて生れた不束ゆゑ、それはお氣に召さない箇所も數々あらう。けれども、それならそれと、明らさまに惡い箇所を指してお敎へ下されば、どんなにも直してお氣に召すやうに致しませう。それを夫は、朝から御酒ばかり飲つて、此頃では毎日の御勉强さへなさらぬ御樣子、私の顔を見るのも厭といふ風に、お書齋へお引込みなすつたきり、口も碌々お聞きにならず、何時も〳〵御不興さうなお顔をして居られる。此方へ嫁た時の半分――否、十分の一でも私を愛して下すつたら、私はどんなに嬉しいか知れないのだけれども……と、つい愚痴も涙と一所にこぼれて來る。

が、いや〳〵夫ばかりをうらむのは無理だ。夫の愛情の失せたのも、始終外出なさるのも、皆私が至らないからだ。

「家内の和合不和合は、其の妻たるものゝ遣りやう一つにある。」

と、私が此家へ嫁る時に、お母さんもくれ〴〵仰しやつた。つまり私が惡いのだ。それが證據には、私が幼小かつた時分から、實家に論爭などのあつた事があらうか？父が自棄自棄酒を飲んで家を不在けた事があらうか？決して無い、唯の一度でも什麼事は無かつ

た。お母さんがさせなかつたのだ。

私もこれから力限り根限りやつてみやう。此麼ぐづぐづして居て、若しも、二度と名るまいと思つた嫁い——處女時代の——性を、又呼ばねばならぬ樣な事にでもなつたら、それこそ、亡くなられたお父さん、年老いたお母さんに對しても申譯ない。さあ直に起きやう。

無理に心を引立てゝ起きは起きたものゝ、一つしか敷いてない自分の床を見ると、何とも云へぬ淋しい、情ない氣がして、戸を開ける力も、寢亂髮を梳で上げる勇氣も出ない。

いやこれではならぬ。夫の外出も私の罪だ。お歸宅になるまでに早くお書齋の掃除でもして置かう。

口嗽ぎも朝餉も匆々に濟まして、散らばつた夫の書齋を整理にかゝつた。



二三行書きかけては、墨痕黒々と消してある、書損じの原稿用紙や、古い新聞雜誌などを、室の片隅に積み重ねて、書棚から障子、机の上から床の間と、薄く下りた埃に輕く拂をかけて、恰度全部掃き出して了つた時、裏の勝手口で、

「御免なさい。」

と云ふ聲が聞える。

勝手へ出ると、其處に、近江屋と白く襟に染めぬいた印袢纏を着て、酒屋が立つてゐる。

「酒屋で御座いますがお勘定を頂きに參りました。」

と云はれて初めて氣がつくと、成る程今日は間違ひもなく晦日だ。ハツと思つて、

「あの、お幾干になつて居りませう。」

と聞いた。酒屋の差出した書出を見ると、八圓幾錢とある。まア此麼に！　今私の手元にあるお金だけでは、此の四分の一にも足りない。いつも見覺えてゐる、夫の机の抽斗を開けたら、一圓位はあるかも知れないけれど、それを出した處で、八圓幾錢といふ大金には到底足りさうにもない。まして夫の不在であるのに、無斷で夫の机を開けるのも心もとない譯だ。仕方なしに

「只今生憎夫が留守で御座いますから、お氣の毒ですが夫の歸りますまで——一日二日——お待ち下さいませんか。」

と斷はると、酒屋は變な目付をして、暫らく私の顏を見詰めてゐたが、

「へえ、御主人がお留守ならどうも致し方御座いませんが、そのどうも月末になると兎角居留守といふ病氣が流行りましてな、困りますんでへえ。」

一寸句切つて、

「それでは又明朝伺ひますから何卒お間違ひないやうに——。」

と云つて、高く踏板を踏みならして歸つて行つた。

ホツと一安心吐息をついて火鉢の前へ坐ると、今の酒屋が云つた、

「月末になると居留守といふ病氣が流行りましてな。」

と云ふ皮肉な言葉が、妙に胸に浮んで、骨身を切られるやうに情ない。あゝ夫さへ家に居て、眞面目に筆を取つてゐて下すつたら……と又しても不覺の泪がはふり落ちる。

暫時ヂツと俯向いて居ると、柱の掛時計が淋しく十時を打つた。洗濯でもしやうと思つて、立ちかけた時、チリ〳〵ンと玄關の格子が勢よく開いた。お歸宅……！？と思つて、急いで迎へに出やうとすると、

「御免下さい。」

と案に相違した聞きなれぬ聲。取敢へず

「ハイ。」

と答へて、靜かに障子を開くと、洋服姿の三十近い男の人が立つてゐる。

「御主人は御在宅でせうか。」

「ハイ、あの、昨日出ましてまだ歸りませんが、何か……。」

「え、實は私は……雜誌社ですが、先日お約束の原稿の〆切がもう過ぎますから、戴きに參つたのですが……。御存知の通り手前の方の雜誌は發行が十日で、原稿は遲くとも月の三日迄には是非頂かなければ間に合はんですから、ではお歸宅になつたら何卒左樣御傳言下さい。」

「は、承知いたしまして御座います。」

男の人は、前の通り勢ひよく格子を開けて、忙がしさうに歸つて行つた。

私は茫然して又火鉢の前へ坐つたが、今の事が心配になつて、兩手を額に當てたまゝ、頽然と首を埀れて了つた。



三日の日まで夫は遊びつゞけてゐらつしやりはしまいか――、眞倒そんな事はあるまいが、一體家の事も關はずに何をぶら〳〵遊んでばかりゐらつしやるんだらう。まして斯うした約束までして置きながら……。萬一忘れてゞもゐらつしやるのぢやなからうか？　それにしても自分の家を開けてまでも酒びたりとは……。思へば思ふ程夫の腑甲斐なさがうらめしい。あゝ私は何て不幸なんだらう。實家に居る時分は、味はひたくもこんな悲しい事は味はゝれなかつたのに。

それもこれも皆運命だ。斯ういふ不運な星のもとに生れて來た私は、斯ういふ不運な境遇に安んじて、只

夫に從がつてさへ居ればいゝのだ。もう何も考がへまい。それよりも、早く夫の歸つて下さるやうに、亡き父君のみ靈へお願ひしやう。

もう正午は疾うに過ぎた。けれども晝飯は勿論一粒も咽喉を通らない。洗濯をする勇氣も出ない。頭は針を刺すやうにずき〳〵と痛む。

チクタクと秒を刻む淋しい時計の音を聞きながら、火鉢の炭火を掘つたり埋めたりして居た。

一時に近い頃、珍らしく實家のお母さんが尋ねて來た。

「一寸近所まで用事があつて來たから。」

と前提して、直に歸ると仰しやるけれど、私は遠い旅先で知人に逢つた樣な氣がして、頭の痛いのも何も打忘れて喜こんだ。久濶の挨拶が濟むとお母さんは、

「お前何處か惡いのぢやないかい。大層顏の色が惡いやうだけれど……。」

と心配さうに尋ねられる。相變らずの御親切に、私は泣きたい程嬉しく思はれて、

「否、別に何處も。」

と何氣なく應へたが、この御親切がお母さんの口からでなく、夫のお言葉であつたら……と、又氣が悄いて來る。

「さうかい、それならいゝけれど、此頃は惡い風邪が流行るさうだからよく氣をおつけよ、それはさうと千代雄さん（夫の名）は？」

私は困つた。何と應へたらいゝだらう、夫の不品行をありのまゝお話申して、お母さんにおすがりしやうか？　或は此場だけ隱して置かうか？　私は惑つた。

此時ふと胸に閃めいたのは、例の

「家内の和合不和合は、その妻たるものゝ遣りやう一つにある。」

と仰しやつたお母さんのお言葉。今私が夫の不品行を泣いて訴へても、お母さんは決して私の豫期するやうな、温たかい同情の涙は濺いで下さるまい。反つて私の至らないのをおとがめになるだらう。斯う思つて私は、

「今朝程大久保のお友達を尋ねに行らつしやつて、未だお歸りになりません。」

と云つた。お母さんは唯、

「さう。」

と一言仰しやつた限り、別にお疑がひもなさらぬ御容子、私はホツと重荷をおろした樣な氣がした。

お茶を喫みながら、一言二言實家の事などお話しあつたゞけで、私がいくら止めるのもきかず、

「また來るから。」

と急いでお母さんは歸つて了つた。後は又、獨り絶海の孤島に捨てられた心地。

日も暮れ方になつて、△△新聞社から、「前に數回編めて送つてあつた連載の長編小説が、殘り少なになつたから、至急續稿して呉れ」といふ意味の使が來た。大阪の〇〇新聞からも同じやうな意味の電報が來た。私はもう氣が氣ではない。早速夫を捜しに行かうかと迄も思つたが、家は無人だし、何處を捜すといふ目標もないから、如何する事も出來ない。只一人で氣をもむ計り。

灯もついた。夕餉も終つた、時間はずん／＼過ぎるが、夫は未だ歸つて來ない。

八時……九時……十時、柱の掛時計は其時間毎に時を報ずる。十二時になつても未だ歸らない。私は又淋しく床を一つ敷いた。何時雨になつたか、軒を傳うて落ちる雨垂の音が、悲しげに耳をうつ。





名流婦人の追想

深山かつら

明治四十二年の前半期は、病氣やら旅行やらで、諸雜誌を讀む機會に多く接しませんでしたが、後半期は、誠に多くの讀書時間を得て、毎月々始めの待遠しさ、田舍の事故一日の新聞に、花と飾らるゝ廣告を觀た計りでも、もう氣がわく〳〵して、高根の花を望む心地がいたします、そして其夕刻か翌日の朝配達いたしくれるのが普通の勉强家の本屋さんだが、遲いのは二三日ものばされる事があつて、實にしやく〳〵の種となる事が往々御座います。

雜誌（主もに女子に關する）の中で、お定まりの大家揃の論說、結構は結構なれど、いづれも有名の婦人方は思ひ切つた、振ひ付くやうな奇拔な事は仰しやらす、婦德を土臺に、色々の家庭談やら、處生法やら、難有いには相違ないが、あまりありがたすぎて、讀む氣になれない事もあります、恰度年寄られた御寺樣が、判で押たやうな說敎をなされると同じ事、若い者の血もをどりません、迷も醒まされません、何でも往生づくめですから。

そこへ行くと無名の人々です、隨分と溫かき生氣ある文字をつらねて、私共頑固な田舍者ですら、時代の子たらんと熱中する位ですから、都のまんなかにそらるゝ若い人達は、美くしい繪卷物の中に、御自分も活動して居る心地がして、どんなに快哉をうたはるゝ事でせう、內藤千代子樣！　克く筆のたつ御方、實際十七八の娘さんでせうか、或は許婚の人に別れて、浦若い身を有髮尼の、つもりで、而かもあり餘る財もつ人の、誰はゞかる處なく、筆に紙に血をそゝぎ、情をみなぎらして入らつしやるのでは無いかしら、秋風ぞ立つ白河の關流で、三十近い年增で居ながら、「十九の

「我」を詩につゞつて平然としてゐた人も有つたし、よいおばあさんで居ながら、小間使日記も凄ましいが、筆の上の僞、まさかに詐僞の告發をもうけますまい。

さてこゝの重もな女子雜誌を觀るに、女大家のさまで多からぬに驚かれます、女子大學あたりから、もつとどん〳〵美人で金持で、覇氣のある女流が出なければ、外國の人に對しても恥かしい、田舍の讀者すら、もうおきまりの大家の御苗字は空で覺えた位、花形役者の御名前を一寸列記すれば、三輪田先生、鳩山夫人、山脇校長、嘉悅女史、棚橋先生等を筆頭に、お若い御連中では、八千代女史に晶子女史、時雨孃はいふに及ばず、猶其上に何爵夫人何々夫人、實に梅櫻桃李一時に春を競ふ心地がして、其度每說を述べたり筆をおとりになる以上の方々の勞を多といたしまする、地方に在つてもおかげで大層學問をいたす次第、感謝の外はありません。

其中でも私の腦底に忘られないのは花園女史、近頃は日本及日本人にもあまり拜見いたしませんが、世人は半ば此君を忘却したのでは無いでせうか、よしや今は花の如き才筆なしとするも才情兼備の夫人として內助者として女史の人格は當世の模範たるべきでせう

猶且いぶかしいのは、前の華族女學校學監下田歌子女史の消息で御座います、僅に東京朝日新聞社の「東京の女」にあつた丈で、私の寡聞のせいかは知らないが、其他に學習院女子部を退かれてから女史を紹介したものは讀みませんでした。

稀れなる才能と、稀れなる容色を以て天下に覇たる事多時、幾多やむごとなき姫君達に師事されて、或時は雲の奧深く入りて、國母陛下の御信任を辱ふし、或時は海外に遊歷して、故ヴイクトリア陛下より難有き御詞を賜はり、又或時は、快辯もて克く女子敎育の要を說き、一時天下は下田女史の天下の如くで御座いましたが、質朴なる乃木大將と才藻一代に覇たる女史何ぞ相容れませう、淚を以てかしこを退かれてから、今はたいづこに閑居してをられますか、去年の春、內親王御結婚の御かどで御見おくり參らせた貴婦人等の中

に、下田女史も御用掛として、御玄關にかしこまりお見おくり奉つたといふ記事は、纔に記憶を新らたにさせたのみでありました、セントヘレナに於ける奈帝にくらべては酷かも知れませんが、それでも巴里の片ほとりに、舊情から慕ひこがれた皇后は、奈帝の爲めに、百萬の御味方では無いでせうか、下田女史にこのやうの熱情を捧ぐる友があるかしら、山脇夫人や鳩山の奧樣訪問に忙殺さるゝ東京の婦人記者は、恐らく才女の末路を見舞ふべき餘暇が無いのでせう。

　何爵婦人、何々富豪に出入して、權門の聲をきゝ、黃金の響を世に傳ふると同時に、孤獨空閨にひそむ婦人達をもたづねて、慰藉を與へては如何です、紅葉山人の未亡人もある、北村透谷夫人もある、乙羽さんの奧樣や、眉山さんの未亡人、近くは二葉亭氏の未亡人、又いつぞや質屋の暖簾をくゞつたと自白なされた獨歩子の奧さん達、もしくは日清日露の役におかくれ遊ばした軍人方の未亡人をたづねて其訪問記をかゝげ、世の記憶をあらたにしたならば、寂寞の中に優しい同性の慰藉をうけて、どんなに皆樣滿足遊ばす事でせう。

　又少しく選を異にしますが景山英子の後身福田英子や、名妓ぽんたの操行、私はおぼろげに其消息をきいて感心してをりますが、この人達も社會から忘られてをります、私共の子供の時分に、景山女史の名は實にすばらしいもので、京大阪に響き渡つたものです、又妓ぽんたの盛名は大したもの、今の萬龍でも叶ひません、爾後貞節二なき良婦人となつて、金のみが生命と思はれた社會に、珍らしいではありませんか、彼女はたしかに江戸ッ子の俠を以て任じたものと思ひます。私共田舍の讀者は、切實なる都の聲がきゝたくてたまりません、今歲はいよ／＼盛なる、御企の程をひとへに希望致します。





思出多き函嶺の湖畔

内藤千代子

今朝は寒い！　前の畑は霜が雪のやうだ。門に凭つて紫の光る畦の隅を美しいとながめ乍ら、あゝ私の薄田伯爵家へ御奉公に上るべき日もいよ／＼近づいた、といろ／＼考へた。もう十日過てばこの片田舎を出て花の都に宮仕へ、伯爵！　若君！！　お姫様！、紫矢飛白の振長う、しとやかに三ッ指つかへる侍女姿を思ひみて、我知らず燗然……。希望に胸は高鳴りつ、前途は星と輝くのである。

が、二十になるまで、我家へは歸られぬのかと思ふと、行くのは厭だ、心細い、兎も角もお嬢さんとかしづかれて居たのが、人に使はれる身となつて、刺の生えてると云ふ、他家の御飯を食べるのだもの。朋輩は多いし、まして若様附……

私に首尾よくつとめられるだらうか。

野村子爵へ上つた登喜子さんは、今春内山醫學士との縁談が調ひかけたのだけれど、御病氣の若樣の大のお氣に入りでなか〳〵お暇が下らず、とう〳〵感染していまは茅ヶ崎の南湖院に身の薄命を泣いて居る。これが形見と芳麿樣が御寵愛のアルバム抱いて。おゝ私も御奉公なんか厭……厭……。

「お姉樣アつ、おほゝゝゝゝゝ」

不意に後から縫子さんが縋りついた。蝦茶袴、元祿袖のお被布、手製のオペラバツクを肩からかけて、黒の靴下勇しく、あふれるやうな笑顔を傾げ。

だまつて手をのばし、曲つたリボンを直してやると、

「行つて參ります。左樣ならッ」

笑ひ乍ら飛び出して行く。あゝ縫子さんとも直きお別れよ、姉さまが居なくなつたら、淋しいでせうねえ……胸が一ぱいになつて、ぼんやり後を見送つて居たが、これをしほに家へはいつた。お母樣はもうお茶の間で、せつせと針を運ばしておらつしやる。私も日あたりのいゝ六疊に裁板をすゑて、縫かけの長じゆばんをひろげる。

薄田伯と云へば御同族中でも評判な有福なおくらし。お年頃の若樣姫樣は在すし、御交際は華手なり、從つてお小間使ひなども、大概の嫁に行くくらゐな支度がいつて、非常に綺羅の張るお邸なさうだがお母樣は、お世話下さる山田男爵夫人のお顔に對しても、朋輩に恥かしからぬだけのことはといろ〳〵御心配遊ばし、白を重ねた紋羽二重の裾模樣も、二三日前松屋から出來上つて來た。

あれをまア一人で着こなせるかしらん、今からそれが心配になる。

手あぶりにこてを突込でおいて、熱心にチク〳〵やり初めた。糸の滑りのキユウ〳〵と絹糸の特聲を出す心地よさ。

白で大きく鶴を飛ばした、鴇色地の上品な友禪羽二重、私もうこれがよくつてよくつて。藝者ぢやあるまいし、長襦袢のそんないゝのは入りません

て云つたのだけれど、出來る時にこさへておかねばと母樣が買て下すつた。きけば近所では、江崎さんぢや近々に御祝儀でもあるらしい。まだ〳〵お孃さんはお若いにねえ、併じあすこでも長らくお父樣がないんだから、など〻知つたかぶりに、取沙汰してる人もあるとやら。まつたく私が御奉公に出るなんて、誰しも思ひ掛けぬ事だらう。元代樣つては、奉公なんか着物をよこすだけ損だと有仰るが、奉公にもよりけりねえ。登喜子さんだつて、平常にきり立の銘仙ぐらゐ着て、友禪縮緬の丸帯に品のい〻高島田、何處のお孃樣かと思はれるやうな風をして居た。

少しは他へ出て上流の家庭のさまなども見なくつちやつまらないわ。元代樣は何でもあんな考へだから堪らない、箱入娘の世間知らずのつて、もうそれが通るお齢でもありますまい、來年はお廿四……人生の半分は過ぎ了つてるものを。よくまアまい〳〵つぶろみたいに家にばかりこびついて居られるわねエ——私に顔さしよせて、ぷつんと糸を切り乍らふと振返ると、丁度きよが郵便を持つて來た。浪さんからの寫眞と手紙。無造作に直ぐ封を引さく。大氣焔でこま〴〵と帝大の運動會便り、裾高なお袴にバンドしめて、編上げ靴に往來を濶歩する、得意のお姿が目に見ゆるやう。が、歸途お汁粉やへよつて、お友達と食べつくらをやつた。私は難なく七杯を平げたが、むくゐはチキメン、夜半からひどい胃カタルを起して、今日は意氣甚だ銷沈の體……に至つては吹き出して了つた。本領發揮、本領發揮、ほ〻〻〻振つてるわね、浪子さん。お茶の水だなんて威張ても、こんな人があると思ふと可笑しくなる。と、共にはしなくも湖畔生活の當時の有樣を、今更のやうに思ひ浮べた。人知れず秘めし戀ゆゑ夢にのみ、散ればかつ咲くまぼろしの花、とやら、戀ならずとも胸に秘むれば折々は夢も見る。

若樣のこと、五位樣のこと。さてはお天道樣に罰でも中られたのか、年中お近眼鏡の中でまぶしさうに、眼を細めてゐらした川島さん、丹ちやんと仇名をとつた若紳士の若山さん、茶目さん、凸坊、河童の干物。

エ、おほゝゝゝゝこれは浪さんと相談して、〇〇さん達に奉つた稱號なのよ。あら、だつてみんなさう云ふ特長を持つて居るからですわ、正一位樣の豊川さん、操さんの藤村さん、油繪を成さるからペンキ屋だの、背くて小さいからすゑなり瓢簞、なんか平凡だけれど、なかく\ローマンチックな物語もあるんですよ。え、きかせて上げませうか。

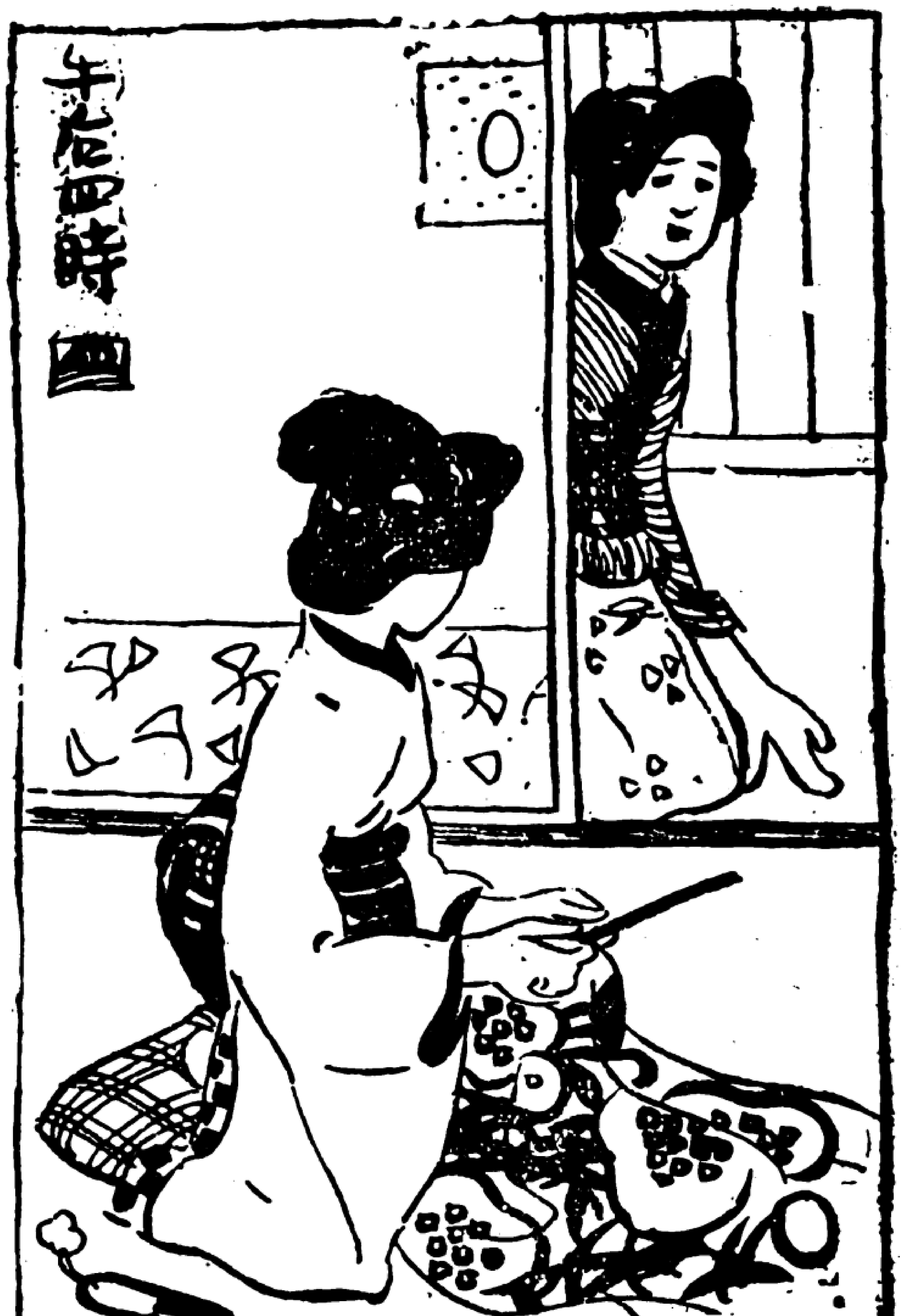
あら厭、罪はろぼしだなんて。

あの暑中休暇中の出來事よ、發端はね、函嶺山芦の湖岸の久子さんから御自慢半分、手傳がてら是非來よと毎日のやうに手紙をくれる。久子さんハお養家は旅館なんでせう。實はね私、去年木村さんが對江館に來て居た時分、よく遊びに行つてはあのお近やおまさなどが、いつも方々の室で面白さうにふざけたり、さわいだり、してるのを見て、ひそかに少し羨ましかつたものなんです。で、例の好奇心から、自分もあんな生活がして見たくつてたまらず、うまく母樣を說き伏せてお許しをうけました。

ほほゝゝゝそりや鵠沼の海水浴場で、印度美人、一名海坊主と、その名かくれなきお轉婆令孃のことですもの、汽車と電車にゆられた上、函谷關も物ならず、と歌はれた嶮しい山路を、結付草履に苦もなくふみ上つて、この孃樣はハアユラク足が早え、と荷しよひの者をたまげさせ、左樣よ貴女はコムパスが長いからね、と途中まで迎に出て居てくれた久子さんに冷された。

だつてあんな山ぐらゐ、ほんとに何でもありやしないわ、たぎり落る瀧津瀨、轉ばる石に激する急流、見上ぐる峰には雲が迷ひ、行途は小暗く霧に埋もれ、谷間には鶯が鳴いて居た、高根には山百合が咲いて居た、のをめづらしく感じたのと、初めて湖水の見えた時、はつと觀喜の驚に打たれたゞけ、別にこれと云つてあたへられた印象もない。みんなに紹介されてお辭儀をして、荷物を片づけてお夜食を食べさせられて、お湯に入浴つてその晩は寢て了つたが、さて翌日起きて見たら困りましたね、たのみに思ふ久子さんは——何しろ夏を書入の場所とてお客の立こむこと立こむこと、

五人の女中の取締りで、また當家の娘として人に接する多忙さ、朝からチットモ顏を見せぬ。私は丁度御婚禮のすんだ朝の花嫁さんのやう、何だかまるで勝手はわからず、出過者だと思はれるのも厭だし、暫くは差控へて居たが、あまりの手持無沙汰さに、何かお手傳ひさせて頂戴な、と云つても、まア宜しいよとばかりなので、一倍氣づまりで堪りません。私今までこんな氣兼をした事はありませんからね、意氣地のない話しだけれど、もう眼の中が熱くなつて來ました。



ところが丁度その時、やつぱり私と同じやうな事で、二三日前に來たといふこの浪さんが（久子さんの從妹）襷がけの甲斐〴〵しいいでたちながら、御同様の手持無沙汰さうな顏して、臺所の隅に立つて居るので、つい話が合ひ、たちまち仲よしに成つてしまつた。

けれどそんなに心配するがものはなかつたのよ。何しろ手のまはりきれないとこだつたもんだから、出來

なければ外の事は何にもしなくつていゝ、せめてお給仕だけなりと、と云ふ約束で兩人とも、受持の座敷をあてがはれた。

もうこんなとこぢや、遠慮やお人好大禁物、人の持つてる物を引たくつてゝも、自分の用さへかゝなけやいゝんですね。そんな事とは知らないから、初めの中は正直で、事毎に面食ひ、意外な事を叱られてあきれました。エ、私の受持ですか。私のはね、裏のお離れの青柳樣の御令息、と云ふと大層可愛げだけれど、もう三十近い方――と思つたら、それでまたお二十三ですと。驚いて了つた。紺飛白の單衣に黑メリンスの兵古帶、私の好きなお近眼鏡かけて、三分刈頭のさつぱりした學生風、この若樣大學生よ、法科でね、お床の間一パい金文字入りや皮表紙やをうづ高く積み上げて、年中シミの化物みたいに、書物にばかり食ついてゐらしやる。

むづかしいお顔あそばして、怖さうなお方ねえとは朋輩のとりさたで、平民的な――いや味のない若樣よと久子さんは賞める。私にやどつちだかわからないが、兎に角この若樣なればこそ、こんなトンカチにでも、御用がつとまつたんですわ。お義姉樣は御自慢で『當家ぢや渡り者ゝ摺れつ枯しなぞ、華族樣の御前へは出しません。』と云ふ。成る程ね、華族さまこそ難有迷惑、私なぞ渡り者にくらべて何處がいゝのか――、氣の利かぬ事だけはおびたゞしいが。まづ第一にそのお離れの緣の雨戸をね、どうも工合の惡い戸袋で、よ程氣をつけねば、四枚の戸が治り切らないんです。が、つい氣の急くまゝ毎朝〳〵ガタ〳〵云はせて持餘し、果は泣顏になるのを、若樣流石お見兼遊ばしたんでせう。その後は毎朝御自分でお開けになつて、それからお目ざめのベルをお押しになるの。母家ぢや誰も知らないけれど、私あんまり勿體なくて、途方にくれて了つたわ。もつともお友達がゐらつしやると、私を召すまでもなく、御自身次の間に出て行らして、お茶をおいれ遊ばす程の方だから、あまり若樣〳〵とかしづかれるのは、かへつてお煩かつたかも知れません。けれど餘

りだと思ふ時もある。それア滅多に口をお利になつたこともないんですもの、私も無言で居る、お給仕の時なんかにらめつくらよ。笑を含れたお顔つたら初めての日、私が御挨拶申上げると、傍から久子さんが、

「どうぞ御遠慮なくお使ひ遊ばして――。誠に氣轉のいゝ御令嬢様で御座いますから……」と笑つたので、

「左様か。いや僕はあんまり氣が利き過ぎちや困るからな、ハヽヽヽ」

と有仰つてじつとお見詰め遊ばした時つきり。

濃い御眉を少しひそめて、きと一文字に口を結んで、飽かず讀み入り給ふ法律書。ほんとに法科は野暮つたいのねえ。進さんがやつぱりこの通りでしたわ、御飯食べてもお箸をおくより早く、直ぐ机の前に坐りこんで了ふので、餘り素氣ないと恨んだこともありましたつけ。おや飛んだとこで？――おほゝゝゝゝゝ御免下さい。

朝々御朝餐前湖水でボートをおこぎになるので、その間にお掃除をすませ、牛乳を沸かし、パンを焼き、半熟卵をこさへたり、花活の水を代へたり、はア朝夕は洋食でお晝餐だけが日本料理なの。あの岡持に入れて運ぶ風は、あんまり見よいものぢやないわねエ、私お吸物なんかあるとこぼすまいとよけい一生懸命で、汗みづくに成つて了ふ。かゝる辛酸を誰が爲にする？　思へば我ながら自分の物好が馬鹿々々しい。つてまア悔むにもあたらなかつた、四五日するとその御弟君が行らつしやいました。

櫻の花の徽章の附いた、眞白い學習院の制服制帽で、ガラ〳〵ガラッと二人曳の俥を、乗りつけらつた勇しさ。おゝ青柳様の――と飛んで玄關へ駆け出た人達もその輝くばかりの品位に打たれて、手をつかへたまゝ平伏して了ひました。私は直ぐと小さな手荷物お受取申して先に立ち、お裏へ御案内する。

それや色の白いお鼻の高い髪の眞黒なお美麗な若様。まアなんて氣高い凜々しいお姿なんでせう。お見上申した者は云合したやうに、「可愛い若様」つて夢見るやうな眼ざしをする。何だか自分の事のやうに嬉し

かつた。

たとへば雨上り、朝日に燃ゆる新綠か、いき〳〵と美しく勇ましく、ほんとに今光る君とも申上げたいくらゐを。

「武明ッ、武明ッ」とお兄様の呼び給ふがふさひ給はぬ。

若い青年がまた附の少い袖の大きい、人形の五寸も開いてる着物を着た風は頗るいゝものねえ、可愛くつて私大好なのよ。武明様もお洋服よかなほよくお似合遊ばす。お十八にしては隨分更けてゐらつしやるけれど、人なつこい無邪氣な方で、急にお離れは賑やかになりました。

御食事の時、お手をすべらしてコップを取落し給ひ、卓子から葡萄酒の小瀑が流れたので、私手早く手帕で拭ひ去つたが、おかげで白絹が薄紅く染つて了つた。これも紀念とまた大切に持つて居ます。

夜は十時を打つとお床をのべに行く。月やあらぬ、星や何處、後れ毛かき上げ乍ら空打ちあふげば、折から颯と蘆の湖渡つて吹き來る夜風にいそがはしくまたたく提灯の、火をとられじと雨の袂にひしとおほふて小走りにのぞむ行途はぼうつと花やかな障子の灯かげ、この時はなか〳〵詩的ですよ。

門にあふるゝ吹井の水音、立さわぐ湖の波、白百合の香がぷんと鼻をつく床しいお座敷。

「若様」

とお次の間に頭を下げる私は、高髷に緋の帶でも、やの字にしめて、薄化粧した優にやさしきお侍女なるべきを、ゆき短かな白飛白で思ひ切つた頭高の束髮……ちやチとどうもね。

お床のべて雨戸をくり、行燈はお枕元に、晝のお召をちやんとたゝんで爲端手落なく、おやすみ遊ばせ、と申上げてすべり出る。

枕におつき遊ばすやもう直ぐに目を閉ち給ふ武明様が安らかな御寢顏。白羽二重に櫻の雫を潮したやう。

「そらだき」の輝一さんは、乾度こんな美男だつたのでせうねえ。

浪さんは華族さん窮屈で厭だつて云ふので二階のうけもち、書生さん達ばかりだから、平林さん〳〵で大變な評判よ。何でも浪さんでなければ……若山さんなど、他の女中ぢや返事もなさらないんですつて。あのふくよかな大廂、華美なゆかたにヒハ色羽二重の帯胸高く、眉美しいハイカラ美人。チヤキ〳〵の學校仕込で、しかもそこの明星とまで歌はれて居た人のことですもの。若山さん達かレデー扱ひにするのは御道理だけれど、浪さんばかりが女ぢやあるまいし――のに餘り癪に障るわ。おほゝゝゝ美人の美しい顔ばかりが人をチヤームするものではなくつてよ、これでもね、またの逢瀬をかたく約してふり返り〳〵行つた、二本條の學生もありました。君ボートに行きませんか、素敵に重いオールで一人ぢやこげないんですよ、なんてこれは早稲田の野球部の闖抜けて身體の大きい人が、かるく後から肩をたゝく。

手紙の交換を願ひますよ、つて帯の間に名刺を入れられたり、馬鹿にしてる?　とは思ふけれど、まさか久子さんのやうに火中の亡者として了ふにもしのびません。

年中雄辯をふるつて客を笑はせて、快活な人だと云はれて得意になつてる久子さん、時には私の手をとつて泣きます。青春の乙女とは云へ、もう一度燃えたつて冷やかな社會の水を浴びせられ、消えて了つた我が心ですもの、甘い戀を囁かれても、胸がどきともしませんわ、と云ふ。

熱き血潮の沸きかへる期、まだ花二十の處女の身で……。一種の悲劇ですわねェ。

「現し世の血は分けずとも、千代かけて姉と呼び妹と呼ばるゝ身、五千萬なる人の中にこれかりそめの縁でせうか」と誓ひ合つた間乍ら、やつぱり一緒に居て見れば、氣性はまるで違ひます。私は私はうけた恨みは忘れぬけれど、どうしてもその人を憎み通せない、まして他人から少しでも情をうけると、嬉しさが身にしんでやめられません。それは片親ながら愛に不足なく育つたおかげ。あゝつく〴〵思ひ知りました、佗しい

母様のあたゝかい御手に抱かれて居る私は幸福なのでした。女學校へやつて貰へなかつた恨みなど申してはすみませぬ。人も泣けろ内が花だとか、養女と名の附く久子さんは、どんなに辛いこと悲しいことがあつても、泣顔なんぞ見せられぬ身の上、人知らず失戀の傷手になやみながら笑つて暮す心の中……。

え〻客種……さうね、此館には長逗留の避暑客が大半をしめて居ましたが、お晝食や一晩泊りの客もなかなか多く、朝に三田の健兒を送つて夕に目白臺の貴公子を迎へ、商人、先生、美術家、軍人、あらゆる階級の者が舞ひこみます。あら、觀察だなんてなか〳〵そんな間ありやしない。けれどもまア何しても學生が一番よう御座んすわ、温和しくつて淡白で正直でね……二ッ飲んだ生卵の代拂ふのを忘れたつて、半里も行つたのに引返して來た人さへありました。どうも間の悪いものは新婚旅行の御夫婦よ、なんぼ夫人がお大切だつて背の君がおいとしいつたつて、天地に二人の外は人をみとめない、つた風――。馬鹿〳〵しい。

一體當主の兄様姉様が新らしい學校の空氣を吸つた方でね、些とも旅館の主人のやうぢやないんでせう。川島さん達は姉様のことを、奥さん〳〵と云ふのですもの、それで女中が親戚や知己の娘ばかり――と來てるから隨分珍談もやりました。一度なんか箒木のおまぢなひを發見けられてね。とう〳〵環ちやんが泣き出して了つたわ。蟲の好かぬお客のとこへはお手が鳴つても聞えぬふり。おほゝゝゝあの肉慾の渇望が顔へ吹き出たお店者や、光る頭をぺつたり分けたハイカラさんなんぞは、不深切な家だとさぞ驚いた事だらう。が、決して服裝やお茶代によつて、取扱ひに區別をつけるんぢやないから何と云はれたつていゝ。いゝえ、婦人の方はあまり見えませんわ。あ、さう、さう、ある時素敵な令孃……が一人泊りました。後できけば女流音樂家の〇〇女史だつたさうですが、まアそのスタイルつたらないんですもの。思ひ切つて廂を出したお下げに藤紫の巾廣リボンを結んで目ざましい百合模様お納戸色五ッ紋の縮緬の單衣、しかもそれが元祿袖

でね、海老良琥珀の袴の穿方なら襟止輝く襟引つめて、凛としたその態度。白魚の指には人の目を射るダイヤの光り、華手なサック入りのヴアイオリン。私等の眼は光りましたね。あれ程悟り澄ました筈の久子さんさへがにこりともせず眉を昂げて――。妬けたのよほんとに。嫉妬心の權化と云はれても仕方がない、あお脆弱よ。汝の名は女なり。



奥平様――其後私は都合によつて奥平様附に轉任したんですよ。こゝはそれまでお鏡さんの掛りだつたがお實家からの電報に取るものも取りあへず歸つて了つたので、急に動員に不足を生じ、變改を來して、涙を飲みつゝ青柳様は環ちやんにゆづり渡して了ひました。は、松のお離れにお附の方とお兩方でお出遊ばすの。左様、あれで……お二十六七でせう。あのお裏の

若様のやうに更け性の方つて澤山はないですもの。やつばり角帽で五位様は理科、お附の桂木様は駒場の椋鳥さん、ほゝゝゝ流石の私も角帽には飽々して了つたわ。

この五位様、同じ伯爵でも青柳様の様ぢやありません、誠にお氣輕で私達をまでまるでお友達扱ひ。けれど私は矢張青柳様、もとの若様がおなつかしい。お裏の方が眺めもよかつたし、第一こゝぢや毎朝あのボートからのお歸りを待ち侘びて、お緣に出たりはいつたり、露草ふんで湖畔に立つやうな特趣は得られない。環ちやんが朝々棧橋のとこに、恍惚佇んで居るのを見ると嫉しさにむら〳〵する。

あら、惡く取つちや困るわ、何ぼ何でも伯爵家の公達ですからね。私はね、華族の次男坊なんか大嫌ひ……と云度いところだけれど、今度ばかりはまつたく惚れ入つて了ひました。お品が違ひます、あの武明様がお美しい中にも四邊を拂ふ御容色、お生み遊ばしたお母様は、どんな方かと偲ばるゝ。

自分は朝晩のお世話申上げて居た頃は、これ程までとも思はなんだが、もう他人の物、手さへとゞかぬ高根の花とのみ、見過ぐさねばならぬ身と成つて見ると、今更のやうに――見れば見る程、まア何と云つてよいか、一點の非の打どこのない若君様。凛々しくつてお優しくつて可愛くつて勇ましくつて、星の御眼、臥蠶の御眉、きりゝとした細面、眞白い頬にはいつも片靨、女のやうに化粧こそせぬが、その天然のうるはしさ。そしてお兄様に對するお禮儀などの正しいこと、上品なお言葉遣ひ……

何もね私、お氣に召さぬからとて交代させられたわけぢやなし、お役にたゝんからつて止められたわけぢやなし、別に愧づるところはない、と云ふものゝ何だか肩身のせまいやうな、横どりされたやうな氣がして面白くない。おまけにまた環ちやんが口癖のやうに武明様のことを、可愛い方、いゝ御縹緻、つて賞めるんだもの、あまり好い氣持はしないわ。虐める氣なんかぢやないけれど、つい皮肉な事も云ひ度なる。それを

また朋輩が何のかんのと云ふ。

こんな小葛藤は絶えずあるんですよ。十六から二十一までですらり並んだ七人の――、何さま發育盛りの若い女達のことですもの。中で無邪氣なはハイカラ浪さん、同性同士おや見えもかざりもあつたものでなく、その食辛坊と來たらお話しだ。――と云ふ私だつて夜御酒のついたお座敷へなんか出るとつい〳〵おそく成つて時刻が外れ、面倒くさいから食べずにすませて了つた事も度々ある、すると夜半にお腹が空いて來て奥平樣に頂いた懷中汁粉をそのまゝボリ〳〵かぢつたりなどしたが――ある時も食パンを買つて私にも分けてくれてね、二人寢しなに食べやうとしたらお砂糖とにらんで臺所からそつと持つて來た蓋物の中が食鹽だと云ふさわぎ、べつたりつけてアングリやつたそのまア浪さんのお顏つたら……。かくれてする事だから笑ふにも笑はれず、かうして毎日パックの好材料ばかりやつて居るのよ。露子さんと呼人のないのもいつか寢言に、「お姑さん、武男さんは歸つたと思つたに……ムニャ〳〵ムニャ」と云つたとやら、それを久子さんが聞きつけたとやらで「浪さん、浪さん」と弄かつたが、とう〳〵浪さんが通稱になつて了つた。だけどこの浪さんはほんとの浪さんみたいなやせつぽちやないわ、小氣味よく肥つた――體骼にかけても關脇は確、自任未來の外交官夫人、あら眞實よ、だから學校でもピヤノと佛語で名高いんですつて。御良人を助けての活動振りも、この人なら屹度成功するでせう。交際社會の花とうたはれ、ロンドン市中やシャンジエリジエーの大道に先を拂つて馬車自動車をかり、華手な洋裝のヘカート長う、かしこの夜會、こゝの園遊會、併しどうもねえ……、羊羹が箪笥の曳出しにひそんで居たり、時々袂からドロップスをふりこぼすなどはチと――。まアいゝわ、西洋へ行けば。西洋料理は量が多くて食べきれぬから困ると云つた人があつたもの。

えゝ〳〵、コンパニーなど盛んでしたね、發起者はいつも浪さんです。久子さんは流石に若い顏するがそれも、「一ついかゞ、」とすゝめれば手を出さずには居

ませんからね。

私と浪さんとは女中部屋でなく特別に久子さんの室へ同居を許されて居たの。蒲團部屋にとなつた六疊で古い書棚や箪笥が兩かはに置いてあるから頗る薄暗く、それとのみの多いには閉口するが、一寸斯うかくれ間と云つたとこで、帳場には遠いし、夜秘密軍議を開くなんぞにやおあつらへ向き。原案が通過すると買出し方は私か環ちやん。だつてお離れに召された風して驅け出して行くんですわ。もし留守の間にベルが鳴つたら大變と、氣が氣ぢやありません、女奇人のLさんぢやないが、泥棒は辛い職業ね。

辛いと云へば浪さんの眠がる事は一通りでない、それや誰だつてずゐ分眠いわ。もう目の先には雲が掛つたやうで、いくら拂つても拂つても物がはつきり見えず、歩きながらふら／＼と居眠りして爐の中へすべりこんだり、廊下でいやと云ふ程鉢合せ、びつくり、どうも失禮、堪忍ね、と目をこすり／＼あやまつたら、いゝ、なんの柱だつたなんと云ふ失策もあるけれど浪さんみたい正體なしに成つて了ふなんかあんまりだと。お風呂から上つて裸のまゝ、そこらへ突伏して居る事は毎度なんですもの。もつともおそくなるからね、早くて十一時、大概十二時をきゝます。私は母樣への手紙を四晩も掛つて、三尺ばかりの飛白みたいなものが書けました。

朝だつて一番寢坊――、散々鼻をつまゝれ頰べたを突かれてやう／＼目をさまし、床の上に起き直つちや兩手で顏をこすり／＼、あーんとあくびをする風にいつも／＼吹き出させられて了ふ。

それが一時間の後にはちやんとお化粧すませて、一絲みだれぬ丸髷に大蝶のやどつたやうな白リボン。スリツパする／＼と二階の廊下を行き通ふ姿のハイカラさ。どうしてこの人が暗闇の床の中でお薩をかぢつたりなぞすると見えませう。何と云つても美人にはかなはない。よしや容は深山がくれの朽木でも心の花が匂ふなら、ナニ愧ることがあらう――なんて云ふけれど、あれは負惜みですよ。男方の目指す處は一に美人ある

のみ、なんでせう。學藝德行の如き、婦人にあつては寳口に大した影響は與へない、と云ふぢやありませんか。また美を愛するは人の眞情ですからね。

女は先天的に美しかるべく、形づくられて居るんですもの、造化の神に繼子扱ひをされた私なんか仕方がないが、それでも盛んにおしやれをしてせめて少しなり天然の不足を補ふつもりよ、美貌論を排斥する人などはそれはみんな、自分の情を僞つて居るんですわ。

「あれは何と云ふのかい、クラシカルな丸ぽちやが居るぢやないか。美人だ！」

と五位樣の御意、口惜しいが恐れ入りました。

この奥平樣の五位樣、まるで駄々つ子よ、世話が焼けてしやうがない。わざつとね、朝晩のお召替遊ばすにも後からお着掛け申さねば、手は通さぬものと定めてらつしやるんだもの。

ある時もけたゝましうベルが鳴る、急いで下駄つゝかけて驅け出して行くと、桂木樣とお次の間の窓からのぞいて笑つて居らつしやる。また――と眉をひそめ乍ら、何の御用と伺へば

「ポカン――」

ですつて。隨分な。いきなり引返しかけると

「おい〳〵用があるから呼んだのだ、火鉢の火が消えかゝつてる。少し注意せんとお母樣にいつけるぞ――」

「恐れ入りまして御座います……」

火鉢の傍へすゝみより、炭取引よせて火種をかき起し、故意にフウ〳〵口で灰を吹き飛ばす。お兩方は驚いて顔をそむけ

「何だ、花枝、亂暴な……」

「好い氣味。おほゝゝゝゝ」

「此奴め、」

とたん不意にパチパチパチパチパチッ

「おツ熱、あつ、まア火ん中へ目が飛び込んで……」

「エ、火ん中へ目が飛びこんだ。それや大變だ、目玉の黒焼？……」

「あらまア、よう御座いますよ。」と顔をあげてにらみ附けたが

「アハヽヽヽヽ」

釣りこまれて思はず

「オホヽヽヽヽ」

何か失敗があつたら手を打つて笑つてやらうと、待かまへて控居るんだから、油斷も透もなりません。併し私もおとらずに隨分減らず口をたゝくので、五位樣から「トンチル」といふ名を拜領した。何でも切り拔けるのが上手だからだとは素敵だわね。だつて、花枝にはもう良人がきまつとるのか、の、その嵌めてる指環はエンゲーヂリングだらう、のつて厭がらせを有仰つちやいぢめてばかり。ほんとに口惡な五位樣つたら、私あんな方大嫌ひよ、伯爵の人格も何もありやしないわ。

が、ある時はありのすさびに憎かりき、と一葉さんが云ました。なくてぞ人のこひしきは、經机の女主人公のみならず、あゝある時は、ありのすさびににくかりける。

別れの一幕、本鄕座あたりの舞臺にのぼせたなら、おそらく逗子の海岸以上——だつたでせう。

「桂木樣、明日お立ちで御座いますつてね、私、私、些とも存じませんでした。何故お歸りあそばすの……」

夕のお膳を運び出ていきなり云ますと

「あゝもう僕は悲しくて悲しくて、お飯も咽へ通らんよ、先刻から泣いて居る」

セルの袖でわざと眼鏡の曇をふきながら

「察してくれ、花枝」

「お察し申上げますとも、よく今までこんな山の中に御辛抱下さいました。久しぶりで奥さまのお傍へお歸り遊ばすんですもの、お嬉しくておうれしくて、今夜はお目が合ひませんて。おほゝゝゝゝ」

「何？　馬鹿な！！」

「駄目よ、さうお顏に書いてあるんですもの、ね、五位樣。おほゝゝゝ」

「誰だつて歸りたくはないが仕方がないさ」

いつになくお眞面目で煙草の灰をほと〳〵と

「なに、また來るよ」

「えゝ」と顔を上げると、はからず視線が衝突して、あはててまた俯いたが

「ほんとうに……」

「ほんとに來るさ、直き來るよ。此邊の秋はまた好いものだ。なア桂木、」

「ほんとに屹度……。お待ち申して居りますわ、」

聲をふるはせた。私だつて四五日の後には家へ歸ります。今度お出あそばしたら、誰がお附き申すだらうと思ふと、もう、もう、一生此館の女中で暮したい……。じつと視詰めたお給仕盆の金蒔繪、だん〳〵涙に包まれて、果はほろりと熱いものが頰を傳ふた。



「花枝、」

「は、はい」

「今夜はお久ちやんと遊びにお出よ、お別れに話しでもしやう、いゝか、」

「恐れ入ります、」

「屹度お出よ、」

「はい、」

その夜久子さんと伺つて、梨や葡萄をいたゞきなが

ら月を賞して語りふかしたのでした。もうお寢み遊ばせ、と幾度となく申上げて、やつとお床をのべたら十一時、母家では二人が何處へ行つて了つたらうとさわいで居ました。

翌日は朝涼のうち、露をわけてのお立ちです。おまめで行らつしやるやうにと、いんげん豆のお猪口に尾頭附のお燒物、花枝のお給仕で食べるのもこれでお名殘だねと箸をとられて、我知らずまた涙ぐんだ。

その中みんなが御禮を申上げにぞろ／＼來る。五位樣は大學の正帽正服、脊高いお姿の見違ふばかり男らしさ。椋鳥さんもAの字の襟に光る制服着けて、しきりとカラーを氣にしてゐらつしやる。玄關にはもう山籠二挺。

お靴はみがいて揃へておいたが鞄と共に屋根の上にしかと結ぶ。馬面、杓子面、盤臺面、駕昇だつて人間なのに、どれも／＼人四化六の面がまへ。

「五位樣、お支度はよろしう御座います、」

「花枝、」

「あれ」

きゆつと手首をとつて握りしめてつと放し、唇に啣んだシガアの烟り、淡紫に曳きつゝさつさと玄關へお立出になる。

やがて桂木樣もあとなる駕に潜りこんだ。

德平さん（手代）はきよと／＼しながら

「お荷物はこれだけですか、お忘れ物はないかね」

「はアこれだけよ。桂木樣、別にお忘れ物は御座いませんね、」

「ない、」

「ぢやア行らうせ」曳しよと息杖とつて駕は一ゆり、早や宙に、一同も揉み手をしながら門に出た。

「御機嫌よろしく、何もおそまつ申上げました、」

姉樣がマダム巻の頭を俯けて叮嚀な御挨拶、

「どうか是非またお出下さいます樣？　精々改良致します積りで……」

德平さんの浮つ調子、

私は物をも云はず珠ちやんとお美喜の手をとつて

「お義姉様あの……」

「あゝ」行つてお出と眼で返事。三人は小走りに足を早めて怨と一緒に歩いて行つた。

「もう澤山よ花枝。何處まで行く。いゝ加減にせんと東京のお邸まで連れてつて了ふぞ」

「随分よ桂木様、そんなにお邪魔ならもうかへります。さ、環ちやん、」

と云つたが歩をとめて思はずひたとより

「五位様……」

「あ、花枝御きげんよう、」

「健在でお出よ、」

お両人の御會釋、私等はたゞ頭を下げた。苔の小路にしみ入るやうな足音もしつしつ、山の襞々湧くは雲、眸ぶは水、見下す坂路のうねりくねり、下りは早い、もう逆落しに坂を下へ、きりゝきりゝゝりとそこの谷間で鳥が鳴く。

私は手帕を顔へおし當てた。あゝ三日前青柳様のお立ちをみんなと共にお送り申した時、環ちやんに對する意地を立通し、堪へに堪へた涙がいま止度なく流いて來る……。

お裏のお離れにはその後松村男爵の御令息達が入らつしやいました。松のお離れは蓋も戸を閉ちたまゝでした。

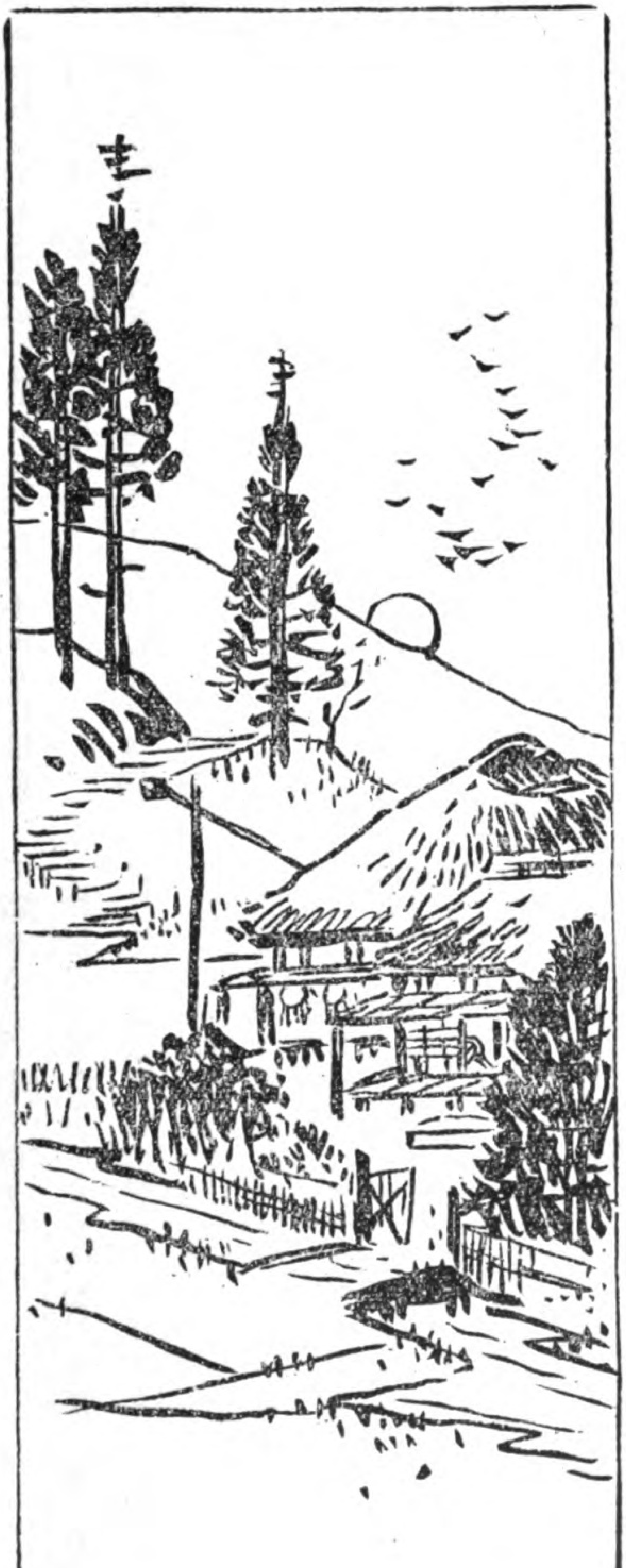
引留らるゝ袖ふり切つて私がこの山の中の町を辭したのは九月の初旬、非常に風が吹いて湖水の波がまつ白く立さわいで居た日、久子さんは一人湖畔に立つていつまでも〳〵見送つて居ました。

人間は都合のいゝものでね、過去のことを追想すると苦しい事はみんな消えて、樂しかつた事ばかり殘る。三十日の旅館生活も今思ひ出して見るやうな事ばかりではありません、拭掃除から、忙しけれや皿小鉢の洗ひ方、朝晩人の機嫌をとつて、寢るも起るも自由ならぬ……、隨分情ない事も云はれました、口惜しい目にも遇ひました。なか〳〵湖畔詩人を氣取つて居るわけには行きませんでした。——が、

あゝ箱根は一種の神秘的なところ。靜かな晩、杉並

木から湖にうつる月を見て、關所のあとをそゞろ歩きしたらば、知らず〳〵涙がこぼれました。

また天も地も薄すりした夜、靄立てこめて夢のやうな湖上から、水をかくオールの音と高らかな美しい詩吟の聲を聞いた時、ぞつと戀風が身にしみ渡つて……未だにあの床しさが忘れられません。



指きりをして再會を誓つた、一高のOさん、高商のCさん、私もうあの約束は果せませんのよ。御主人持の身、來年の夏は何處の御別莊にお供して迎へることやら——。

五位樣はその後ほんとに湖畔の秋をお訪ひになつたでせうか。

兵曹の妻振り

藤井の妻

私達だつてもやはり帝國軍人の妻ですよ、其れをどうでせう昨日も吉田さんが松下さんへ御機嫌伺ひと云ふ譯で上たらいつぞや私が二等下士へ嫁を世話したのを聞て居られたと見えて、やれ味噌漉奥樣だのあれで子供でも出來たら生活がむづかしからうなどゝまあ貴夫人にあるまじき事を仰有たと、吉田さんが口惜がつて藤井さん御聞きなさいよとすぐ歸りに寄て話して行かれた、それは中には潜行艇上りのそれこそ味噌漉奥樣も有りますけれど隨分な仰有り方だ、何でも御自分の家の小間使を御遣しなさる御心だつたさうだがこちらがすんだものだからきつとあんな事を仰有るのだらう、士官……機關長……それはえらひには違ひ無いが下士だつてやはり國家の干城でせうその妻ですものやつぱり貴女方と同じでございますよ、立派に夫が航海中の留守はまもりますホヽヽヽかう申たら下士の妻が何熱吹くかつて仰有るかも知れませんね、けれども我々の連中でも兵曹長の奥さんとなれば中々幅がきゝますのよ、中にも藤井の奥さんと云へば皆樣にうなづかれて居りますは、暮しの程度それは貴女どうせ士官樣とは違ひますが今では宿



も六十五圓頂いて居ります、親子四人で……と申ても宿は海上勤務ですから三人の方が多いのです……は困る樣な事は有りません、私の手には五拾圓づゝもらひますの、然し今年十七になる清子と十二の武の教育費家賃米やから其他の諸拂を四十圓内外で上げて三圓位の貯金は必ず致します、私どもはたりなく致せばもう次の二十二日迄はどこからも入る處が無です からね、其れに宿が中々しまりやで始終餘り遣うなよ五十圓もやるのだから十圓は預けろ、などゝ申ますのですけれども其ぢや私やりきれませんわね此でも世間の義理も致さなければならず清子とても十七の花娘女學校へも通て居ればいくら木綿で好いと云てもまさか始終二子の洗洒や大島まがひの古いのも着せられませんし武とてさうよごすから破るからでもまさかねえ、年金でと仰有るの、それは百圓有りますけれどだめ〳〵でも暮のはね丁度留守でしたから此辛と清子の無地御召と帯に武の洋服買てやりました……(此な妻ぢや餘り大きな事は云はれませんねホヽヽ)惡いと存じながらもさうしたら歸つて來て案の條大立腹でした其れから私が貴方そんな事仰有るな清は女ですよあんな羽二重など着て居る者有りませんよ丁度あの時村上の芳子樣が縮緬の襲れが出來たものですから清が、ねえ母さん御引初めに着ていらしやるのですてとあの無いな子だからほしいわと迄は申ませんが私の身になつて御

覧なさいと云はれないだけ作つてやりたうございますわ無斷で致しましたのは惡うございましたが迚間に合ないと思つたものですから、と申たら其時はさうかてれ濟で仕舞ひました、ホヽヽヽやつぱり子は可愛と見えますよ私のですかほんの入用だけしか有りません私自分が一枚着るなら半分でも子供に着せとうございます、交際ですか之で中々廣いですよ、皆樣が藤井の奥樣々々と仰有て下さるものですから迚好い氣になつて出懸けますといつでも遊びぢやなのですよ彌生婦人會の幹事長に祭り上げられて居りますから、此會は佛教婦人會と申た方が宜しうございます、月に二回位順に會員の家で師を御迎へ申て御話を伺うのですヱ眞宗です、會員も追々ふゑますし熱心な信者ばかりですから誠に幸でございます、ですからだん／＼知り人がふゑますでせう御彼岸などの御くばりも大變ですの、けれどもほんとに御交際してゐる家は十四五軒ですが其れだけの御家への義理を致すのですから骨がをれます、途四五日前も杉本樣で御產が有りました、山崎樣の旦那樣が御病氣だそれ御見舞やれ佐々木樣の御嬢樣がお嫁に行くと申す樣な次第で隨分出ますから苦しい月も有りますよ、で未だ御產を致す人二人ひかへて居りますのは此は皆私の娘分に爲て居りますからいづれ見てやらなければなりませんホヽヽ樂しみでございますよ、めんだうもございますが私も娘が有りますし



致しますから出來る時は人樣の御世話もしておき度と存じましてれ、私への客も每日幾人も參りますよ會の事やらで、戰爭時分でしたよ皆樣で日に幾度となくあちこちへ出入するのに其の度每に御茶菓子だの何だのと不經濟だからつて貴女、御茶菓子は御香の物でもと云ふ事に致しましたの糠味噌の好いのは女の名譽とかつて譯でれ、アラ御笑ひ遊ばすなよ、だから糠味噌くさいつて？ホヽヽ何とでも仰有いよ今でも續いて居りますけれどどなたにでもぢや無いのですよ上官の奥樣などには相當に致します其れから艦が歸りますと盛に呑みに來る方が有りますのよ、いくら宿が甘黨だからつて御客樣が呑むのを知りつゝ菓子を出すのもたまの上陸に餘り氣がきゝませんから、其れでも一寸した御肴に御酢の物位で濟むからよござんす其の變り御酒はいくらでもと云ふのですもの二三度も續いて御覧なさい私の手許大番狂せです折角買と思つてくすれたショウルの代も消えて仕舞ます、然し皆樣元氣で歸つて御出でゝすから氣持はよござんすよ、宿ですかだめよ一合も頂くと最う赤くなつて仕舞つてやれ三味線を引けの琴をひけのと申て一人で浮れて居りますのさうかと思ふといつか高いびき、ほんとに御酒を呑むとた愛が有りませんのれ、宿は自分で進んで呑む樣な事は有りません。私達もかうやつて海員の妻に無つて居ればいろ／＼な心配致しますよ、浪さんとや

らの様に地圖こそ出され今頃はどこを走つて居られるだらうどうぞ暴風の無いようにとあの稻川の女房ぢやないけれど神佛にいのつて居ります、松島のやうな事も有りますからね、ほんとに船乘は出る時が別れと思はなければなりませんのです、いつでしたつけ、オヽさう〳〵一昨年の冬でした然も寒い夜吉田さんが顔色變へて飛で來て藤井樣の〇〇が沈沒したのですつてとうしたら好いでせうて仰有るのですもの驚きましてよ、副長の御宅が近所でしたから伺ひに上つたり方々聞き合せたり致しましたのよさうしたら跡方も無うそでしたの、實際こんな事云ひ出す方罪な方ですわホヽヽヽ思ひ出すと可笑しうございますよ其時の吉田樣の御顔つたら、今でも話しては貴女もですよと御互に大笑ひ致します、然しいつどんな事が無いともかぎりませんからね、あはてた顔見て笑ふ内が花でせう。服裝ですか矢張り短劍下げますよ上等兵曹から服がかはります准士官と云て判任官です兵曹長は高等官ですよ、今の御若い方々は海軍と申せば將校とのみ御思ひしていらつしやいますが兵曹だツて貴女武雄樣の樣にやさしい方も有りますよ、遠洋航海などの歸りには指環位買ても來ますよ、そんなに馬鹿に遊ばすものでは有りませんよ、エヽ矢張り用は無いと仰有るの、オヤ〳〵、あてがはづれましたね、では上等兵曹の方で少し學問の有るものをと捜して御出でゞすがいけませんね、御年は三十一で一寸文學趣味もあり御家も豐ですしスタイルとかも中々好くていらつしやいますよ、どうぞ御心當りもございましたら御世話下さいませ……あゝ最うよしに致しませう今日はほんとによくしやべりましてね、……藤井の妻君は年頃の娘を持て居ながら若い者つかまえてくだらぬ事をしやべる女だゝなんて云はれるとあのソレ宿に氣の毒ですからねホヽヽヽ御免遊ばせよ、では皆樣幾久しく御榮え遊ばしませ。

次に私が世話致しました姪の日記を盜み出しましたから秘密に御目に懸けませう。



あき子

下の臺所がガタ〳〵するので目がさめた、時計を見ると未だ五時、早いから床の中に居る暫くすると御隣りの水兵さんが歸艦るらしい大きな聲で向ふの家に下宿して居る人を呼んでオイ佐藤行かんか早くせおそくなるぞと怒鳴て居る、あゝ妾も今日は山本の上陸番だと思ふと最うれて居られなくなる未だ嫁たばかりで用の無い身は早いと思たが起きてしまう家と云ても八疊一間の然も二階借りだから戸を明けるにも窓と南のはき出しだけだ、ふとんを入れて一寸はき出す緣側にある七輪に火を起し土瓶に水を入れて掛ておく、洗粉を持て顔洗に降りて行くと下のお神さんがオヤ貴女お早いのねガタ〳〵し

てやかましいでせう家ぢや炊事所だもんですから早くてれと仰有るよい加減に返事をして顔を洗ひ土のおかまに火かけておいた米の水をかへて歸る土びんを下してすぐたく、お汁を作らうと思たけれど、めんだうだから昨夜の殘りの大根のにたので喰べる何だか御飯がクシヤ／＼してまずい事、今まで實家では多數暮しで七リンでたいたのなんか喰べた事はないさうしてにぎやかに御膳に向たのに嫁てから急に一人になつたのだから尙おいしくない上陸て居る時でも食事は船だから朝も夕もほんとに間がぬけて居る、それから御茶碗を洗て今日は好いお天氣だから上敷やら枕のくおひやら洗濯しようと思て降りて行たら下のお神さんが奧樣お洗濯ならこゝでなさいよ井戸ばたはこた／＼しますよと云て下さる、バケツを持て水くみに行たら上等兵曹の奧樣とかッて素敵なハイカラな方がいらッしやる、外にも二三人……下の神さんが昨日あの方ゐばるんですよさうして新しい方には倚ですと仰有たが道理でツンとして居る、いやだとは思たけれど上の方と思ふから、お早うございます好いお天氣でございますて云ったらお早うとヂロリと橫目で見た、で、ございますわ　えなかッた、准士官になるとあんなにゐばるものかしら、でもあの方もとはお茶やに居たとかッて云ふから……七時頃すッかり用を終る、それから髮を束髮になほすまあかろくなつたこと、丁度そこへ藤井の伯母樣



が近所まで來たからとて寄て下さる、奇麗に片付いてれとほめて下さッた間もなく御歸りなさる、午後下からお湯をさそはれたから龜の湯といふのに行く、若い小柄な橫顏の好い方と子供を連れた四十位の方と居た若い方は綺麗に白粉つけて出ていらしつた、歸りに小魚二疋ばかり買うきまりが惡かつた、家へくるともう四時、さあ大變だもう今に御歸りなさるだらうお湯をわかす、いつぞや藤井の伯母さんが山本さんは御酒を呑まないから秋ちやんは幸福よほんとに海軍には珍らしいと仰有た事があッたから今日は實家からもらッた唐饅頭をお皿に入れておくご飯を先に頂ふかと思てるうちに御歸りになる嫁てから九日になるが御迎へ申すのは今日で四度目、何となくはづかしい氣持がした、お歸りなさいませと云ふ、オヤ束髮かい、今夜坂井の家へ行て歸りに大瀧町へ廻つてこようと仰有る、お菓子出して上げて妾は急で御飯を頂く手早く片付て矢がすりの銘仙に同じ羽織を着るその間に山本は何をなさるかと思たら水をくんでやらうといつて降りていらッしやる、見ともないからととめてもお聞きなさらないで、ツいでにくつ下も洗つていらッしやる、よく洗濯の人が井戸端でシヤツでも何でも洗濯して居るのを見るがほんとに妾達は幸福だ、其れから戸を閉めて下に賴みて出懸ける一緒に歩くのはなれないから人が見るやうできまりが惡いから一間ばかりもはなれてゆく、(完)



世帶に馴るゝまで



紅花

妾が嫁いたのは未だ夫が東京の某省に勤めて居た時で、收入と云つては二十五圓の月俸の外には何にも有りませんでした。

が、只今と違つて物價も餘程安う御座いましたので、無論贅澤な眞似は出來ませんけれど、僅に夫婦二人の生計は立つて行つたものです、それに夫は二十五妾は十九と云ふ年ですから、先々の考が浮ばう筈もなく、只面白可笑しう暮したもので、お友達にひやかされなどすると、何だかぞく〳〵と嬉しう思はれたものです。

ある時も斯麼ことが有りました。

山川さんのお宅へ行つて來るつて、夫はお友達の所へお出でに成りまして、いつに無い其の晩は歸つて來られないので、大方御馳走にでも爲つて泊つたので有らうと、朝のお掃除を仕て居る所へ、ガラッと表の戸が開きましたから。

「お歸り。」と飛び出して見ますと。

「はゝゝ……。」と庭に立つて笑つて居るのは夫でなくて山川さんです、妾はきまりが惡くて仕方が有りませんでした。

「おや。」と云つたぎり、不審さに後の句が容易に出ません。

「中井君はまだ歸つて居ないのですか。」

と山川さんも不思議さうに仕ますから。

「何處かへ御一緒に？。」と聞きますと。

「はあ一寸、いや之れは何うも早朝からお邪魔仕ました。」

と、あたふたと惡いことを仕たと云ふ風で、お歸りに

なつたので、妾はふと妙な氣がさして、それと極つたことかのやうに、そこへ泣き伏しました。

　ところへ何氣なく歸つて來たのは夫です。妾は夫の面を見ると、俄に胸が込み上がつて來て、お恥かしいことですが、女の愼も忘れて仕舞つて。

「御愉快さま。」と云ふと。

「あゝ愉快だつたよ。」

と、あまり平氣なのが惡たらしいので。

「何方でお泊りでした。」と聞くと。

「何方つて山川君の宅へ行くと云つて置いた筈だが……
……」

　夫も妾の素振に氣附いたのでせう。

「はゝ……何か勘違ひ仕て居るな。」

と申されますから。

「飛んだ山川さんが有つたものですね。」

と妾がむきに成つて云ひますと。

「何だと。」と稍氣色ばんで。

「朝から何を云ふのだ。」

と云はるゝので妾も負けて居ません。

「だつて山川さんはね、ちやんと今朝お見えに成りましたよ。」

「山川が……。」

「はあ。」

「そんなことが有るものか。」

「だつて、それに違ひないのですから、もう何も彼も知つて居てよ、宜い加減に馬鹿に仕なさい。」

　妾は前後正體もなうわつと泣き出したのです、夫の辯解などは耳に入りません、とう／＼夫も怒り出すと云ふ始末で、やつさもつさの最中。

「中井君。」

とニコ／＼入つて來たのは山川さんと今一人は小西さんで。

「何う仕たのだ。」と夫から譯を聞いて。

「はゝ……愉快々々。」と小西さんはしきりに額を打つて。

「ちと藥が効過ぎたかな、いや奥さん。」

と、實は餘り夫婦仲が善いので、一つ調服しようと、夫がまだ寢て居るうちに、山川さんが宅へ彼麼ことを云つて來られたのだと聞いては恥かしうて怒るにも怒られず、御酒のこしらへを云ひ附けられたのを幸に、臺所へ逃げ込んだことが有ります。

こんな風でしたから、東京の所帶はまるで子供ごつこに過ぎなかつたのです、その頃のお友達なども細君を調服したり、人の死んだ電報をこしらへて一杯喰はしたり仕ては歡んで居たもので、今から思ふと阿房らしいですが、それが人を馬鹿にすると云ふやうな惡氣があつて遣ることで有りませんから、腹を立てることも出來ないと云ふ無邪氣な有樣で有つたのです。

それは〱隨分面白いことも多かつたのですが、妾が夫に言葉をかへしたのは其の調服に掛かつた時だけと云つて善い位ですから、三年と云ふ月日は愉快に過ごしたものです。

ところが、何でも秋の末つ方で有つたかと思ひますが、夫の郷里から。

アニキトクスグコイ

と云ふ電報が來たのは夜の十時頃でしたらう、何分國は讃岐と云ふ遠方でせう、ぐづ〱仕ては居られないと、其の夜の急行列車で、夫はあはてふためき東京を立つたのです。

それでも便利な世の中に成つたもので、翌々日の早朝多度津から、無事到着の電報が來ました。

越えて一日、又電報が來たので、開いて見ると、義兄はとう〱黃泉の客となつたと云ふ知らせでした、御兩親の嘆きや夫の愁傷は何んなに有らうと思ふと、妾は泣かずに居られませんでした。

義兄と云ふのは御上京の際に、一度お目に掛かつただけですが、まことにお人の善い方で、今年三十に成つても弟や妹が多いので、家庭の圓滿を缺いでは成らぬと、未だに獨身で居られたので有ります。

十日程經つて夫は歸京しました、が、いかにもくつたく顔を仕て居られるのが、何うも義兄の死去を痛まれて居る許りでは無いらしいので、妾は變に思つて居

ますと。
「大變な事に成つたのだ。」
と、ぐつたりさるゝので。
「えゝ。」
と驚いて、夫のお勞れも忘れて承りますと、眞實に大變なことが振り沸いて來たのです、と申しますのは夫は次男に生れて居なさるので、義兄が死んだのに就ては是非家督相續のために國へ歸らねば成らぬことに成つたさうで、あとには弟



も有ることだから、夫はそれに家を讓つて呉れと云つたけれど、御兩親は勿論親類の方々が何う仕ても承知しないので、已を得ず承知して歸つたと云ふことでは有りませんか。

妾は讃岐と云つたら西やら東やら知らぬと云つても宜い位で、また御兩親や御兄弟と云つたら、死んだ義兄を除いては寫眞で見た許り、そんな所へ行かねば成らぬかと思ふと、急

に心淋しく成つて、何とも知れぬ哀しみに打たれました。が、夫人の心を汲みますと氣儘も申されませんので、潔く承知しますと、夫は大層歡んで吳れましたが其の切なさと云つたら、たとへやうが有りませんでした。

この事を聞き附けて、驅けて參つた實家の母などは、死にでも行くかのやうに云つて、別れを惜んだものです。

五六日と云ふものは家の取り片附けにがたがた〳〵仕て、一たん實家へ引取り、さてお名殘に二三日は市中を見物することに成ると、妙なもので、平素左程までに思つて居なかつた町々まで何となう目新らしう、お茶の水の彼の學校の前に來た時は、今更のやうに哀しさが胸に込み上げて來まして、思はず顏をそむけました。

で、いよ〳〵出發と云ふ朝に成ると、御飯も咽喉を越さない樣な始末で、新橋の發車時間が丁度都合善く行つたのが却つて情なく、一層少々位怪我しても途中で列車に何か故障が起れば宜いにと思つたほどです。

それでも列車がだん〳〵西へ進むに連れて、幾らか悲しい思ひも薄らいで來ましたので、京都大阪神戸各市の見物は餘程愉快に思はれました。京都がお座敷なら大阪神戸は臺所でせう。玄關嚴めしい東京とはそれぞれ一風變つて居て、言葉のゝんびりと仕たところなど、初めて來た女の身には何となう嬉しう、殊に油を流したやうな瀬戸内海は兎ても關東では見られないので、神戸からの汽船が美しい島々の間をくゞりつゝ、多度津に着いて夜の明け方、艀船待つ間を甲板に上ぼつて見ますと、あたりの好景に氣がせい〳〵して洗滌でも受けたやうでしたが、最う此所から夫の郷里へは三里餘と聞いては大敵が前に顯はれたかのやう、俄に胸がどきまき仕ました。

夫の郷里は阪出と云ふ町で、其頃戸數は三千餘だらうでしたが、田舍の割には善い所だと思ひました。

この町は海岸に沿つて居まして、食鹽の產出が多い上に、近在から集つて來る砂糖を上方へ賣り捌く額が

、なかなかたくさんださうで、それらの取引に關係して居る商人達は又なかなかハイカラで、田舎臭ひ所が少しも無いやうですが、女の風は一體にじみで細君方は大方歯を黒々と染めて居ると云ふ有様でした。

そこへ妾のやうな女學生上がりのものが來たものですから、一時はハイカラとか何とか云ふ評判が高かつたやうですが、この風と云ふものばかりは、一朝一夕で崩されるものでも有りませず、殊に夫から注意も受けて居ましたので、ことさらに改めようとも仕なかつたものですが、何時しか東京風が臺なしに成つて仕舞



つたなどは後から考へても不思議なやうです、しかし家族に對する策戰計畫……でも有りますまいが、まあ心得と云ふやうなことには隨分心をくだきました。

家族は兩親はじめ義弟三人義妹二人それに近頃離緣に成つて歸つて居る姉と妾等夫婦の外に下男二人下女が一人と云ふ大勢で、迚も妾等には切り廻して行けさうにも思はれませんから、妾はあからさまに其のよしを夫に話しましたけれど、只笑つて居る許り、何とも被仰りません、と云つて今更逃げ出すことも出來ませんから、遣れるまで遣つて見ようと決心は仕ましたものゝ、われながら覺束なくて仕方が有りません、しかし外の事と違つて、左う／＼夫に一々申せるもので無いから、今までに見たり聞いたり仕て居る人々の成功や失敗の原因を考へては自分を顧るといふ風に仕ました、それが又確に妾を益したことが多いので、今に此の女學世界を愛讀して居るのも、人々の經驗談などを承つて置きたいからであります。

昔から小姑は鬼千匹と云ふでは有りませんか、今妾には其の小姑が六人も有るので、氣が引き縮つて來たやうに思ひますが、たとへのとほり實際世の中を見渡すと、小姑と仲の善い嫁は誠に少ないので、義兄が嫁を迎へなかつたのも無理は有りません、が、この事を耳にして居る妾には夫を安心さす責があると云ふことを痛切に感じたのです。

そこで、一ばん妾の目に止つたのは義姉です、ことに離緣に成つた譯は亭主が外に女をこしらへて居ることが解つたので義姉が苦情を云つたのが原因でごたごたが起つて遂に破鏡の悲しみを見るやうに成つたとやら、それは義姉にも惡い所が有つたかも知れんが、近頃のやうに男が女の操を重んじて呉れないのは如何にも嘆はしいことで、義姉なども氣の毒なお方だと思ひました、が、義姉はまた此の不幸に心がねぢけたものと見えて、隨分氣むづかしい僻が有るから、下女などは餘程嫌つて居るので有らう、まだ來て間もない妾にさん／＼こぼしたことも有ります。

實際、妾もこの義姉には同情をよせねば成らぬと早

く氣が附かなかつたら、或は其の間に面白からぬ事が起つたかも解りません、邪推すれば妾のする事爲すことに目をつけて、小言の一つも言つて遣らうと思つて居るのでは無からうかと、思へば思はるゝ樣なことも一度や二度では有りませんでした、けれど苟にも御兩親の丹精で折角女學校まで卒業さして戴いたものが、はる〲田舍に來て、人樣に後指をさゝれては再び東京へ行つてお目に掛かることが出來ようか、何でも此の義姉には同情を捧げて、同情に醇化せぬものは無いと聞くからには、義姉と妾とが一體のやうに成らぬとすれば、それは妾の同情が乏しいからであると、一にも二にも姉さん〲と解り切つたことまで、此の義姉に相談するやうに仕向けました。

　それに兄が嫁を貰つたときは妾も未だ實家に居て覺えが有りますので、弟や妹には不自由の思を爲せては成らぬと、夫が極く無頓着の方でしたから、義弟義妹の衣類などをも始終義姉に相談して、時に夫が面白半分でせう、反對することがあると、むきに成つて爭つたことも有ります。

　妾が今まで、たび〲聞いて居ることは。

「宅の兄さんは義姉さんが來て、すつかり人が變つて仕舞つた。」

と云ふ小姑達の小言です、そこで妾は何うぞ夫に斯麼非難を受けさしたく無いと思つて、隨分苦いことも我慢しました、とは云ふものゝ肉身同志さへ永い月日には事のあるもの、と思へば義理の間柄だけに却つて辛棒も仕安いやうに感じました。

　妾の經驗に依ると、まあ一ケ年です、初めの一ケ年さへ小姑に誤解されないやうに、務めて、お互の融和を計つたならば、後は最う樂なもので、妾のやうなものゝ足らぬ勝ちに盡した結果、義姉が一年餘で誠に親切な義姉に成つたことを思ふと其の嬉しさは又格別です、それに東京の生活は誠に氣樂なやうでしたが、翌年長男が生れた時、これが東京で有たら、嘸困つて居ることで有らうと思つたのは産後の病氣です。

　生兒の世話から、妾の看病まで皆小姑達が親切に仕て呉れて、心置なう養生することが出來たので、小姑は鬼どころか佛のやうに思つたことでした。



私の見た神戸の奥様

物集芳子

神戸ッて甚麼所だと仰しやいますの、然うですねまア乳母車の立派な處よ、私は明日から當分の間他家へ預けられる事になりました、夫れは何日もお話する夫人で大層交際もお上手なら、家事經濟にも勝れていらッしやるさうで、然ういふ方のお傍に居て働きぶりでも見たら少しは身の爲めになるだらうといふ譯なのですよ。

○

私は夫人のお室に同居といふ事になりました、十疊のお部屋で西洋簞笥が三ッと書棚だの本箱だのごたごた並んでゐる眞中にミシンが出してあるのですよ、柱には日課表と黑板が掛けてあッて、黑板には、、、しッかいやを呼ぶ事、オイスタアクリーム、子供の足袋カヴアと書いてありました、かなり大きな紫檀の机と隅の壁の方に椅子と机があッて夫人は凡そ二三十も付いてゐる鍵をヂャラ／＼帶に下げてゐられます、眞個のお年は知りませんが見た處は廿八九よ、何處となくハイカラな背の高い眼鏡をかけた方です、直ぐ次の間が化粧室になッてゐてお湯殿と連ッてゐるの、夫人は一室一室案内して下さいました、何處を開けられても好いやうに綺麗に片付いてゐますよ、女中部屋には女中の規則書といふやうなものが壁に張ッてありましたッけ、一週間に一日づゝ交代ッて休日を與へる事、食物を粗末にせぬ事、その他來客に對する心得などくだくだ書いてありました、新しい女中には一々夫人が夫れを讀んで心得させるのださうです。

恰度今日は着物の入れかへで多忙しいですよ、一枚一枚叮嚀に疊直して、肩の折り目へは眞綿を細く入れ紋には薄い紙を挾んで、殊に黑紋付などには柔い布を

當てゝ縫ひつけました、紋がすれるし自然と又染色が出て汚れるから夫れをふせぐのですよ、帯も山が痛まないやうに折り目折り目には矢張り眞綿を入れました、夫れから丁字を白い袋に入れてお手玉のやうなのを幾箇も拵らへて簞笥の中へ入れて、さア是れで好いとなつて鍵をかけるともうお晝になりました。

　隨分お洒落で身の廻りの事になると夢中になる代りに、着物の手當ても却々行き屆いて大切にします、此處の夫人なんかは一寸の散歩にもお召縮緬位の着物、買ひ物にも訪問にも會に出るのも皆お召縮緬と定ッてゐて、その上は模樣物の紋付になりますの、其間も物は持ッてゐても着ないし、小紋縮緬だの紋お召などは幾襲もありますけれども流行遲れで着られないと云ッて簞笥の底に仕舞ひ込んであるんでせう、是れでも經濟家なのか知らとおもひます。

　午後になッてからしッかいやが參りました、夫人はあゝ然うかい此處へ直ぐ通しても好いよ、との事で私は何が入つて來るかと思つてゐましたら染め物屋でした、敷居際に手をついて二度許り平蜘蛛のやうになッて、ゐる頭から、相變らず待たせるのねと夫人が微笑まれるのを一々恐縮し乍色本だの見本だのを澤山出しました、夫人はもう夢中になッて彼れは奈うの、是れは不可ないの、長襦袢柄だの帯柄だのと難かしい事を云ッて、今年は御年始着を拵らへる譯に行かないから、去年のを染め返して間に合せやう、模樣だけ生かして色を變て貰ひ度いと云ふ事と、例の簞笥の中へ仕舞ひ込んであッた着物をそれ〴〵すッかり染めかへる事になッたの、小紋縮緬は友禪にして長襦袢にしたり、羽二重地の物は縱にしぼらせて絹縮のやうにして縞を置くとか、是れならもうまるで地合からして異ッたものとなるんだから成程と私も感心して仕舞ひましたよ、上手なものだと思ひました。

　三時に皆揃つて二階の西洋間で珈琲と夫人のお手製のカステーラと甘くないワップルを食べました、お揃のクリームサージの洋服を着たお孃さんが二人、八つださうですが、背が割合に高くつて可愛いの、夫人の

理想通りに育てるのだと云つてらしやいました、今からもう學校が退けると英語のお稽古やら音樂だのッて却々多忙しいです、もう少し經つと又針もそろ／＼始めさせるのだッて云つてらつしやいました。

○

今漸つと落付きました、今日は婦人會が此家の家であつたので、今迄ごた／＼して仕舞ひました、會員は僅十二三人ばかりのやうですが、夫れは／＼仲が好くつて宛然久し振りで姉妹が寄り合たやうですよ、形式的な處が少しもなくつて見てゐても氣持が好いです、順番で誰樣かゞ有益な問題を出すといふやうな規則があります、而して一體皆さんのお話つて云ふのが經濟の事とお子さんの敎育の事とで持ちきりでした、而して仰しやる事は私はもう此地に來てから十年になるの、今年で七年目だのと云ひながら、何れは東京へ歸つて落付く氣でゐらつしやるらしく、今は斯うしてゐるがといふやうな樣子が見えるので面白いと思ひましたよ。

家の子供は何處の女學校へ入學やうかと思つて今から夫れが心配でねといふ方がありましたが皆さんも全く同感だといふやうな事を云つてらつしたからお幾歳位かと聞きましたら大抵まだ七ッか八ッですよ。

何と云つても惣領子は親の自由にされて仕舞ふのね、昔なら親父樣や親母樣の玩具にされるのね、珍らしいのと面白いのとで自分の理想通りに否でも應でも育てゝ仕舞ふとするから面白いんですよ、夫れが二人三人と段々多數になつて來ると、もう好い加減子供にも飽きて來るし面倒になつて仕舞ふから、敎育敎育つてやかましく騷いでゐた人も識らず知らずの內に放て置くやうになりますのね、子供の身になつたら却つてその方が自由で好いかも知れないけれどもそれでも困りますわね、夫れかと云つて親が好いと信じた事なら何でも彼でも好いとして押し付けられるんぢやア堪りませんね、此家のお子さん達も夫人がやかましいから却々自由な事はさせません、一々規則で縛られてゐるんですからね、此の間もお孃さんが私は音樂なんか大

嫌だけれども母さんがお好きだからしなきやアなりませんねえッて泣顏して仰しやると夫人は小さな手を握ッて、然う〳〵、音樂は嫌ひでもやつてる內には好きになりますよ、而して今に上手になつたら音樂で母さんの心を慰める事が出來ますよ、つて云つてらしつたつけ。

○

今日は洗濯日で朝から夫人始め襷がけになッて、一週間中にたまつてゐる足袋だの肌着だの白い洗ひ物を裏の大釜で煑てゐます、その間にめりんす物だの一寸した絹物なんかは椿のかすで洗つて、少し急ぎだからといふので直ぐしんし張りをしました、私が黙言つて見てゐると夫人が傍へ來らして、よく覺えてゐらッしやいよ、一々紺やへやッちやア堪りませんからねッて白い物を晒したり青味を掛けたりして一通り片付くと今度は染物が始まりましたのよ、私は馴れないから、だけれども染物は面白いものですよ紺やにやつたのと同じ事で手にも付かず、ムラもなしによく染りますよ、夫人のお羽織の裏の羽二重の色の褪せたのを褪紅色に染めかへしました、夫人のお話では斯うして自分で染めたり洗濯したりするのは人が見たらば眞の道樂とか、お慰みだとしか見えませんけれども、是れが却々經濟になるんですよ、少し面倒だけれども無精をせずに手まめにさへすれば分はないんですからね、と夫人は夫れよりお働きなさいます、何しろ家中の裁縫は人手を借りずに縫はれので、日曜日だけは皆揃つて遊びに出掛けるのですよ、

夕方琉球人のお鶴さんにお龜さんッていふ十七八の娘が反物を背負て賣りに來ました、夫人に甘へて今日は不要いから又來てお呉れと云ッても却々歸らないの、變な髮に結ッて變な着物を着て、細帯一つでゐるんでせう、何故那麼なりをしてゐるのッて聞いたら斯うしてゐないと眞實の琉球人と見えないからだッて、商賣のためだからと云つて若い身空で恁麼妙な風をしてゐなければならないのかと思ッて氣の毒でしたよ。



幸福を疑ふ妻の悶

ちどり

小間使の瀧がお背を流してゐる間に、私はお姑樣の御召を彼此と揃へて、お上りになるのと入違に綾子さんとお湯にはいる。此人も最う十五にもなるのだけれど、お年寄のお側にゐて極稚幼い方だから、心は疾に歌舞伎座に行つてると見えて、何もかも私の手にかゝる。だけと、私だつて此家へ來る一昨年までは、手足の先までお母樣にお世話を燒いて頂いたつけと思ふと餘り豪い事もいはれやしない。もう時間も迫つてゐるから身仕舞も大抵にして、

「早く上つていらつしやいよ、直ぐお召を着せて上げますから。」と一足先に湯殿を出る。

着て行く着物はちやんと瀧が揃へて置いたから、先づ化粧部屋にはいつて大姿見の前に立つて見る。寛げた襟の間から御園の香がぱつと立つて、白い頸筋かけて頰へ暈したやうな白粉のあと、遂我ながら恍惚する。學校にゐた頃から、(ゆみ子さんは學者風がお似合遊ばすよ)なんて皆樣がお冷かしになつたつけが、今日の束髮はふつくりと庇が出て殊に似合ふやうな氣がする。どつちかといへば私は根下りの髷の意氣なゝりをするより、同じ事なら高尙な作が好き、其方がいくら人柄がよく見えるでせう。やたらに藝者の眞似をして得々として被在る方があるけれど、私にはその御心がしれないわ。藤崎樣の奧樣なんか其お一人よ。お言葉なら身のこなし。――あの、人をチャームする樣な目を遊ばして態とらしい作聲、思つてもぞつとする。然しそれもこれも殿方の多くが其方を御好きになるのだから仕方がない。

うつかりしてゐると、
「お姉樣、其髮櫛隨分よくうつゝてよ。蒔繪の中の石が、お動きになる毎に光る事つて。」綾子さんが何時の間にか出て來てゐらしつた。襟脚をなほして上げやうと鏡臺の前にお連して、外して置いた五吋巾のミルク色のリボンを一の字にきゆつと結ぶと、眞に可愛いゝ事。括り腭の小い口元など御兄妹とて旦那樣にそつくり、遂鏡に寫るお顏を覗込むと、目と目が其所で合つたので一緒にホヽヽヽ。
「ね、「娘道成寺」つてどんな事するのでせう。」
「何でも花の咲いてる所で皆で踊るんださうですよ。」
「それぢや、綺麗でせうね。」
「えゝ。」
今日の樣子を想像すると、又顏見合せて莞爾して仕舞ふ。一體里のお父樣がお厳しかッたので、私は芝居見物など餘り好きでないのだけれど、今度のは慈善興行で止を得ない上、お姑樣も近々葉山へおいでになるから、進んでお伴する事にしたのだが、さうと極れば矢張嬉しくて氣が急かれる。
私が見立てた友禪縮緬の振長い二枚襲に純白の襦袢の襟を揃へて帶は思ひきり目覺めるやうな褪紅色、銀泥で鶴の出た厚板を胸高く立矢字に結ぶと、御容貌よしの綾子さんが又更に見違へるやうな令孃振、
「お母樣のお居間へいらしつてお目に懸けて被在いまし。私も直參りますから。——あゝお召が平常より長めいてありますから下褄をお蹈みなさいますなよ。」つて思はず後から見送りながら、今度は自分の仕度に取かゝる。上下對の霞お召を二枚襲ねて、此間出來たばかりのあやめ織の丸帶は桔梗取で私の好み。急いでお姑樣のお居間に上ると、旦那樣迄被在つて、
「やアすつかり滿艦飾が出來たね、」なんて。
「あら相變らずお口が惡い……。」
「ほゝゝゝ、もう俥の仕度もいゝさうですよ。」つてお姑樣は只笑つて被在る。

○

「どうも失禮、ようこそ御遊方をね。さアどうぞお敷

き遊ばせ、隨分外はお寒いでございませう。」と桐胴の火鉢をお進めになる芳子さんは、御兩親の御秘藏つ子で級でも幼くいらしつた方とは思へない程、遂二三年お目に懸らない中にもう全り奥樣じみて、御應對振のお上手におなりだこと。

「どうかもうおかまひなく。ちつとも知らずに居りましたら、此邊にお引移の事を今日遠山さんに伺ひましたので、序と申しちや濟みませんが、御近所まで參りましたものですから遂伺つて見る氣になりましてね。」

「まアよくね、どうぞ御緩り遊ばして下さいましよ、お久し振ですもの。」と心から嬉しさうに仰る。ほんにお別れしてから三年になる。さう思へば女は意氣地のないもの、あれ程親しくしてゐた仲も一度他家に行くと、居所も知らずに過してゐるんだもの。

親しい仲の何時か膝と膝とが觸れる程接近して、話は學校時代と違つて流石にしんみりとなる。程よくおこつた炭の香がえならぬ香水の香に打交つて、何所までもお手の屆いたお部屋の中は春のやう。芳子さんは少しお窶れの見えるお顔をぽつとなすつて、あの落付いた御樣子でつゝましやかにお話になる。そんなお噂は伺はないでもなかつたけれど、餘りなので、

「ぢや隨分御苦勞ですわね。お察し申してよ。」つて今更お身の上がお氣の毒でならなかつた。いくらお優しい旦那樣をお持ち遊ばしたつて、それぢや差引零になるわ。お年を召していらつしやる癖に、一寸でも旦那樣のお側に被在ると、

「今の若い者には困る。暇さへあれば……」なんてよくまア。矢張お燒けになるのかしら。食物だつて召物だつてお氣六ケしく、第一束髮が大のお嫌ひ、其上西洋料理は匂もいや、今風の小説なんか見るも汚らはしいと仰るんですつて、如何にお年寄でも餘りだわ。私なんかならすぐもうかつとなつてしまう。お氣の優しい芳子さんなればこそあゝもして見やうかうもして見やうとお務めになるのだけれど……。でも今に赤さんでもお出來になれば少しは和ぎも取れやうとも思つて、「いつそ御辛棒序にも少し御辛棒遊ばせよ」つてお


FINE TIME

慰め申す。あゝそれを思ふと私の身など勿體なさ過る。斯うしてゐる内もあのお優しいお姑樣に遲いつて御心配を懸けちや濟まない。殊にお氣象の多い芳子さんに此上種々御厄介を懸けるも御氣の毒と早々にお暇する。

「もうお宅もわかりましたからちよい〳〵伺ひますよ、貴女も是非御出下さいましな、ちつとも御遠慮のいらない宅で御座いますから。」と待たせて置いた俥に乘つたのは冬の日脚も早暮近い四時頃。

護謨輪の乘心地よい俥の中に身を置きながら、毛のショールに頰をうづめ、兩の手はマッフに任せて、ぼんやり他樣の事や自分の身の上を考へ込でしまう。ああ私は何ていゝお姑樣を持つたのでせう、嫁いで三年一度だつて嫌なお顏を見た事もなければ氣まづい思をした事もない。年中莞爾々々遊ばして、あの御目ざしのお優しさ。一も二も遊美子〳〵つて此樣な不束なものを御力にして下さる勿體なさ、生の母樣と何所に違ひがありませう。それに親身よりも慕つて下さる綾子さん、お姑樣に叱られても〳〵甘えて附纏つて下さるのを見ると、私は何だか嬉しくつて淚がこぼれてしまう。成程芳子さんに比べると旦那樣のお身持がもの足りないけれど、それとて絕えずといふのでもなければ私に辛く遊ばすといふ譯でもなし、只御心多い御性質から遂……。反て私こそそれをいゝ事にして我儘のありつたけ、時には隨分思ひ切つた振舞も御眼に入れるのに遂御怒り遊ばした事もない。思へば濟まぬとは知りつゝも矢張其所が女だもの……。あゝ芳子さんの樣なお堅い旦那樣を持つて、彼方の御心配は露御存じないにしろ、お姑樣からはお箸の上げ下しに迄睨まれて被在るあの方と、斯うした身の私とどつちが眞に幸福なのかしら。折々は六ケしいお姑樣のお仕打に泣いても旦那樣のお優しいお手で慰めて頂いたら……。あゝそれも私の上知らぬ慾かしら。さう思ふにつけ昔の儘のなつかしい梓樣だつたらとあの頃が戀しくなる。

○

お姑樣は明日愈々葉山の別莊へ御避寒になる事に極

つたので、家の中は何となくごた〳〵してゐる。何時もなら綾子さんの學校のお休をお待ち遊ばして御一緒に被行るんだけれど、今年はお寒さが早いから一日も早くと岡本さんの御心付けなので斯う急に。――あゝもう、明日からは家の中が急に淋しくなつてしまう、世間の方は一日でもいゝからお姑樣のお側を離れたいなんて仰るけれど、私には一寸のお留守も淋しくつていや、彼方へお出の二三日は乾度忘れてお部屋の襖を開ける位なんですもの。

　お年を召して被在るにつけても成丈輕くて暖かいものをと、眞綿ばかり澤山はいつたお召物を幾揃、お胴着やらお被布やら、お足袋も新しいのゝ外に洗濯ものでも數多くと揃へて、仕殘りのお襦袢の襟を懸け換へて居ると、森永に注文して置いた西洋菓子が色々屆いた。後は松屋から來るものばかり、お使の花やはまア何をしてゐるのだらうといら〳〵してゐると、

「大層待たされましたんで遲なはりました。だつて私が參つてから火熨斗をかけるんでございますもの。」とせい〳〵云ひながら這入つて來る。

「おやさうだつたの、御苦勞でした。」

　まアさすがによく縫へてること、此裏地のお品のいいつたら布で見た時よりはずつと引き立つて見える。お着せ申したらさぞと思つてゐると、瀧が小走りに來て、

「あの園田樣からお電話で一寸奥樣にと仰います。」

「さう、ふじ子樣から、――何の御用かしら。」

と忙しい中でもなつかしく針の手をとめて立上る。あ、乾度明後日の會の御召の御相談よ、あの方も隨分呑氣やでいらつしやるわ。

　むつとするやうなストーブの暖かさに加へて、壷のやうな電燈の光は、お姑樣の御出立をお祝ひ申す小宴の卓を鮮明に照す。室咲の梅の四邊に薫じて只春のやうな心地の部屋の中に、外の木枯も夢と聞きなす親子四人の睦ましい團欒、お料理は私が手づから心を込めた品の數々、お姑樣のお歯に合ふのを主とした日本料理が多い。旦那樣は早微醉の、でつぷり太つた御身を安樂椅子によせて、とけさうなお目で葉卷の煙を見て

被在る。柔かものゝお召を二枚重ねた上に、先刻出來上つた市樂のお羽織召したお姑樣もお嬉しさう。

「お姑樣、綾子さんがお休みになりましたら御一緒に私も上りますわ。その時は又お土產を澤山持つて參りますよ。」つて云ふのを側から旦那樣が、

「ハヽヽ遊美のお土產なんか御母樣信賴になりませんよ。折角持つて行つても參上つた上で屹度綾と二人で頂く方が多いんですから。」

「まア　姉樣、なんて兄樣の御口惡なんでせう、まさかねえ。」つて綾子さんはやつきとなる。お姑樣はお嬉しさうに例の御目の皺を深くなすつて、

「お前達のお出を樂しみに待つてゐますよ、お正月も近くつて忙しからうけれど、暮の内に一寸でもいゝから屹度ね。遊美がゐないと萬事手が屆かなくつて……………。」と心からいつて下さる。何だか座がしんみりとして來た。

「あ、一つお慰みにお琴でも合せませう。綾子さん、あなた千鳥もうお上げになつたわね。私換手を彈きますからあれを。

「えゝ、ピアノならすぐ此處にあるけれど……、母樣には矢張お琴の方がいゝでせうね。兄樣、憚りですけれど……。」と呼鈴をお指しになる。

「無藝大食とあつて僕はベル鳴しか、ハヽヽ。」と椅子の儘お體をおそらせになつて、すぐ後の呼鈴を强くお押しになると、遠退く木枯の音に交りながら、下部屋の方でチリ〳〵〳〵〳〵

○

旦那樣は昨夜遂々御歸館がなかつた。夜一夜眠みもせずお待ち申した私の心も御存じなく、何所の誰と差向ひのさしつおさへつ、粹な爪彈に逢うたゝ寢の膝枕……あゝ屹度々々家の事なんかお忘れ遊ばして被在るのよ。お姑樣がお留守になるとすぐこれだから嫌になつてしまふ。如何せ私は無口の不粹もの、藝者やなんかの樣に人樣の機嫌氣褄を取る事なんか出來は致しません、此幾年の間高等な敎育を受けさせて下すつて、何一つ人に見劣らぬやうにといやが上にも仕込んで下

すつた御両親のお心盡は、そんな事で良人にお仕へしろと云ふのではないのです、今更舊弊もの、者なんぞの眞似なんかとても……。涙が胸を突いて頬に溢れる。

小春日和の暖かい日影は居間の半迄さし込んで居る。机に凭れて見るともなく庭を眺めて居ると、何處から來たのか可愛いゝ四十雀が二羽逸目の前の袖垣に羽うち交して遊んで居たが、果は打ち連れて池の汀に飛んでいつた。葉といふ葉は皆落ち盡した木々の梢は、何所を見ても冬枯の淋しい感がする。あゝ過し昔が偲ばれること。マアガレットに巾廣のリボンを嬉しがり、流行の靴に裾短かな袴を穿つて、朝な〳〵通ひ馴れた學の庭！其頃はまだ世の浪風も知らぬ身



の、女學館の花と唄はれるのを此上なき胸の誇として、只管君が凛々しい角帽の御姿に思ひ憧がれたつけ。忘れもやらぬ一年の春、朧に霞む春月の光を只二人欄干近く浴びながら、しめやかな御物語の果ては優しき君が御手の何時しか我撫肩に……。あゝ其時の戰ぎ！胸の血潮も湧き返り、月にも流石面はゆかつた。やがて待ちに待つた結婚の式も滯りなく終へて、樂しかつた蜜月の旅の山や川、――今猶目の前に浮んで來るものを、旦那樣の御心には何時か秋風立つて此頃の御身持、實家のお母樣がお聞きになつたら嘸やさぞ御心配遊ばすことだらう。遂一度手紙の端にだつてそれらしい事は聞え上た事はないから、矢張背の儘にいとしがられて幸福でと喜んで被在るだらうけれど……。けれども御安心遊ばせ、私は此家に嫁ります時の御敎訓はよく〳〵心に銘じて居りますから……。

「あら、婆や、唐突にびつくりしたわ。」

だつて何時の間にか障子の際に立つて居たんですもの。私は眞に極が惡かつた。

「奥樣又何をお考へ遊ばして被在います。今朝もお箸ならお取りにならないでお下げになりまして、如何やらお顏の色もお宜敷くはなく、何時もの御頭痛でも遊ばすのぢやございませんか。」と心配さうに側に坐り込む。

「如何もしやしないのだから心配おしでないよ。昨夜ね、御本に讀み耽つて遂々明方まで起きてたものだから。」と云つたつて駄目、澤山女中も居る中で幾ばかりはよう〳〵私の心を察して、

「旦那樣も餘りで被在います。お學問なら御器量なら申分のない奥樣をお持ち遊ばして被在りながら、何が御不足で御心多くなさいますのかと婆やはあなた樣が御いとしくつて。」慰める所か何時も自分が先に泣いて呉れる位ですもの。

「遊美さん、まだお前は怒つて居るのかい、偶には交際で外せない事もあるぢやないか、然しね、何れを見ても山家育、遠く遊美子夫人に及ぶ奴はないから安心し給へ。」など〳〵何がお嬉しくつてか一人悅に入つて致

在る。餘り人を馬鹿になさると口惜しいから、

「いゝえ、どう致しまして、お交際ですもの御無理はございません。私なんか斯うして三度三度御飯さへ食べさして頂いてれば、此上何を申上げませう、何卒御遠慮なく……。」と厭味交りにつんとすると、

「やアあやまる、早く歸らうと思つたんだけれど、遂醉ひつぶれて仕舞つたんだ。まア怒らないでお呉れ。」つてすぐ折れてお仕舞ひなさる。今日こそと胸に疊んで置いた事もあるのだけれど、御顏を見ると流石に十ケ一も云はれない。

「だつて餘りぢやありませんか、お姑様がお留守になるとすぐ斯うですもの、もうよござんす、たんとお好な所へお通ひ遊ばせ、どうせ私の樣なもの疾の昔おあき遊ばしたんでせうから。一寸意氣な端唄の一つも唄へて、貴郎やなんて甘つたるい事をいふのがお好きで被在るのよ。」

「だから詑まつてるぢやないか、これからは遲くなつても屹度歸る事にするから機嫌をなほしてお呉れ、まア是を御覽。」なんてポッケットから絹ハンケチに包んだ品物をお出しになりながら、

「遊羨さんにやらうと思つて此間白牡丹へ跳へて置いたのさ、もう大抵出來てる頃だと思つたから廻り道して寄つて見たら、丁度出來て居てね、恐れ入るからお屆け申すといふのを、一寸も早く喜ばせたいと思つて持つて來たんだ。これでも薄情だつと云ふのかい。」つていきなり私の手をお執りになつて、細輪の石入りのを無理に左の無名指に。まアお歸宅にばつがお惡いものだから。

「おや、お門が違や致しませんか、これは芳町の方でせう。」つてすぐ外して放つてやつた。私そんな〱なま〱した事なんか大嫌ひ、然し格好といひ石の工合といひ餘程未練があつたけれど、でもはづみだから仕方がない。

あゝこれでも私は芳子さんより幸福か知ら！

古女房の日記

あき子

ある夕べ何かなし淋しくなつたので、ふと本箱を探ぐつて見たら古雜誌や種々と這入つて居る中に三年前良人と共に東北の或る地方に居た時の日記が出たので其中の一節を見たら恁んな事が書いてあつた。

十一月九日　土えう日　晴

兩三日來降りつゞいだ秋雨は昨夕から晴れて今朝、霧が深い、晴れる日のあさ霧の深いのは當地の常だけれど今朝は又格別、一尺とはなれると何にも見えない位、寒さも大分增して來た。

「今日は今に必然天氣になる」と有仰りながら良人は御出勤、玄關まで送つてから、竹に和雄をつれさして榮町まで使ひにやつて置いて東京新聞に一通り目を通す、べつに面白い珍らしい記事もない。

良人の仰有つた通り十時頃からすつかり晴れてうらゝかな秋の日は南向きの座敷に一ぱいさして心地よい靜な暖い日だ、和雄の祝着を一日も早くと精々針を運ばせて居ると、誰人か玄關の方で訪ふ聲がする。竹に取り次がせると澤田樣の奧樣だ。

「御座敷の方に御通し申しておくれ」と云ひつけて一寸羽織着かへて御挨拶に出る。

「餘りにいゝお天氣なのでぶら〳〵散歩ながら」と有仰る相變らず御血色がお惡るい。だけどお子樣がないのでお若い事、おなりも思ひ切り華美で什う見ても私より五つ上の二十八とは受け取れない。あらい縞御召に紅の這入つた長襦袢召して御羽織は流行の桔梗納戸色の縮緬、兩のお手にはいくつもダイヤが輝いて居る。ほんとに羨しい事。澤田樣の如に流行物がどし〳〵出來たらさぞ滿足だらうと思ふ。

でも始終御病氣勝ちで床をはなれて居らつしやる時八月の內數へるほどしかないとの事、それも旦那樣がよからぬお遊びに耽つて御宅にかへらるゝ事も稀な由で、それが原因での御病氣だとか。

それから思へば私などダイヤの指輪も何にもないが良人が優しいので幸福だわ。物質的の幸福より精神的の幸福が何よりだなど御話しながら考へる。例の通り衣服や髮飾りの御自慢話。

「近頃東京では束髮は餘り流行しないで丸まげが流行るさうですつてれ、着物の色も納戸がゝつたのが一番多く出るさうですよ」つて有仰る。

よくもこんな山國にゐらして東京の事など委しく調べられ

ると感心しながら伺つて居ると竹がお茶やお菓子を運んで來たので御話は止む。

一時間ほど御話なされて御歸りになる。勝手で又和が何か駄駄これて竹を困らして居るので奥へ連れて來て遊ばせながら縫ひかけの仕事仕上げる、四時頃から夕飯の仕度手傳つて居ると良人が歸られたので樂しき晩の食卓につく。此頃は割合ひに和雄の手がはなれて來た。廻らぬ舌で片言にもの言ふのがほんとに可愛い、東京の母様御らんになつたらさぞ大騒ぎしてお可愛がりなさるだらう。良人は餘念なく和雄の食事を世話焼いてゐらつしやるさも嬉しさう。そして、

「明日東山温泉に紅葉でも見に行かふ」と有仰る。

「まあ嬉しいわ。私かみが損れてる什うし様今からちやかみ結もおそいし。いゝわ自分で束髮にして置かう」つて獨り言して居たら。良人が、

「今から何だ、髮など什うでもいゝぢやないか」

竹もお給仕しながら笑つて居たので何だかきまりがわるかつた。夜和雄が寢てから母様への手紙かく。

「あした寫眞器お持になるのでせう、私乾板入れませうか」

新聞見てゐらした良人に伺ふと、

「僕が入れるからいゝ、お前なんかゞ入れたらすぐ光線が這入つて駄目だよ」つて。

「あら、私だつて乾板の入れ方位知つて居るわ」

先刻澤田様に頂いた林檎をむいて良人に上げながら御見えになつた事を御話する。

「あの方いつも御血色が悪るいんですれ」

と言つたら、

「澤田、今日も會社から直ぐ妾宅に行つたようだ。妾だも氣の毒だな顔色も悪るくなりや病氣も出るだらうよあれぢやあ。什うだ僕も少し澤田の眞似してお前を困らしてやらうか」なんて有仰る。

「いゝわ何とでも有仰い」

餘りだから澄ましして居たら。

「奥様は立腹ですかこれは恐縮」なんて有仰るんだものいやな方だわ。

十日　日えう日　晴

昨日のやうな霧もなく朝からいゝお天氣常より少し早やく床をはなれて朝飯もそこ〳〵とすませて仕度に取りかゝる。良人の衣服は寫眞器お持ちなさるのだらうと思つて洋服出して揃へておく。眠つて居た和雄を無理に起して着物着かへさして居ると車夫が早や來たので直ぐに東山へと走らす、町から丁度五町ほど途中の稻田は見渡す限り黄金の波を打つてる、最早や刈入れのすんだ所もあつた、遠近の山々は薄い朝霧に包まれて

また眠りから醒めぬような風情だ、宿についたのは十時前、直ぐ温泉に這入る、まだ一人も居ない、近頃新築した湯槽は悉皆石で造つて、見るから心地よい、足の先の爪まではつきり見えるほどきれいなお湯。和雄は。

「山おぶぼちや〳〵」を繰かへして喜んで居る。

硝子を透して窓から見える川で十七八の若い、宿の嫁らしい女が細帯の寢卷姿で何か洗つて居る。それが弱い日光に照らされて秋の山と調和して畫の様に美しく見えた。上る時分に二三人泊り客が寢ぼけ眼で這入つて來たと思ひがけもない其中に秀様(良人の從弟)が賤子さんと美代ちや連れてゐらしやるではないか。御互ひにかほ見合せて。

「オヤ〳〵」「あらまあ」と言ひ續けだ、良人が

「實に奇遇だれ、何時宿地に來た?」

と御聞きになると。

「急に思ひ立つて昨夜終列車で着いた、直ぐこゝに來たので君の宅にしらせる暇がなかつたから明日突然に行つて驚かしてやらうと思つて居たのだ」

なんて秀様の人が悪い事、私も嬉しくて〳〵仕様がない何だか丸でゆめのやうだ、

「まあ少し見ないうち美代ちやんの大きくなつた事れ、美代ちやん、おばさん忘れたでせう」

「…………………………………………」

「美代ちやん幾年?」

私が聞くと片手を擴げて。「これだけ」と言つてニコ〳〵笑つて居る賤さんが

「女のくせにあばれて困るの、和雄ちやんこそほんとに大きくなつたのれ」

おなじやうな事二人で繰りかへす何しても嬉しくつて仕ようがない宿の女中に命じて部屋を一緒にする良人と秀様とは東京の話やら會社の事やらしきりとしてゐらしやる、私も負けずに賤さんと御話する。美代ちやんが姉さんぶつて何か和雄にしきりと云つてるけれど和雄はたゞ驚いたようなキヨロ〳〵と私と賤ざんを見較べて居る、それが又なく可愛くつて賤さんが抱いたら急に泣き出した、見馴れなかつた故だらう、竹に被して庭の方で遊ばせる。「妾も一緒に行きませう」チヨコ〳〵と美代ちやんが走つてついてゆく、人なつこい可愛い子。晝飯は鯉こくや鯉の洗ひ。生鮭の照燒きなんど、例の通り食るものがない。

「宿地しいゝが食ふものがないには閉口するれ」

秀様が有仰ると

「君、こんな山へ來て食物の事云ふな野暮だよこれでも交通が開けてからよくなつたんだ、昔はれまぐろなんか見る事も出來

ないで偶におればヒリヽとする位なのが一番の御馳走つて云ふ處だつたと、云ふんだもの」

「おばさん、和ちやんねお庭いや〳〵つて云ふのよ妾がだましてもきかないの」

遊んでた美代さんが私のそばに來て云ふ、

「まう什うもありがたう。竹やにれ連れてお出でつてさう云つて頂戴な。」

「ハイ――」

市康のリボン結んだお下げの姉さんらしうチヨコマカと往つたり來たりして居る美代さんはほんとに可愛いあし私も女の子がほしいと思つた。

午後皆して後の山に行く。思つたより高く急な道で閉口する。暁るんも困つて居る様子秀さんや良人は私等を置いてどんどん先へ行つてしまふ。

東京あたりはもう皆色づいて居るだらうけれどこゝは時候がおくれるのでまた七分通りしか紅葉して居ない。満山紅を以つて染められたのよりか、かう棒赤黄など取り交ぜて居る方が美しいと思ふ。又夫れに對して常盤木のみどりが一段と濃く見える。

紺青の空は綿屑ほどのくもゝなく高く澄み渡つて風もなくうらゝかな小春日和だ。時々名もしらぬ小鳥が鳴きながら翔をかすめて飛つてゆく。

「君、丁度いゝ機會だ僕が腕を振つて一ッ撮影して上げよう背景の場所を撰み給へ」

「そいつは難有いな。併し君のお手際では怪しいもんだねアハヽヽヽ」

秀様はほんとに口が惡るい。

「其代り私等の方のを秀様撮つて頂戴」

「よろしい引受けた」

なんて大いに寫眞屋氣取りだからなかなかしい。秀様の家族がすんで次ぎに私等の番になる。

「あきさんそんなにすまさないでも僕が別嬪に撮つて上げるよ」

「オホヽ、すまして居やしないわ。何でもよろしうござんすよ、撮りかたは什んなでも良人で修整すればよくなるから大丈夫」

あんまりだから云つてやるどこまでお口がわるいのだらう。

「まあ、あきさんも隨分な、敏郁様何か御馳走つて頂かなけりやあいけないわオホヽヽヽヽ」

嫂さんが笑つて居らつしやる。漸々撮影がすむ。

其外二三枚良人が景色をおとりなされて宿に戻つてくる、秀様たち、ぜひ一泊してと云はれたけれどすぐ御歸京なさるのでも

あるまいから明日宅の方に來て頂いてお話する事にして惜しいけれど私等は宿を出る、五時頃であつた、短い秋の日はもうすつかり暮れて風もないが何となく肌寒い、またゝく星はふるように輝いて居るけれど月もなく眞暗。たゞ農家の燈が處々木の間を洩れ來るのみ。途中車の上で和雄が寢て仕まつたので家につくと其まゝすぐ床の中に入れる、眞人は暗室へ現象にとお這入りなさる。

あゝ今日は何と云ふ樂しい嬉しい日だつたのか、思ひもよらない睦さんにお目にかゝつたりして、私と睦さんとは撰りわけがみの昔から姉妹も及ばないほどの中、學校でも同級で琴も同じ先生。兄様と結婚なさつた後も絶えず遊びに行つたり來たりして居たのが縁で私が眞人と結婚したのだもの又明日ゐらして友の誰れ彼れのお話伺へると思ふと實に〱嬉しい、今日の寫眞もどんなに寫つたかこれも早やく見たい出來上る日が待たれる。

讀んで居た私はそゞろ當時の樂しさを思ひ出さずには居れなかつた、幻のような昔を追つて思はずほゝ笑んだと心の追懷はそれからそれと語り出す、其翌年の正月も末つ方眞人がふと心地惡しと云つて居られた。がたゞかりそめの事よと思つて意に止めなかつたのが案外にも病症は輕からぬ心臓病と醫師の宣告、私は實に驚いた、眞人は固より、私もとてもこんな田舍では、と直ぐ東京に戻つて或る病院に入院したのは春もまだ淺い、彼岸櫻がやう〱綻びかけた頃、和雄を母様に托して私は心の限り身の限り看護したけれど甲斐もなく眞人は一日〱と衰りゆき、遂々梨の花がほろ〱と散る夕べ。

「和雄を頼む」

と一言を此世の終りとして永き眠りについてしまつた、其臨終の時の事、悲嘆のうちに葬儀行つた事、又何もしらぬ子供はたゞ人の集ふのに喜んで嬉々と戯れて居るいぢらしい姿見てひとり腸を断つた事などが迫るように胸に浮んで來てほゝ笑みは涙と變つてはら〱と止め度がなかつた。

思へばゆめなりし昔よ、今は其忘れ紀念なりし愛兒も此世を去つてしまつた、取り殘された私は、あはれ果敢なく閑淋しく一人寢のねざめ勝ちに日を送つて居る、再び又此日記のような樂しい時に逢ふ事が出來ようか？其時の寫眞は今も我が手に藏はれてある。吁、

▲若き者よ。相手方の實質に目をつけよ。
顔に戀する勿れと老人は敎ゆ。
されど若き者は服せず。

若い夫人達を觀察した小間使の手紙

深山のさくら

○

お今さん昨日は御早や〳〵との御年賀狀お嬉しう拜見いたしましたお留守お邸でも御隱居樣を始めお次御一同おかはりも無相かはらず御賑ぎ〳〵しき新年をお迎へ遊ばされしとの御事御目出度御祝ひ申上ます當方でもお上御夫婦樣を始めお下一同もかはりなく殊に私はます〳〵横に大きくなつて新年を迎へましたから御安心下さいませ承れば御地では二日の晩例のかるた會のお催しが御座いまして○○樣若樣とお里さんとの取つ組みあひなども始まり大へん御盛んでしたとの御事御羨ましう存じます　當地では奥樣始めお下も皆若い者ばかりで其上此土地では始めてのお正月とて三ケ日はたゞもう皆がバタ〳〵と朝から晩迄うごき通しでおちつく暇も御座いませんでしたが昨夜からの雪でけふは珍らしくお客樣もお見えにならずお上でも早くお退けになりましたので薄暗い女中部屋のランプの下で埋火かきおこしつゝなつかしいお今さんへの今これを書いて居る處で御座います

○

お今さんあなた今年のお宿下りには何處へいらしやるおつもり？私はまだ土地なれない事とて何處といつて行き度い處もなしほんとうに去年の十四日の晩私が一番先きだといふてお今さんやお君さんおしもさんに迄羨ましがられて一晩ろくに寢もせずに夜の明けるのを待ち兼ねて仕度もそこ〳〵出かけやうとしたら皆にからかはれた事なんぞ考へると思はず涙がこぼれますわ、アラ私とした事が新年早々から延喜でもないぐちなんぞ並べてつるかめ〳〵〳〵、

お君さんといへば今はもう會社員の奥樣ですわネよくあの時分書生さんや小使さんたちに迄おすましだの何だのと云はれて居た人の事ですもの今頃は例のぞろりときものを着てお品ぶつてゐる樣子が目に見えるやうですわ、番町の若樣も小石川の姫樣と、、、、、私いつ迄も姫樣のつもりで、あの若奥樣と御いつしよに御年始にお出で遊ばしましたつて、お美しい大禮服の若樣とお高島田に大ふりそでの若奥樣とお馬車にお並びになつた所はまあどんなにかお美しかつたでせう、

○

よく去年の春頃學校のお歸り道だと仰つしやつては濃いおぐしをお下げにお袴をみじかく〳〵召してラッケット持つてはお邸へおより遊ばして兄樣や姉樣がお留守なら叔母樣とテニスしませうなんて御隱居樣をお困らせになり「そんなお轉婆な事ばかりしてゐてはお嫁さんにもらひてがなくなりますよ」と御隱居樣が仰つしやると「其方が私も丁度宜いわ私お嫁さんなんぞになつてきうくつな思ひするのは大きらひ」なんてとん〳〵はねまわつてゐらしつた方が一年もたゝないのに、もう、ちやんと奥樣になつてすまして、ゐらつしやるつて、をかしい樣ですわね、でも御當家の奥樣だつて去年のお正月はマガレットに肉色の御洋服白ばらで飾つたボンネツト眞白のボアーをお肩からふわりとかけてお實家のお母樣とお邸へお出でになり御隱居樣や若樣（今の旦那樣）が何か仰つしやつても思ひきつておハイカラなお姿に引きかへてたゞハイ〳〵とお顔を赤くしてお母樣のお後にかくれるやうにしてゐらしつたのが今年はもうすつかり奥樣らしくおおちつきにもなりたくさんのお客樣でもどなたにもこなたにも同じやうにお愛想よくおもしろさうにお相手を遊ばすやうにお成りになつたのですもの、ほんとに人といふものは一年の間でも隨分變るものですわね其れを思ふと私なんぞだん〳〵お婆さんにはなるし田舍じみるのに引きかへてお今さんは益々東京のスー〳〵ハイカラにおなりで此次お目にかゝつたらお互ひにさぞびつくりする事でせうネ、、、、、、

○昨日はお近所の奥樣方お五方御當家へお集りになりましたの何しろ皆お廿歳から卅歳迄の方ばかり其上皆樣御紋附きに立派なおみ帶ですらりとお並びになつたお美しさ私も同じ女と生れたからには一度はあんな美しい風もして見度とつくづく思ひましたわ（ホヽヽ笑つてはいやですよ）



○お床の間に向つて左の一番上席にゐらしつたのがA樣と申す陸軍中佐の御夫人すらりとしたなで肩に上下お對の鼠縮緬檜垣に蕗の薹の江戸づまもやう白茶唐繻

のおみ帶を少し下目にお結びになつて、どことなく、きりゝとしたお姿お年はお廿九でお子様がお三人とかよほど御交際馴れてゐらつしやると見えて人をそらさぬお話ぶりお給仕をしてゐる私さへ承つてゐてほんとに心もちが宜う御座いましたわ其れも其の筈旦那様は例の軍人肌で何もかもおかまひにならないのでお交際の事から何から何迄内外の事皆奥様のお手一つでさばいて、ゐらつしやるのださうですもの、しかしお家ではなか〳〵お氣六ケしいとかで女中が少しもおちつかず二月の間に四五人も變る事があるとの事ですわ、其お向ひがB様の奥様、パッチリしたお目高いお鼻透き通るやうなお美しさを引きつめたお束髪に黒羽二重こぼれ松葉の小さいおもやうの三枚重ね、鼠地に小菊を金糸で出した厚板のおみ帶を小さく結んでしやううつむきかげんにお口數も少なくつゝましやかなおものごしお年はお廿六との事ですけれども何處迄もおみなおづくりの故かお三十位に思はれますの旦那様は別に之れといふお職務もおありにはならないのですけれどお家は當地方で一二といはれる財産家で御舅姑様にお義妹様それに明けて六つの坊様とおめしつかひの男女が六人、随分お家は賑やかで何に不足も無さゝうに思はれますのにほんに、世の中はまゝにならぬもの旦那様のお品行が良ないので御舅姑様との間に入つて奥様の御心配はいつも絶え間が無いとか此頃も御本宅とはつい半町も距たらぬ所に賤しい女を圍つて旦那様は夜晝其家にお出つきり此二タ月ばかりは奥様とお顔もお合はせにならないとか、其れでも何一言仰つしやるでもなくお舅様やお姑様の御機嫌をとりながらお生家の御兩親をなだめてたゞお家のためお子様のためとぢつと堪へてゐらつしやるお心の中のお苦しさはまあどんなかと思ふと私お顔を見ると涙がこぼれてしかたがありませんの。

○

其お隣にゐらつしつたのがC參事官の御夫人この方は御當家の奥様より一年後れて昨年學習院をお卒業になつた方、色白のお丸顔でにッとお笑ひになると愛け

うがこぼれるやう、少し赤いおぐしをハイカラなお束髪にお結ひになつて藤色紋羽二重に亂菊を高く染め出した三枚がさね大笹の葉をパッと出したコプラン織のおみ帶を胸高におしめになつた御樣子はまだお孃樣と申上度いやうお年はお廿歳旦那樣とは相思のお仲でやうやく御夫婦におなりになつたとかいつも日曜には御いつしよにお出ましに近所では鴛鴦の御夫婦なんて評判してゐますの、なかなかお活潑で「昨日も良人と庭であんまりはねをついたので今日は右の肩がいたくて仕方がない」なんて仰つしやつてゐらつしやる、



○

其お向ひがD醫學士の御夫人此の方はC夫人とはお一つちがひのお從姉で面長の月のやうなお眉美しいお生え際キリヽと結んだお口元などどことなく威のあるお顏、フックリしたお束髪に藤鼠ちりめん雛に白椿の派手なおもやう下に白を二

つかされて呉竹錦のおみ帯をしやんとお結びになつた氣高さ皆様と面白さうにお笑ひになつてはゐらつしやいますが旦那様は御養子で御兩親ととかく御氣がお合ひにならないのでお見かけするほどお氣樂ではゐらつしやらないとか、

○

其お隣が陸軍技師E様の奥様、黒紋羽二重水に鴛鴦のおもやうに白茶地厚板のおみ帯を丸く結んで一寸お癖のあるおぐしを大きな〳〵お頭いつぱいほどのお丸髷におあげになつてゐらつしやる、お年はお廿三、この方の旦那様はそれは〳〵お優しいかたですがたゞ奥様が外へお出ましになるのが大のおきらひ、處が生憎とこの奥様は二日とつゞけてお家にぢつとしてはゐらつしやれないといふ御氣質なのでいつも〳〵それがためいさくさが起つてはお身分にお恥づかしげもなく日中奥様が散らし髪でおかけ出しになるやら大さわぎ、でも二三日するとけろりと直つて御いつしよにお睦ましさうに御當家へなんぞいらつしやるの、それが一度や二度では御座いませんのですものをかしくなつてじまひますわ「あれほど大切がられたら奥様も少しはがまんをしてお家にゐらつしやらなければネー」なんて口さがない近所の者は云つて居りますが奥様はしゞうこぼしてばかりゐらつしやるのですよ、何にしても思ふやうには行かないものと見えますわね、

○

お當家の奥様は先日三越からおとりよせになつた上下おついの無地お召は青海波に舟のぬひもやうをしたおめしものに褪紅色地へ金糸と銀糸で百合を大きく出したルイ織のおみ帯を胸高かにぴつたりとおしめになりうるしのやうなお髪を昨日は始めてお丸髷に結げて赤いてがらに花べつかふのお後ざし重さうに一寸お頭を傾げてお話をしてゐらつしやるお美しさいつものお束髪とは變つてそれは〳〵可愛らしい奥様ぶりほんとうに御隱居様に御目にかけ度いやうでしたわ、いづれ近い中にお丸髷でお寫眞をおとり遊ばしてお送りになるとの事ですからお今様も樂しんでゐらつしやい。（完）

受賞目錄

△燃ゆる思ひ（兩嶺湖畔の回想）　一等金五拾圓　内藤千代子
△新奥様訪問記（マダムぶられの記）　二等金参拾圓　野菊女
△當世新奥様の面影　三等金貳拾圓　水仙女史
△當世マダム氣質　三等金貳拾圓　菱花
△妻となつた私の經驗　四等金拾圓　くれ竹女
△新郎新婦の離別　四等金拾圓　彌生子
△クラスメート花競べ　四等金拾圓　翠野
△世帯に馴るゝまで　四等金拾圓　紅花
▲伯爵家の新夫人　四等金拾圓　若紫

△境遇の變化と私の覺悟（小だまき）
△新妻物語（若草）
△古女房の日記（あき子）
△會社員の妻（葉子）
▲結婚後の三年（若葉女史）
△幸福を疑ふ妻の問へ（ちどり）
△文士の妻述懐（眞琴女）
△小間使の見たる若奥様（深山のさくら）
▲當世五婦人の手控帳（雪の下）
△海軍兵曹の妻（藤井の妻）

（以上五等金五圓）

―※（△印は次號へ掲載す）※―



クラストメート評判記

潜める　同級生

祥子樣

級一のハイカラで和歌と圖書が御上手なのには先生も舌を捲いて居らつしやいます。烏羽玉の御髪を其れも少し縮らかしてぱつと前の方へ出し表情ある眼ざしにぢつと人を見つめなさる時は如何なる硬骨漢もだちたぢたらざるを得ませんね。國語の先生のお花、如時やらはお二人して花咲く野邊の逍遥とか、下級生徒の專らの評判、されば味方も有れば敵も隨分御有りの樣です。

登喜子樣

品行方正學術優等とは此の御方の爲に許りある言葉かと思はれる程、おとなしやかな親切でそれで居て中々氣丈して居らつしやいます。此の間の地震の時など寄宿舍の方々は大層御騒ぎ爲すつて舍監の先生に少からぬ御目玉頂戴した時にも此の方一人ぢつとして少しも御騒ぎ無かつたとか、されば級中誰れ一人として登喜子樣〱と御慕ひ申さぬ者は無く如何なる先生でも御信用あつく、殊に修身の先生のきつい御ひいき、お家は有名な地方財産家で御兄弟も澤山御有りとか承りました、實際御珍らしい御方です。

秋子樣

全校一の音樂家、未來は樂界に立つて名聲を馳せ樣と云ふ御方です。無論理想はお高くて私等は足元にも寄りつけません。此の春の講話會にも、先生は御二人りが可いでせうと仰しやるのにもし合は無くては不可

ませんからと自分のお望みで獨唱、配所の月をなさいました、如何しても拔群ですね、いくら私等がやきもきしても出ぬ聲には致し方が有りませんからね。四十三年の新年會にはさぞお振ひなさるでせうと今から御察し申しますわ。

多津子様

何と云ふ事も無いけれど人に嫌はれる御方ですの、瘦ぎすの何處となく骨つぽい、眼の光る御方、其れでも御自分では何も御存知なく誰とでも、交際てすぐテニス仕ませうと御誘ひなさる、そしてぽん〳〵と強い玉を御出しなさるので『誘ひ玉』の綽名が誰れ知らぬ者も無い程廣がつて居ります、其れを御自分では知つてか知らすか此の頃は益々強い球を出すので誰れも一緒に遊ば無いのでまさか一人舞臺も出來無いと見えて少し溫和しくお爲りの様です、テニス界の王様、運動場の持主です。

光子様

賤に御氣取りなさるのと物質的幸福をのみ望んで居られるのとで祥子様秋子様とは毎日目に見えざる大戰鬪です、裁縫の達者なのには一晩の中に小袖を縫つて仕舞つたのでも分りませう、此の人ならば『女學生は實用に供し無い』等と御たく並べる御方達も舌を捲いて逃げ出すでせう、無論裁縫の先生のお花、光子様が前垂かけて襷して御洗濯の處は花嫁様そつくりだとは口の惡い川嶋さん、卒業後は、さて何處へ御嫁でなさいますやら。

瀧子様

御せいの低いに於ては負けつこ無しと云ふ御方、御ちびさん〳〵と誰れにでも御名前を云はれた事は滅多に無く其れで居て中々隅へは置けぬ事を仰しやいます寫眞道樂で小さい身體が色々様々の形して寫してあります。此の間拜見したのは七分身の手をかざしてにつと微笑んだ處、少し反り身になつて氣取つて居られます七分なら御脊の低いも分らず可愛い御顏が一層引立て見えます。卒業後もまだ御勉强なさいますとか、御年も若ければそれも可いでせう、大柄の私なんかちつ

と御ゆづりして若くなり度程ですわ。

英子様

名は體を表はすなんて今更そんな野暮は申しませんけれど此の方ばかりは致方がありませんね、すら〳〵と一ひら散りし櫻花の唇より漏れ出る英詩、會話、たゞ見惚れる許りですわ御習字も中々よく御書きなさいますが少し癖が御有りの様です。

髪は割合にハイカラではありませんがバンカラでも有りません。先中庸を得て居るとでも申しませうか、黄綺が大層よく御似合ひです御家庭が舊式なのであの秀才も終には埋れて仕舞ひはせぬかと外所ながら御心配申上げます。

百合子様

何の時間でも難かしい質問しては先生を困らすのを唯一の學課と心得て居るのでいつでも皆様が又始じまつた、と目と目の笑ひ、快活な惡氣の無い御顔して其れですから先生も御氣に止めませんのです、時々何に感ずつてか哲學染みた事を云つてソクラテスが如何云つたの、アリストートルがかう云つたのと兄様の問かじりか何か云ふので皆様に冷笑されて居ります、此の間なんか髪を引つつめてぐる〳〵捲きにして來て隣の方に默つて居るので如何なすつてと問へば「私如何しても操の妹よ」と云ふから何かと思つたら藤村操の妹ださうな、皆して大笑ひして仕舞ひました、されば自稱厭世家と云ふ尊號を奉つて置くのです。

近子様

常にひそむ眉根の御いたはしさ外所目にも御可愛想なのは御兩親様の無いからでせう、今は御伯母様の御家に居らつしやいますがあまり思はしく無いとか、父母といふ作文を書かせられた時にも人は皆樂しさうにして居るのに御自分一人思ひ出の如何に涙茂かつたでせう、ほんに御察し申しますわ其の優しき御胸の中の堪へがたき愁の雲にとざされて、如何んなに御辛いでせう、思へばよくも私等は罰もあたらぬ、あれが厭の此れが氣にくはぬのと我儘許云つて……………

けれど近子様御安心遊ばせ世の中は鬼ばかり仕では居りませぬ同胞四十人は皆貴女に同情して居ります。

衛生に協へる睡眠法

一に睡眠、二に運動、三に節食、是れ長命健康の守り本尊なりとは、衛生家の格言なるが、就中睡眠は健康の第一秘訣にして人間にこれのあるは誠に造化の賢き攝理といふべし、吾々人類が、日常生活しつゝある間は、斷えず精神と體力とを消耗しつゝあることは生理上の原則にして、その消耗を睡眠によりて恢復し得るは天の定めたる衛生の規則なり。故に吾吾は毎夜八時間の睡眠によりて毎日新らしき活力を其精神と肉體とに得、以て新たに生れ來りしが如く、爽快なる心地を得て再び活動の世界に入るものなり、されば古の哲人も安眠を以て千金に例へ、又朝の爽快を以て此寶に例へたり、實にや旨き眠は石の寢床を金の褥となし、睡眠不足の朝の心地は惡魔の棲窟に導かれし思ひあるべし、斯く睡眠は人間生活上に至大の關係あるに拘はらず、世人の多くは睡眠の時間と時期とに無頓着にして、求めて不攝生を爲し、求めて不愉快を爲さんとするは愚の至りといふべし、

人若し健全にして永遠なる生活を希望せば、適當なる睡眠を取るべし、世にこれ程重要なる手段はなし、睡眠の不足程生活消費を速かにし、生命を短縮し、老衰せしむるものはな



し、抑も睡眠の徳たるや、即ち生活の運轉を休息せしめて、日々消費せしところの精力を恢復し、體内の不用有害物を驅除するものなり、而して我々有機體が、目の覺め居る間は、吐出する炭酸の量、遙かに吸取する酸素の量より多きものなるに、いかにして之れが平均を保ち得るかといふに、乃ち夜間睡眠せる間に、過分の酸素を吸取して、毎日の用に供ふるものなりといふ、是れ睡眠の必要なる所以なり。

併し此の如く大切なる睡眠を餘り長きに過ぐる時は又害あり、一般に適當せる睡眠時間は、六時間乃至、八時間とす、其間は極めて快く靜かに眠るべし。

左に衛生的睡眠の個條を擧ぐ。

（一）睡眠の場所は、閑靜にして闇黑なるを好とす、閑靜にして闇黑なれば十二分に精神を休息せしめ以て翌朝の爽快を得べし、決して騷々しくして睡りを妨ぐべからず

（二）寢室には、常に新鮮なる空氣を流通せしむるやうにし、廣く、高く、なるべくは晝間人住まず、夜間は又暖爐等を用ゐざる部屋を撰ぶべし、且窓は、夜間の外常に開放して空氣の通じをよくし、例へば草花等の如きものを室内に置くべからず、殊に窓門は密閉すべからず。

（三）睡眠前には滿腹すべからず、さればとて空腹もよからず、若しあまり空腹なれば一二時間前に、少量の輕き食

物を採るべし、是れ靜かに眠り、快く起き出で得る良法なり。

（四）　身體を抑壓することなく、眞直に横はり、頭を少し高くして眠るべし、關節を屈曲して居るときは、身體に角度を作り、腹部の血液循環を妨害し、睡眠の目的に違ふべし。

（五）　睡眠前にしんぱいをなし、若くは氣を揉むやうな仕事をすることは、よろしからず、又寢所に於て讀書するが如き習慣は有害なり。但し睡眠を誘ふ讀書觀齋は此限にあらず、蓋し身體精神を靜かに休息せしむべき時期に於て、更に精神を働かし始むれば、其起されたる働きは容易に止まずして、終夜腦裡を去らず、或は身體疲れて就眠するも精神は尙働きて、充分なる睡眠を遂ぐること能はざればなり。

（六）　世間には往々にして晝夜を論ぜず、何時にても定めの時間睡眠せば充分なりと信ずる人あり、されど是れ實に誤解の甚しきものなり、成程睡眠の時間は、それにてよしとするも其利害は、晝夜によりて全く相異なれり、特に夜中前二時間（午後十時より十二時まで）の睡眠は、其利益は他の時間に二倍するものなり、其理由は左の如し

凡そ人は、夕刻に近づくに、從ふて其脉搏速かになり、



恰も熱氣ある如くなるものなり、是れ黃昏熱と稱するものにして總ての人にあるものなり、此原因は。日々新らしき滋養分の、漸次血液に加入すると、又太陽の沒する爲め、大氣に變更を生ずるとによるものなり、此熱の働きは即ち睡眠を促し、其體內に吸收せし不用有害物の蒸發を盛ならしむるものなり、而して此働の尤も盛なる時は何時なりやといふに、前記黃昏熱の最高度に達したるとき、即ち眞夜中十時より十二時までにあるなり、然るに此尤も睡眠の効能多き眞夜中に仕事を爲し、又は精神を奮勵して、大切なる熱を他の方に用ゐなば、睡眠の大切なる働きを爲す能はず、從つて蒸發不充分にして、終には病氣を喚起するに至るものなり

▲子福者

遠慮のない人「如何だ、お前の伜の利口な事、親より子の方が餘程豪くなるぞ、

親爺「夫や當然でさ、私だつて親爺より餘程豪いんですよ親爺は私一人きり子供を拵へませんでしたが、私は彼れを頭に六人拵へましたからなあ、

「嫁がぬ人」を讀みて、

枯尾花

十一月の增刊を御覧になつたつて？はア左樣して絶交して了へと仰有るの？……それや無理だわ、私の自由です、イヽエ憚り乍ら其麼事まで貴女の干渉に預りませんよ。エッ何ですつて、品性を汚がすつて？餘計な心配だわ、其麼事杞憂に過ぎないわ、まア聞いて頂戴。

えゝそれやもと／＼誌上から交を求めた友なんですけど私みたいなたゞの一人も趣味の友を持たないものは、最早あの昨年の心の日記を讀んだ當座からお友だちの樣な氣がして、悉皆あの青春の血潮が湧き返る樣な華やかな文字にチャームされて了つたの、實に私の境遇が類似してゝ許ちやないの、あの誰より親密な芳子樣ねエ、あの方だつて矢張お父樣がないでせう、それにあの呼べば應へん許の片瀬川を隔てた邊に閑居して被居るわ、其麼事で私の心に深い印象を刻んだのです。變つてゝかつて？私も變つてるけど、何しろ普通の友だちとは違ふわ、えゝ手紙差上たつて几帳面に返事よこす方ぢやなくつてよ。あら何？美ちやんの尊大な風にも似合んと、追從的の交際だつて？えゝ能くつてよ何とでも仰有い、いくら此方から交を求めたつて、才に於て零だとて、バンカラだつて何だつて、憚りながら東都第一のハイカラ學校出身の私ですもの……といつて御覧の通り、甚麼にあの方がお偉くなつて何だつて、此私として追從なんかゞ出來るもんですか、私だつて隨分露骨にやつてるわ、おほゝゝゝゝ

え甚麼方だつて……あら今しがた大膽だの臆面なしだの、乃至多情な女だのと罵倒して置き乍ら、ほゝゝゝゝ知りませんわ、そして私し親友だと聞いて、吃驚して絶交しろと迄仰有たのぢやありませんか、碌々人の話も聞かないで。まア默つて聞いて被居い、それから何とでも被仰いな。



はア恰ど先月でしたわ、御上京の序に訪れて下すつてよ。どつちかと云へばおほがらなお脊のすらりとした……えゝお島田で……何ハイカラだつて、能くねえ讀者俱樂部なんかにも、大槪の人は其麼考持つてるらしく出てるけど、大違ひだわ、微塵もハイカラ風なんかないの。お服裝だつて極く質素な――肩上……え眞實ですわ、餘りよそりや數へ年なら或は八かも知れませんけど……擦れからしだつて……失敬だわ、斯樣何處か品があつて……はア私だつて案に相違して多少は吃驚しましたの、お若い許ぢやない、人品が

まるで違ふといつても好いの、だつてれエ、作品に現れてゐるのは多少混沌たる世の渦卷に揉まれ拔いて、斯う超然主義な方の樣に見えるけど、口數の少ない、そしてキツパリした物云ひの方よ。其麼作物なんか愚なこと、恐しい御謙遜だわ。何ですつて……買被つてゐつて、えツ清少納言が跣足で逃げだすつて……それや仰山らしいわ、失敬な……まアまぜツ返さずに聞いて頂戴、私がれエ、作品に對して感想を述べたらばれエ、あれや皆空想ですの、一だつて眞實の事はありませんわつて、全然に對して非認なさるの、が私だつて其點は疑問ですわ。何しろ謙遜家よ、初對面だから解らないと云へば云ふものゝ、初對面は其人の性格を明白に認識する事が出來ると云ふぢやありませんか。それや野暮だのバンカラだのと皆に云はれてるけど、私だつて筆が走つては隨分心にも無い事を書くわ。けれどれエ、作品は作者の人格性情の一端を覗ふに過ぎないと思ふの。だからいくら大膽に遣つて除けて被居るつて、私は唯自分の親友として萩樣の爲に名譽を傷けなければア好いとそれだけ始終思つてるの、彼の作品が露骨的だの、作者の品性陋劣を認るのつて云ふのはあんまり、嗚呼彼の華麗な彩筆を揮つて、彼の趣味深い思想を描く、美しい若い萩樣迄攻めるのは酷いわ、甚麼氣のしつかりした方でも、まだうら發



かしさ花の處女、長い袂を嚙みしめて夕のお縁に晩の床に物思の種も添へよう。

先刻清少納言と仰有たわれ。少納言が如何にお轉婆だつて何だつて、作品に於て彼の瀟洒な筆、源氏に是靡れりと迄評されるぢやないの。それでコンストラストなとるのぢやないけど、私何時も左樣思ふの。作品に對しての概念に依て、まだ見ぬ作者の觀念を構成するのは、ちと無理だと思ふのよ。此麼私みたいな者でもそれで誤解を招いてよ、まア嘘冴なら逢つて御覽なさい、貴女の御想像とは全然違ふわ、何か仰有るつたつて美しい長い睫毛を伏せて……其麼貴女みた樣にしら〳〵と他の顏ばかり見る方ぢやなくつてよ。ほゝゝ怒つて……それで能く小說——松風れえ皆があの對話の處が妙を極めて居ると云ふわ、エツ松岡女史は作者自身だつて？嫌だまさかア……此度のなんかでも能くあゝ筆が廻るわ。キザだつて、それや私だつて讀んで齒が浮く評句無きにしも非ずですけれど、何か書く上に就いて反省ともなり參考ともなりますわ。えゝ何とでも仰有い、私なんかどうせ彼麼靑春の血潮漲る熱烈な筆には持ちませんから。だから多情だと仰有るの？それア私なんぞ境遇上……箱入娘ではないけれど、若い男子に接する機會は絶無だから、筆の上にも書けませんわ。エ、だから何

だと仰有るの？世經驗なくとして可ならんやだつてオホヽヽオホ彼が現時の文學に趣味持つ青春の處女心を描いたものだと思へば、それで濟むでせう。作者迄ゝ是非するのは立入すぎてるわ。イヽエ、其眩輕佻浮華なハイカラ振ぢや無くつてよ。品の好い高島田……全く令孃風ですわ。あら少とも肥つて被居らいませんの、尤此頃は錄うですか。秋高うして馬肥ゆ……此夏骨と皮許になつた私でも。ほら此麼になつたでせう。

お理解になつて？ほゝゝゝ是でも絶交しろと仰有るの？エツ手紙を見せろつて、あらまだ趣味ある文通したのではありませんから。何しろ萩樣つて貴女の御想像なさる樣な、お喋りにお轉婆に、左樣してハイカラさんぢやなくつてよ。私お話が出來ないから歸つたら直ぐ手紙でね、といつて歸つてお了ひになりましたの、私は觀察が鈍いし無口者だから、滿腔の熱誠を捧げて此の趣味の友に對したけれど、何にも得る所が無かつたの。まさかに初對面から堂々たる文學論なんかも出來やしまいし、此度お目に掛つたら何かお話もしますわ。貴女は冒頭から突然絶交を命じて罵倒して置き乍ら、能くも根掘り葉掘り……そしてまぜつ返してばかり……どうせ境遇を同うし趣味を同うして求め得た友なんですもの、何と仰有たつて信じて一生離れぬ趣味の友にして見せるから……。

誰に似てるかつて？さア……左樣ねエ……誰に似てらつしやるでせう。まアれほらあの增刊の表紙の立姿！彼れ野鮮の力よとして置きませう。



○小兒には飽食せしめてはならぬ食物で小兒を責めてはならぬ

○藥味などの入つた料理や揚げ肉、鹽肉、饅頭の類や生のまゝなる野菜、熟しない果物、酒類、甘過ぎるやうな菓子類は成可く與へぬがよい

○毎々同じ食物ばかり與へてはならぬ

○小兒が食べたがらぬ時無理に食物を與へてはならぬ

○小兒にはよく食物を咀嚼く癖をつけさせるがよい

○十一二歳より下の女子の頭髮を組んではならぬ

○身體は何時も淸潔にしてやらればならぬ

○幼兒にはフランネルを着せておくがよい夜中は殊にさうである

○小兒の靴は堅過ぎぬ形と大さのものにせればならぬ

○小兒の頭腦を烈しく冷したり暖めたりしてはならぬ

○朝な〳〵に柔い毛の楊枝でよく歯の掃除をしてやるがよい

社會觀察

居留外國人の生活狀態

神谷磯子

開港場の山手附近で、眺望の好い閑雅な所には、乾度數年手を入れぬ欝蒼たる常磐木に包まれた、ゴシック風の家や、煉瓦又はブロックで塀高く圍まれた宏壯な邸宅があります、此等は在留洋人の住宅で、内には敷地の開拓だけにも萬金を投じたやうなものもあります私の見た家は神戸の居留地で有名な邸宅、主人は英國人で商會の支店長、家屋は四年前に建築したものでさほど宏壯とは申されないが居留外國人の邸宅を語るには好い模型であります。

▲家屋の構造

位置は山麓にありまして、敷地の總坪數千二百坪、庭園の芝生ばかりでも二百餘坪、邸の周圍は高さ八尺にブロックを堆積し、モルタールを上塗にしてゐます、家屋は二階建で地下室があります、此所にコック部屋、物置、暖室汽鑵、馬車、自働車、及人力車の庫まで設置されてあります、階下には應接の間、食室、音樂室、圖書室、化粧部屋、湯殿、小間使、下婢、及馬丁の部屋があります、階上には主人の部屋、細君の居間、寢室及遊戲室抔がありまして、隨分設備は行屆いたものです。

▲室内裝飾

華族や高官方の御屋敷へ上りまして、應接室を拜見いたしますと、床の間の掛軸、花瓶、違棚の置物、火鉢又は卓子椅子抔は却々結構な御道具を拜見いたしますが、總體に裝飾がシンプルに見えます、それ等に見慣れた方が洋人住宅の應接の間にお這入りになりますと、室内裝飾の餘りに雜多に、不秩序不整頓なるに一驚を喫せらるゝで御座いませう、日本古代の武器があ

るかと思へば、京人形があつたり、刺繍屏風や怪げなる繪書を描いたストーブかくしが併置されたり、有馬細工、箱根細工、湯本細工、臺灣の竹筏、アイヌ人形等の小道具が子供らしく飾られたり、九谷、萬古、出石及今里の陶磁器が不調和に陳列されたり、本金梨子地蒔繪の書棚に、張子の虎と伏見人形の安物が、さも大事さうに安置される杯、丸るで鑑定眼のない骨董狂が居間にも似て、一見噴飯され趣味もなにもあつた話ではありませんが、之れを御主人にお訊ねいたしますと、室内裝飾よりも寧ろ來客に愉快な興味を與へるのが主意である、若し故郷の住宅なれば英國の珍物を陳列すると申されました、日本でも來客に書畫古器物を御覽に入れて、客に居心地よき感興を與へ、傍ら幾分か自分は所藏家たるを誇る人がありますが、つまりこれ等と同一の格であらうと思ひます。

住宅への來客は多く私用でありますから、お話も誠に多愛のないことばかり、虎の首を振らしたり鎧を着たり、溫泉場細工の智恵の輪を玩つたりして笑ひ興せられます。

▲食堂と細君の周旋

お客によりましては、それから食堂へ案内されて晩餐を倶にされますが、流石に食堂は立派なもので、周圍の壁はすつかり佛蘭西製の壁紙で張詰め、額面は歐米で高名な畫伯の丹精を凝らした傑物、風景、人物、動物等の油繪水彩畫及クロモ杯が、可い調和に掛けられてあります、カーテンは以太利仕込みの織物、食卓はエリップス形で卓子掛は純白のリンネン、椅子、墺地利特産の曲ケ木細工物、食器は歐米の粹を集めた高貴品、卓上の懸垂花形電燈は其光線を反射鏡に曲折させて其美觀名狀するの筆なし、食堂には必ず細君が出て、なにくれとなく斡旋されます、夫人はいつも快活に手を振り體を伸べて種々興味ある談話をされます態度は流石英國仕込みだと感服いたします、これが日本婦人であつたら、お行儀よく兩手を膝に据ゑての伏目勝、來客の談話を無言で聽いて被居る所でせう、お客

の醉眼朦朧たる頃には子供達も出ましてお對手します、斯麼風ですから、客も滿足して歸ります。

料理は無論お抱への料理人夫婦が調理いたしますが、お客の嗜好がありますから、その献立は宵細君の胸三寸から出るのでございます、細君は食堂のクキンで細君が不在か病氣の時は、什麼來客にも食事は出るれません。

▲音樂室と圖書室

音樂室にはピアノ、オルガン、ヴヰオリン其他洋樂器の一通りは備付けてあります、和樂器でも琴と八雲は、裝飾半分に陳列されてあります、主人は餘り音樂は好かれないが、十七になる令孃の爲めに此室を設けたのだそうで、毎夜細君も演奏されますが、音樂よりも寧ろ讀書に耽ける時間の方が永いやうです、自然圖書室内の書籍は、主人向きよりも細君の愛讀されさうな文藝書が多いです、殊に英佛兩國の新刊物は、故鄕から到着します、其陳列方にも注意をしますから、具渫一小文庫の體裁をなしてゐます、和書でも北齋の繪本、諸國名所圖會、風俗誌、風景畫帖、德川時代の繪本小說、それに國華などは金を惜まず蒐集して居ます。

▲化粧部屋と浴室

化粧部屋は僅か六疊敷位の廣さですが、大理石の洗面臺、楕圓形の大姿見、銀鍍の手盥は申すまでもなく、裝置の水道栓を一と捻りすれば、冷水は自由に出ますし、又別に溫水栓がありまして、十瓦侖の熱湯が、サイホン仕掛になつて吐出するやうになつてゐます、洗面臺の右側に米國製の化粧簞笥があつて、それに種々樣樣の香水、香油、化粧粉、洗粉、石鹼、化粧水等が備付けてありますが、多くは佛蘭西製でございます、日本でお購めになるものはタオル、ブラッシ、ゴム櫛位なものでこれ程萬事行屆いてゐますのに、細君はまだ化粧品の買入れには不自由すると言つてる。

　湯殿は存外狹く二坪しかありませんが、湯槽は木造船形で大いさ疊一枚位ありまして深さ二尺之れにも冷

溫水栓が設備されて、湯の溫度を人手によらず自由に調和することが出來ます、沐浴は一週一度の定めですが妙な風習で御夫婦が必ず同時にお這入りになつて、ドアーの錠前をおろされます玻璃窓はありましても艶消ですから外面から見られませぬ。

　階上にある細君の居間、主人の部屋は、普通有觸れた裝置で、別段取立てゝ申す事もありません、此室へは何人たりとも無斷で這入ることは出來ません、夫婦相互でも扉を先づトントンと打ちまして、室内からの諾否を待たねばなりません、今歳四つになる孃さんですら、母親の居間へ這入るときは、ちやんと訪づれてお許があるまで戸外に耳澄まして立つて居ます。

▲生活費

　毎朝良夫の出勤までは、良人につきまとつて要務を辨じ、それが濟んで了ふとコック對手に一日中の食事の献立を相談して、材料の購入を命ずる、細君は食事の献立に干渉しても、經濟は一切料理人まかせです。

　一家の生計を調べて見ると收入は、主人の月俸が八百圓、その他商事上の利得が二百圓内外もありますから、雜つと月千圓の收入です、支出は食費即庖厨用ですが二百五十圓、之れが料理人が受取る定額です其他は交際費、被服費、教育費、諸税金、保險料及び雇人の給料等で彼此六百圓はかゝります、で大概毎月三四百圓の剩餘金が出て、それを銀行へあづける勘定ですが、さうは行かないもので、主人や令孃の盛装服一着拵へても、直ぐ三四百圓は飛びます。

　夫人は却々交際が廣う御座いますから、四季の服は英國へ注文して、整然と仕立上げたものを外國の小包郵便で取寄せます、いくら小包郵便でも輸入税が從價税三四割もかゝりますから、存外高價なものになります、神戸には婦人服裁縫專門の商店がありますが、イザと云ふ場合に服地や裏地の新柄がなかつたり、仕立方が流行におくれて如何にも我慢が出來兼ねるものですから、新調物は何時も英國へ注文します、其他靴、ボンネット、革手袋、コルセット、身邊裝飾の貴金屬

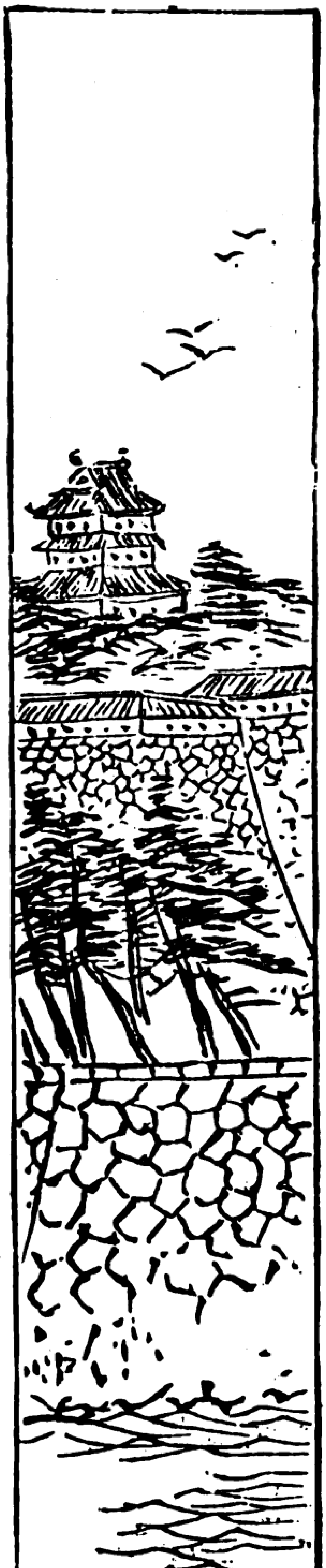
細工品は、態々佛蘭西、獨逸、伊太利から取寄せます。

▲産婦の事

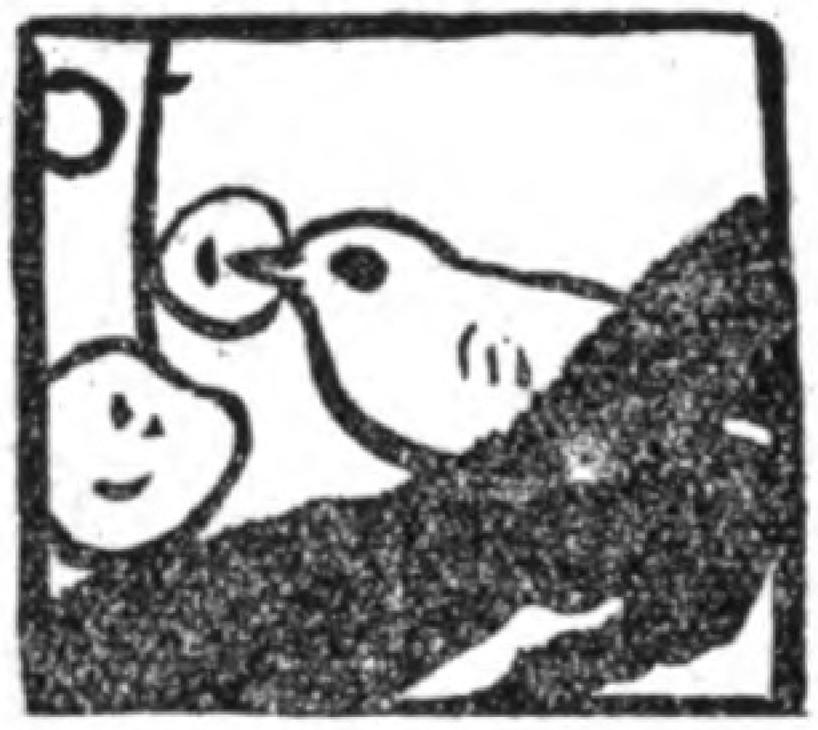
以前は、産婦を持つ主人の苦勞は並大抵のことではありませんでした、産婦が洋人にしろ胎兒のとり上げは日本風のぼろ〳〵の中に産ましたくないものだと思ひますから、産科醫に預けたり、その當時横濱に居ました英人の産婆に來て貰たりいたしたものですが、東京に住居の方は大抵大學醫院へ入院するさうですが、居留地に居るものはさうも參りませんでした、けれど今では洋式の助産婦が到る所にありますから、そんな心配もなく安樂に産も出來るやうになりました。

洋人の産とて格別違つたことは御座いませんが、違ひますのは分娩當時に於ける夫婦の情愛で御座いませう。

日本では肝腎細君が苦痛の眞最中に留守をする方が多いやうですが、外人の心遣りは全然反對です、細君が産氣づくと良人は傍を去らず、と申すよりも側を離れさせぬと云ふ風です、愈々陣痛が烈しくなつて來ますと、廣い寢臺の上で良人に犇と取縋り、遠慮會釋もなく泣出します、又良人も一緒になつて泣き出し、其苦痛を心から同情を表して慰藉いたしますのは、慣れぬ日本人の眼には可笑しく映つるでせう、偖て兒頭が産道に入つて胎兒が出るまでは、助産婦や助手と共にかひ〴〵しく萬端の世話をするので御座います。



文苑



奥様の生活

花嫁の元朝

近江　中村清子

トロ〳〵とまどろむ間もなく三時が鳴つた、寒さに慄へ乍ら起き上ると、齒の根がカチ〳〵と打合ふ、火鉢の埋め火を掻き分け炭をついでそつと旦那樣をお起し申す、ほの〴〵と東の空が明け初めて、東天紅を告げ渡る時分には全然り元朝の用意が出來上つた、初めて結つた髷に薄りと化粧し、更めて旦那樣の前に座ると「御見逸れ申した、何處の奥樣」と、初春早々調戯れてドキマギする、お雜煮の膳に向かつた時お母さんが「靜さん、よく似合ひましたよ」、ハツと思ふ間もなく「今年は戌の年、精々きばつて八犬士の樣な孫を、早う見せて下され」と立つゞけ、お屠蘇も戴かぬ内から、顔はほてつて火の樣、(入賞)

夜なべ

京都　京子

良人は同國人の懇親會へとお出かけなすつて、今迄キア〳〵とさわいでた花子も一夫も寢てしまつて靜かになつた、サアこれから今夜中に花子の春着を仕立て上げてしまひませう、中の間へランプをつるして雜巾さしてるまきとさし向ひに座る、四方はシーンとしてたま〳〵聞くは車の音戸棚の上に鼠がキ、、、となく、濃ひ納戸地に御所車と亂菊の大模樣の友禪袖を下着の赤無地紋羽二重と重ねて袖へ尺を通してつるして見る、緋縮緬の裾裏がよくはえてふつくりとよく出來た、マアおきれいでござります事目がさめる樣ですとまきが見とれて居る、向ふの百姓家では夜なべに臼引きが初まつたか、ゴロ〳〵の音につれて若いすき通つた聲でのどかに歌ふのがひゞいてくる、(入賞)

初子持ちの新年

東京　藤本としえ

去年までは二人淋しく正月を迎へしに、もう今年は親子三人となりぬ、自分はお粗末な見る影も無い着物を身に纏ひながらも、子供には出來ぬ中より新年の初衣をこしらへ、床の間には初子のお備へに羽子板などを並べて飾り、祝ひの膳にも子供を抱いて坐る、あゝ目出度くも又忙はしき新年かな、

黄金にも玉にもまさるこだからよ
つゝむむつきは錦ならねど

深夜のめざめ

香川　金井浪子

火燵に這入つて書物を讀みながら　つひうと〳〵眠つた、ふと身體が寒くなつたので、目がさめる、布團をまくつて、手をかざして見たが、火

の氣は更にない、風邪ひいたのであらう、氣持惡う鼻がつまる、夜は大分更けてゐるらしいと思つて、枕元の時計を見ると、二時何十分、これからぼつ〳〵薪を折つて、火を起す間に夜は明けるのだらうが、それもいやだから、冷たいけれど、床を敷いて又くの字形にねる、さて横にはなつたものゝ、寒いと思へば思ふ程、寒くて眠むられぬ、一層起きて火を起さうかと思ふたが、矢張いやだ、風が强く吹く。裏畑に落葉がからから走る、障子の破目が嘯く、

おぐしあげ

東京　うづみ火

去年の夏頭を圓坊主にしたので、まだ毛が六分位しかのびてゐない、やつと三ツになつた花ちやんの髮を結ばうといふのだから、事はなか〳〵六箇敷しい、毛が短いながらも人並にこぐらかつて居る、それを先づ手拭で薪もみをして緣日で買つた豆櫛でとく、引つつれて痛いだらうが少しも泣かない、かれて持たせておいた輕燒の効めらしい、それから、前の方の毛を少しつまんで、とき色の細いリボンでしばる、前へ行ツて見ると、せまくないビンズル式の額にリボンがたれかゝつて居る、かう出來れば本望だ、丁度その時輕燒も食べ盡してしまつてベタ〳〵した手で、背中へまはつてきて、おんも〳〵とねだる、仰のまゝに表へ出ると、人が皆寄つてたかつて愛嬌があるといつてくれる、

待つ音信

牛込　松本菊子

防寒の用意はして御出でたが、寒い國だから嘸ぞお辛らい事であらう、一週間も二週間も降り續いて家共に雪の下に埋れさうな所にお務めなさらなければならない、それぱかりか、あの寒い西伯利亞から吹いて來る風が日本海の荒い海で又冷えて凍つて晝となく夜となく北陸の國々に侵入して荒れ廻るのだから堪まらないであらう、其の鋒先に當るのは劍で胸を刺されるよりも苦しいに違ひない、私が斯して暖かい火燵に降る雪は……などゝ歌を作つて雪を愛でゝ遊つて居る日に、同じ雪にまみれてお務めなさる良人はどんなであらう、一寸お野菜買ひに行くにも戶ばかり開けて行つて、其れでもスツト風が當ると、「ア冷たい」と御易するが、骨までも凍るばかりのあの烈しい吹雪に吹き捲でられて入らつしやる良人の身に比べると何でもない事だ、あゝもう御出張になつてから五日になるが、未だ何んとも　便がない、どうなすつたらうか、昨日の新聞には北越に大雪があつて電信電話は不通となり汽車も延着せりと載せられてあつたが、途中汽車に故障があつておわづらひなすつてお出でゞはなからうか、……さう云ふ事はないにしても、しかし又ひよつとすると……、あゝ待遠しい、良人よりの音信が……、（入賞）

人待つ夜

鹿兒島　若葉

待ち兼ねた終列車が着いてから二十分、あんなに樂しんで待つて居た武坊もいつか膝上にもたれて眠つて了つた、女中は又居れむりでも初めたか音もしない、通りには空車の音も絕えて、長い夜もふけた、眼は次第にさえるけれどもあけた女學世界をよむ氣もしない、もしやと用意して置いた火鉢の火も半ば灰になつて、次の間の鐵瓶のタギル音のみやみにひゞく、今夜は何處へおいでかしら、

情を込めた手紙

くれない

霜凍る或夜、私は海山千里故山遥かに勤務してゐらしやる夫へ心をこめた手紙を書いた、筆をおいた時はもう一時過ぎ、寒い夜風はひしと身にしむ、讀み返した私の眼からは熱い涙がハラ〳〵と文の上に落ちた、いつそこの涙も封じ込めてと迄思つた、あゝこれを御覽になる夫もまた泣いて下さるであらうか、

優しき觀察

船中の悲劇

清津　板井かた子

咸興丸が、城津沖を疾走して、明日は愈々淸津に着くといふ夜でした、蠶棚の樣な三等室で、私共の隣に、今思ふとにくらしい四十近い婦人が、妙齡の田舍娘三人を擁して、同じ地へ上陸すると言つてゐました、娘の一人は十六七位で美人でしたが、他の二人ばかりが親密にヒソ〳〵話したり、歌つたりして、一人ぼつちにしてゐましたから私は、不憫に思つて種々話をしてやりました、この夜は、浪は穩かで、加之に、月さへ懸つて綺麗でした、ペンキ臭い室から、先きの仲のよい二人は、甲板に上りました、一人殘された娘は、始終憂ひ顏で、何事か思ひ詰めては太息してゐましたが、遂々、毛布を被ふて、さめ〳〵と泣きだしました、件の年増の婦人は知らぬふりして小說を讀んでゐました、私は、例の誘拐だと、推しました、果して上陸後十日餘り經て、新聞に、誘拐事件が掲載してありました、私はつく〴〵彼の美人の身の上を思ひました、(入賞)

美しき笛の音

札幌　長谷川汝子

玄關の方で尺八の音がする、出で見ると、三十路にたらぬ盲目の男、この寒空に、外套一ツつけてない、あまり可愛想なので吹かせると、お定りの枝煮追分、「忍路高島及びもないが、せめて歌棄磯谷まで」をやる、次は腰に差した神笛を取出し、丁寧に笛に向つてお祈して後、神前で注連を斷つ時に吹奏する曲だとて跪いて靜に吹き初めた、或は緩に、或は急に、高く、低く、……、もうあまり好い音に心を奪はれ、自分は神樣に手を引かれて天上する樣な感がした、風采こそ汚らはしいが、此一曲は誰をも感動させた、(入賞)

その人の面影

京都　黃菊

汽車は今京都驛を發した、私の向側へ御召のコート着た上品な奥樣風の人が腰かけて居る、赤いてがらのまるまげのびんは、二筋三筋すごい程白い頰に亂れて、時候には早すぎると思ふ程、大きなショールに半ば包んだ顏は、絕えずうつむき勝ちである、そして時々苦しさうなせきをする外は、身動もしないで、眉の邊には憂のいろがみちて見える、私はその婦人をあとに殘して大阪で下車した、けれども何だかその人の面影が忘れられない、それから一月程して世の中も大分忙しくなつてきた師走の中頃、私は病みて臥します姉の君を舞子ヶ濱に訪ふての歸り道、松林を通つてゐると、ベンチに腰かけた若い紳士の膝にうつ伏して居る婦人、どうやら泣いて居るらしい樣子、私の足音に驚いたのか顏をあげた、よく見るとたしかにこの間の車中の人、あのもしや——浪さんの樣な人ではあるまいかと思つた、(入賞)

車坂の新聞賣子

下谷　玉香

松の内といふも三日前に過ぎた、風はないが星のまたゝきも凍るかと思はるゝ寒むい夜十時頃、歌留多に招かれての歸途、車坂で電車を下りた、ショールに肩をうづめながら姉様と二足三足歩き出すと、突然後で、「エー報知夕刊は一錢、夕刊は一錢」と寒さうな可愛い聲が聞える。はつと振返つて見ると、妾の胸にも及ばぬ位の小さい男の子が、少しばかりの新聞を賣つて居るのでした、只もう譯はなしに可愛さうで、二枚許買つて種々尋ねますと、歳は九つで、父はなく、母と二人淋しく車坂に暮して居るのださうです、あゝ今夜の樣な寒い夜にも最愛の我子を送出さればならぬ母人の心の中はまあどんなでせう、妾の弟と同い年と思へば堪らなくその子が可愛さうで、思はず同情の涙がはら〳〵と頰に傳はる、あゝ、慈愛あふるゝ父母のふところに靜かにまどかな夢を結ぶ子供が多い世の中に、この樣な感心な子もあります。何卒皆樣、寒むい毎夜を車坂で新聞を賣りつゝあるその可憐な子に温かい同情をよせて下さいまし。

混雜な街

讃岐　小野定子

何でも今日で七八日位、空の灰色の雲が動かぬ、街は祭の前日の樣にざわしておちつかぬ、四つ辻には交る〳〵廣告屋が、何々商店の大安賣などゝ大裝飾にふれて居る、進物を抱えて行く人、がらくたを車に積んで行く人、杖にすがつて居る老人までも、足のはこびが速い樣に思はれる、夜の本街筋は更に美くしい、軒毎に赤い提灯をぶらさげて、中には大變に店頭の装飾に凝つたのもある。誰の頭にも先づ年の暮と云ふ事を印象する。

紙屑買ひ

仙臺　わかばし

「お拂物はありませんか？」と、いと衰へたる悲しげなる聲に、戸を押開けば、ヨロ〳〵として今にも倒れんかと怪まるゝ老翁、破れたる布子に麻の如き帶を結び、汚れたる風呂敷包を負ひ、片手に杖を握り、片手に破れたる籠を携へて、顫へながら立ち居る樣の哀れさ、若者だも中々に堪え難きこの寒空に、さりとは餘りの痛はしさよと、胸先つ塞がりぬ。「何かお拂物は？」と促されて、何か見るべければ先づ内に入りて休まれよと、再三辭むを手を執りて引き入れ、さぞ寒からん、暖かき茶なりと差上げんとて、火鉢と茶とを出しやれば、あまたゝび額を疊に押付けぬ。其間に古新聞布屑紙屑などを集めて出しやり、財布を出さんとするを押止むれば、翁は大に打喜び、幾度か伏し拜みて立去りぬ。白銅一箇にだも値せざる情にて、かくも憐れなる人を喜ばせるよと思へば、いと心嬉しく感じぬ。

電車の中

麹町　靜子

三越へ行つた歸りに、日本銀行前から、電車に乘る、土曜日だから、電車も、一ぱいの人ですみに小さくなつてやつと、こしをかける、そして車中の人を見ると男が多い事、やつと女が二三人しか居ない、私のむかふの方に十四五の女學生、どこの學校かわからないがいづれ私立らしい、其の女學生が人のこみあつてる中で何だか口をうごかしてるから、

ほゝづきでも、持つてるのか知らと、思つて見て居ると、まあ驚いた、一寸横をむいて、袂の中へ手を入れ、其の手を口へもつて行き、そして、こちらをむいて、平氣な顔でもぐ〳〵口をうごかしてる、あれでも女學生か知ら、見て居る私がはづかしくてすぐ外の方へ目をやつた、けど東京は、あんな事を誰れでもやるのかもしれん、それが文明式なのでせう、

職員室の午後三時

黒百合

マスターは、發音矯正の調査中で、モヂヤ〳〵した頭を手でおさえて居る、首席のS先生は、巡回文庫の日誌書き、六十四本ばかりの可愛いゝ髯が時々ピク〳〵とうごく、次席の三十には、若く見えるY先生は、高い身に、眼鏡を光らせて日錄のペンを休めたまゝ、教科書を見つめて居る、準訓導のA先生は、青い血色のわるい顔をかたげて新聞を讀んでる、そして、たつた一人の女先生の私は田舍の小學校なんて、つまらんものだと思ひながら、之を書いてる、ガメリ〳〵と烏が鳴つて、外は風だと思ふばかり、寂りしたものだ、

乙女の樂み

隣りの出産祝

山梨　田中義子

去年の今日は兄さんが嫁姉さんをお娶ひなさつた日である、私はほんとうに嬉しかつた、御縹緻は美しいし、御里家の家柄は良し、御身上も富み、何一つ不足の無い嫁姉さんを持つた私は、學校の御友輩から何んなに羨まれたか知れない、親戚廻りも濟んで二十日許り經つと、姉さんはお里へ歸りました、母樣は病氣だと言はれましたが、私にはさうは思へませんでした、其後も月に二度位は屹度歸りました、それから女子大學とやらにて、御勉學の花子さんとか申すお友人から折々御消息がある、其度姉さんは手紙を見ては泣きました、私は花子さんをお恨みしました、斯んな風で年は暮れ、明けて樂しき正月も姉さんは御留守で何時になく淋しく、つまらなく七日と過ぎ、二十日と經ち、二月も夢の樣に通りて、彌生三月雛節句の濟みし頃でしたが、離緣と云ふ事にて、いとしき姉さんは全く我家を去り給へり、幾程もなく、姉さんは二十有五歳の御歳にて今を盛りと咲き匂ふ花の都へ御遊學に出で立たれしとか、手の玉を人に取られし心地して悲しさやる方なき私は、姉さんの美事御成功遊され再び我が家に歸り來まさん日を待つて居ります、

お隣りの綾子さんの兄さんも、内の兄さんと同じ頃御嫁さんを娶ひまして、つひ此間赤ちやんが御産れになつた、今日はお七夜だとて綾子さんニコ〳〵しながら御赤飯を持つて來てくれました、日頃私が好きなもんだから母樣は直ぐともつてくれましたが、私は何だか胸が一パイで、ボツチリ食べたばかり、母樣に何所か惡いかへと聞かれて、イヱと笑つて答へながら、二階へ上つて泣いて居ると、清ちやんが、門口からケタヽマシク駈け込みながら、母樣ボウは御隣りで御赤飯をよばれました、（入賞）

五年振の歸郷

淺草　吉田さだ子

五年前の十四の春、東の都へやられし私は、今日懷かしい故郷の地をふんで、戀しい母樣や兄妹のよろこぶ顔が見られるかと思ふと嬉しくて足

より體が先へ行く、心ばかり急いても、田舍道のあるきにくゝ、幾度かころびそうに成つて、やつと我が家近く成つた時は、もう堪らず驅け出して家へ這入つた、其の音で母様は奥から出て被居つて、私を見るなり、「まあよくネ……」と仰有る、ニコ〳〵とお笑ひ成さつた母様のお顏を見た時は何より一番嬉しく思つた、

母の悲しみ

伊藤　綠子

今日は朝からシト〳〵と雨が降つて、何だか物さみしい、私は奥のはなれで編物して居ると、「綠さん〳〵」と母様がお呼びなさる、「何か御用」、「お父様にお手紙をお書きなさい」、「ヘイ」とは云つたが、私はもうたまらなくなつて、涙が流れる、「何ですネ　泣いたりなんかして」、仰有る御目にももう露の玉が……、「母様此間の御返事も？」、母様は何にも仰言らずうつむいてゐらつしやる、あゝ此間から五日にあげず差し上る文、どうか歸りて〳〵と涙と共に書き送る文も、父様は何と思召してか……何日こそはと力をこめて、どうか此度こそはお歸りをと神に祈つてポストに…　あゝこれで御返事が無かつたらと思ふと父戀しくなつて母様を見ると、びんのほつれ毛も力なう……、(入賞)

雪の朝

篠原あさえ

キヤツ〳〵と、弟や妹の聲に、樂しい夢をさまされた、丁度六時を打つた、何を騒いで居るのかしら、時々父様や兄様の笑ひ聲がする、床をはなれて緣側に出ると、マア　美しい一面の銀世界、庭で弟や妹や、父様も兄様もまぢつて、雪達磨を拵へて居らしやる、庭下駄をつつかけて、枝折戸あけて裏に出ると、池の汀も兩側がこほつてる上に雪が一ぱい積つて居る、向の岸まで枝がたれてゐる松の木から、折々ほたり〳〵と雪が落ちて水に消える、何におどろいたか、小鳥が一羽チヽ——と鳴いて向の森にとんで行つた、

桐の芽ばえ

大阪　栗野光子

能くは私しもおぼえませんが、何でも八ツか九ツのいたづら盛りでした、おぢい様の大切な桐のめばえが御座いました、それを私しが一本一本ぬき取つて遊んで居ましたと、おぢい様は驚いて「これ〳〵そんな事をしては枯れるぢやないか、それはお前が大きくなつてお嫁に行く時簞笥だの長持だのを拵らえてあげるのだ、ぬいてはいけないよ」と云ひ云ひ元の通りにしてゐられましたが、あゝ今は桐も大きくなり、私しも年頃になりましたが、おぢい様はもう此の世には居られません。(入賞)

親子の合作

澁谷　中村千代子

姉さん君が代が書けてよと明けて九つの竹ちやんが嬉しさうにして見せに來ました、私もすぐ新玉の年の始めに筆とりて下手ながらも書きました、すると父が幸多き明治四十三年と墨の色さへ鮮やかに朝日に匂ふばかりにお書きになつた、母は傍らでにこ〳〵し乍ら、私も何か書きませうと、筆の穗先を浸されて、君代と御自分のお名を記されました、

我が露子

金澤　露滴

鶏が井戸端で淋しく啼いて、ハラリと散る落葉の音までが物悲しい、す

やすや眠つてゐた露ちやんが突然、「姉ちやん」と呼ぶ、「なあに氷でもあげやうか」といふと、「姉ちやん〳〵痛いわ、こゝが痛いわ」といふ僅に、額に手をあてゝると、まあ大熱、それに咳も氣にかゝる。……一昨日、床についた露ちやんの病は、日一日に重るやうだ、熱も昨日より大へん強くなつた、あゝ露ちやんは母樣と同じ病で、まだ八才の可愛盛りを、葉末におく露のやうに、果敢なく散るのではないであらうか、などゝ考へると、止め度なく涙が落ちる、日はもう病院の裏の方に沈んで空は眞赤に燃えるやう、

叶はぬ望み

長門　山本きせ子

私の望みは決して、おいしい物が食べたい立派な着物が着たいといふのではありません、

只昨年の秋亡くなられた母さんに今一度「御母さん」と云つて見たい、と之が私の滿一ヶ年間の望みでした、そして今後も只此ればかりが望みです、とてもかなはない事とは思ひますが……、

家庭の趣味

淡雪

岩代　江口ろく子

眞白に膨らむだ雪が、如月の陽日にみる〳〵溶けてゆく、畑の隅に蒔いた菜の若芽がほんのり頭をもたげてそこら一體が薄緑りになつた、やがて芽葉草の葉が見えて飛石や灯籠の臺の雪がすつかり消えて終つた、此の二三日は日が午に近づく頃には屹度祖父樣の鶏冠りの寒紅梅が緣端に出るが、今日もいつぱいそれが出た、日足が水仙の鉢にとゞく頃雪は全く消えて泥濘となつた、やがて南の日向はもう乾いて地が現はれた、弟は滑られぬのでこぼしてゐるが、祖母樣はよろこんで針仕事をはじめられた、光明、潭托、消滅などいふ考が切れ〳〵に胸に浮んで來た、この分ではもう梅も間近に咲くであらう、（入賞）

一日の瀬戸

横濱　さゆり

一夜あければ御正月と云ふので、今日のせわしさは一通りでない、お父さんは朝から金庫の前にそろばん片手に張面と題引、いつもこたつに許り入つてゐらつしやるお母樣も、今日許りは臺所に入たきり竹や（女中）を對手に明日の仕事でいそがはしさう、姉さんは春着が間に合はぬとて今日こそは徹夜してもとおつしやる、私と妹とは朝からの掃除にほんとにつかれてしまつた、店の者は此寒いのに又十二時一時まで掛取りにあるくのかしらん、僅かに空が曇つて來たので、明日の御天氣が心配でならない、

妹の寫眞

麹町　初雪

待ちに待つた妹の寫眞が到着しました、一年の間にまあこんなに大きくなつて、ほんとう見違へる樣に二人とも頁く寫つて居ること、少し小高い所で桐の葉を持つて居る美代ちやん、振分髮のまだ肩にとゞかぬに、菊模樣のお振袖に厚板の帶をたて矢の字にキツトしめたその姿といつたら、まるでお人形樣の樣、そしてその下に跪いて居るあきちやんは、去

年君の結ふて置いた赤き友禪ちりめんの重ねに白きアップロンを掛けて可愛らしく、ほんとに飛びつきたい程、まだ母ちやんの御乳がお口に殘つて居る樣です、もう少し近ければこの無邪氣な姿も見られるのに、遠くはなれし身の、あゝいつ會ふことが出來るでせう。

月蝕の夜

常陸　霞の里

夕飯の仕度に玉子蒸しも漸く出來上つた、さあこれから鴨の吸物にとりかゝらうと、煮汁を引いて居ると、外から這入つて來たお鍋、「お月樣がおつかけましたから早く出て御覧なさい」との御注進、急ぎ前掛はづして裏の畑に出て見れば、雄さんやゆき子ちやんは遠眼鏡持て橋の上に「見えてよ早く被來しやい」と頻りに手招きする、見れば月は虧け初めた……やがて滿月に立戻つた頃、ゆき子ちやんすや／＼と夢を結んだ。

兄樣の御土產

栃木　石川錦子

御歸省の兄樣は、にこ／＼とお緣に上られる、持つて行て上げやうと、かばんに手をかけたら重いこと／＼、今日こそはお土產が、と樂しんで開けて見たら、何のこと、着物一枚入れずに本ばかり、可笑しかつたのをジツトこらへて、「兄樣、約束のお土產を」と言つてやつた、之れにはさすがにまいつたのだらうと思の外、生れて十九年間、きたへ上げたお腕はちがう、荷物がおほいので後からおくつてくる筈だと、風がさらつてくるか、鳥がくはへてくるか、一向當てにはならぬ。

寫眞

靜岡　天野欣

けふはお祖父さんの誕生日だといふので、從兄の健さんが寫眞器械を持つて是非みんな撮るやうにと勸める、寫眞撮ると壽命が短くなるから止さうとお祖父さんは昔氣質の一點張、けれどみんなして勸めてとう／＼撮ることにした、家内九人は中庭の泉水の前へならんだ、お祖父さんを眞中に、父と母、それから兄妹五人、末のは私が抱いた、いろ／＼位置を直し、光線を調へ、さあ撮りますよと健さんはピーと笛を吹いた、すると武夫と芳子が笑ひ出す、今度は笑つちやいけませんとまた吹くと、また笑ふ、末の子が動く、三度目でとう／＼撮りました、みんな笑つてゐるでせうよ。（入賞）

回想

信濃　古川滿壽美

故鄕の苦しさに堪へかねて只一人よるべなき漂泊の身となりしは思へば早や五年の昔、異鄕の空に星移り年變りて、其折々どんなに泣いたであらう、或夕靜に故山をさして飛ぶ雲を眺めてゐると、ふと「孝行のしたい時分に親はなし」と云ふ句が心に浮んだ、其時自分はもう／＼たまらなくなつて斷然歸鄕を決心した。

さびしき心の内にも多少の悦びを誇らして久しぶりにて懷しき門なくぐれば、昔にも增しゝ變りはてたる我家の有樣。いそ／＼と迎へて下すつた母の、哀れ其面はやつれてゐる。もう今は語る友もない。（入賞）

無邪氣

栃木　つや子

二つになる坊が、表の緣の明るい日がさしてぽか／＼と暖い所で、足

を出してあちら向ひて何か一生懸命にしてる、後からそろーつと行つて覗いて見ると、鏡臺の上に置いたレートの、まだ半分以上も有つた瓶を持ち出して、中のものはそこら中へうつしてしまつて、其のあとへ小さな疎菜豆な小な口からよくもきかない手で一生懸命に入れて居る、そしてもう五つばかし入れて居つた、赤いのを二つと白いのを三つ……、前の櫻の木の上では雀がチユー〳〵飛んでる、いかにも長閑な小春日和の静な朝で、私は何だか神様の世にでも來た樣な心地がして、いつもの樣に蓮坊を怒ることも叱ることも出來ないで、たゞ茫然と見て居つた、

友情の發露

お正月の一日

大阪　秀子

お屛風の陰でお父樣からのお菓番を夢中になつて讀んでゐると、妹が不意に後から、「アラお姉樣此處にゐらして、姿マー何んなに探したか知れやしないワ」と眼の緣を紅でも差した樣に赤うして苦しがつてゐる、「諏訪ちやんはお暦蘇に醉けたの子」と云と、「イヽエ」と可愛い顏をする、處へいと靜かな衣摺れの音、何誰かと思つて屛風の陰から一寸覗くと、大好きな靜子さん、御挨拶もそこ〳〵にお上り遊ばせといふと「今日は父樣のお代理で急ぎ升の」とお仰やるので、たつてお止もしない、「では今晩きつと春さんと御いつしよに子、例のをしますから」、「エヽゆつくりお邪魔してよ」とニツコリ笑つてお歸りになつた、咲の案の廣告の樂隊が曲を奏しながら美しい旗おし立て東へと練つてゐつた、

友の爲の祈禱

京都　秀子

「神よ願くは永久に友が世を守り給へ、友に光あらしめ給へ、涙にもろき赤心もて祈る我がねぎ聞き上げたまへ、天上の者をして心安からしめ、地上の友をして煩悶せしめ給ふなかれ、神よ願くは友の未來に幸あらしめよ」、とは五年前に父上に死に別れ、かりそめと思はれし母上の病に永き別れとなり果て、親と賴む兄上に二人まで續いて逝かれ、今の夜寒むの時、春花にそむきて去りし雁もまた歸り來るの時に、ゆきて再び來らぬ父上、失ひたる母、うばはれたる兄上を想ひて悲痛の胸をいだく友の爲に神に捧ぐる切なる祈です、(入賞)

朧夜の花

丹波　上田　おちば子

「いゝ香ですね」、吹く風のまだうすら寒い春の夜に朧の月影を浴び乍ら、私は文樣と庭に立つた、一面に漂ようてゐる白梅の床しい香に醉ふてハラ〳〵と散る花びらの行方を見つめてゐると、「丁度こんな夜でしたわ、母樣の逝かれたのは……」お聲はひどく沈んでゐる、思はず仰向くと文樣の瞳は涙であやしう光つてゐた、

初春の涙

岩代　岡　美都子

「日毎に老けて行くのも考へず、お正月が來ればお節句、梅が咲けば櫻を待つて、來る日も〳〵家の中で、同じ事ばかり、くり返して居るんですもの、眞實うにつまらなくつて、貴女や熊谷樣の、御境遇が羨しく思はれてなりませんわ」と、お定まりの不平を言ひ出すと、吉田樣は、「又そんな事おつしやる、あんな子供を相手に遊んで居るから、外面は樂し

さうに見えるけど、實際つらいんですよ、先週の水曜には、算術の研究教授があつてれ、大汗流して授業をすますと、先生方の綿密な批評、其時のつらさ、泣きさうでしたわ、それに歸りが後れて、家についたらもう眞暗がり、疲れては居るし、寒いのに火の氣はなし、つく〲情なくなつて、燈もつけず、机にもたれて、泣いてしまつたの、あゝこんな時慰めて下さる方が有つたらと思ふと、胸が張りさける樣になつてれた――」とホロ〱涙をお落しなさる、私は無言のまゝ熱き同情の涙を流しました、（入賞）

白き花びら

越中　菊　榮子

日頃なつかしき友よりの音信、まあ嬉しい、開く間おそしと、いたく心をどりて、くり返し讀み行く程に、はら〱と落つる、眞白なる茶山花の二たひら三ひら、なつかしともいや床し。あゝなつかしの我友、御心こみし此の花瓣、我は暫時茫然として、遠き友と、同じまなびやの、昔を偲びぬ、

歸國せぬ春

東京　西村節子

東京にて一度は、新年を迎へむと、譲れて思ひしものから、來む冬休みは歸國せざる旨母上の許に通知しやりき、その文認めし時は旭が障子に映りて心も何となくすが〱しかりしゆゑ思慮もなう、かくは認めしものゝ、其夕には早や今朝書き送りけるを、悔み初めぬ、夜、友の誰れ彼れ寄り集ひ、歸鄕して樂しきまとゐの中に冬休みを過す事の歡びなど語り合ひいづれも休みの日を待ちわぶる由聞きけるなり、妾が心は如何になどりしよ、友散じて後、去にし年の冬休みの日記等繙きけるに、其折の樂しかりける事ども目に見るやうに覺えて、それやこれにて、其夜はうまひも得せざりき、（入賞）

慕ひまつる君へ

長崎　ひろ子

行く年波によどみなく、今年も早や暮れんと致します、おなつかしい凉子樣、如何お過ごしなさいますか、思ひまはせば今年の夏、温泉場でお目にかゝつたがもとで、それからは實の姉も及ばぬお厚情にあづかりまして、何とも御禮の申し樣も存じません、ほんとに私は何も氣がつきませんのよ、だから悪いところはどし〱お忠告遊ばして頂戴、そして來ん年は今年にもまして お導き下さいます樣にお願ひ申し上げます、

かるた會の思出

奈良　富澤美穂子

思ひ出づる一年の昔、かるたの集りに、房子樣の御手並、いかに美しかりしよ、又來ん年もと思ひしに、あはれつれなき風の神よ、などて淸き少女をへだゝれる世には召しつる、お姿戀しくて、手箱に秘めし御うつしゑ取り出せば、いつ迄も仲よくとちかひし愛らしの口には今もなほ笑をふくみて、あゝそのやさしの目は今もなほ我を見つむるを、

少さなワイフ

鹿兒島　山田壽々枝

私の弟の今年取つて六つになる利ちやんが、隣の荒物屋の一人娘の一ツ年下の丸ポチヤの高ちやんと二人連で店先で 如何にも嬉しさうに遊ん

で居ると、向ふから中學生の市ちやんがやつて來て、此樣を見ながら、高ちやんは利ちやんのワイフだから、何時も離れつこはないネ、と言ふた、すると二人は何んだか解からないで唯だワイフ〳〵と言つて、無生に喜んで居る、奥から見て居た私は思はず吹き出した、

自然の美

大雪の朝

信濃　優梨子

「まア酷い降りで御苦勞だ子」と優しく送つて下さる母樣に御挨拶して、私は家を出た、

昨晩から降り續いて、もう七八寸も積つて居るのに、まだやみさうもない、三王門の鳩も居なければ、豆賣婆さんの姿も見えない、

辨天坂の細道で幾度も雪の中によけては袴の裾をぬらして、小學の子供を通してやつた、

湯屋の森が、美しい花と咲いて居る、かるかや往生寺の道を右に折れて、私は戸隱街道を上つた、

「酷い降りだな、飯綱原は一尺から積つて居たぜ」と氷つた手綱を引いて、彼の連れを振り返りながら馬子が下つて來た、

眞白い中に暖かさうなストーブの煙りが教室毎に見えた、私の足は小刻みに急がれた、（入賞）

緑さんの述懐

北見　信太英子

梢を渡る風が颯と、胸の奥まで沁み込む樣に吹いて、ハラ〳〵と木の葉が散る、鳥が侘びしげに啼きながら飛んで行つた、庭の草花見るかげもなく霜枯れて、只一本の寒菊のみいと誇りがほに咲きにほつてゐる、「あわかくて、青春の血は枯れんとす」と突然みどりさんが云ふ、其の美しい長い睫は、いつか潤ふてゐた、（入賞）

月夜の白雲

伊豫　多景子

ザワ〳〵と庭の棕梠竹のゆれる音がして、其影が障子にうつつた、そつと障子をあける、十六夜の月は中天高くすんでゐる、鼠色のそらには白い雲がちぎれ〳〵に飛んで、其絶え間から弱い〳〵星影がもれる、すつと寒い風が枯枝をわたつてくる、私は思はず首をちゞめた、外にはカラコラと云ふ下駄の音とともにあんまの笛の音がした、

お美代ちやん

水戸　中根雅子

お向ひのお美代ちやんは、明けて十五の可愛い娘さんである、まるぽちやではあるけれども、色白で、眉のこい、殊にその鈴の樣な眼は、顏全體を生々と見せる、京生れの母樣のお好みで、髮はいつも銀杏の子をあしらつた桃割、「私、兄樣にお多福お多福つていはれて、口惜しいから、御飯、ちつとしきあいたゞかなくつてよ」なんて、罪のない心配をして居る、「ぢやお腹が空くでせう」と聞けば、「そのときあ、燒芋を買つて食べるのよ」、どこまでも無邪氣である、（入賞）

歎く人と喜ぶ人

讃岐　紫の花

月の光に老松の三枝二枝破れし窓の障子に影をなげて、あたかも一幅の墨畫のやう、今朝生けた山茶花を見て居ると、表の方で商人であらう、車をギシ〳〵と音たてつゝ「最う今年もくれて逝く、月のたつは早いものだ」「あゝほんとうだ此樣に不景氣だし年の終りが思ひやられるな」と互に歎じつゝ行くかと思ふと、幼い聲で「正月こい〳〵松竹立てゝ羽もつて」とさも嬉しげに足音に合せつゝ遠くに消えて行つた、あゝ彼の幼子も一年二年と過ぎては又逝く年をかこつ時が來るであらうと思ふと、何となく哀れな思がする、月はいよ〳〵冴えて、犬の聲も凍えるやう、

月下の猿

下谷　磯崎ふみ子

冴えた月の光に、山頂の平地はまるで磨いた白銀のやうに輝いて居ります、と其處へ、ガサ〳〵と落葉を踏み敷く音と共に何物かゞあらはれて來ました、しかもそれは立ち止つた儘、大空に向つて頻りに吠え始めました、――白い齒を思ふさまむき出して、首を高くグッと前にさしのべて、

そしてその前足を揃へて大口を開いた恐ろしい影は、黒くはつきりと凍つた地面にうつつて見えます、すさまじい呻り聲はあたりの木立を殘らず根こぎにでもして仕舞ふかのやう…… 胴の細ない一匹の猿、私は深夜、ふと斯んな事を思ひ泛べて一入の寒さに身を顫はせました、

才媛詞藻の募集に就て

我が女學世界は、こゝに芽出度新年を迎ふると共に、今後大いに新進の才媛の詞藻を賑はさんと欲し、從來募集せしものゝ外、更に美文、日記、書簡文、俳句、私の實驗等、各種の文に就いて讀者の瓊章を募る、苟しくも文藝に志ある諸子、冀くは錦心繡腸を披攊したまへ（投書の規程は二〇八頁に詳記す）

▲謎の新題

「活動寫眞」とかけて

「人口の繁殖」とかけて

「自然主義」とかけて

讀者倶樂部

▲年賀状――左記の方々から皆様と記者へ宛て年賀の御手紙が參りました、茲に謹んで御禮を申上げます、三河那木まゆみ子、山口紫山女史、鹿兒島別役とし子、埼玉野菊子、信濃野口千鶴子、滋賀久保岸子、京都神谷郁子、岩代會津女史、大阪梅村愛子、埼玉中村みどり子、香川木下光枝子、岩代武藤たみ子、大分秀子、大隅前原常子、相模内藤千代子、福岡竹石はるよ子

▲交際希望――私は當地實業家の娘で御座いますが、同胞とては兄一人有るばかりで、姉妹なき身のいとゞ淋しくて、本誌を無二の親友として愛讀して居りますが、御蔭様で本誌を媒介として御交際ねがつて居ります御方様が澤山ございまして、誠の御姉上様と存じて喜んで居りますが、尚一そう各地の愛讀諸姉様と御交際ねがひたう存じます故、何卒御手紙下さいまし、直に御返事申上げます、私の住所は本誌昨年の拾月號の本欄にございます、（京都神谷郁子）

▲内藤千代子様――私も貴孃の御名文を初めて拜見致しました時には、實際驚く手紙だと思ひました、ソシテ眞人にも見せますと、冷静な頭腦をもつた眞人は申ますに、『之れは詩人ヨネ野口が、先年米國婦人をヤンヤと騒がせたと同型(セーム)(タイプ)だ、どうして十七の、然も女がこんな褒い腕を現はせるものかつて」、私もお年の點は信じられませんが、然も女がピツト額にさげりましたから、『廿世紀の今日これ位の逸文の書ける方は女にだつて御座いますよ」つて申ました、スルト眞人は「若しもありとすれば亡國のもとだ、怪しからん女だ」つて申して居りました、處が今度の栗がパチ／＼の一幕(イッシヨ)を拜見致しましたで『ホー、此女と僕と夫婦になつたら、栗屋が繁昌したらう！」ですつて、夫れは御自分は大好だからですよ。オホヽヽヽ、兎に角千代子様、愛讀者諸姉のためにお寫眞を本誌にてお見せ下さいましよ、（北米タコマ、カーチーシヨン）

▲絵葉書交換――私は各地方の絵葉書を集めて居ります、御同志の御方は下名まで御恵送下さい御返禮に當地のを差上げます、（備前國邑久郡牛窓町吉田竹子）

▲五十嵐都留子様――お互に遠く隔りまして御拜顔は出來ませぬが、せめては本誌のよしと思ふ節々互に語りあはせて、と御約束しながら、いつか御疎遠になりまして、御住所も分らず、淋しい年を迎へました、どうか御住所をお知らせ下さいませ、（大阪東區谷町三ふみ子）

▲大家の奉公希望――私は高等女學校を卒業致しまして田舍に居りますが、華族か外國人の家に奉公をしたいのです、華族や大家であれば下の女中でもよろしいし、外國人の家であればなるべく大きな所へ行つてつとめをなしつゝ英語が習ひたいのです、これは神戸邊でありたいので、大家の方は東京になつてもよろしいが、私の家ではつてがありませんが、よい所がありましたら何卒御紹介を願ひます、（攝津の里のわらべ）

▲深川不美千様――貴孃はもしや横濱に居らした方では御ざいませんか、一寸おたづね申ます（靜香）

▲投書の質問――記者様に御尋ねいたします、女學世界にいろ／＼の記事を出すにはどう云ふ方法にして出したらよいのですか、誠に恐れ入りますが誌上で御案内下さいます様くれ／＼も御願申します、（岐阜縣の女）本誌每號の終りの頁に書いてある規則に依つてお出し下さい。

▲交際希望――本誌愛讀のお姉さま方、何卒是から私もお仲間にいれてお導き下さいましな、私は以前からもう此の女學世界が好きで／＼これぱかり讀んで居りますの、ほんとに私の親友は此の本よ、從がつて本誌を御愛讀遊ばすお姉様方がおなつかしくつてたまりませんの、何卒お姉様方末長く可愛がつておつきあひ遊ばして

頂戴な。(大久保にて妙香)

▲近眼療法‖東京の近眼女様、御投書拜見御同情申上げ升、つきましては私が先日の本欄で申上げました、化學的食養會へ、食療法御質問遊ばせ、手數はいりません、返信用として二錢郵券を封入して戴けばそれでよろしいのですが私から會の顧問なる岡部先生へ御紹介申上げますから、私方まで御住所御姓名御知らせ下さいませ、私の住所は昨年拾月の本欄に有り升、(京都神谷郁子)

▲内藤さん‖大阪府下愛讀者様の仰せの通り私は一昨年の秋以來片時も内藤千代子様の事を思はない日とてはありません、ほんとに何うしてあんなに御上手なのでせうならば花の主なる君居ます鵠沼のほとりへ飛んで行き原稿でも書いて居らつしやる所をそつとのぞいて見度い事いくら御慕ひ申しても御目にかゝる事はかなはないでせうから、せめて御うつしゑでも掲げて下すつたらどんなに嬉しいでせう、記者様どうぞ〱一生のお願ですから萩香様の美しい御俤を拜させて下さいな、(宮城の多福子)

▲美鈴女様‖ちぬの浦とうけたまはりてほんとにおかつかしう御座います、何處?あなたの御住所おしらせ下さいな、(千鳥子)

▲添削依頼‖何誰様にか文字なり文體なりの添削を願度も外出の思ふにまかせぬ身故通信にて右様なる御事業遊ばさるゝ御方様何所にても御座いまするなれば誌面にて御報を願ひます確實なる御方様を、(YMK)

▲内藤さん‖毎月毎々號の女學世界に内藤千代子として、日記文隨筆などかゝれてありますが皆様の中にはスッカリチヤームされて、會ひたいの交際したいのと仰しやる方がありますが、私は十七でもなく十九でもなく三十路をこしたおばあさんがむかしの夢をかゝれるのだとおもひます、(酒井朝香)

▲交際希望‖ちぬの浦の美鈴女様、お懐かしう御座います、私も本誌の愛讀者です、誠に不束者ですが、此後何卒御交際を願ひます、私は岡山縣淺口郡三和村大字占見新田字中村高橋八千惠です、

▲御注意〱‖本紙愛讀者の皆様方、私は神聖なる女學世界の最愛者で御座います、何卒誌上に於て隔てなく御交際を切にお祈りいたします、大阪府下愛讀者様、一月號の讀者倶樂部を拜見致しました、私も内藤千代子様を思ふ一人ですよ、えゝどう思ふかつて、心の日記、同じく秘密の手紙、小説松風……あなたの仰せの通り拜讀するごとに體がしびれた様に身もなりますが、あゝ此の御作などどんな方々が御らんなさるだらう、此のお作を讀んで讃嘆の涙に袖を絞つてゐらつしやる方がど位あるだらうと存じましたの、皆様如何で御座いますか?矢張千代子さまの御作に醉はされて居らつしやるのですか、考へて御らん遊ばせ、(あゆらにて佐藤)

▲毛髮の衛生‖皆様、私は昨年の拾月に本欄へ毛髮に付いて投書いたしました處、澤山御質問下さいまして、化學的食養會へ御紹介申上げまして食療法御進め申上げましたが、うたがはずに御實行遊ばしてゐらしつた御方様から、御陰で拔毛が餘程すくなくなつたからとの御手紙が參りました故、御困りの御方様は御心置なく御申込み下さい、何時でも御紹介申上ます、(京都神谷郁子)

▲指導お願ひ‖私は今年とつて十六歳になりました、今は高等女學校の三年ですが、後もう一年で此上の學校へは上りませんのでございますから、何卒小さき妹として御導き下さいませ(小樽あき子)

▲松岡霧野様へ‖大久保の松岡霧野様、おなつかしいわ、あなたも四大久保でゐらしやるの私も大久保にをりますものよ、あなた四大久保のどの邊ですか、私は長光寺のそばよ、毎日獨りで淋しくていけませんから、お暇の時にお遊びにいらつしやいな、(大久保まる子)

新刊紹介

△銀月文　伊藤銀月著

文に多能なる銀月氏の雑筆數十種を集めたるものなり、様々の觀察、紀行、日記、いづれも奇抜にして、輕妙なる流石に一角の文章家の文章といふべし、價五十錢榮山堂發行

△小賣商店繁榮策　石井研堂著

都會地に於て小資本を卸ろして小體の店を開き小規模に經營せんと欲する商店をして相應に繁榮せしめんと欲せば隨分工風を要することなるが、この書は即ちこれ等の爲めに一かどの繁榮策を考案したるものなり、商品の仕入、場所の撰定、廣告法、お客待遇法、金錢の出納より、現金賣、かけ賣の巨細に至るまで一々經驗に基きて說明し、繁昌の指針を示したる良書なり價四十八錢博文館發行

△春日局　武田仰天子著

三代將軍の媬母として、德川幕府大奥老女氣質の一典型として古來異彩を放てる女英雄春日局の一生を細叙せるものなりこの一書男まさりの局の氣象は遺憾なく發揮されたり價八十錢東京堂發行

△蒙古土産　一宮操子著

若き婦人の身を以て單身萬里の沙漠に入り、帷幕に臥し、駱駝を伴として數年間育英の事に從ひたる河原操子女史の壯志は當年女流社會の一珍事として江湖に喧傳せり、蒙古土産は即ち當時の紀行井にカラチン王府に於ける教育事業の實蹟を記したるものにて蒙古の風土生活の狀態を委曲に叙述したり女史によつて文明の光を見るに至りし蒙古の婦人の將來又多幸なりといふべし價八十錢實業日本社發行

△藤村集　島崎藤村著

文壇の一異彩として注目されたる藤村氏の短篇中好評ありし並木、收穫、一夜、若き人、旅、弟子、雜貨店、奉公人、芽生等の數種を集めたるものなり、清新の想、靈妙の筆は紛々たる俗書と其の撰を異にするものなり價七十五錢博文館發行

△女聲唱歌　天谷秀　近藤逸五郎　共著

本書は主として女子師範學校高等女學校等の教科用に充てんが爲に著はしたるもの丶由にて奏西名家の傑作、女聲三部合唱二十有五を集め、歌詞は尾上柴舟、武島羽衣、三宅花圃、大塚楠緒子、與謝野晶子等の諸家の作なるが、歌曲調和に特に苦心されたるが如し、定價金五十錢、通油町水野書店

△ポケット女四書　龜谷正司編

貝原益軒の女大學、植村玉枝の女中庸、及び女小學、三輪田眞佐子女史の四書を錄し、それに下田歌子女史、村上專精博士等の諸評を附したる小冊子なり、略ゝ我國在來の女訓を會得し得るところ一寸便利なり、定價金三十錢麴町十丁目藏六書院

△古今女流俳句集　今井柏浦著

上は貞享元祿より下明治に至るまで凡そ女流にして俳句に名をとゞめしほどの句は大方網羅せり、時候、人事、天文、地理、動植物の部類を分つ温順にして玉のごとき閨花の流露は流石に女流の胸襟なり價三十錢博文館發行

△俳諧新派と舊派　武田櫻桃著

古今に名ある俳人の句數百千種を集め、これを新舊兩つの思想に分類し、彼是れ長短を批評して兩派の特色を發揮し句の姿勢、態度を味はしむる樣工風したるところ一段の趣向なり價六十錢公文書院發行

△わかは（第廿四號）　若葉歌會發行

「わかは」は若葉歌會の會員の詠草を集めたる雑誌なり、清新の氣の溢る丶を見る、會は赤坂區赤坂臺町五十八番地にあり、毎月一回歌題を課し諸大家の添削を經たる上本誌に掲載する外、課題以外の添削歌合等をもなし、又質問にも應ずといふ、撰者は海上胤平、篠塚躬弘、小杉榲邨、坂正臣、遠山英一等の諸大家にして、會費は毎月金七錢

△（假中）女大學　石山福治解說

貝原益軒の女大學の原文を掲げ、一節毎に解說を施したる小冊子にして、何人にも讀み易き樣に記述しあり、尚ほ卷末に近頃有名なる女子教育家の議決したる新女學生十訓をも收めあり、定價金十錢、丸山福山町奉公會

△新式初等英語獨修　長井氏晸著

英語の發音、綴立、讀節等の仕方を尤も詳しく丁寧に解說したれば初めて英語を學ばんとする人の手引として尤も簡便なる獨修書なり中學一二年の程度の人には尤もよき參考書なるべし定價六十五錢博文館發行

△正義の鐘　横地良吉著

英語練習生の課外の讀物として趣味ある參考書なり、英米諸國の讀本中より尤も面白くして文の趣味深きものを撰びて解釋し、解剖したるものなれば歐文の妙を學ばんとするに就て頗る有益の課外書といふべし價三十五錢博文館發行

△女子手藝講義錄

女子職業學校卒業生より成立つ手藝普及會が、家事の都合にて學校に通ふ事を得ざる者及び在學生の參考用として發行したり、執筆者は同校職員其他知名の人々、科目は編物、組糸、和服、洋服、袋物、造花、細工物、刺繡、割烹等、講義は親切なり、毎月一回發行一ヶ年にて終了、會費一ヶ年金三圓二十四錢、申込所日本橋區通一丁目大倉書店

△習字用新體女子用文

雛井雨江氏の作、氏が平生の所信を玉の如き麗筆に現はし、書は優美なる中村春堂氏の筆それに小野鵞堂氏の書式數葉を附して錦上更に花を添ふ、定價金七十五錢前川文榮閣發行、

才媛文壇懸賞募集（二月十五日〆切）

▲美　文（二十四字詰三十行以內）
▲日　記（二十四字詰二十行以內）
▲書簡文（二十四字詰二十行以內）
▲私の實驗（二十四字詰三十行以內）
▲和　歌（一人一首）
▲俳　句（一人一句）
▲謎▲笑話▲讀者俱樂部

△美文、日記、書簡文、私の實驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、謎、笑話、俱樂部は端書にかぎる。△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛とし△原稿に文の種類を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文△私の實驗
天賞參圓、地賞貳圓、人賞壹圓
△和歌△俳句△謎△笑話
天賞壹圓、地賞七十拾錢　人賞五拾錢
（圖書切符）

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ケ月分）……前金七十五錢
八册（半ケ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ケ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册
　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十四圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四錢	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規
●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十三年一月十一日印刷納本　第拾卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番／千十八番
本局　二千六百二十番／三千二百二十九番

圖書定價改正廣告

弊館發行の圖書中左記の百餘點は十數年前の刊行に係り其後も引續き增版舊價を以て江湖の需要に應じ來り候處現今に至りては發行當時に比し凡ての出版費殆んど倍加致し候爲め增版の都度多大の損失を釀し居候に付此度不得止定價を改正値上げ仕候乍併世間類似の出版物と御比較下され候はゞ尙ほ遙かに格安なること明瞭可致と存候就ては是迄右圖書中一時休版いたし居候分も此際增版取揃有之候間陸續御註文被仰付度奉希上候

明治四十三年一月

東京日本橋區本町三丁目

博文館

帝國文庫

全部五十册
紙數壹册壹千頁
中判總クロース
脊皮金字入美本

改正 定價 壹册 七拾五錢
郵稅 壹册 拾貳錢

【割引】
●五册 金三圓七十錢 ●拾册 金七圓二十錢 ●二十册 金拾四圓
●三十册 金廿圓五拾錢 ●五拾册 金卅二圓五拾錢 (外要送料)

全部書目

(一)眞書太閤記卷一
(二)眞書太閤記卷二
(三)眞書太閤記卷三
(四)眞書太閤記卷四
(五)源平盛衰記
(六)南總里見八犬傳上卷
(七)南總里見八犬傳中卷
(八)南總里見八犬傳下卷
(九)東海 奥羽 木曾 江の島 道中膝栗毛
(一〇)梅暦春告鳥
(一一)通俗三國志上卷
(一二)通俗三國志下卷
(一三)三馬傑作集
(一四)柳澤、越後、黒田、加賀、伊達騒動實記
(一五)京傳傑作集
(一六)種彦傑作集
(一七)星月夜鎌倉顯晦錄 北條九代記
(一八)通俗十二朝軍談 通俗武王軍談 通俗明清軍談
(一九)甲越軍記
(二〇)通俗吳越軍談 通俗漢楚軍談
(二一)楠廷尉秘鑑
(二二)風來山人傑作集
(二三)西鶴全集上卷(發賣禁止)
(二四)西鶴全集下卷(發賣禁止)
(二五)滑稽名作集上卷
(二六)滑稽名作集下卷
(二七)其磧自笑傑作集上卷
(二八)其磧自笑傑作集下卷
(二九)人情本傑作集上卷
(三〇)氣質全集
(三一)珍本全集上卷
(三二)珍本全集中卷
(三三)珍本全集下卷
(三四)人情本傑作集下卷
(三五)赤穗復讐全集
(三六)水滸傳上卷
(三七)水滸傳下卷
(三八)忠臣藏淨瑠璃集
(三九)四大奇書上卷
(四〇)續氣質全集
(四一)四大奇書下卷
(四二)近松時代淨瑠璃
(四三)大岡政談
(四四)佛教各宗高僧實傳
(四五)仇討小說集
(四六)馬琴傑作集
(四七)淨瑠璃名作集
(四八)俠客傳全集
(四九)續仇討小說全集
(五〇)近松世話淨瑠璃

(後付の三)

日本文學全書

【割引】……●六册金壹圓七拾錢●十二册金三圓三十錢●廿四册金六圓四拾錢……(要外送料)

全部書目

(一)竹取物語、伊勢物語、住吉物語、徒然草、紫式部日記
(二)土佐日記、枕草紙、更科日記、方丈記
(三)十六夜日記、落窪日記、辨内侍日記、
(四)とりかへばや物語、堤中納言物語、四季物語、
(五)中務内侍日記、蜻蛉日記、讃岐典侍日記、和泉式部日記
(六)濱松中納言日記、大和物語、唐物語
(七)宇治拾遺物語
多武峰少將物語
(八)源氏物語
(九)源氏物語
(一〇)源氏物語
(一一)源氏物語
(一二)源氏物語
(一三)榮花物語上
(一四)榮花物語中
(一五)榮花物語下
(一六)太平記上
(一七)太平記中
(一八)太平記下
(一九)保元物語、平治物語、秋夜長物語、鴉鷺合戰物語
(二〇)平家物語
(二一)古今著聞集
(二二)公事根源、十訓抄
(二三)水鏡、大鏡
(二四)增鏡

全部二十四册
中判洋裝並綴
紙數壹册四百頁以上

改正 定價壹册 參拾錢
郵税壹册 八錢宛

支那文學全書

【割引】……●六册金壹圓七拾錢●十二册金三圓三十錢●廿四册金六圓四拾錢……(要外送料)

全部書目

(一)四書講義(大學中庸論語)上卷
(二)四書講義(孟子)下卷
(三)小學忠經孝經講義
(四)老子、呉子、孫子、列子講義
(五)韓非子講義上卷
(六)韓非子講義下卷
(七)莊子講義上卷
(八)莊子講義下卷
(九)正文章軌範講義
(一〇)荀子講義上卷
(一一)靖献遺言講義(發賣禁止)
(一二)唐詩選三體詩講義
(一三)續文章軌範講義
(一四)荀子講義下卷
(一五)十八史略講義上卷
(一六)近思錄講義
(一七)十八史略講義
(一八)戰國策講義上卷
(一九)戰國策講義下卷
(二〇)墨子文中子講義
(二一)詩經講義
(二二)史記列傳講義上卷
(二三)史記列傳講義中卷
(二四)史記列傳講義下卷

全部二十四册
中判洋裝並綴
紙數壹册四百頁以上

改正 定價壹册 參拾錢
郵税壹册 八錢宛

改正定價

書名	定價	送料
●石川鴻齋君校訂 鼇頭音釋 康熙字典 全六冊(中判一五二二枚) 桐箱入	六圓五拾錢	參拾貳錢
●同 帙入	五圓五拾錢	拾貳錢
●石川鴻齋君校訂 篆文詳註 日本大玉篇 全三冊(中判七二八枚)	三圓三拾錢	拾貳錢
●土生柳平君校正 明治大廣益 會玉篇大全 木村品太郎君編輯 全三冊(中判六六四枚)	二圓八拾錢	拾貳錢
●石川鴻齋君著 新撰日本字典 全二冊(半紙半截一〇一〇頁)	一圓三拾錢	八錢
●林退菴君著 新註 四書補註備旨 全五冊上帙入(美濃四截四六六枚)	壹圓二拾錢	拾貳錢
●宍戸逸郎君編 唐宋四大家文選 全五冊(大判一三八枚)	壹圓	八錢
●戸田翠香君著 文章字典 (半紙半截判五八二頁)	八拾錢	六錢
●石川鴻齋君補閲 増補 和漢字引 歷史文章 川田孝吉君編輯(半紙半截形二〇四枚)	六拾五錢	八錢
●長岡道謙君著 新刻正字通 (菊四截形五二七頁)	四拾錢	四錢
●柴田方祭君校閲 頭書圖彙 十八史略字引大全 關德君編纂(四六判一一二枚)	參拾五錢	六錢

改正定價

書名	定價	送料
●風月庄左衛門君編 校正三版 増字文選字引 (半紙半截形)	參拾錢	四錢
●後藤點 四書 全四冊(半紙半截形) 假名附	參拾錢	四錢
●棚橋廣君著 新撰 漢語字引 (菊四截形一三八枚)	參拾錢	貳錢
●齋木寛直君著 明治文選字引 (菊四截形)	貳拾八錢	四錢
●青蓋居士編 歷史文章 皇國字典 (菊四截形)	貳拾八錢	四錢
●博文館編輯局編 眞草 いろは早引節用 (菊半截形)	貳拾五錢	四錢
●東潭生君編 坂東、秩父、西國 百觀世音靈場記 (四六判三六頁)	貳拾錢	二錢
●三島文學博士校閲 山名善讓君訓點 資治通鑑 全七十冊(美濃判五一二二枚)	拾五圓	五拾錢
●林道春君 林春齋君共著 標記 本朝通鑑 全八十四冊 菊判四五六二枚	十二圓五十錢	五拾錢
●曲亭馬琴翁著 南總里見八犬傳 (本箱入)全五十冊(菊判三〇五一枚)	拾貳圓	六拾四錢
●長谷川雪旦君畫 江戸名所圖會 全二十冊(菊判一一七三枚)	六圓	貳拾八錢
●安藤安格君校訂 標註 史記讀本 全六冊(半紙判一三五三枚)	三圓五拾錢	拾六錢

改正定價

書名	著者	冊數	定價	送料
●五經	後藤點	全十一册(美濃判三四〇枚)	参圓廿錢	拾貳錢
●春秋左氏傳校本	宮脇通赫君標註	全十五册(半紙判)	参圓	拾六錢
●四書	後藤點	全十册(美濃判二〇五枚)	二圓五拾錢	拾六錢
●續唐宋八大家文讀本	村瀬栲君編	全十二册(大判)	二圓五拾錢	拾貳錢
●枕草子春曙抄	北村季吟君著	全七册(菊判)	一圓八拾錢	拾貳錢
●明治新刻 日本政記	學橋大郷穆君著	全十册(四六判八五〇枚)	一圓八拾錢	拾貳錢
●點註 五代史	石川鴻齋君點註	全八册(美濃判)	壹圓八十錢	拾貳錢
●萬國史標 十八史畧評註	近藤瓶城君評註	全七册(美濃判四三二枚)	一圓五拾錢	拾貳錢
●中等教育 支那史	增田貢君校閲 藤田久道君著	全七册(中判四〇七頁)	壹圓卅錢	拾貳錢
●廿二史言行略	矢土錦山君編	全六册(美濃判)	壹圓廿錢	拾貳錢
●增評文章軌範	大内政正君編	全六册(半紙判)	壹圓廿錢	拾貳錢
●博覽古言	菅相丞撰	全五册(大判)	壹圓廿錢	八錢

改正定價

書名	著者	冊數	定價	送料
●和漢 合璧文章軌範	石川鴻齋君編	全四册(半紙判)	壹圓	八錢
●むぐらぬ集	黒澤翁満翁編	全三册(大判)	壹圓	八錢
●南木誌	中山利貞君著	全五册(菊判一七五枚)	八拾五錢	八錢
●皇朝百家論文抄	沖冠嶺君編	全四册(大判)	八拾錢	八錢
●續皇朝百家論文抄	同君編	全四册(菊判一六九頁)	八拾錢	八錢
●和歌八重垣	有賀長伯君著	全七册(中本)	八拾錢	八錢
●本朝畫史	狩野永納君著	全五册(半紙本)	八拾錢	八錢
●作文率	山本北山君著	全三册(大判一五〇枚)	八拾錢	八錢
●賀茂翁家集	賀茂眞淵翁編	全五册(中判二二三枚)	七拾錢	八錢
●文章小成	芸閣千葉君著	全六册(小判)	七拾錢	八錢
●類題採風集	黒澤翁満翁編	全四册(中本二〇〇枚)	七拾錢	八錢
●詩文良材	大槻東陽君著	全二册(大本)	七拾錢	六錢

改正定價

書名	著者	冊數・判型	定價	送料
●畫法詳論	石川鴻齋君著	全三冊（菊判一五〇枚）	六拾錢	六錢
●文法詳論	石川鴻齋君著	全二冊（半紙判一二五枚）	五拾錢	六錢
●續文法詳論	石川鴻齋君著	全二冊（半紙判一一五枚）	五拾錢	六錢
●重刻内閣秘傳字府 ▲一名歷代名書要論	新安黃溪撰、黃楊子、黃威子校訂	（美濃紙）	五拾錢	六錢
●江戸名所花暦	長谷川雪旦君畫	全四冊（和紙菊判一五六頁）	五拾錢	六錢
●詩法詳論	石川鴻齋君著	全二冊（菊判一一〇枚）	五拾錢	六錢
●日本文章軌範評林	田島象二君編	全三冊（大判八八枚）	五拾錢	六錢
●初學文範	大典禪師著	全二冊（大判六二枚）	四拾五錢	四錢
●和歌俳諧節用集	片山精知君著	全二冊（小本二九二枚）	四拾五錢	四錢
●山陽先生眞蹟詩文帖	長尾銀次郎君編	全二冊（和紙）	四拾錢	六錢
●書法千字文	卷菱湖君書	全一冊（大判六三枚）	四拾錢	四錢
●常陸誌料關城繹史	宮本元球君著	（大本）	參拾五錢	六錢

改正定價

書名	著者	冊數・判型	定價	送料
●前出師表	佐瀬得所君書	（美濃判和紙刷）	參拾五錢	四錢
●箋註歐蘇手簡	大槻東陽君編	（中判）	參拾五錢	四錢
●楷書丞民帖	柳澤小陽君書	（石刷折本）	參拾五錢	四錢
●文藻行潦	山本北山君著	全三冊（菊半截）	參拾錢	四錢
●尺牘彙材	漆園君著	全三冊（小判）	參拾錢	四錢
●俳諧節用集	高井蘭山君著	全二冊（小本和紙）	參拾錢	貳錢
●作文志彀	山本北山君著	全一冊（中判）	貳拾五錢	四錢
●明治英名百首	小林永濯君編	（中本和紙刷）	貳拾五錢	四錢
●俳人百家撰	雄齋國輝君畫	（中判五〇枚）	貳拾五錢	四錢
●梧窓詩話	藤坡君著	全二冊（和紙中本）	貳拾錢	四錢
●地口畫譜	諸名家合作	（大判二七枚）	貳拾錢	貳錢
●將棊手鑑（手合）	伊藤宗印君著 天野宗歩手合	全三冊（菊半截形一〇六枚）	貳拾錢	四錢

女學世界

（毎月一回二十六日印刷納本）

（明治四十三年一月十一日印刷納本）第拾卷第貳號（増刊マダム振り）（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）



御茶の水　小林寫眞館特寫（禁轉載）

定價金貳拾錢●郵稅貳錢

VOL. 10　東京市日本橋區本町三丁目博文館發行　No. 2

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑬
明治43年1月（第10巻第1号、第10巻第2号）

2010年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3851-7　C3321